
転生は良い結果をもたらすのか？

反逆のピカチュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生は良い結果をもたらすのか？

【Nコード】

N5221M

【作者名】

反逆のピカチュウ

【あらすじ】

フリーターだった私が、交通事故で死んだ事により新たな人生を迎えた。

第二の人生を、わずかながらに生きてきたそれまでの知識と経験を使い生きて行く。外伝として、転生したが知識、経験が無い人物を焦点に物語を展開。転生を優位に使える人物、使えない人物のそれぞれの視点で日常を進めて行く。

ブログ フリーター (前書き)

初めまして

この度初めてssというものを書かせて頂きます。

読みにくい文章、技術が低いと思われるかもしれませんが私も勉強して良い物に仕上げて行きたいと思っています。

ではよろしく願います。

ブローグ フリーター

死んだはずの自分が何故また人生を満喫しているのだろうか。
疑問を浮かべたらキリが無い、自我が芽生えた時から疑問だらけ
だったのだから。

疑問の一つは私が知っていたはずの私では無かった事だ。

私が今の体になる以前はフリーターとして過ごしていた。就職活動に失敗した私はアルバイトで日々の収入を稼ぎ暮らしていた。東京等の都会ならばそれでも十分に暮らしていけるだろう。しかし、私が暮らしていた地域は東京と比べて自給が低く、フリーターにとっては厳しい場所だった。実家暮らしだったのならば話は変わるのだが、私は実家には戻らなかった。両親が必死に稼いでくれたお金を使い大学まで進学したのに、職に就くことが出来なかったのだ。どの顔をして家に置いてくれと言えるのか。

私が大学を卒業した時、職が決まるまで決して実家に顔を出さないと決めた。昼間は求人表等を使い就職活動。夕方から夜まで居酒屋でアルバイトという生活を繰り返していた。昨今の世界的な不況から職が見つかる事は無かった。だが、諦めなければ必ず私にもチャンスが巡ってくると思い活動を続けていた。そうでなければ心が折れてしまいそうだったから。

その日、私はバイト先からアパートへ向かっていた。この地域は交通事故での死者の数は全国でもトップクラスに入るほど車のマナーが悪い。いつものように私のすぐそばを車が走り去って行った。

その度に私は一人で愚痴をこぼすのだが、その日はそのような気分では無かった。それからの事はあまり詳しく覚えていない。気が付いたら、私の目の前に道路があった。そこで私の意識は一時途切れた。

それから意識を回復した時、私は目を開ける事が出来なかった。ましてや言葉も発せない。何が起きているのか解らなかった。そして極度の睡魔が襲いまた意識を手放す。

その繰り返しを行っていくうちに、空腹感を感じるようになった。だが言葉を発せない。私が出来た事は言葉では無い音を発する事だけだった。それを行っていくうちになぜだか涙が出てきた。涙腺が緩くなったのだろうか？まるで赤子のようだ。そのうち、口元に何かを入れられ、そこから液体を補充させられた。しだいに空腹感が無くなっていった。腹が満たされると睡魔が訪れた。強い睡魔に私はまた意識を手放した。次に私が気が付いた時は排泄物を催した時である。我ながらこの年でもらしとは情けなかった。だが、目は開ける事が出来ないし、何故だか自由に体が動かない。また私は声を上げ泣いた。その時私は思った。赤子そのものではないか、と。それから目を開ける事が出来、目の前の光景を見た時に私は確信した。

私が赤子になっている事を

三年の月日が流れた。私は歩くことも出来るようになったし、言葉が発せる事も出来るようになった。

何故三年と解っているのかと言うと、ついこの間私の三歳の誕生日会が開かれたからだ。新しい両親は私が生まれた時から愛情を注いでくれている。この歳でそのような考えをする子供はいないだろうが、私は別だ。なにせこの体になる前は成人だったのだから。そして、私がこの体になる前の年号から四年経っている事を知った。つまり、空白の一年間があるのだ。私はその時、私の魂が輪廻転生したのだと確信した。それと同時に、以前の私が死んだという事も理解した。調べる方法はあるにせよ今は出来ない。当たり前話である、三歳児が自分で調べようとして出来る事では無いし、他人に頼る事も出来ない。運良く死んでいなかったとしても、私は両親に合わせる顔が無い……私だと言う証拠も無いのだから。

「ご飯食べるよ、手洗って来なさい。」

「はい。今洗ってくるよ。」

母に促され、私は洗面所へ向かった。今の私の身長では洗面台に届かないので、踏み台を使い手を洗う。

新しい両親は至って普通の人だ。父はサラリーマン、母は専業主婦をしている。いや、私から見たらサラリーマンは勝ち組なのだろ

う。一人で家族を養っているのだ、会社も、給料も決して平均の位置では無いのだろう。それとも都会では当たり前なのだろうか？
田舎で生まれて育った私だからなのだろうか？

「良は何かやりたい事ってあるか？」

テーブルで夕食を食べている時、ふと父親が私に話してきた。

「あなた、良に何か習い事でもさせるつもり？」

「うん。今の時期から習い事とかさせた方が良いつて聞くだろう？俺もそうした方がいいのかな」って思ってた。それなら、良がやりたいことさせようって思ってたね。」

なるほど。確かにそれは一理ある。小さい頃からの習い事の影響でその習っていたものを嫌いになるという話はよく聞く。

「確かにそうね」。もうそろそろ塾も行かせなきゃいけない時期よね。何か勉強以外もやらせてあげたいよね。」

この年齢で塾に行くのか？あれはテレビの話やおぼっちゃんだけじゃ無かったのか？それとも家はそれほどまでに裕福なのだろうか？

「お前、良をもう塾に行かせるのか？さすがに速すぎるだろう？」

「何言ってるの！」

二人は私の塾の事で少し言い争いになってしまった。私の予想ではこのままでは母は教育ママさんになってしまふ。それは回避して欲しい。頑張れ！親父！

「とにかくだ、良。何かやりたい事あるか？」

父がいったん母を制し私に聞いてくる。その目は真剣だ、何かやりたい事……。私が今最もやりたい事は……。ふと視線をずらした先にそれはあった。

「僕、ギターをやりたい。」

ブログ フリーター (後書き)

読んで頂きありがとうございました。

所々変えたりしました。宜しければ次回以降も読んで頂ければ幸いです。

小学校低学年（前書き）

幼稚ながらも二話目を投稿します。読んでいただけたならば幸いです。

頑張つてよい文章にしていこうと思いますのでよろしくお願いします。

最後の所を少し変えました。

小学校低学年

「はいはい、今日はこれまでだよ。もう終わり。」

先生が私の目の前で両腕を大きく振りながら声を掛けた。

時計を見ると既に終了時間となっていた。

「すみません。集中してて時計を見るの忘れてました。」

「いいよいいよ。それだけ熱中してたんでしょ？君の熱意は見てて心地いいからね。」

私は立ちあがり先生に礼をした。その後、先生から次回の課題曲と日課を忘れないように言われた。金物類のネジを緩め、ハイハットをクローズさせペダルとスネアをバツクに詰めて帰る準備を行った。

スタジオから出ると、次のレッスン時間の生徒が待っていた。時間までまだ三十分前なのに既に来ている所から自主練習を行い早く来たのだろう。

「お疲れ。良君のドラム、ますます上手くなってるね。」

「ありがとうございます。でも、豪さん程では無いですよ。」

まあなと言い、彼はスタジオの中に入って行った。私が豪さんと言った彼は私より五歳年上の中学生だ。私がこのドラム教室に通う以前から通っていて、私の先輩に当たる。長年ドラムを習っているだけで無く、持って生まれた非凡さ、そしてそれに甘える事無く自分に厳しい人だからその技術は目を見張る物がある。同年代はもちろんの事、大人でも彼程上手に叩ける人はアマチュアではそういないだろう。

階段に向かって歩いていると別のスタジオから女の子が出てきた。

「お疲れ！今終わり？一緒に途中まで帰ろうよ！」

「うん、いいよ。」

彼女は真美と言い、ベースを習っている。歳が同じという事と、レッスン時間が同じ時間帯な所から話すようになり親しくなった。

「今度またスタジオ入ってセッションしようよ！私上手くなったんだからね！」

「いいね。僕も前に合わせた時より上手になったと思うよ。」

真美もそうだが、このレッスンに参加している人は皆総じて上手い。小さい頃から教わっている事もあるのだから、講師の質も良いのだ。それなりの年代から参加している人も、事前に自主的に始めている人ばかりだ。そして向上心が高い人ばかりなのだから自ずと上手になる。

「そういえばそろそろ夏休みだよ、良は夏休みする事あるの？」

「特に無いかな。あらかじめ宿題終わらせて遊んで暮らすよ。」

「え、宿題先に終わらせるの？絶対最後の日まで何もしないのが良いよ！」

真美は大げさに驚いているようだが、私は何事も先に済ませてしまおう方が性に合っているのだ。心配事は先に失くしておいた方が良い。「じゃあ夏休み暇なんだね？それじゃあ私が呼んだ時は必ず来る事！」

「って言っても僕、真美の連絡先なんて知らないよ。」

私がそのように言うのと真美は私に携帯を出すように言った。私が携帯を出すと真美も携帯を出し、私に無理やりアドレス交換をさせた。前世では私が携帯を持ったのは高校生の時からなのだが、現在は小学生のほとんどが携帯を持っている。そんな世の中なのかなと思うが田舎ではそんな事は無いと思いたい。

「はい、これで大丈夫でしょ。じゃあ駅まで元気よく歩こう！」

真美は張り切って階段を降りて行く。そんなに急ぐと危ないぞ。

それから駅に着き、電車に乗り私と真美は家に向かった。家の近くの駅に着き電車を降り真美と別れ、改札に向かった。夕方六時と言ふ事もあり駅は帰路に着く人達で溢れていた。私も都会で就職し

ていたのならば同じようにスーツを着て帰路に着いていたのだろうか。

改札を抜けてすぐに母が私の元に迎えに来た。週に三日、レッスンがある日はこのように駅まで迎えに来てくれる。

「お帰り、良。」

「ただいま、母さん。」

私と母は一緒に家へと向かった。

言うのが遅れたが私は小学二年生となった。幼稚園、小学校と私立に通わせてもらい、またドラム教室まで通わせてくれている。父が昇給し、給料の羽振りが良くなったとは言え、あまり楽ではないのではと思う。塾に通わないでここまで来れたのはひとえに、前世の事があるからだろう。いくら怠けていたとしても国立大学を卒業したのだ。中学受験までは少しの勉強で大丈夫だろうと思っていたのだが、テレビ番組で有名私立中学校の試験を見て愕然とした。もし、中学校も私立に通うのならばそれなりに勉強をしなければならぬ。幸いにも頭が柔らかい今の時期から大学入試レベルまでの勉強をしたら、私は間違いなく秀才として名をはせる事が出来るのだ。

そして、何故あの時ギターを習いたいと父に言い、今ドラムを習っているのか。それは父がギターを弾ける事がきっかけだった。私の家には父が使用しているギターがあった。エレキギター二本とアコースティックギター一本、それぞれそれなりの値段な品物だ。父は大学生の頃にバンドをやっていたらしく、仕事から帰ってくると毎日ギターを弾いていた。そして、私も前世で中学生の頃からギターを始め、高校生になってからずっとバンドを行っていた。何か習い事をするならギターでもやろうかな位と私は考えていたのだが父の、

「ギターなら俺が教えるから大丈夫だ！良、お前はドラムを覚え！そして家族でバンドをしよう！」

と言いだめたのがきっかけだった。いやいや、私と父は良くても母は何も出来ないのではないか！だが、その心配も

「いいわね、私も久しぶりにベースを練習しようかしら。」

と、言う一言で全て無くなった。父と母は大学の軽音楽サークルで知り合っただけ。かくして私はドラム教室に通う事になった。父は最初、私のしたい事と言ったのだが、おそらくギターを、楽器をやりたいと言う私の言葉に感化され家族でバンドをしたくなつたのだろう。私がギターでも良かったのだろうが、今からドラムを練習するわけにはいかない。それならば、私がドラムを叩いたら全て丸く収まるのではと考えたに違いない。そしてドラムならば何年間も機材が無くて教室で貸してくれるからお金もあまり掛からないだろう、と間違いなく考えた。ギターは自分のを使わせれば良いのだから。当たり前だが大人用のギターは子供の手には大きすぎる。この事を知ると父は私にギターは大きくなってからと言ったのだが、

「僕もギターを弾きたい！」

と言う、息子の言葉を聞き、母が父の機材を売り、私に子供用のギターを買い与えてくれた。その事を父は知らなかったみたいで、最初は知り合いから譲り受けたのだろうと考えていたのだが、私の持っているギターが新品なのを見て、母に問いかけた所、事の詳細を知った。そして、それと同時に父の持っていた主要なエフェクターを売られたと知り、一人寂しく泣いていた。

かくして、私はドラム教室に通うと同時にギターを手に入れた。初めは父の言うとおり弾き、初心者の振りをしていた。父や母がいない時に前世でやっていた曲をひたすら練習する、という事を繰り返していた。だが、半年も経つとごまかしきれなくなり、父に怪しまれ私が練習している所を見られてしまった。父は大変驚くと同時に、俺の息子は天才だ！と嬉しそうにしていた。メガデスのSYM

PHONY OF DISTRACTIONと言っ曲を幼稚園児が弾いていたら誰でもそう思うだろう。

それはそうと私は五年前に兄となった。妹が生まれたのだ。私が生まれてからも父と母は事あるごとに励み、新しい命を授かった。生まれたのが妹と解ると父はすぐに加奈と名付けた。私は加奈を見た時、物凄く心を打たれた。それと同時に前世の時も同じように祝福されたのだろうかと思ったら少し悲しくなっただ。

加奈はそれから健やかに育ち、もう四歳となっている。身内の私から見ても加奈は愛くるしい少女であり、このまま育っていけばさぞ美人になるのではないか。さらに加奈は物凄く？チート？と言っ言葉が似合う。私がギターを弾いていると加奈は「私もやる！」と言って聞かなかった。遊ばせるだけだと思っギターを渡したら、先ほどまで私が弾いていた曲を弾きこなして見せた。一度もギターを触った事の無い少女が初見でいきなり弾いて見せたのだ。私は開いた口が塞がらなかつた。また、母が言うには加奈は幼稚園で歳が上の子たちとかけっこをしても負けならしい。学力面でも非凡さを見せいる。私は天才と呼ばれる類の人間を身内を通して初めて体験した。

「おかえりなさい。」

私と母が家に帰ってくると加奈が玄関に走ってきた。駅まで数分と言っ事と、加奈が聞きわけの良い子と言っ事もあり母はお留守番をさせている。その間加奈はギターを弾いているのだからそこまで心配してないのだろう。

「お父さん来たらご飯食べるからもう少し待っててね。」

母がそう言っつと私と加奈は元気よく返事をした。父が帰ってくるのはだいたい夜七時くらいである。それまでに私は日課のメトロノームを使いリズムを鍛える事を行った。メトロノームの音を頼りに手足を使いリズムを鍛える。ドラムもさる事ながら、全ての楽器にお

いてリズムは重要である。それを鍛える事は楽器奏者としては当たり前の事だ。加奈も私と一緒にやって行うために決して辛く無い。加奈が楽しそうにしている姿を見ると自然と私は自然と笑顔がこぼれる。だから決して辛く無い。

「ただいま。」

どうやら父が帰ってきたようだ。夕飯を食べてからギターを弾き宿題をする事にしよう。

学校も夏休みに入り、私は家にいる事が多くなった。たまに学校の友人と遊んだりするのだが毎日では無い。朝、起床し朝食を済ませ、午前中はギターを加奈と一緒に弾き、リズム練習をする。昼食を取り、午後は加奈と遊ぶか学校の友人と遊び、夕方になったら帰宅し、夕飯を取り、それから本を読んだり、ギターを弾くか、ドラムの練習をする。ドラムの練習と言っても自宅がマンションだから生ドラムを置くわけにはいかない。練習パットを使い練習している。最近、父は仕事が忙しく休日も出勤している。母は家にいる事が多い。たまに昔の友人と会いに外に出かけるか買い物をする位だ。いわゆる専業主婦なのだが、実の所、月に稼ぐ額は母の方が多い。父の収入の足しになればいいと思いFXを始めたのだが母の手際と感が冴えわたり、実に多額の資金を手に入れる事に成功した。おかげ様で私と加奈は実に恵まれた環境化で過ごす事が出来ている。

夏休みのある日、私は真美に呼ばれてスタジオに向かっていた。私と真美が通っている教室の親会社のスタジオと言う事もあり、普通に入るより安い値段で入る事が出来る。私のお金で入っている訳ではないのだから少しでも安く済ませたい、と言う事で毎回このス

タジオで私と真美はセッションを行う。たまに家族で入る事もある。

セッションと言ってもそんな難しい事はしない。私が適当に叩くリズムに合わせて真美が弾く、と言う具合だ。そして毎回何らかの曲のコピーをして遊ぶ。それはレッスンでやった曲だったり、自分たちでやりたい曲だったりする。その都度、真美はベースとヴォーカルを担当し、たまに私がコーラスを行う。最初の頃はラモーンズ等を行っていたのだが、最近は真美がレッチリにはまっているらしくレッチリの曲を行っている。決して小学生が弾ける曲では無いのだが、だましまし何とかやっている。要は楽しければいいのだ。

「あゝ！来週までに絶対完璧にしてやる！来週も入るよ！」

「無理だつて、僕たちじゃ。ただでさえ難しいんだよ？僕も真美も全然だよ。」

昔はレッチリのドラムなら経験者ならば誰でも出来るんじゃないかと思っていたがそんな事は断じてない。チャドのように迫力があり、要所要所でここしかないと思わせる叩き方をするのは決して楽ではない。しっかりしたリズムを保てないと曲として成り立たないのではないだろうか。

「絶対絶対ぜ〜〜つたい、来週までに出来るようにしてやる！目指せフリー！」

ベーシストは必ずフリーに影響されるのだろうか。昔もフリーを愛してやまない人達が多かったような気がする。私としては真美がフリーの真似して全裸で弾くと言う事が無いように注意しないといけない。友人が露出狂になるのだけは勘弁願いたい。

小学校低学年（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

小学校高学年（前書き）

三話目となりました。

読んでいるうちに転生とか関係なくな？と感じるかもしれませんが、私が思う転生の最大のメリットは経験した事を覚えている事だと思います。その経験を元にさらに成長出来る事が転生のメリットだと思います。

それでは楽しく読んで頂けたならば光栄です。

小学校高学年

後少しで二度目の小学校生活も終わる。エスカレーター式に系列の中学校に通う事になった私は勉強に身を入れる事無く過ごしていた。学力を落とさないようにそれに勉強してただけなのだが、前世の記憶を持っていた私は学内ではそこその成績を収める事に成功した。

加奈も同じ学校に通い、学年でトップクラスの成績、運動面でもトップなのを見るとここまでの天才はそんなにいない事が解った。つまり加奈は特別な人なのだ。そしてそのルックスの良さから加奈は学年でもマドンナ的存在となっていた。その話をクラスの友人から聞いた時に、前世の高校での四天王を思い出した。学内で特に可愛い子四人を四天王と呼んでいた事を思い出したのだ。それはそうと加奈はピアノを習い出した。最初は私と同じドラムを習いたいと言っていたのだがそこはまた父の目論みによりピアノを習わされた。持って生まれた才能と数年ギターをやっていた事もあり、耳、指の回転は速くもう既に将来を希望されているらしい。加奈が今後何を選ぶかは解らないがほぼ全てにおいて人並み以上になるのは間違いないだろう。音楽と言う事に関して言えばプレイヤーならば間違いないだろう。ただ、生みだす者としてならば解らない、技術が上の者が認められる訳ではないのだから。

私は後数週間後に行く、小学校卒業パーティーの出し物の練習をしていた。一次会はある会館を貸し切り、それぞれのグループが出し物を行う事になっている。私は真美とクラスの友人達とバンドを行う事にした。他のグループはダンスだったり、バックに音楽を鳴らして歌を歌ったり、コントを行うみたいだ。欲を言えば私の組んでいるバンドのベースを真美が担当していたならばそれなりの演奏が出来たのだが真美は他校の生徒である。そんな事出来る訳もない。

真美は真美で中学受験で忙しいらしく、レッスンに来ていない時が多くなった。

「じゃあ、もう一回頭からね。」

ハイハットを叩きカウントを行う。二拍のカウント後、楽器隊の演奏が始まった。メンバーは私を入れて五人、ギター、ベース、キーボード、ドラム、ヴォーカルとオーソドックスな布陣だ。曲自体も初心者が行うような比較的簡単な曲を選んだ。バンドはリズム帯がしっかりしていれば他が初心者でもどうにか聞けるようになる。ドラムとベースが上手ければ何とかなる、と言うのが私の自論だ。ヴォーカルはクラスで歌が上手くて人気者の子、身内で発表するならこれは仕方が無いだろう。歌が凄く上手でも小学生にとってヴォーカルは人気者の子がやらなければ盛り上がらない。うちのクラスの人気者は歌が上手くて良かった。物凄い音痴だったならば苦笑いしかできない。ギターとベースの子は初心者だった。数か月前から始めたらしく、バンドを組むのも、バンドで演奏するのも初めてと話していた。最初の頃はそれぞれが合わせる事を知らないから自分のリズムで弾いていた。これだと曲がごちゃごちゃになってしまう。私はギターとベースの子にドラムの音を聞いて演奏する事を教えた。何回か練習していくうちに合わさるようになった。また、彼らは演奏する能力も高くなっていった。ギターの子なんか私がギターで見本を見せた時から対抗意識を燃やし、家で相当練習していたみたいだ。元々ギタリストの私からしたら音だけで解る。キーボードの子は小さい頃からピアノを習っているらしく技術はしっかりしている。

スタジオに最初に入った時と比べると別のバンドかのように私達のバンドはレベルが上がっていた。

「人前で演奏するには全然大丈夫なレベルになったね。」

「当たり前だろ？俺は天才だからな！」

ギターの子が笑いながら私の問いに答える。

「でも天才と言うのは良んじゃない？ドラムめちゃくちゃ上手い

のにギターも上手だもん。」

キーボードの子が天才と言う言葉に反応して喋った。私はドラム歴八年になるし、ギターは前世と合わせると二十年近くなるから当たり前だ。本当の天才と言うのは加奈みたいな人なのだよ。ギター等の楽器はどれくらい練習したかが重要だ。しかし、世の中には持つて生まれた才能だけでそれをいとも簡単に覆る事もある。それが加奈だった。今はまだ私の方がいささか上だがそのうち追い抜かれるだろう。

「じゃあ、ちょっと休憩しようか。十分くらいしたらまた合わせよう。」

私はそう言つとスタジオの外に出た。毎度の事ながら長時間ドラムを叩いたり、バンドで合わせると耳が遠くなつた感じがする。少し外に出て耳を休ませないと。他の子達は休憩時間にも関わらず練習を行うから余計うるさい。

外に出て体を伸ばしていると携帯が鳴った。真美からの着信のようだ。

「もしもし？」

「もしもし、良？今スタジオにいるでしょ。何してるの？」

何故真美は私がスタジオにいるのか解つたのだろうか。

「学校の出し物に出るバンドの練習だよ。真美こそ何で僕がスタジオにいるって解つたの？もしかしているの？」

と、聞いたら電話が切れた。何だろうと思ひ携帯をポケットに入れたら後ろから大きな声がした。

「わっ！！！！！！」

突然後ろから大きな声がしてびっくりして振り返るとそこには真美がいた。

「驚かさないでよ。心臓に悪いよ。」

「ごめんごめん！久しぶりにスタジオに来たら良がいたから。」

笑いながら真美はそう答える。真美は入試で忙しかったのだがもしかして終わったのだろうか。

「受験、終わったの？」

「うん！終わったよ！後は合格発表だけかな。」

「どこ受けたの？」

「受かってから教えるよ。それより久しぶりに良とセッションしない？。今大丈夫？」

「だから、今はクラスの友達とのバンド練習が「いいから！じゃあやるよ！」」

真美は私の言葉を遮りそう言うと、私の手をひっぱり中に入った。何番のスタジオかと聞かれ、無視していたら怒られたので素直に喋りつた。私は小学生の女の子にすら逆らえないのだった。

「お邪魔しま〜す！」

真美が勢いよくスタジオに入るとメンバー皆、誰？と言う顔をした。当たり前だ、いきなり知らない人が入ってくると言う事はまず無い。真美の後ろに私がいるのが見えたのか、ギターを弾いていた子が私に話しかけた。

「誰だよそいつ？」

「いや、その……僕の友達んだけど勝手に……」

「いいから！ほら良、早く座って！あ、君、ベース借りるね。」

有無を言わず真美はベースを奪い取り音を出した。少しチューニングがずれていたのかチューニングを直し、準備万端と言う顔で私を見た。こうなったらしょうがない、私には真美とセッションすると言う選択肢しか無かった。ペダルをツインにして、本気モードのセッティングにする。そうしなければ真美に怒られるからだ。

「何するの？」

「RUSHのYYZ、忘れてないよね？」

いきなりあの難しい曲かよ、と言う俺の視線を笑顔で真美は返してきた。私のドラムから始まり、曲が開始される。一年前から真美はプログレヤジャズ等難しい曲を弾きたがる傾向にあった。それに付き合わされる形で私もいろいろやらされた。おかげ様で技術は上がったのだが。

私のドラムに合わせて真美が音を弾いていく、やっぱり真美と合わせるのは凄く楽しい。それが難しい曲でも簡単な曲でも。偶に私と真美は顔を合わせる。長年お互いに組んでいた事もあり互いのリズム、グループは確認しなくても解るのだが見てしまう。ドラムとベースの関係はピッチャーとキャッチャーの関係に似ている気がする。私にとって真美は最高の相棒だ。

曲が終わっても私と真美は合わせ続けていた。私の要求するリズムを把握し完璧に合わせる、合わせるだけでなく自分のグループを出していく真美の技術はもはや小学生レベルでは無い。こんな小学生がゴロゴロしていたら嫌だろうな。

私は叩いているうちに重要な事に気付いた、私はバンド練習をしにここにいるのだ。慌てて時計を見ると既に休憩時間は終わっていた。終わっているだけでなく、五分も延長していた。私は真美に目で終わらせると合図を行い、軽いロールの後終わらせた。

「ごめん！ちよつと遊びすぎた！」

私がそう言い謝ると皆、ハツとした顔をし拍手を行った。何故拍手をされたのか解らないでいるとキーボードの子が

「良君ってこんなに上手かったんだね！プロの演奏を聴いてるみたいだったよ！」

「良、お前俺たちの前じゃ実力隠してたんだな！くっそ！今にみるよ、絶対に追い抜いてやる！」

「良、そのベースの子上手すぎだろ……後でいろいろ聞かせろよ。」

と、色々言ってたみたいだが、要は皆俺らの演奏に聞き入っていたらしい。それにしてもプロレベルと言うのはさすがに無理がある。まだまだひよつ子だ。

「ごめんね、良。ちよつと白熱しちゃったね。」

そうだね、と言いそれから私達はバンドの練習を再開した。一曲終

わかることにベースの子は真美にどこが悪かったか、良かったかを聞き、他の子は私に聞いてきた。今までと違い、各々自主的に聞いくる当たり、私と真美の演奏で彼らは自分達のバンドが未熟だと感じたらしい。そして、より良くしたいと思ったのだろう。これはバンドの演奏力向上させるきっかけとして良かったのかも知れない。

その後、練習が終わり私達はスタジオを後にした。私と真美以外は迎えが来ており、それぞれ別々に帰宅した。私と真美はいつも通り駅に行き、それから電車の乗った。

「それにしてもキーボードの子可愛かったね。良ってあいうのがタイプなの？」

「可愛いとは思っけど別に僕のタイプって訳じゃ」

真美が私を茶化してきた。女の子はこの年頃になると異性との関係について聞き出してくる。思春期を迎えるのが男より早いのだろう。私が前世で小学校の時はこの時期に女性と付き合う等と言う事は考えもなかった。人によるのだろうが、ほとんどの人がそうだと思う。中学校に上がった時から異性を気にし出すのだが、考えてみたら春には中学生になるのだからそのうち皆そうなるのだろう。

「あつちのほうはなんか良に気がある感じだったけど？どうなの？もしかして両思い？」

「だから、そんなんじゃないってば！真美こそ好きな奴いるのかよ？」

「私が好きな人はね、さ、誰でしょ？」

私は真美とは違う学校だしレッスン以外では真美との交友関係を知らないから解るはずが無い。

「解る訳無いじゃん。誰だよ？教えてよ。」

真美の好きな人が誰か別に知ろうとは思わないが一応せがんでみた。真美はえーと言い笑うだけな所を見ると教える気は無いらしい。

「じゃあ、良の好きな人教えてくれたらいいよ。」

「残念、駅に着いたようだ。じゃあ真美またね。」

ちよっと、と言う真美の声を無視して僕は電車から降りた。そして

軽く手を振って電車から離れた。

私が小学校高学年になると母は迎えに来なくなった。私を信頼してと同時に加奈のピアノ教室の送り迎えがあるからだ。加奈のピアノ教室は駅から電車を使って向かうほど遠い場所では無い。なので加奈は母と歩きながら通っている。

家に着くころにはもう七時になっていた。家に入ると母が夕食の準備をしていた。

「おかえりなさい。」

「ただいま。加奈と父さんは？」

「加奈は部屋でギター弾いてるわ、お父さん今日も遅くなるんだって。すぐ夕食にするから手洗って来なさい。あと加奈も呼んで来て。」

そう言うと母は食器を並べ出した。私は洗面所に向かい手を洗うと私と加奈の部屋に入った。

「加奈、ご飯食べるよ。」

加奈に話しかけると、加奈はギターを弾くのを一旦辞め私の方を向いた。

「お兄ちゃんお帰り！ちょっと待ってて！」

ギターをスタンドに掛け、加奈は私の前まで来た。私と加奈は一緒に部屋を出てダイニングに向かった。

ここ最近の父は以前にも増して仕事が多くなった。昇任すると以前にも増して責任や重要な仕事が増える。それに伴い給料も上がるのだが割に合わないと思いをこぼしている。休日も少なくなり、家族でどこかに出かける事も少なくなった。父にとっては家族でどこかに出かけるよりも家族でバンドをする事が好きらしく、母

や加奈に文句を言われている。選曲も父の好きなバンドばかりなので、本当に父のためのバンドになっている。

「ただいま。」

「あら、おかえりなさい。今日は遅くなるんじゃないの？」

父が予定よりも早く帰ってきたので母は急いで父の分の食事を取りに行った。

「いや、切り上げてきたよ。全く……」

父は仕事の愚痴を言い始めた。母は適当に合わせながらテーブルに父の分の食事を出した。私と加奈はそれを見ながら食べていた。

父はテーブルに着くと食事をとりながら私達に話しかけた。

「な、今度スタジオ入る時までにはスレイヤーの曲練習してくんない？ 久しぶりにスレイヤーやりたいのよ。」

「私違うのやりたい！ B・z やろうよ、ウルトラソウルやりたい！」

加奈が父の意見に反対した。私だってスレイヤーは嫌だ。おそらく父がやりたがってる曲は *angel of death* か *reign in blood* だ。あんな速いテンポで16分のバスを踏むのは体力的に無理だ。

「そうね、たまにはお父さんのやりたい曲じゃなくて加奈のやりたい曲をやりましょうよ！ お母さんも B・z やりたいわ。」

女二人の意見に父は勝てる訳もなく、次にやる曲は B・z で決まった。

私としてもスレイヤーじゃなくて良かった。父は私がツインを踏めるようになった時からメタルばかりやらせるものだから正直きつかった。

時間が過ぎるのは早い物でもうすぐ私達のバンドの順番になる。皆、家族や級友、学年の前で演奏する事に緊張している。私みたい

に過去に何度もライブに出ている訳では無く初ライブなのだから緊張するのは当たり前だ。しかもライブハウスのような小さい場所では無くホール規模、さらに人数も多い。私もこれくらいの人前でやるのは過去に数える位しかなかったので少し緊張していた。

私達の前のグループが終わり、いよいよ私達の出番になった。幕が降りると、それぞれが楽器の準備をした。私はドラムをそれぞれの位置にセッティングして軽く叩いて終えた。他の皆は何をしているのか解らずに楽器を準備したらその場に立っていた。キーボードだけ少し音を確認して終えていた。

「ギターとベースも少し音出した方がいいよ。始まってから音出ないとなったら困るでしょ？」

「そ、そうだね……」

私のアドバイスを焦ってそれぞれ急いで音出しをした。まずい、このままでは緊張しすぎてバンドが成り立たない。

それぞれ軽く音出しを終えたと同時に私は皆に向かって喋った。

「皆凄く緊張してると思うけど大丈夫だよ。いつもの練習通りにやろう。練習通りにやったら絶対上手くいくんだから。自信を持っていこう！」

「そうだね！良君の言う通りだよ！皆頑張ったんだもん。絶対にうまくいくよ。」

私が言った後に、キーボードの子が自信よく喋った。

「そうだな、良がそう言うなら間違いないよな。」

「思いつきり暴れようぜ。」

「皆をびっくりさせようぜ！」

少しずつだが皆の顔色が良くなってきた。私はドラムスローンから立ちあがりステージの真ん中に来ると皆を呼んだ。

「じゃあ皆で円陣をしようよ。僕達の初ライブ前に皆で意気込もうよ。」

私が呼ぶと皆私の元に駆け寄り丸くなって円陣を組んだ。

「ありきたりだけど精一杯楽しもう！ミスしたとかそんなの関係無しに。誰だって間違えるんだ、人間だもん。」

「お前、みつおかよ。」

皆があははと笑い表情が柔らかくなった。

「じゃあ、頑張りましょう。」

「……おー！」「」

私達のバンド演奏は大いに盛り上がった。それぞれが持てる力を出し切り、精一杯に演奏、歌い、楽しく終わった。嬉しい事にアンコールまでしてもらったのだが、持ち時間一杯やったためにアンコールは出来なかった。

終わった後、皆泣いていた。ライブをする事の楽しさを知ったと同時にもうこのメンバーで演奏する事が出来ないかもしれないから私とキーボードの子とギターの子はそのまま中学に上がるのだが、他の子は違う中学に進学する事になった。それも親の都合により違う県に行くことになった。恐らくこのメンバーでずっとやって行きたいと思ったのだから涙が出たのだろう。違う中学にいくから、遠くに行くからもう会えない、もうこのメンバーで出来ないんだと。

「そんなに悲しそうに泣くなよ。」

「だって悲しくないの？もうこのメンバーで出来ないんだよ？」

キーボードの子が泣きながら僕に訴えかけた。

「大丈夫だよ。」

「何が大丈夫なの！？」

私はキーボードの子を含め皆を見て

「また僕達はこのメンバーで演奏する事ができるよ。僕たちはまだまだ時間があるんだ。この先も続いて行くんだ。僕達皆が忘れないでいたならきつといつかこのメンバーで会う事ができる。絶対にね。」

「喋りながら私も涙が流れていた。私もこの苦楽を共にしたメンバーでバンドをしたかったのだろう。その後、皆泣きながらも楽器を片づけた。片づけが終わるころにはキーボードの子以外は泣き止んでいた。ステージ裏から客席に戻る時にクラスの皆から拍手と歓声を貰った。母と加奈からもかつこ良かったと言われた。ちよつとだけ照れたのは皆にはばれてないだろうか？」

それからあつという間に卒業式を迎え私は小学校を卒業した。卒業式が終わった後の教室で、私達は語り合い、写真を撮り、寄せ書きを書いたり、最後の小学校生活を満喫した。小学校、中学校、高校とこの時期に過ごした事は二度と体験出来ないし戻る事も無い。それでも私達の心の中にいつまでも残り続ける。思い出は時が経つにつれて色あせていく。その事を皆知るのはいつなのだろう、と私は思いながら教室を出て行った。

「じゃあな、また会える時までにあの女の子くらい上手くなってるよ。」

「頑張つてね。また会える時を楽しみにしてるよ。」
私とベースの子は軽く握手をして別れた。

「お前とバンド組めて楽しかったよ。今度会うときは俺が歌手としてデビューしてるかもな。」

「そうなたら僕が君の後ろでドラムを叩くよ。」
ヴォーカルの子とは笑いあいながら別れた。

彼らの今後の人生で何があるか解らないけど、一緒に楽しく過ごした事を忘れないでいてくれたら私は嬉しい。

あつという間に小学校生活が過ぎ中学校生活が始まるうとしていく。玄関に張り出されたクラス表で自分のクラスを確認し、教室へ向かう。そこにいるのは大半が同じ小学校の生徒だが何人か違う小学校からの生徒がいる。小学校の時に同じクラスだった友達も何人かいるようで、最初から見知った顔がないという状況は無くなつた。

「お、良！また一緒のクラスだな。」

「そうだね。よろしく。」

見知った顔と挨拶しているうちに後ろから女性に呼ばれた。

「良〜！」

聞いたことのある声だと思い振り返るとそこにいる人物を見て私は固まった。

「ちよつと良！これから宜しくね〜！」

「あ、ああ。よろしく……」

ニヤニヤ笑いながら私に挨拶をしてくる女性。まさか同じ学校かつ、同じクラスになるとは思ひもなかった。

私と真美は中学校生活を共に過ごす事になった。

小学校高学年（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました。

中学一年生？（前書き）

テストやら、バルドスカイヤらのために四話目は少し書くのに時間が掛かりました。

幸いにも少しずつですが読んでくださっている方がいらっしゃるようで嬉しく思います。それでは宜しくお願いします。

中学一年生？

中学生の時期が心身ともに変わる。本格的に成長期を迎え、少年だった見た目から青年へと変化する。また、性というものに興味を抱き、今まで以上に異性の事を気に掛けるようになる。学校においても小学校の時のように全て先生が片付けてくれるような環境から少しだが自主性を求められるようになる。前世で私はこれらの変化に大いに戸惑った。女性とは話せなくなり、それまで無かった、先輩との上下関係に苦しんだ。

入学して数カ月も過ぎると、皆、やっと中学校生活に慣れてきた。目まぐるしい変化に最初こそは驚くが、人は慣れる生き物であり、この時期になると皆適応してくる。

放課後になると、クラスの友人達はそれぞれの部活動へと向かう。うちの学校は部活動に強制参加では無いので私は部活動に入らなかった。音楽の方に力を入れる事を、優先したからだ。中学校に入学してすぐ、私はドラム教室とは別に週に一回、プロのドラマーから個人的にご教授して頂いている。どのようにしてその経緯に至ったかというと、私は、ドラム教室の先生の知人にプロのドラマーがいる事を知った。その時に、先生にその知人の人が私の演奏を見て頂く事は出来ないか聞いた。先生はすぐさま知人に連絡をし、次のレッスンの時に私の演奏を見てくれるよう取り付けた。次のレッスンの時、私の演奏を見て頂いた後に、個人的にご教授して下さる話になった。元々、こちらの方からお願いしようとしていただけに、その話は願っても無い事だった。

昼休みの時、私の携帯に一通のメールが届いた。それは薫さんからであり、薫さんの都合により、個人レッスンが出来ないという内

容だった。薫さんとは私にご教授して下さいいるプロのドラマーの人だ。

「あゝ、今日は大人しく家に帰るかな。」

「今日って薫さんとのレッスンの日なんじゃないの？」

私が独り言ちていたら、隣にいた真美が話しかけてきた。

「今薫さんから中止ってメールが来た。」

「じゃあさ、放課後に楽器屋に行かない？弦買いに行きたいんだよね。」

「いいよ、暇だし。」

久しぶりに楽器屋に行くのも悪くない。何か新しいものが入荷しているかもしれない。

「あの、真美さん、良くん、私も一緒に付いて行ってもいいかな？」
「いいよ。ね、真美？」

私が真美の方を向くと、真美は少しだけ嫌そうだった。一見何も変わっていないように見えるのだが、付き合いが長い事もあり、ほんの少しだけが嫌そうにしているのが解った。

「うん、増田さんも一緒に行こう！」

表面上は笑っているのだが、どこか増田さんと距離を置いているように感じる。何かあったのだろうか。

増田さんは小学校の頃に行ったバンドのキーボードの子であり、あのライブ後、私と増田さんはよく喋るようになった。中学校でも同じクラスになり、増田さんは私の数少ない女子での親しい友人だ。もつとも、女子で親しいのは真美と増田さんしかいないのだが。

放課後、私達はいつも行っている楽器屋へ向かった。そこへは学校の近くの駅から二駅程であり、通っているドラム教室から近いこともあり、私と真美は常連客となっている。

「お、良ちゃんと真美ちゃんじゃないか。もう一人の子は初めて見る顔だね。」

「お久しぶりです、松本さん。こっちの子は同じ学校の友達ですよ。」

「増田と言います。宜しくお願いします。」

松本さんはこの店の店長だ。増田さんと松本さんが話しているうちに、真美はベース弦を探しに行っていた。

「増田さん、僕ちよつといろいろ見てくるね。」

「あ、私も一緒に行く。」

私が最初に向かったのはギター関連の場所だった。身長伸びにより、手が大きくなったため、今まで使っていたギターではサイズが合わなくなってきたのだ。幸いにも、今まで貰ってきた小遣いやお年玉をこまめに貯金していたため、それなりに纏まったお金はある。PRSや、ギブソンのヒスコレ等は高くて手が出せないが、フエンダーUSAのストラトや、ギブソンのレスポール等を、買うお金はある。

ギタリストはギターを眺めているとどれも欲しくなってくる。お金に余裕が無い時は強がつて、今のままで良いと口ずさむのだが、本音は欲しくて仕方がない。自分の持っているギターとは別の種類、用途が展示されているなら尚更だ。前世で私はギブソンのSGとフエンダーのストラトキャスターを使っていた。うまい具合に、ピックアップがシングルとハムバッカーの両方を持っていただけにその時々で求められる音毎に分けて使っていた。今現在使っている子供用ギターは正直な話、音に関してはアンプ任せである。バンドでギターを弾いていないので今はいいが、私としてはバンドでギターを弾きたい気持ちは常にある。

「またSGにしようかな……………」

私がSGの前で呟いていると、増田さんが不思議そうな顔をして私に訪ねてきた。

「良くんってこのギター持ってたの？」

「い、いや、父さんが昔持ってたんだよ！それで僕も弾いてたからそれで……………」

「そうなんだ。」

危ない所だった。上手く誤魔化せたが、次からはこのような事が無

いようにしよう。何か疑われたら誤魔化しようが無い。

「お、良くん、弾いてみるかい？」

「お願いします。」

松本さんは、壁に掛けてあるSGを手に取り近くのアンプに繋げた。軽く音を出してからチューニングを合わせ、私に手渡した。

Aのコードを鳴らし、クリーンの音を確認めるとSG独特の音が流れた。SGの特徴は何と言ってもその中域の音にある。よくゴバゴバと言い表されている。ギターの音が中域が強いためにこもりがちな音ではあるが、決してバンド内で埋もれる事は無く、単音においては逆に前に出てくる。一音一音の音が太く、まさに目立つ音だ。ただ、相変わらずフロントピックアップの音が気に食わない。無駄に高域が出るために、前世でも直ぐに違うピックアップに取り替えた。次に、歪みの音を確認していったのだが、特に前世の頃のSGとの違いは無かった。オリジナルで付いているコンデンサーを変えて、フロントピックアップを変えたら正に、私が使っていたSGの音になるだろう。

「そう言えば良はギターが弾けるんだったね。」

いつの間にか真美が私の後ろにいて話しかけてきた。手に店のビール袋を持っている所を見ると、既にベース弦の会計を済ませたのだろう。

「真美の前じゃ弾く機会無いからね。ドラマーよりギタリストだと僕は思ってるよ。」

「ベースは弾けないんだ、と言ってもルート弾きは出来るか。リズムはしっかりしてるし。」

「でもギタリストの癖が出るかもね。」

「そういうものなのかな。」

一度だけベースを弾いた事があったのだが、私には難しいものだった。弦は太いし、重いし、何より指弾きが出来なかった。ビリー・シーンが好きな私としてはどうしても指で弾きたかったのだが、バンドに迷惑がかかるのでピック弾きに甘んじた。

「それにしてもSGね。私はアイバニーズの方が良いと思いいけどな。」

確かにアイバニーズは良い。安価な値段でそこその物を買えるし、Jカスタムは見た目も音も素晴らしい。

「私はこのギター、良君に凄く似合ってると思うな。」

増田さんに似合ってると言われ、前世でSGと言えは私と言われてたのを思い出した。やはり、SGと私は切っても切れない縁なのだろうか。

「良君、SG買っちゃう？買ってくれるなら安くしとくよ。今のうちにギブソン買っておかないと次から大変になるよ。代理店変わっちゃうしね。」

「SGでよかったの？SG持ってる長門だ」と言われるよ。」

「バカ野郎。SGって言えばトニー・アイオミだろ。」

結局、私はSGを買った。私にとってSG使いはトニー・アイオミである。日本人なら人間椅子の和嶋さんが直ぐに思いつく。和嶋さんは物凄くアイオミの影響を受けているのが解る。あの音とプレイは聴いてて心地が良い。去年の冬頃に放映されたアニメにSGを使った場面があったらしく、ネタでSGを使っている人をそのキャラの名前で呼ぶ、その影響で使っているのかと問う風潮が出来てしまった。オタクがアニメの影響でギターを始めた！と嘆く人もいるだろうが、楽器演奏者は総じて？音楽オタクの部類に入ると私は思う。だから全く気にしない。と言うより、私の周りのバンド仲間はアニメオタク、ゲームオタクが多かった気がする。楽器屋も新規の顧客を獲得出来る機会を得たのだから悲観する事も無いだろう。

「白のSGだったら完璧だったのにね。」

「くどい。」

ふと空を見上げると少しずつだが日が傾いている。

「ごめんね増田さん。予想以上に長く居すぎたみたい。」

「全然大丈夫だよ。今日は特に何も無いし。」

増田さんは放課後にピアノ教室に行く事が多い。レッスンが無い日でも自主的に通い、日々鍛錬に励んでいる。そんな増田さんが私達のために時間を割いて一緒に来てくれたと思うと申し訳なく思う。

「でも、そろそろ発表会じゃないの？」

何気なく私は増田さんに発表会について聞いてみた。

「うん、来週にね。課題曲は終わってるし、そんなに焦らなくても大丈夫かなって。焦って練習して手を痛めたらどうしようも無いから。」

「そうなんだ。それじゃあ応援しに行くよ。」

「ほんと!？」

増田さんが嬉しそうにこちらを向いた。

「うん、多分何も無いしね。真美も無いよね?他にいろんな人連れて応援しに行こうよ。」

私が真美に話を振ると、

「え、ま、まゝ私は別に何も無いけど……行つていいの? 増田さん?」

「え、う、うん。来てくれるなら嬉しいよ……」

真美と増田さんの間に何とも言えない空気が流れた。そんなに二人は仲が悪いのだろうか?

家に着いた時には外が暗くなっていた。楽器屋を出て駅に向かい、外で話をしていたら予想以上に話が弾み、気が付いたら一時間近く時間が経っていた。本来ならば、早い時間に帰れたはずだったのだが、結局いつも通りの時間に帰ってきてしまった。

中学生になったからと言って一人部屋になったという事はない。

一度、父からそれぞれの個人部屋にしようかと問われた時に加奈が猛反対したからだ。加奈は私に物凄く懐いているので、恐らく第三者視点から見たならばブラコンに見えるのだろう。何にせよ、可愛い妹が懐いてくれる事は全然嫌では無い。思春期を迎える頃にどうなるか解らないが、もし拒絶されたのならば私は今までに無く落ち込むだろう。

「お兄ちゃん、ご飯だよ。」

「直ぐ行く。」

私はいつものように夕食を取りにキッチンへ向かった。

夕食後、私は部屋に戻り買ったばかりのギターをハードケースから取り出した。ハードケースから取り出す感覚は最初の頃は心地よいのだが、運搬方法が徒歩の場合、持ち運ぶ際に非常に重量感があるために結局ソフトケースに入れる事になる。

「お兄ちゃん新しいギター買ったの？」

私がギターを取り出したのを見て、加奈が私に問いかけた。

「うん。いつも使ってたギターが小さく感じるようになったからね。貯金使って買ってきたんだよ。」

へ〜と加奈が呟いてるのを横目に、私はギターを弾き始めた。ギターを弾いているうちに、ふと一つの感情が生まれた。

やはり、ギタリストとしてライブに出たい。

ドラマーとしてはもちろん楽しいのだが、今ならば前以上に楽しめるかもしれないと思ったからだ。リズム感も確立してきたし、テクニック面も言う事無い。ならば、以前よりも高いクオリティでバンドを組み、ライブを行えるかもしれない。もちろんドラマーとしてもバンドを組んでいきたい。これは欲張りなのだろうか。

「ねえ加奈、加奈はギターとピアノどっちが好き？」

私と突然の問いに加奈は驚き、そしてしばらく考えた後にこう答えた。

「どちらかと言ったらギターだよ。ずっとお兄ちゃんとやってきたからね！」

「そっか。それじゃあ一緒にギター弾こうか。」

「うん！」

私は加奈と一緒に流行りの曲を弾きながら歌った。

翌日、私は教室に向かう途中に、壁に貼ってあった一枚のポスターが目に入った。

？ 顔見せライブ 月 日土曜日 at 音楽室 OPEN
12:30 START 13:00 入場料無料”

「軽音なんてあったんだ。」

私が独りごちていると後ろから声をかけられた。

「君、軽音に興味あるの？興味あるんだったら入らない？」

後ろに、私より頭一つ背の高い男性がいた。察するに軽音学部の人で、私より上の学年なんだろう。

「いや、僕は部活に入ろうと思ってないので……」

「取り敢えず！取り敢えず顔見せライブに来てみなよ！まずはそこ

からね、合わないって思ったなら入らなくても大丈夫だから。取り敢えず、来てね！あ、それじゃあこの紙にクラスと名前書いてね。え？そんな時間無い？大丈夫大丈夫！喋ってくれるだけでいいから！ほらほら。」

半ば強引な手口で私は軽音楽部の人にクラスと名前を教える事となった。だが、この手の勧誘にはうんざりするほど慣れていたので適当な名前と違うクラスを覚えておいた。人が多い学校なだけにもう二度と会う事もないだろうと思ったからだ。

土曜日、家でギターを弾いていると、携帯に電話が掛かってきた。
「もしもし？」

「もしもし？良か？お前今日暇だよな？」

電話の相手は小倉だった。彼は小学校の時にバンドを組んだギターストだ。

「暇と言ったら暇だけ何？」

「それじゃあ、今から学校の音楽室に来てくれ！出来たら真美さんと増田も誘って！」

「良いけど、増田さんは来週ピアノの発表会あるから無理かもよ？」

「じゃあ真美さんだけでいい！取り敢えず来い。解ったな？」

それだけ言つと、向こうから電話が切れた。何事か解らなかったが取り敢えず真美に連絡をして、私は学校へ向かった。

「ねえ、学校の中、凄く煩いんだけど。学校内でライブしてるの？私と真美が学校に着いて音楽室のある方へ向かって廊下を歩いていると真美が話しかけてきた。それもそうだ。物凄く煩い。それも聞きなれている音でだ。その時、私は思い出した。今日は土曜日、軽音楽部のライブの日と言う事を。」

「まずい。今日は軽音のライブの日だった。」

「え、何それ？」

真美も私と同様に軽音楽部なるものが存在する事を知らなかったみたいで、初耳だという顔をしていた。ともかく、これは非常にまずい展開だ。小倉が軽音楽部に入部していたなんて知らなかった。違うクラスなのであまり会う機会が無かったから情報が全然入ってこなかった。

「取り敢えず、帰るか。」

「ちよつと、何それ？学校に来たばかりだよ？」

「そうなんだけど、取り敢えず帰ろう！何ならミスド奢る「お〜い！良！やつと来たな〜」！」

真美に帰ろうと喋っていると遠くから大きい声で私の声が遮断された。真美と私が声のする方を向いたら、遠くから小倉が走ってくるのが見えた。

「小倉君じゃない？」

「うん……」

小倉が私達の前まで来ると、型で息を整え、私達の方を見て

「それじゃあ、音楽室へ行こう。今から俺出るから。」

と言い、真美を連れて行った。私が啞然としていると小倉から早く来い！と言われたので、私は覚悟を決めて音楽室の方へ向かった。

音楽室に入ると、調度次のバンド演奏のための転換中だった。そのせいか、中には人が少なかった。音楽室の外は軽音楽部の部員とその友人、観に来た人達で溢れていた。

「結構本格的なんじゃない？」

真美が音楽室の中を見回してそう喋った。

確かに、本格的だった。中はカーテンで暗くして、照明機器でステージを照らしている。アンプやドラムにもきちんとマイキングがささっており、パワーアンプを通して後ろの卓で音量バランスを取っている。返しもきちんと置かれていて、小さいライブハウスと同じくらいの設備が整っていた。業者に頼んでもらったのだろうか。

「確かにこれは凄いね。人も多いし、ライブって感じがするね。ス

テージの後ろに黒板があるけど。」

これはこれでライブ感が養えるのかもしれない。学校側からお金が出ているなら、タダでライブが出来る事になる。アマチュアバンドの出演料、ノルマが無い分、ここで腕と場慣れをするのは良いかもしれない。

「そういえば小倉君、次のバンドで出るって言ってたね。私、練習の時しか小倉君の音聴いてないから楽しみだな。」

「僕もライブの時以降聴いてないな。どうなってるのかな。」

真美と話していると、次のバンドの準備が出来た。会場の音楽が違うのに変わり、バンドのメンバーが入ってくる。それに伴い、音楽室の中にも外にいた人達が入ってきた。

メンバーの一人がPA側に手を挙げ、曲を止めると小倉のギターから始まり、演奏が始まった。演奏している曲を私は知っていた。

ニルバーナのSmells Like Teen Spiritだ。中学生には調度良い難易度だからこれを選んだのだろう。もしくは、バンドメンバーがニルバーナが好きなのか。中学生の演奏にしてはそれなりの演奏でかつ、曲がニルバーナと言う事もあり、周りは盛り上がった。私が中学生だった頃はメタル全盛期でラウドネス等をコピーしたものだ。今はグリーンデイやニルバーナなのだろうか。

一曲目が終わり、二曲、三曲と演奏していくうちに小倉は緊張感が解けたのか楽しく弾いているようだった。大きく動き回る等のパフォーマンスを行い、場を盛り上げていた。そして、最後の曲が終わり、バンドは履けて次のバンドのための転換が行われた。

「小倉君、前より上手くなってるんじゃない？」

「そうだね。良い刺激を貰ったよ。」

「でも全然良のレベルじゃないよ？」

私が刺激を受けたと言う事に驚いたのだろう、真美が少し驚いた顔をしていた。

「テクニクとかじゃないんだよ。しいて言うならバンドで楽しそ

うにしているのが凄く刺激を受けたのかもね。」

どれだけ他者より上手くても、楽しくなかったら意味が無い。初めてバンドを組んだ時に技術は全然無くて演奏は酷かったけど、それでもやって楽しかった。一つが出来る度に喜びを感じそれを糧に頑張ろうと思い皆で笑いながら切磋琢磨していった。それらがこのバンドには見えたのだ。恐らく今日出る他のバンドもそうなのだろう。

「バンド組みたくなってきたな。」

バンドを組むと色々な事がある。それを私は経験してきた。いくら仲の良い友人同士で組んでも些細な事で離れたりもするし、逆に色んな事を学んで仲が深まる事もある。だが、大概が前者が多い。

「それじゃあ、私ベースやるよ。」

「やってくれるの？」

「良の相棒が務まるのは私しかないでしょ？」

笑いながら真美が私の方を向いた。その笑顔に私は少しだけドキッとした。真美の笑顔は見慣れているはずなのに。気持ち的に歳下としか思っていないかったのだが。

「お、お前この前の！俺に嘘教えやがったな！」

ハッとして振り返るとこの前ポスターを見ていた時に話しかけられた人がいた。

「え、え〜っと」

「お前の事を探していたんだ。さあどうしてくれようかな。」

顔を見るに怒っている事が解る。隣で真美は何が何だか解らない顔をしているし、この場をどうやって切り抜けようか考えていた所、

「先輩どうしたんですか？良と知り合いましたっけ？」

小倉が何とも言えないタイミングで現れた。今現れたら私の名前が知られてしまう。

「小倉か、こいつ知ってるのか？」

「はい、小学校の頃からの友達ですよ。」

小倉の言葉を聞き、にやりと笑みを浮かべて

「そうか、名前何て言うんだ？」

と小倉に聞いた。

「良って言いますよ。」

「そうか、良君って言うんだ。なあ良君、これで俺から逃れられなくなっただな。お前の選択肢は二つだ。俺に焼きを入れられるか、軽音楽部に入って俺のパシリとなるか。どっちがいい？」

笑いながら、私の方を向いた。小倉は何かしたのかと言いたげな顔をして私を見て、同じように真美も私を見た。

かくして、私は軽音楽部に入部する事となった。ついでに真美も入部した。

中学一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今回は専門用語やら、楽器のメーカー等、いろいろ知ってる人にはなじみの深い、知らない人にな全く解らない単語を使ってしまった。要望がありましたら軽くですが説明をしたいと思います。

それでは今回も読んで頂きありがとうございました。もっと語彙力、文章力が付くように頑張って行きたいと思っています。

外伝 別の転生者の場合？（前書き）

本編の良とは違う場合の転生者を書いてみました。物語の場所とは本編と同じ舞台なのですが、今後、両者が関わるとかそういうのは全然考えていません。私の気まぐれで関わりが出来るかもしれませんが。

それではこちらの方も読んで頂ければ嬉しいです。

外伝 別の転生者の場合？

時々不思議な夢を見る。自分の知らない所で、自分の知らない人達がいる夢だ。そこで俺はその人達と親しそくに話している。

知らないはずなのに昔から知っているように話をしていて、俺の知らない話題で盛り上がり、俺自身もその話題について面白おかしく話している。

これは夢なのか？それとも誰かの記憶なのか？

「じゃあ行ってくる。」

俺は家を出て駅に向かう。朝だと言うのに日差しは強く、外は暑かった。まだ朝だからそれほど湿度も気温も高くないが、昼近くになるにつれて両方とも上がってくるのでそう樂觀視は出来ない。衣替えの準備期間だと言うのに、この暑さは異常だ。年々、上がってくる気温に初夏と言う言葉と季節が無くなったのではないかと思う。

「それじゃあこの問題を、え〜と誰にしようかな。」

授業を受けている間、俺は夢の事を考えていた。小さい頃からよく見る夢、それは普通の夢の内容とは違い、まるで俺自身が経験してきたかのような夢だった。正夢とは違う。現実においてその場面にいくわした事は一回も無い。そして、夢から目が覚めると決まっただけで涙が流れていた。小さい頃は気にしていなかったし、あくびでもでたのだらうと思うていたけど最近は違う。何故だか悲しい

のだ。あのような何でも無い、ごく当たり前にある事の夢なのに、それを見ると悲しみが私の心に残る。

「おい、聞いているのか佐藤！」

「は、はい！」

先生に怒鳴られて慌てて俺は返事をした。考えすぎていたために気が付かなかった。

「タク、お前最近ぼくとしてるけどどうしたの？」

授業が終わり、教室を出ようとしたら正也が話しかけてきた。

「いや、特に何も無いんだけどな。ちょっと考え事してた。」

「なんだ、好きな奴でも出来たのか？このクラスは可愛い子多いしな。増田さんとか真美ちゃんとかさ。」

正也の話を聞いて名前の挙がった二人を見てみる。増田さんは少しおとなし目の美少女だ。品の良さが伝わってくる。家ではお父様、お母様とでも読んでいるのだろう。もう一人の真美さんは活発的で元気がある子だ。二人とも正反对のタイプの美少女と言えるだろう。「でもさ、あの二人って絶対あいつの事好きだろ？」

「あゝ良ね。あれは勝てないわ。」

正也もお手上げだと言わんばかりに両手を挙げた。勉強は出来て運動もそこそこ、ルックスも良いと来たら周りの女は黙って無いだろう。話では小学校の最後の時にバンド演奏をしたとか。物凄く上手なドラムを披露したのだから小学校から同じ奴はあいつに惚れてもおかしく無い。かたや、俺なんて平凡だ。無理して中学受験をしてここに入った時は自分が天才かとも思ったが、そんな事は決して無かった。井の中の蛙は狭い日本の中でさえ大海を知ったのだ。

「でも可愛いよなゝちくしょう！俺もなんか楽器やろうかな。」

「はいはい、頑張れよ。」

放課後、する事も無いが、家に帰っても誰もいない。そして最悪な事に家の鍵を忘れてしまったためにどこかで時間を潰すしか無い。そんな時は決まって屋上に俺は行く。

この学校は屋上が開放されているために多くの生徒が利用している。放課後は部活があるために、昼休み程人がいないので快適だ。

「今日は誰もいない、ね。」

屋上に着いてみると珍しく人がいなかった。近くのベンチに腰を掛けグラウンドを見る。色んな運動部が汗を流して部活に励んでいる。そんな人達を見て何が面白いのかと思ってしまう。彼らは青春してました、という事だけを楽しみにしているのだろうか。俺には全く解らない気持ちだった。むしろそういう人達は見えていて不愉快になる。

「人生って何だろうな。」

「それで、今日はどこ行くの？」

「決まってるだろ、こんな晴れた日は海に行くしかないだろ？」

男がそう言うと、車にサーフボードを乗せた。女はまたかと言う顔をして車に乗り込み、男が乗るのを待っていた。

「ね、速くしてよ？」

「ちよつと待つてろつて、今すぐ乗るから。」

荷物を全て詰め込んだ後、男は車に乗り込みエンジンを掛けて車を動かした。

「毎日海に行つて飽きないの？」

女は少しうんざりしながら男に話しかける。

「バカ、毎日海に行つてサーフが出来るなんて最高だろ？大学生つて素晴らしいな！来年からはこんな事出来ないよ。」

「私達も社会人になるからね。早い物だよね、もう最後の学生生活だよ？」

「だから思い出をいっぱい残そうぜ！」

車を運転しながら男は女に喋る。先ほどのうんざりした顔から笑顔で頷き、男を見ている。男の方も女と一緒にいるのが嬉しいのか笑顔になっている。車を運転して二人は海を目指した。

「ねえ、君！そろそろ屋上閉まっちゃうよ？」

聞きなれない女性の声で俺は目を覚ました。目の前に見た事の無い女性がいる。制服を着ている所から教師じゃない、スカートの色から一学年上の先輩だと解った。どうやら俺は寝てしまっていたようだ。少しだが、また夢を見た。今回は女と二人で海に行く話、彼

女なのだろう。

「あ、起きたね。もうそろそろ屋上閉まっちゃうよ。寝てたから悪いと思ったけど……って君、何か怖い夢でも見たの？」

「え？」

目を擦ると涙が出ていた。あの夢だから涙が出たのだろうか。そう思っていると、目の前の女性が俺を抱きしめ、頭を撫で始めた。

「え、ちょ……ちよつと……」

「大丈夫、大丈夫だから。落ち着いてね。」

この状況でどうやって落ち着けと言うのだろうか？寝起きに知らない女性に抱きつかれて頭を撫でられるという事に。顔に胸が当たっている。生まれて初めて女性から抱きしめられ、胸が顔に当たっていると言う状況に俺はパニックに陥った。

「アハハ、じゃあ怖い夢を見て泣いてたんじゃなかったんだね。」

少し照れつつ、笑いながら女性が喋る。

「ごめんね、うちの弟さ、こうしたら落ち着くから。」

「俺はあなたの弟じゃない。」

そうだね〜と言い、女性は振り返った。あれから、俺はこの女性に離してもらい、訳を話して屋上を後にした。

「私亜里抄、桐島亜里抄って言うの。見ての通り二年生。君は名前なんて言うの？」

「佐藤匠。」

「匠君ね。私、放課後は毎日屋上にいるから良かったら話そう？」

亜里抄が俺の方を見てそう話す。要するに話し相手になってほしいのだろう。

「そこまで暇じゃない。」

「じゃあ暇な時！暇な時でいいから！ね？」

「わ、わかった。暇な時だけなら。」

物凄い勢いで喋りかけてきたために俺は嫌だと言えなかった。

「それじゃ、毎日待ってるからね？じゃあね〜！」

亜里抄は俺とは別の方向に走って行った。変な夢を見た後に、変な先輩に付きまとわれて今日は散々な一日だった。これからこのような日々が続くのだろうか？亜里抄の方は解らないが夢の方は続くのだろう。そう思ったら、自然と溜め息が出た。

外伝 別の転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。転生物で私が書きたかった事の一つです。記憶を完全に引き継ぐのでは無く、全く引き継がず、かと言って記憶を完全に消去した訳ではなく、何かしらによって思い出していく、見る事が出来る話。そんな話を書いてみたいと思ってました。転生をしたら記憶、経験が引き継がれて全てが上手く行く。そんな転生においての成功者じゃなく、転生をしたが全くと行って良いほど転生の恩赦を受けない人の物語を書いてみました。題名が題名なので良い結果をもたらす例を良として、匠は良い結果も悪い結果も得なかった例、もう一つ悪い結果を得る例を考えています。それではまた次回も頑張って書きたいと思います。

中学一年生？（前書き）

本編第五話です。早い物でもう五話目です。徐々にアクセス数、P
Vが増えて行くのを見る度に読んで頂いてる皆さまに感謝、感謝で
す。それでは今回も読んで頂けたならば幸いです。宜しく願いま
す。

中学一年生？

「暑い………」

「言うな、もつと暑くなる………」

扇風機の前で真美が力無く喋る。今、私と真美は学校の音楽室、隣の隣の準備室にいる。通常、音楽室は吹奏楽部が使用する。それなので、軽音楽部はその隣のさらに隣の第二音楽室準備室で活動を行う。準備室と言う名目だが、言うほど狭く無い。それなりの防音をしているはずらしいが、音はダダ漏れなために、よく吹奏楽部の人達といざこざがある。そして、今年の夏は例年に比べて暑い。裸足でアスファルトを歩いたら低温火傷するのでは無いだろうか？

「音出す時に締めきらなくちゃいけないならクーラー付けてよ。扇風機だけで何とかなる訳無いじゃん！」

「じゃあスタジオで練習する？」

「今月お金無いから無理！」

と言う訳で、私と真美はここで練習している。当たり前だが、音を出す時は窓、ドアを締めきらなければならない。そうすると熱がこもる、演奏していくと自然と体が熱くなる、また熱がこもる。この悪循環の繰り返しだ。

「服脱ぎたい気分………」

「頼むから僕の前で裸に成らないでね。」

「お、良は私の裸見たくないの？」

真美はシャツの首元をブラが見えるか見えないかの瀬戸際まで伸ばし悪戯っぽく笑った。

「そんな事しなくても汗で透けて見えてるよ。」

「嘘！？」

「嘘です。」

そう言うと、真美は私の方に向けて近くにあったペットボトルを投げつけた。少しデリカシーが無かったのだろうか？

この準備室を実質スタジオ化している軽音楽部は、時間を決めて各バンド事に利用している。学内のライブが近い時は時間がびつり埋まるらしいが、それが無い時はガラガラに空いている。そんな時や、どのバンドも入っていない時は自由に使っていていいというのが暗黙のルールだ。夏休みの午前中という時間帯にバンドが練習を入れてる訳も無く、私と真美は二人でここにいる。時間表を見ると、二週間後までバンド練習が一切入っていない事が解る。ここにあるアンプは私立の学校だけあっていいアンプを置いている。中学校の軽音楽部にアンプやマーシャルのスタック、ジャズコーラスが置いてあるものなのか？

「真美、ちよつとギター弾きたいから窓閉めるよ。」

「わかった。」

ギターのヴォリュームを上げてギターをかき鳴らす。最近、キングクリムゾンにはまり始めたのでその曲をよく練習している。21st Century Schizoid Man including Mirrorsの最初のリフを弾き始めるとそれに合わせて真美も弾き始めた。ドラムが無いのが寂しいが、それでも曲として何とかなつてると思いたい。この曲の難しい所は最初のゆったりしたテンポからの転調、そしてまた戻る時にもたつてしまう可能性が出てくる所が一番厳しい。他にも、全てのパートがきつちりと合わせなければならぬ場面が多数あるので、バンドで合わせるとなると一人一人がしっかりとリズムを把握して無ければ全くと言っていいほど形にならないだろう。

私と真美が弾き終わると同時に準備室のドアが開き、小倉が中に入ってきた。

「やっぱ良と真美さんか。」

開口一番に私と真美を特定する言葉が出てくるのはどうしてだろうか？

「何でって顔してるけど、あんな難しい曲弾けるのお前ら位しかないよ。同じ学校にお前らレベルがいつぱいいたらこっちが困る。」世の中には同じ年で同じ位、それ以上は山ほどいるだろうけど、小倉の言う通り、同じ学校に沢山いたら嫌になる気持ちは解ら無いでもない。

「それはそうと良、ドラム叩いてくれないか？今度のライブでこれやるんだけど。」

と、言い私にスコアを渡してきた。曲はグリーンデイの American Idiot だった。これならば真美と私で一度だけ合わせた事があつたから直ぐに出来る。

「いいよ。真美も弾けるはずだから皆でやろうよ。American Idiot 覚えてるでしょ？」

「覚えてるよ、歌も歌おうか？」

「頼みます。俺コーラスだからさ。」

ギターをアンプに接続しながら小倉は答えた。それと同時に私はドラムスローンに座り、真美はマイクスタンドを調整し始めた。それぞれの準備が整った所を見て、

「じゃあ、やろつか。」

小倉のギターから始まり、私達は曲を演奏した。

「まったく、リズム帯がしっかりし過ぎてCDに合わせてる気分だったよ。」

小倉がギターをスタンドに掛けながら私の方を見て喋った。

「そりやどうも。」

「まゝあれくらいならね。」

演奏が終わると直ぐに窓を開け、扇風機の前で陣取っている真美もそう答えた。小倉が水を飲みつつ、

「そう言えば良は目ぼしいドラマー見つけたのか？ギターでバンドやりたいんでしょ？」

と聞いてきたので、私は

「いや、手数が多く人はいるんだけどリズムがね。真美がリズムしっかりしている人じゃなきゃやりたくないって言うから結局僕がドラムやる事になるかも。」

「ぶっちゃけ良より上手い人いないよ。ライブで見て解ったもん。」
自惚れる訳では無いが、真美の言葉は本当だった。私が入るきっかけになった先輩もドラムだったが、ぶっちゃけそこまで上手く無い。ドラムを初めて一年と言う事だったが、私が一年経った頃よりも全然下手だった。先輩には練習出来ない理由があったのだが。

「まゝ良より上手い人ってあまり見かけないしな。」

「いつぱいいるよ。師匠とか雲の上の存在だよ。」

「良の師匠プロだしね。プロの中でもトップレベルだし当たり前じゃない？」

そんな話をしていると、またドアが開き人が入ってきた。

「お疲れ様です！」

小倉が持っていた水の入ったペットボトルを置いて挨拶をした。先輩が入ってきたのだろうと思い、後ろを振り向いたらあの先輩がいた。

「おいおい、良君は挨拶しないのかい？」

「・・・お疲れ様です。」

少し睨みつけて挨拶したら先輩は笑いながら、

「冗談だよ。そんなに睨まないでくれよ。こっちがビビるってば。」
と言った。

「前田先輩は見た目が怖いんで冗談に聞こえないんですよ。」
「確かに。」

小倉と真美がそれぞれそう言うが、前田さんは笑ったままだった。

あの時の印象は最悪だったけど、本当は優しい人なのだ。三年生の人からそうしろと言われたので仕方なく、行ってただけらしい。

「前田さんはサッカー部に行かなくていいんですか？」

「もう終わったよ。今日は午前だけなんだ。」

前田さんは軽音楽部とは別にサッカー部に入っている。本業はサッカー部の方なのであまり練習は出来ないらしい。

「それにしてもさっきの演奏は君達かい？プロがいるのかと思ったよ。」

「そんな、プロだなんて褒めすぎですよ。」

調子よく小倉が笑いながら答えるが、断じて小倉のプレイがプロレベルな訳が無い。

「小倉君は今年入った部員の中で一番ギター上手いけど、君達は僕達とレベルが違うね。小学生の草サッカーに高校生の全国レベルが入ってきたみたいだ。」

サッカーに例えて前田さんが説明する。その例えは予想以上に的を得ていた。

翌日、私は真美と前田さんと加奈と小倉で近くのプールに来ていた。夏休み中、連日の猛暑により、プールは超満員状態だった。

「人多すぎだろ……」

「皆考える事は一緒なんだよ。」

小倉と共に、私は人の多さに少しばかり不満を抱いた。ビキニ姿の女性を見る度に、小倉は喜びを隠せないでいたが、その気持ちは私

も解るので黙っている事にした。

「おい良、ここにいる人達のレベルは高いけど増田と真美さんも期待できるんじゃない？他の奴らからしたら羨ましい事なんだろうな。」

「……確かにあの二人は可愛いけど。」

真美も増田さんも人気が高い事は私も知っている。そして、二人と親しくしている私に非難が来ている事も承知している。だが、今の段階で私は特定の誰かと付き合おうという考えは無い。同い年なのに恋をしてしまえばロリコンと言うレッテルを貼られそうな気がしてならないのだ。誰も私の本当の事を知るはずもないのに。それにあれほどルックスがいいのだ。私よりも似合う人がいるだろう。

「加奈ちゃんも後少ししたらとびっきりの美人になるだろうな。今でも十分可愛いけど……お義兄さんと呼んでもいい？」

「殺すぞ？」

「じよ、冗談だよ冗談！マジになるなよ、目がめっちゃ怖いんだけど……」

冗談でもそんな事は言うものではない。加奈と付き合う人は俺がしっかりと見定めなければならない。どこぞの馬の骨に加奈の操を預けてなるものか。

「お、待った？」

「遅いよ、やるとき……」

ようやく三人が来たと思い、二人で振り返ると私達は言葉を失った。学校のプールの授業とは違い、それぞれがビキニの水着を着ていた。増田さんは見る者全てが奪われるほどの、中学一年生とは思えないほどの胸がスクール水着以上に強調ささって目に毒だ。真美は胸は普通だが、モデル並みのスタイルの良さが露骨に表れ、足フェチにはたまらない魅力を醸し出していた。加奈は、私は肉親だから小学生の割に発育が良いとしか思わないが、そのルックスはロリコンじゃなくても手をだしそうになるのではないだろうか。

「どうしたの？固まって。」

真美の問いにハッと我に返って、

「いや、何でも無いよ。ね、小倉。」

「そ、そうだね良。」

私達は互いに肩を抱き笑って誤魔化した。加奈が不機嫌そうに、
「お兄ちゃん、絶対増田さんの胸見て固まったでしょ？」

と言いつつ、増田さんの後ろから両手で胸を揉んだ。

「きゃ！？ちよつと加奈ちゃん！」

「どうしたらこんなに大きくなるのよ！」

「確かにね。私も小さくは無いのに……」

加奈が増田さんの胸を揉み、真美は一人で胸を見て落ち込むという謎の状況。加奈の手により豊満な増田さんの胸が色々形を変えていく。非常にけしからん光景である。けしからん！もつとやれ！……
「……と言いたい所だが、小倉が鼻を押さえそうになったので、
「か、加奈。もう辞めるんだ。増田さんも嫌がつてるじゃないか。
それにそろそろやばそうな人がいる。」

加奈に辞めるように言った。手を掴めば速いのだが、そんな事をしたら増田さんの胸に触れてしまう。

「え、でもお兄ちゃん、もつと見たいって顔してるよ？ほらほら。」

加奈の揉む手が本格的にやばくなってきた。これはいけない！

「ちよつと加奈！辞めろつて！」

「きゃあ……！」

考えるよりも先に体を動かしたために、加奈の手を離すため掴んだ私の手が増田さんの胸を少しだけだが揉んでしまった。

「ご、ごめん増田さん！」

「お兄ちゃんへんたい。」

「見損なつたよ、良！」

真美と加奈が私を軽蔑の目で見てくる。だが、加奈の目は笑っていた。間違いない確信犯だった。

「い、いや全然気にしてないよ！それに……」

増田さんは苦笑いをしながら答えた。最後の方は小さくてよく聞こ

えなかったが大丈夫だろう！ふと小倉の事を思い出して小倉を見たら、小さく蹲って鼻を押さえていた。

「おい、大丈夫か！？」

「良か？大丈夫とは言えないが、今日この場にいる事を俺は誇りに思う。」

恐らく、鼻血を流しながら生理現象が起きたのだろう。私は小倉をそっとしておく事に決めた。

それから私達は気の赴くまでプールで楽しんだ。途中、加奈が危ない人達に声を掛けられると言うハプニングが起きたが、監視員の人に急いで連絡をする等をして何とかその場を乗り越えた。

「楽しかったね、お兄ちゃん！」

「楽しかったけど、悪ふざけしすぎだろ？」

えへへとほほ笑みながら加奈は私を見た。いつもなら愛くるしい笑顔なのだが、今日に限って小悪魔のように感じた。加奈の将来が少し心配になってきた。

「小倉君大丈夫かな？最初からずっと蹲ってたけど……」

「大丈夫大丈夫、あいつは私達の体を見て興奮しただけだから。ね、良？」

「いや、恐らく暑さにやられたんじゃないかな。」

「そうなんだ。」

にやにやしながら加奈は私を見た。あいつの名誉に誓って本当の事を言う訳にはいかない。

今日は私と小倉にとって忘れられない日になったのは言うまでも

無いだろう。特に小倉にとっては。

「また皆で一緒に行こうね、ね、加奈ちゃん？」

「うん！今度、真美さんも増田さんも私達の家に来てよ！いっぱい遊ぼう！」

加奈が無邪気に笑いながら喋っているが、顔が悪い顔つきになっている。何が起こるか考えただけでも胸があつく、寒気がしてくる。

こうして、中学生になって初めての夏休みが終盤へ向けて始まった。私はしばらく師匠の所にお世話になろうか本気で考え始めた。

中学一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今回は未熟ながら、精一杯頑張らせて頂きました。今後も、思う事を文章で伝えれるように努力して行きます。それでは、今回も読んで頂きありがとうございました。

中学一年生？（前書き）

怒涛の羊よろしく、第六話です。書き始めたら止まりませんでした。本編は一応この回まで考えていたので、これからどうするか考えます。それでは今回も最後まで読んで頂けるのならば幸いです。

中学一年生？

夏休みが明け、段々と気温が下がってきてもおかしく無い季節になろうとしているのに、相変わらずの暑さに登校するだけで汗をかく。私は、二週間後の文化祭のために、軽音楽部のバンド練習で多忙な日々を過ごしていた。

文化祭一日目の開催式において、軽音楽部は持ち時間二十分を生徒会側から頂いたので、一バンドだけ全校生徒の前で演奏する事が出来る。また、二日目は音楽室を丸一日使えるので、一バンド持ち時間50分とたっぷりと演奏する時間があるのはこちらとして嬉しい。これだけ好条件を与えられている事から、学校側、生徒会側からの軽音楽部に対する期待は高いと思われる。

かく言う私は二つバンドを組む事になった。一つは私、真美、増田さんとのスリーピースバンドで、もう一つは先輩のバンドにドラムで誘われる事となった。今更だが、生きてきた年数だけで上下関係を決めるならば私はここにいて一部の教師を含めて先輩となるのだが、どうなのだろう？それはそうと、増田さんも軽音楽部に籍を置く事に決めた。冬までコンクールも発表会も無いので暇だったそうだ。夏のプール以来、真美と増田さんは親しくなり、真美が誘う形で増田さんを部に引き入れた。どのように説得したか解らないがこれらの事が重なり、最近の私は帰りの時間が遅くなっている。放課後、バンド練習後にドラムのレスンや師匠との個人レスンを行う。逆のパターンの場合、帰宅する時間が夜九時近くになるから加奈は少しご機嫌斜めだ。もう少ししたらクラスの出し物の方にも顔を出さなければならぬのでこの時期は本当に忙しい。

「なんか、もつとこう面白い形のベースライン入れてくれない？歌メロを邪魔しないようにかつ、ベースラインが動くみたいな。」

「うん、解った。それじゃあちよつと違う感じで弾いてみる。」
真美と増田さんのバンドはオリジナルを作る事になったので練習中ではもっぱらアレンジ作業ばかりだ。真美と増田さんのツインボーカル、ギター無しのドラム、ベース、キーボードという編成でバンドを組んでいる。欲を言えばギターも一人欲しかったのだが、私達の要求するレベルについて来れる人がいないのでこの形になった。
「サビ前のオカズ、もっと勢いよくサビにいけるようなのに変えてくれない？ロールとかの連打系じゃない感じで。」

「了解。」

基本的に誰が曲や詞を作ると決まっている訳ではない。それぞれが家や学校で思い付いたメロディーを皆に披露して皆が良いと思ったら曲を作る。そういう形で作曲は行われる。作詞はその曲でいたい人が行う、という事を取り入れた結果、増田さんがほぼ全ての作詞を担当する事になった。増田さんの書く詞は恋愛ものが多く、時に女性ならではの繊細で優しい感じの詞を書く事もあれば、男性的な熱い詞を書く事もある。数曲はコピーを行うが、一度合わせた時にほぼ完璧だったので最近では常にオリジナル制作に意欲を傾けている。

「これで三曲出来たね。あと二曲くらい作ってみる？」

「じゃあインストでも作る？プログレ的な！」

練習後、それぞれが自分達の楽器を片づけている時に何気ない一言を真美が発した。

「いいね。客の反応は悪いだろうけど。」

「まゝプログレを好んで聴く中学生なんてあまりいないからね。増田さんは聴く？」

「私はあまり聴かないな。」

ですよ〜と私と真美は顔を合わせた。それぞれ、片づけが終わり準備室を出ようとした所、部長が準備室に入ってきた。

「お、危ない危ない。もう帰る所だったのかい？」

少し慌てた様子で部長は私達を見渡した。

「どうしたんですか？」

「いやね、君達に頼みがあるんだよ。」

部長は一呼吸おいから、

「君達のバンドを開催式に出す事に決めたから。」

と、私達を見て言葉を紡いだ。

「ここ一カ月凄く忙しそうだね。文化祭が近いから？」

ドラムを叩き終えた後、師匠が私に向かって問いかけた。

「忙しいですね。疲れてるように見えます？」

うん、と師匠が頷いた所を見ると、私は見て解る位に疲労がたまっているようだ。自分自身では忙しいなと感じるだけだが、体は外に向けて信号を出していたらしい。

「まゝ体を壊さないように気を付けてね。ドラマーは体が大切だから。じゃあ今日は早い所切り上げて夕飯でも食べに行くか。親御さんにはちゃんと連絡しとくからゆっくり片づけていいよ。」

師匠は立ちあがると、スタジオを出て行った。周りの人が心配するくらいに私は無茶をしていたのだろうか。それとも要領よくこなせていなかったのか。長く生きてきたつもりだったがまだまだ改善すべき点は色々あるな、と考えさせられた。

師匠と近くの定食屋に入ると店は会社帰りのサラリーマンで溢れていた。スーツを身に纏い、酒を口に行っているのを見ると飲酒したい気持ちになるが、未成年なので後数年我慢しなければならぬ現実を思い出した。

「なんだ、良も酒を飲みたいのか？」

私が恨めしそうに隣のサラリーマンの飲む所を見ていたのが解ったのか師匠が私に問うてきた。

「いえ、別にそういう訳では……」

「はは、中学卒業したら飲ませてやるよ。」

笑いながら、師匠は店員に注文を行った。私も一緒に軽い食事を注文した。疲れている時に重い食べ物は喉が通らないからだ。師匠は店員が運んできた水を口に少し運んだ後に、私を見て、

「それはそうと、バンドは楽しんでるか？」

と言った。その意味する事は簡単な用で深いと私は思った。長年、音楽業界にいる師匠ならば私が経験した以上の事を身に染みて経験したのだろう。

「ええ。楽しくやってますよ。」

私が笑顔で答えたのを見て、師匠は軽く笑った。だがその目はどこか遠くを見ているようだった。純粹に楽しんで演奏していた時が懐かしい、そして今、その時期である私が少し羨ましそうな目だった。そんな師匠を見て私は尋ねずにはいられなかった。

「師匠は、まだバンドをやりたいと思いますか？」

私のその問いに師匠は面をくらったような顔をしたが、直ぐに

「そうだな・・・やってみなければ解らないけど、心から楽しいって思える事は十年近く無かったよ。」

と、答えた。それは趣味で行う事と、仕事で行う事の差。よく、好きな事は趣味に留めておいた方が良くと聞く。趣味で行うのなら自分だけが楽しければいい。そこに周りの重圧や大きな責任が伴う事は無い。だが、仕事となると別問題だ。仕事に結びつく事になると自分が目に見えてる以上に多くの人と繋がる事になる。自分一人のミスで最悪、誰かが首を切られるかもしれない。自分のせいで誰かが路頭に迷う結果につながる可能性があるのだ。お金を貰って仕事をする以上、これはどうあがいても仕方の無い事だ。

「それでも俺は、この仕事に就けた事に誇りを持つてるよ。嫌な事もあったし、認められるまで回り道もした。それでも後悔なんてしてない。俺は胸を張って、職業はプロのドラマーだと答えるよ。」

胸を張れると答えた師匠は輝いて見えた。業界の汚い所を見てきただろう、大きな挫折を味わったのだろう、現実を見る事で理想が崩れた事もあったのだろう。それでも後悔をしていないと言う師匠に、

大人に私は成らなければならない。大人というものは皆そういう生き物なのだから。私はまだまだ社会の事は知らない。知って行かなければならない。

「ま、こんな辛気臭い話をするためにお前を飯に誘った訳じゃないんだがな。」

苦笑いをしながら、師匠は頭を掻いた。

「とにかく、今を精一杯頑張れって事だ。勉強でも、ドラムでも、恋でもな。人生はゲームみたくセーブ、ロード機能なんて付いてないからな。どうあがいても後戻りが出来ない一方通行の道なんだ。」

「そうですね。俺も精一杯、今を生きます。」

師匠の言葉が胸を突く。どれだけあがいても後戻りが出来ないんだ、人生というのは。私があの時、周りをよく見ていたならば……・と考えても今になってどうする事も出来ない。過去の過ちを次に生かすしか道は無い

。

ようやく、私達のテーブルに料理が運ばれた。頂きますと言い、ご飯に箸を着けようとしたその時、

「そう言えば、真美ちゃんともうやったのか？」

師匠の何気ない一言で私はご飯に箸をさしてしまった。

「な、何言ってるんですか！真美とはそういう仲じゃないって何度言えば解るんですか！」

私がつらたえている事が珍しいのか、師匠は大笑いをしている。

「何、隠さなくていいって。あんだけイチャイチャしてるのを見せられるとこっちもちよっとム力つくんだよ。あんな可愛い子と付き合いやがってよ。」

私と真美と一緒にスタジオにいる時や、増田さんと真美と三人で学校帰りに楽器屋や、ファーストフード店にいる時に、何故か師匠に会う事を思い出した。その度に茶化してくるのだ。

「だから付き合っていないですってば！」

笑っていた師匠が急に真剣な顔になり、

「じゃあ、何か。テーマは真美ちゃんだけじゃ物足りなくあのお嬢様っぽい子とも遊んでるのか？おいおい、俺はお前に二股だけはするなと言ったはずだぜ？」

と、怖い顔で言った。

「だから、二人ともそんな関係じゃないですってば！」

その後、師匠に二人とも何も関係が無い事を説明して納得させるまでに三十分かった。

店を出ると一台のタクシーが止まっていた。

「もう遅いからな。今日は俺が付き合わせたんだ。お前はタクシーで家に帰れ。金は心配するなよ。」

と、言うのと、師匠は私に五千円札を渡した。夕飯を御ちそうしてくださったのにここまでしてもらうのは相手が社会人とは言えさすがに悪い。

「大丈夫ですって！僕電車で帰れますし！」

「いいから黙って言う事聞け。弟子は師匠の言う事をちゃんと守るもんだぜ。それにほら、タクシーの運ちゃんもお前を連れていけないと商売あがったりじゃねえか。」

「でも……」

「いいから乗れ。お礼なんて考えるなよ。それでも何かを返したかったら、文化祭でお前が出来る最高のプレイを最高に楽しんでいる姿を俺に見せる。それこそ、俺がもう一度バンドを組んで楽しみたいと思わせる位にな。」

そこまで言われて私は師匠の恩を受けない訳にはいかなかった。

「師匠、ありがとうございました。」

私は師匠に頭を下げてタクシーに乗り込んだ。タクシーに乗り込んでから師匠の方を見ると、師匠は私の方をずっと見続け、一言、頑張れよと言って踵を返した。

それから、家に着いた後に師匠から一通のメールが届いた。内容は文化祭が終わるまで個人レッスンは無し、文化祭終了後に真美と増田さんと私とでご飯を食べに行く事、そして最後に精一杯楽しめという事が書かれていた。

速い物で、あっという間に文化祭当日を迎えた。クラス展示の準備も無事に終了し、後は文化祭を楽しむだけだった。私達は開催式を行うために近くのホールに向かった。私はスネアとペダル、スティックを持って、真美はベースとエフェクターケースを持ち、増田さんはキーボードを背負いホールの裏側へ向かった。

「よし、私達の初ライブだ！気合入れて行こうぜ！」

「まだ時間じゃないよ。今は楽器を置きに來ただけ、そうでしょ？」
うん、と元気よく真美は頷いた。ステージ裏に着くと、既にダンス部がステージでリハーサルを行っており、その後ろに部室にあったアンプとドラムセットが準備されていた。

「いつの間に運んだんだろう？」

「ジョバンニが一晩でやってくれました。」

増田さんの問いに真美がふざけて返す。その問いが面白かったのか、増田さんは上品に手を口に押さえて笑っている。本当にこの二人は最初の頃が嘘かのように仲良くなった。

それから私達はリハーサルを軽く行い、ホールで昼食を取り、ク
ラスの皆が来るのを待った。皆が来ると私達は合流し、指定の座席
に腰を掛け、開催式を迎えた。オープニングから始まり、数々の催
し物が行われ、多いに盛り上がった。同じクラスの友人も、初めて
の文化祭に目を輝かせて楽しんでた。私も何十年ぶりの中学校
の文化祭の開催式を楽しんだ。

私達の出番が次にさしあった所で私達は席を離れステージ裏へ
向かった。ステージ裏に着いた時には私達の前のダンス部の演技が
終わり、幕が下がっていた。業者の人達が楽器をセッティングして
いたので、私達も急いで楽器を取り、それぞれの楽器をスタンバイ
した。軽く音出しをした所で一度ステージの真ん中に集まった。

「私達の初ライブだね。」

「気合入れて行こう！」

「あんまり気負いすぎるなよ？楽しく行こうよ。いつも通り、観客
を楽しませるのも大事だけど、僕達が皆楽しまなきゃ意味がないよ。」

「ステージの真ん中でそれぞれ思った事を言い放った。」

それから私達は円陣を組み、

「良、何か言いたい事ある？」

真美が私に向かって言った。

「そう言えば、師匠が文化祭終わったら皆でご飯食べに行こうだっ
てさ。」

「「それ今言う事？」」

真美と増田さんが笑いながら言った。気を取り直して、

「それじゃあ思いつきり楽しめよう。真美は？」

と言い、真美に繋がった。

「私からは、音楽を楽しみましょう！これだけ！はい次、まっちゃ
ん！」

ちなみにまっちゃんとは増田さんの事だ。

「皆で楽しく音楽を演奏しよう！」

結局、皆音楽を楽しむためにここにいる。それでいいんだ。

「それじゃあ音楽を楽しもうぜ！」

「「オー！」」

二日に渡って行われた文化祭もいよいよ終わりを迎えようとしている。今、私達はグラウンドで行われているキャンプフェイヤーを準備室から見ている。

初日のライブは大盛況で終える事が出来た。私も真美も増田さんも、持てる力を精一杯出し切り、楽しく演奏をした。それが伝わったのか、一曲目、二曲目と次の曲に行く度に盛り上がっていった。最後は大きな拍手と声援を貰い、私達は感動を貰った。

嬉しい事に、開催式が終わり学校へ戻る途中に、同じ学年の女子や先輩達から話しかけられたりしたのだが、真美と増田さんが良いタイミングで話しかけてきたり体を入れてきたので話すタイミングを逃してしまった。私が他の女子と仲良くなるのを好しと思えない理由でもあるのだろうか？小倉からは死ねと散々言われた。

次の日、午前中はクラス展示の場所に私はいた。観に来る一般の

お客さんの相手をしたりと中々忙しかった。

午後は音楽室に向かいライブを行った。私と真美と増田さんのバンドは開催式効果もあり、音楽室の中が人で溢れていた。それこそ小さなライブハウスに有名バンドが来た時みたいな感じに。ドラムの位置から見ていてダイブやモツシュをしたら楽しいだろうなと思いつた後に師匠から俺にドラムをやらせろと言われた。可愛い女子中学生とバンドが組めるなんて事あり得ないんだぜ？と笑っていたが、私達の演奏を見て何か思ってくれたのだろう。素直に、師匠にそのように思わせる事が出来て嬉しかった。

その後、先輩達とのバンドのライブも行い、無事に中学一年生の文化祭は終了した。

「なんか、あつという間だったね。」

窓からグラウンドを見ながら増田さんが喋った。あつという間に始まってあつという間に終わった文化祭の余韻に浸っているのだろう。「そうだね。」

私も窓からキャンプファイヤーを眺めてそう答えた。私としても、これまであったどの文化祭よりも忙しく、楽しかった。素晴らしい思い出が出来たと思っていると後ろから頭を叩かれた。

「痛いな！」

「何余韻に浸ってるんだよ！俺は全然満足してないぞ！」

そう言えば小倉とはバンドも組んで無かったので文化祭期間中はあまり会っていなかった。

「知らないよ。」

僕がそう答えると、小倉は何でお前ばかり良い思いするんだよ！と叫び泣いてしまった。確かに私は他の人より得をしているのかもしれない。

「あ、キャンプファイヤー終わっちゃうよ！ね、最後は皆でグラウンドで見ようよ！」

真美の問いに、

「それもそうだね。小倉、外行くよ！」

私は小倉を引き連れて外へ向かった。後ろに真美と増田さんが仲良く話しながら着いてくる。

グラウンドに着くと、調度キャンプファイヤーが燃え尽きる所だった。それを四人で見で、私達の文化祭が終了した。最高の思い出と共に、二度と戻らないこの時を胸に仕舞い込み、私の二回目の、そして最高の中学一年生の文化祭が終わりを告げた。

中学一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今年になって歳が一回り以上上の方と話す機会を多く頂きました。その人達が経験してきた事を聞く度に、重みが伝わってきて違うんじゃないかと感じてても、違いますよね？と軽々しく話せない、という事を経験しました。彼らのそういう話を聞いて、ただ時間の無駄にするか、自分の人生に活かす事が出来るかは自分次第なんですね。過去から学び、それを次に活かす、これが大事なのではないかと私は思います。違うと思ったのならば、そのようにならないようにする。そうだな、と思ったのならばそれを活用する。何事も使いようでどうともなるみたいです。それでは今回も読んで頂き本当にありがとうございます！もっともっと読みやすくなるように頑張りたいと思います！

中学一年生？（前書き）

本編第七話です。今回も読んで頂ければ幸いです。ここ最近という
か数日の間にこんなに書けたことに自分でも驚きを隠せません。
完成度はともかく・・・取り敢えず、書き続けて、勉強して
いけばより良い物が出来ると信じていますので頑張つて続けたいと
思います。では宜しくお願いします。

中学一年生？

「もーいーくつねーるとー クーリースーマースー」

準備室の窓際にクリスマスツリーを組み立てながら小倉は歌っていた。正月の歌をクリスマスに変えているのは突っ込み待ちなのだろうか？ 周りに真美も増田さんもいるのに二人とも小倉を無視し、読書にふけていた。誰か突っ込めばいいのに、誰も突っ込まない。外の寒さと二人の小倉への態度が比例しているかのように冷たい。小倉の替え歌もついに歌詞が思いつかないのか鼻歌になってきた。これはいいよまずい。

「クリスマスにはーかーのじょとーちちくりーおい！それ以上いけない。」

下ネタに発展しそうになった所を、急いで止めた。だが、何を言いたかったのか察しが付いた二人は今までよりも冷たい視線で小倉を包み込んだ。さすがにそれに耐えきれなくなった小倉が、

「な、何で二人は私をそのような目で睨みつけるのでしょうか？」

と、怖々とクリスマスツリーを組み立てていた手を止め尋ねた。しかし、二人は何も答えようとしない。直ぐ様に視線を読んでいた本に戻した。二人とも小倉が来るまでこのような態度では無かった。いつものようにオリジナル曲について話し合い、それから適当に会話をしていたはずだ。それが小倉が準備室に入ってくるなり急に会話を辞め本を読み始めた。

「なあ、なんかしたの？」

無言の状況に耐えられなくなり、私は小倉に二人に何かしたのか尋ねた。

「と、特に何もしていないとは思っただけど……ひっ！」

何もしてないに反応して二人はまたしても小倉を睨みつけた。小倉は蛇に睨まれた蛙のように縮こまった。

さすがの私もこの状況に耐えれなくなってきた。

「じゃ、じゃあ俺先に帰るね。また明日ね。」

私が荷物を持ち、準備室を出ようとすると、

「私も帰る。」

「私も帰ります。」

真美と増田さんの二人も身支度を整え準備室を出ようとした。私が呆気にとられていると、

「良、はやくして。」

と急かされたので、

「じゃあ、一人で頑張って頂戴。なんだったら明日の朝に来て俺やるから。」

私は小倉にそう言うと、準備室を後にした。

「あいつさ、私にクリスマスは一人なんでしょって聞いてきたんだよ！？という神経してんのよ！」

「私も言われました！まったくデリカシーが無いですよね！」

二人は互いに小倉についての愚痴を言い合っている。察するに、個人個人にクリスマスの時に一人なのかと聞いていたらしい。おそらく、一人ならば一緒に過ごそうと誘う手はずだったのだが、聞き方に問題があったようで、クリスマスの時は一人なんだろう、とからかわれたと思ったのだろう。

「多分さ、小倉と一緒にクリスマスを過ごしたかったんだよ。ちょっと言い方が悪かっただけで……」

「そうだとしても！普通そういう話を笑いながら話す？だからあいつはモテないんだよ！」

少しだが小倉に同情したくなる。私もモテた記憶が無いので、小倉がクリスマスまでに彼女を作って一緒に過ごしたいという願望は解らくもない。

「そういえば良くんはクリスマスは予定あるの？」

増田さんが話を切り替えようと私に話を振った。

「いつも通りに家族で過ごそうって思ってるよ。学校もあるし、夜

遅くまで出歩くわけにはいかないからね。」

特定の誰かと一緒に過ごすにはまだ早い年齢だ。そういう事は高校を出てからでも遅くないだろう。

「そうなんだ………」

顔を足元に向けて増田さんが答える。確かに小倉も含めて皆で盛大に楽しく行うのは面白そうではあるが、今はまだ家族で過ごしてもいいかも知れないと考えている。

「まあ、増田さんも僕のことには気にしないで楽しく過ごしなよ。」

「うん………」

励ましたつもりがさらに暗くしてしまった。既に断られたのだろうか？

「ほんと良くて………」

「うん、そうだね………」

二人はそう言い残すとトボトボと歩いて行った。二人の後を追ってはならないような気がしたので、私は挨拶をして一人、違う道に行くことにした。

「お前は本当に解ってないな。」

師匠との個人レッスンが終わり、今日の事を話すと呆れた顔をしてそう言った。

「普通さ、女の方からクリスマスの予定聞かれる事って無いぜ？あったとしたら、それは気がある証拠だ。」

自動販売機の前のベンチに腰掛けている師匠が頭を掻きながら言った。

「まゝ、普通はそう感じますよね。」

「そう思うなら気の利かせた言葉位言ってやれよ。お前が最後に言った言葉は人によっちゃフラれたと捉える奴もいるぜ。まゝ、あつちはお前が鈍感って事で終わらせてるけどよ。」

師匠の言っている事は解る。確かに最後の台詞はまずかったのかも知れない。

「僕は二人の事は好きです。でも恋愛感情としての好きって気持ちはまだ感じた事がないんです。二人はもしかしたら僕の事をそういう気持ちで見ているのかもしれませんが。だからこそ僕は、恋愛感情を抱いて無い時にそれに答えるのは相手に失礼だし、何より僕自身が許せません。」

私だってそこまで鈍感なわけじゃない。違う可能性もあるだろうけど。だが、違わなかった場合、今の私の感情でそれに答えるのは私は出来ない。

「お前の言う事はもつともだ。そんな気持ちで受け入れられても相手に失礼だよな。だが恋愛感情ってのは解らないもんでな、最初は何とも思わないで適当に付き合っただとしても、場合によっては付き合っているうちに好きになってくる、って事もあるんだぜ。俺の今の嫁さんがそうだった。」

いつの間にか師匠は私の方を指差して熱く語っていた。言い終わると師匠は立ち上がり、

「ま、お前は少し大人びているからな。そんなお前だからこそ悩んでいるんだろうけど。多いに悩め、少年！悩む事は良い事だぜ。」
それだけ言っと、師匠は私を置いてこの場を去った。

「良は今年のクリスマスは真美ちゃんと二人っきりで過ごすんだろ？あまり遅くなるなよ。」

珍しく早く帰ってきた父が夕飯の席で私に聞いてきた。

「今年も家族で過ごそうと思ってるんだけど。」

私の言葉に父は心底驚いた表情をした。

「何で？クリスマスだぜ？彼女と一緒にいたいって思わないの？」

「お兄ちゃん是谁とも付き合っていないよ！」

父の言葉に私が反論しようとするよりも先に加奈が表情を顕にして言った。

「お兄ちゃんは今後も来年も家族皆でクリスマスを祝いたいんだよね!？」

「そ、そうだね。」

妹の加奈の迫力が凄いためにそう言うしか無かった。別に家族と過ごすのが嫌ということではないのだが、最近の加奈は私の手に負えない時がある。

「付き合っていないのか」。まだ良には恋愛は早いのかな……。

疑問に思いながら、父は食事を口に運ぶ。

「まゝ家族で過ごすのもいいけど、友達で集まるクリスマスもいいもんだぜ？俺が高校の頃は男だけで集まってむさ苦しいクリスマスを過ごした事もあったな。あの時は悲しかったな。何が悲しくてカップルが幸せそうに過ごしている時に男で集まってるのかって思っちゃって。」

昔を思い出しながら喋る父を見て、私も同じ事をしたのを思い出した。大学二年生の時、彼女がいない友人を集めて、クリスマスイブの日に海で騒いだ。寂しい気持ちをまぎわらすために集まり、馬鹿騒ぎをしてクリスマスイブを過ごした。

「でも大学の時はずっと私と一緒にだったじゃない？」

「まゝ、付き合っちゃったもんね。まさか結婚までするとはその時絶対思わなかっただろうけど。」

父と母が仲良く笑いあう。学生時代から交際を始め、今に至っても仲の良い所を見ると、運命の人同士で結ばれたのだろうと思う。もしあの時、私が死んでいなかったら父と母くらいの年代になっている。私は結婚をして、家庭をもつことが出来たのだろうか？子供を作り、幸せな家庭を築くことができたのだろうか？

「お兄ちゃん、どうしたの？」

加奈の言葉が耳に入った。加奈を見ると心配そうに私を見ている。

「何でもないよ。ちよつと考えてただけ。」

「お父さんとお母さんを見て？お父さんも高校生の頃は寂しかったみたいけど、今は凄く幸せそうだね。」

父と母が楽しそうに会話しているのを見て、加奈が微笑みながら言う。加奈の“今は”という言葉に、私は昔の自分では無いことを思い出した。今の私は良だ、どうあがいても過去の私に戻る事は無い。良として人生を歩んでいくしかないのだ。その事を思い出すと自然と笑みがこぼれた。突然笑顔になった私を見て、加奈は不思議そうな顔をしていた。私は加奈の頭を撫でて、

「ありがとう。」

と、言った。私の突然の行動と言葉に首を傾げていたが、私が元気になったのだと感じたのか、

「どういたしまして！お兄ちゃんは私がいなくちゃ駄目だね！」

加奈は飛び切りの笑顔を私に向けた。

クリスマススイブまで一週間を切った日の夜、父がクリスマススイブの日に仕事で出張に出かける事になったので、今年は父のいないクリスマススイブになる事が決まった。その話をしている時の父の顔は物凄く残念そうであった。

「そういう事だから良も加奈も友達とクリスマスパーティーしてもいいんだぞ？別に家で行ってもいいし。な？」

「ええ。大勢で賑わうつても悪くないわね。」

父の言葉に母も頷いた。その言葉に、加奈は勢い良く、

「それなら真美ちゃんと増田さん呼ばうよ！ね、お兄ちゃん！」

私に同意を求めた。私は少し考えてから、

「まゝ、二人がいいって言うなら僕は構わないけど。」

「そうね、真美ちゃんも増田さんもきつと喜ぶわ。良、連絡してあげたら？」

真美と増田さんが来るかも知れない事に嬉しそうな表情をし、手を

叩きながら母が答えた。私は直ぐ様、真美と増田さんに連絡を取り、二人とも喜んで当日来てくれる事が決まった。ついでに小倉も誘ってみた所、電話の向こうで泣きながら感謝された。

「……メリークリスマス!!!!!!」

クラッカーを鳴らし、皆一斉にメリークリスマスと叫んだ。ダイニングで行うには少し狭いために、広いリビングで行われた。

「それにしても豪華な料理ですね！皆手作りなんですか？」

リビングテーブルに所狭しと並べられた料理を見て、小倉がはしやぎながら喋った。それを聞いて母は微笑みながら、

「そうよ。家では手作りなの。お口に合わなかったらごめんなさいね。でも、多く作っちゃったからもしよかつたらいっぱい食べてね。」

「めっちゃ美味しいですよ！こんなに美味しかったら外で食べる必要はないです！」

いつの間にか小皿に料理を載せて食べていたのか、小倉は肉を頼張りながら答えた。あまりに美味しそうに食べている小倉を見て、母は満足そうであった。

「本当に美味しいです。今度私に料理教えてくれませんか？」

「おばさん、私にも教えて！」

増田さんも真美も、母の料理の味に感動をしたのか母に料理をご教授してくれないかと頼んでいた。

「お兄ちゃん、何か料理お皿に盛ろうか？」

「うん、お願い。」

加奈に私の小皿を渡し、料理を盛ってもらった。その間にコップについてあったジュースを口に含んだ。

「お前、毎日こんな美味しい料理食ってるのかよ？」

「毎日こんな豪華な料理が出る訳ないよ。でも、母さんの作る料理

は何でも美味しいよ。」

小倉が羨ましそうに聞いてきたので私は正直に答えた。確かに母の作る料理は美味しい。店で出される料理と比べても遜色無い。それこそ下手な店よりかは比べ物にならないくらい美味しい。友人が口々に母の料理を美味しいと言ってくれるのは息子の私にとっても喜ばしい事だ。口に運んだ後の表情から決してお世辞で言っているのでは無いと解るのでなお嬉しい。

「いやゝ料理も上手でそんなに綺麗なら若い時はモテたんじゃないですか？もちろん今でもお美しいですけど。」

「お前、人の母さん口説いてるんじゃないよ。」

食事が進み、一段落してくると女子は女子同士で会話に夢中になる。

「でさゝどうしたらいいと思う？」

「私も知りたいですよ！てか、真美さんには負けませんからね！」

「言ってくれるねゝ、私だってまっちゃんには負けないから！」

「二人とも！私の存在を忘れないください！私が一番ですから！」

女の子同士仲良く、とは見えないが話をしている。母は後片付けを行っており、私と小倉はテーブルで将棋を指していた。

「なゝ、何でお前ん家ってゲームないの？」

「あるじゃん、今してるだろ。」

「いや、そうじゃなくてテレビゲームの事！」

「必要ないもん。」

私の家にはテレビゲームが無い。なので大勢で遊べる物といったらテーブルゲームしか無いのだ。その事に小倉は少しばかり不満を顕にする。

「お前普段何やってるの？」

「勉強か本を読むか、ギターを弾くか、ドラムパット叩いてるか、リズムトレーニングしてるよ。勉強はともかく、ゲームするより楽しいだろ？」

私の言っている事にいまいちピンとこない表情を小倉はしている。

「小倉つてさ、ギター弾いてて楽しいって思わないの？」

「いや、練習だもん。楽しいって思わないよ。バンドでライブしてる時は楽しいけど。」

「そっか。僕はね、ギターを弾くだけで楽しいんだよ。ドラムもね。それに別に練習と思って曲を弾いたり、リズムトレーニングしていないんだ。楽しいからしてるんだよ。出来ない曲を練習している時も僕は練習をしているって思った事は一度も無い。そうだね、例えるなら物語を読んでいる最中みたいな感覚なんだ。曲を完璧に弾けるようになった時は物語を読み終えた時のように感じてる。その積み重ねが今の僕の技術なんだと思う。好きこそ物の上手なれって事だよ。」

啞然とした顔で小倉は私を見ている。別にこの感覚は今になってからでは無い。前世の時もそうだったのだ。ただギターを弾くだけで楽しかった。スポーツをするよりも、他のどんな遊びをするよりも楽しかった。だから、苦に思う事なんて一度も無い。より上手くなりたいと思って様々な練習をしている時もそれは同じだった。

「なんか、お前が上手な理由が解ったよ。俺はお前程楽しめていないんだな。」

「ま、そのうち楽しいって思えるようになるさ。出来ない時は誰でも楽しくはないからね。」

落ち込み始めた小倉を軽くフォローしておく。こんな私の自論を聞いて腐るのは勿体無さすぎる。

「そろそろ遅い時間になってきたからお風呂入って寝ましょう。」
母がそう言くと、女子は皆で風呂に入り、私と小倉はそれぞれ別々に風呂に入って寝る準備をした。

今日だけ、私は小倉と一緒に楽器が置かれている部屋で寝る事になっている。私と加奈の部屋が一緒の部屋なので、それぞれの部屋に男女別れて寝るということが出来ないからだ。なので、私と加奈の部屋に、加奈と真美と増田さんが寝る事になった。私の持ち物で

見られて恥ずかしい物は無いのでそこら辺は大丈夫である。

「うわ、すごい。このギターめっちゃいいやつじゃん！アンプもこんなに良い物を……」

部屋に置いてある楽器類を見て小倉は興奮していた。主に父と母の楽器が置いてあり、この部屋で私も加奈も音を出している。

「全部父さんと母さんの物だよ。僕のギターは部屋においてあるし、ドラムパットは……まあ、僕の物ってわけじゃないしね。」

「え、お前の両親楽器弾けるの？」

「うん、父さんは昔からギターを弾いていて、母さんもベースをね。二人共、大学の軽音サークルで知り合ったみたいだよ。だから僕は小さい頃から楽器を演奏してるんだ。」

「環境ってやつか……」

小倉の言う通り、環境ってのは思う以上に人を左右する。別にそういう環境で無くても才あるものは上に行くのだが、普通の人ほど環境次第でどうともなる。もっとも、環境だけでなく自分の心構えの方が大事なのは言うまでも無いが。

布団を敷き、電気を消して私達は床に着いた。いざ目を閉じようとした時、小倉が声をかけてきた。

「なあ良、お前真美さんと増田さんどっちが好きなんだ？」

私は小倉の問いに答えられないでいた。恋愛感情を無しで言えば両方好きだ。だが、不思議な事に二人には恋愛感情と言うものが芽生えない。それは他の女性に対してでもある。私が同性愛者だからという事ではなく、おそらく、精神面で思春期を迎えていないからであろう。身体面では二次成長期を迎えた。それと同じくして、普通は思春期に差し掛かるはずである。それなのに、今の私は異性として好意を抱くという感情が未だに芽生えない。

「二人とも好きだよ。」

「そういう事じゃなくて！女としてどっちが好きかって事だよ。」

小倉の口調が激しくなっている。私はその問いに答えられなかった。

小倉は深く問いただす事もせず、私たちは眠りについた。

<Side Another>

今日は凄く楽しかった。この前良くんにクリスマスの事を聞いたときには考えられない状況。

私が良くと深く関わるようになったのは小学校6年生の頃からだけど、今みたいな気持ちになったのは小学校最後の発表会のライブ後。以前から勉強も出来るし、顔も全然カッコいいほうだと思ってたけど、バンド練習してる時は全然違った。学校で見せる表情よりも活き活きとして、凄くカッコよかった。あんなに楽しそうな顔できるんだって思った。その時から何となく良いなって感じたのがライブを通して好きって感情になった。私はこの人以外を好きになるなんて有り得ない！そう思った。

中学校に上がって、同じクラスになれたらいいななんて思ってた。なんと、同じクラスになった！これでまた良くと一緒にいる時間が多くなる、そう思ったらとても嬉しかった。でも、同じクラスにいたのは良くんの友達の真美さん。一度だけみたことがあった。バンド練習中に勝手に入ってきた子。しかも良くんの手を引く張って！それから真美さんは良くと一緒にセッションを始めたんだけど、その時の良くんの顔が私達とやっている時よりも楽しそ

うだったのが悔しかった。

始めの頃は真美さんは苦手だった。私とは違って明るいし、活発だし、美人だし。でも、プールの一件以来、私は真美さんと友達になった。真美さんの良くんへの思いが私と同じだということが解ると、絶対に負けない！って気持ちになった。でも同時に、私以外と結ばれるなら真美さんしか認めないって気持ちにもなった。

良くんは文化祭以降、学校内でも有名人になった。女の子からの人気も凄い。だけど絶対に負けない！真美さんにも負けない！

私は二人が寝静まったのを見て部屋を飛び出した。ちょっと卑怯だけど、良くんの寝顔が見たかった。ついでにキスもしちゃおうと思ってる。あと少して良くんが寝てる部屋だ！勇気を振り絞って、

「増田さん、そこはトイレじゃないですよ？」

声のした方へびつくりして振り向くとそこには加奈ちゃんがいた！

「さあ、トイレはこちですよ。ほら、行きますよ！」

加奈ちゃんに無理やり連れられて私はトイレに向かわされた。加奈ちゃんもしかして、

「増田さん、私の目が黒いうちはお兄ちゃんは渡しませんから。」

「……………真美さん、もしかしたら最大の敵は加奈ちゃんかもしれないよ……………」

中学一年生？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。今回は良とは別の視点を入れたかったので、最後は視点が変わったのを解りやすくするようにしました。そんなのいらねーよと感じる人もいるでしょうが、一応、ということでは今回も読んでいただき誠にありがとうございます。次回も早ければ今日中に書き上げたいです。

外伝 別の転生者の場合？（前書き）

外伝二話目です。結構匠の性格、口調が変わってますが中二病にさしかかろうとしている、と言う事で許してください。一応中学一年生ですからね。それでは今回も最後まで読んで頂ければ幸いです。おそらく今までで一番長いと思います。でも眠気を抑えて頑張って書きました。ではよろしく願います。

外伝 別の転生者の場合？

相変わらず不思議な夢を見続ける日々が続いている。内容の速度が速く、一瞬のうちに全てを見る事が出来たのならそれは走馬灯なのではないだろうか。でも俺の生活している内容では無い。まるで夢の中で物語を見ているようだ。普遍的な、摩訶不思議の無いくだらない人生という物語を。

あの屋上で亜里抄と初めて出会った日から毎日、亜里抄は屋上に現れた。一人で勝手に喋るのを適当に頷き、適当に返している事が最初の頃は多かった。次第に、少しずつ会話をするようになった。嫌なら行かなければいいだけのはず。だけど、毎日屋上に俺は行つた。何をする訳でも無く、ただ亜里抄の喋ってる事を聞いているだけなのに。

「お、今日もいるね。私といるのが好きなの？」

下から顔を覗くように亜里抄が俺を見る。女性の上目遣いは何故か男心をくすぶる。

「別にそんなじゃない。」

「またまた〜照れちゃって〜可愛いな〜。」

特に重要な会話をする訳でも無い、何かをする訳でも無い、それなのに俺と亜里抄は放課後に毎日屋上で会っていた。いつしかそれが俺と亜里抄にとっての日課になっていた。

どこもかしこも文化祭で盛り上がってる。たった一日しか行わない展示のためにクラスメイトは張り切り、楽しそうにしている。何をそんなに楽しいのか。どうせ最後に壊すんだから適当に作って適当に行えばいいのに。俺が帰ろうとして鞆を持ち、椅子から立つと、

「ちよつと佐藤、あんた部活も入って無いならちゃんと手伝ってよ。」

ある女が俺が帰るのを止めた。何で俺がこいつらの青春ごっこに付き合わなければならぬのか。

「聞いているの？手伝えって言ってるの！」

「うぜえよ。お前らに手伝う義理なんて一つも無い。」

たったそれだけの言葉で、俺に手伝えと言ってきた女は怒り狂った。別に俺一人いなくなつて出来るんだろ？ただ作業の効率が良くなるためだけに呼んでるんだろ？そんなのお断りだ。誰が好き好んで歯車になりたいものか。そんな奴の気が知れない。

「佐藤君だっけ？君が手伝わなくて帰るのは、何か理由があるのかな？」

「うぜえって。」

こいつもこいつだ。女に良い所を見せようとして偽善者ぶっている。くだらない。ちよつとドラムが出来て、ちよつと顔がよくて、ちよつと頭良いだけで周りの女はキャーキャー騒ぎやがって。

「何か理由があるなら仕方ないけど、何も無いなら手伝ってくれないか？見ての通りまだ終わって無いんだよ。」

「だからうぜえよ。」

「そついう態度をとらずにさ、手伝ってよ。」

俺はこいつの言ってる事を聞いていて、段々頭に血が昇っていく

のが解った。言葉よりも先に手が動く。気が付いたら胸倉をつかんで殴っていた。

「うぜえって言ってるんだろ！」

そいつを殴り飛ばし、ドアを開けて教室を出ようとした時、
「理由があつたのなら僕が詫びるけど、君の我が儘で帰るのなら僕は君を許さないよ。」

俺に殴られたのに脅えるどころか言い返しやがった。そいつの言葉を見殺して俺は教室を出て行った。廊下に出るとそれまで静かだった教室が騒がしくなったのが解った。どいつもこいつもくだらねえ。

教室を出て、そのまま帰ろうと思ったのだが、殴った時に鞆を教室に置いた事を思い出した。今更教室に戻って忘れ物を取りに行くなんてカツコ悪い事出来る訳が無いので、玄関に向かわず、屋上で時間を潰す事に決めた。

屋上に出ると、どこかのクラスか部活が文化祭のための準備を行っていた。幸いにもうちのクラスの連中はいなかったため、俺は屋上の端に行きアスファルトに腰を下ろした。

放課後に残って文化祭のために準備をする。せつかくの時間をそんな事に割く事が俺には不思議でなかった。

「おいたく！お前大変な事になったぞ！」

いつの間にか正也が目の前にいて、鞆を俺に投げ渡した。

「お前が殴った相手あいつだぞ？良だぞ？これで女子全員を敵に回したぞ。しかも最初にお前が反抗した相手もまずい、真美さんにある態度取ったら男子全員からシカトされるぞ。」

「別にいいんじゃない。」

俺の発言に正也は呆れた顔をして一言言い残し、屋上を出て行った。何を言ったか聞こえなかったが。

「それで匠は屋上にいるんだね。」

屋上のフェンスに背をもたれ、空を見ながら亜里抄が答えた。最初に来た時よりも人数が減り、日が傾け始めている事もあり屋上は寂しさを感じさせられる。

「亜里抄は手伝わなくていいのか？」

「私のクラスは今日はもう終わったから。それに、私不器用だからあんま手伝わせてくれないんだ。私何かすると皆が慌てちゃうし。出来る事は特に無いんだ。」

空を見ながら悲しそうに亜里抄は答えた。

「手伝わなくていいならそれでいいだろ。俺なら喜ぶね。何をそんなに悲しそうにしてるんだよ。」

「だって！」

亜里抄はそれまで見上げていた空から私の方を向いたと同時に声を張り上げて言った。

「だって……皆が必死に一つの目標のために頑張っている時に、私は何にも出来ないんだよ！？それほど悔しくて、悲しい事は無いよ！」

亜里抄が悲痛の声を上げて訴えるが、何故そこまで悲しいのか全く理解出来ない。そもそも、皆が必死に一つの目標に向かってる事に自分が一緒に取り組む必要は全く無い。そういうのはしたいやつだけでやればいい。

「やっぱ俺は悲しいとは思えない。自分の力が足りないって点は悔しくおもつだろうけど、そういう、皆で頑張ろうって気持ちに俺はならない。」

俺の言った事に対して亜里抄は驚きを隠せない顔をしている。

「亜里抄は、ただ皆で行う作業を手伝って力になれたっていう結果が欲しかったんじゃないのか？それを過程の段階で結果に結びつけなかった、それが悔しくて悲しいんじゃないのか？そんな自己満足を得るために行っている事に同意を求められても俺は困る。」

「違う……私は皆で喜びたくて……」

亜里抄の口から出た言葉は今までにないくらい小さく、弱く、脆く感じた。嗚咽も聞こえる。今まで人のため、と行ってきた事が本当は自分のためと言う事に気が付かされてショックなのだろう。

「違う……自己満足なんかじゃ……」

膝を抱え、蹲るようにして亜里抄は言った。

「くだらねえ」

鞆を持つてから立ちあがり、俺は亜里抄を残して屋上を後にした。俺の言った事に間違いは無い。それなのに、泣いている亜里抄をみてられなくて俺は屋上から逃げ出した。

「だりい」

文化祭が始まったが、俺は一人屋上でふけていた。あれから亜里抄は屋上に来る事は無かった。それでも今日まで毎日屋上に来てしまうのは日課となった事を忘れられないからだろう。

あの後、正也の言う通り俺はクラスの連中からハブにあった。皆が腫れ物を扱うように俺を見てきたのが解った。ただ、俺と衝突したあいっだけは執拗に手伝えと言ってきた。正也もクラスでハブに遭いたくないのか学校で俺と会話する事は無くなった。はれて、俺はクラス内でぼっちという称号を得たのだった。取り敢えず、下校時間になるまでここで俺は寝ている事にする。そう思い瞼を閉じた瞬間、

「佐藤、今の時間は君が当番だ。こんな所にいないで今すぐ行くぞ。」

目を開けるとあいつがそこにいた。

「うるせーな。別に俺がいなくてもいいだろ。逆に俺が行ったらあいつらが困るだろ。」

「へー、君は他人の心配をきちんと出来るんじゃないか。」

その言葉に若干苛立ちを覚えてあいつを見るとニヤニヤした顔で俺を見ていた。

「殺すぞ。」

「それは勘弁してほしいね。」

「じゃあ黙ってろ。」

「そうはいかない。君が当番になってくれないと僕が困る。今からライブなんだよ。」

「知るか。」

お前のライブなんかどうでもいい。むしろお前が困るのなら喜んで邪魔をしよう。

「そっか、そんなに嫌か。残念だな、君が来てくれるんだったら・・・。」

物で釣ろうとか考えているようだけどそんな物では俺は釣られない。

「君が常に屋上にいる事を皆に伝えよう。」

勝ち誇った顔で言っているがそれが何になる？別に俺が屋上にいる事が知れたくらいで俺に不利益は被らない。

「何にもおきないと思うてるだろうけど、君が平日の放課後に屋上を頻繁に利用している事を真美が知ったら悪戯されるだろうな、執拗に。それにある事無い事を喋って君をクラスで一番のお笑いキヤラにしてやるさ。」

「おい、お前マジで殺すぞ。」

「今の君に暴力やハブかれる事は痛くない。それよりも周りの皆から自分が笑い物にされるほうが痛いはずだ。例えば、屋上で物思い

にふける事がカッコイイと思ってるハードボイルド野郎だと思わせたりね。」

「べ、別にカッコイイって思ってここにいるわけじゃ！」

慌てて反論しようと思ひ掴みかろう、としたのだがやんわりとかわされた。そう言えばこいつ運動面も良かったんだっけ。

「それに、独りになりたがるのもそうなんじゃないのか？ 変に論理ぶって相手を追い詰めるのも。」

こいつの前でそういう話をした事は無い。しかもあの時だけだ。

「…………お前！」

「まゝ聞けよ。別にそれが悪いって言ってるんじゃない。今の君がそれが良いと思ってるそういう風になった事に僕が否定出来る訳が無い。でもな…………一つだけ言わせてもらおう。お前の思う自論をベラベラと一方的に相手に喋って、泣かせてどうするんだ！」

気が付けば胸倉を掴まれ、睨まれていた。その声は、低く静かな感じで、ドスが効いていた。反論しようにもこいつの出す迫力に俺は何も言えないでいた。

「お前はそれをして何がしたかったんだ？ 何故相手を思いやらない？ 何故相手の考えを理解しようとしない？ お前はあの時に彼女が悲しんでいた事に対して深く考えるべきだったんじゃないのか？ 違うか！」

俺の胸倉をつかんでいる手に力が入っている。こいつが怒った所なんて見た事が無かった。だが、それ以上にこいつの言葉が突き刺さる。何故こんなにも痛いのだ、何故こんなにも心に深く突き刺さってくるのか。

「慰めれば良かったのかよ。傷の舐め合いをすれば良かったのかよ。」

大きな声で言う事も出来ず、こいつの目を見て話す事も出来ない。明らかに気後れしている。俺はこんなに弱い人間だったのか？

「そんな事を言ってるんじゃない。相手の考えが違うと思うなら相手の言い分をしっかりと聞いて、しっかりと考える。それから言葉を選

んで喋る。そうしたのなら、あんな事にはならなかったはずだ。お前も相手の事を気に掛けてたからそう言ったんだろ？ 普段のお前なら聞き流してるだけのはずだ。」

こいつの言う事に対して何も言えない。なぜか発する言葉一つ一つに重みを感じるからだ。同じ歳のはずなのに、同じ年数しか生きていないはずなのに。そんなあいつの言葉が俺の心に深く突き刺さって、胸に大きな痛みを感じた。

そんな痛みを感じていると、肩を叩かれた。

「ちよつと長く話すぎたな。もうライブまで時間が無いからこのまま行くよ。皆には悪いけどね。もう一回、彼女の言った事の意味を理解してみな。損得考えずに、心で考えるんだ。」

そう言うのと、あいつは踵を返し屋上から去って行った。

「亜里抄が悲しんでいた理由……」

亜里抄は文化祭の手伝いが出来なくて、それで悲しんでいた。あの時、亜里抄は皆で喜びたかったと言っていた。もしかして、出来あがったという結果の喜びを得る事が目的じゃなく、皆で同じ物を作り上げるという過程を楽しみたかったのではないだろうか。その楽しみが亜里抄にとっての何よりの喜びだったのでは。

「喜びじゃなくて、楽しみたかったって言えよ。」

屋上の上で、大の字になって寝ころび空を見る。ただ空は青く広がっていた。どこまでもどこまでも広がっていた。

俺は本当に馬鹿で頭でつかちだったのかもしれない。あいつの言う通り聞きもせず、理解しようともせず、自分の中の答えだけを物差しとしていた。こういう風に、相手の立場になって考えるだけで違う考えが思いつくのには。

「本当に馬鹿だよな、俺。」

独りが良いと思いつながら、亜里抄との繋がりだけはどこか心の片隅で大切にしていた、失くしたくなかった。だから、あの時屋上から降りる時にあの感情が芽生えたのだろう。

今日、文化祭が終わるまで、終わってからでも亜里抄がここに来る

事を願ってここで待っていていよう。あいつに伝えなければならないことが出来た。

「もしもし、正也か。ちょっとクラス展示の当番やっててくれ。」
正也に電話でそれだけを伝えると、俺は音楽室へ向かった。あいつが夢中になっているというものがどんなものか興味が沸いたからだ。あんな事を言え、俺のためにあそこまで言ってくれたあいつが一番打ち込んでいるものを見てみたかった。

音楽室へ入ると大勢の人がいた、それこそ身動きが出来ないくらいに。そういえば開催式の時にも出てたんだっけか。その時寝てたから解らなかったけど、あの一回で学内で人気が出たのだろうか。流れていた音楽が違う曲に代わり、ライトがステージを照らす。それと同時に、ステージ側のドアが開かれ三人が現れた。よくよく見るとあいつが同じクラスなのは解っているが、他の二人もクラス内で見た事がある。三人がそれぞれの場所に移動し、音を出したと思ったら流れていた音楽が止まった。いよいよ始まるのだ。それまで音楽室内に飛び交った歓声も一段と大きくなった。しばらくして、歓声が止むと、あいつが叩くドラムから曲が始まった。始まるや否や歓声はそれまでとは比較にならないくらいに大きくなった。だが、それ以上に、バンドの爆音が俺を包んだ。

体全身に響き渡るドラムとベースの音、繊細な音でその場全てに広がって行くキーボードの音、それらが完璧に重なり、今までに味わった事の無いような感覚が生まれる。楽器の演奏に乗せ、二人の歌声が広がる。片方は綺麗で優しい歌声、もう片方は力強い歌声。

初めて聴いた曲のはずなのに、気が付いたら涙が流れていた。

「今日は楽しんでくれてありがとう！最後の曲なんだけど、本当はキーボードじゃなくてギターが必要な曲なんですよね。でも私達、頑張ってアレンジしました。とてもいい歌なので最後まで聴いて下さい。ちなみに、歌詞は受付で貰ったパンフレットに書いています。よかったら終わった後にでも読んでください。では、聴いて下さい。MR・BIGで？To be with you」

「お前、何でここにいるんだよ！クラス展示の当番だったはずだろ！」

トイレを出た所で、あいつらにばったりと出くわした。ライブ後直ぐと言う事もあり、肩で息をしていた。

「別に……」

恥ずかしくてこいつの前では絶対にライブを観てたなんて言えない。と思つてたら、ベースを弾いてた奴が俺を指さし、

「佐藤さ、私達のライブ観てたでしょ？ちよつと後ろの方で。しかも泣いてなかった？」

と、ライブを観てた事と俺がライブ中に泣いていた事をこいつはばらしやがった。

「観てなんかいないし、泣いてもいねーよ！」

「そういえば目元が少し腫れてますね、佐藤君、私達の曲聴いて泣いてくれたんだ！ありがとう！」

キーボードの奴が俺の手を両手で握り、上下に振りまわした。違う！と言おうとした時、あいつが俺の目の前に来た。キーボードの子も俺の手を離し、俺はポケットに手をつ込んだ。

「それで、どうするんだ？」

そんな事言われるまでもない。

「やるべき事が解った。」

それだけを言うと、俺は屋上へと向かうために歩き出した。あいつを通り過ぎようとした時、

「じゃ、頑張れよ。それと僕達の曲、最高だったろ？」

自信満々に言ってきたのがむかついたので、

「悪くは無い。」

一言だけ返して、俺は屋上に向かった。

辺りも暗くなって、グラウンドのキャンプファイヤーが綺麗に見える。真ん中で燃え盛る炎を囲んで、生徒達が文化祭の最後を楽しもうと騒いでいた。屋上から観るキャンプファイヤーは俺が思っていたよりもずっと綺麗だった。

あいつと別れてからずっと俺は待っている。でも現れてくれない・
・・・・やっぱり愛想を尽かされたのだろうか・・・・・

「綺麗だね・・・・・」

声がした方を向くと、そこには亜里抄がいた。

「私ね・・・・・自己満足でも良いって思えるんだ。」

亜里抄は俺の目を見て、真剣な顔で言葉を紡いだ。

「私、あれから凄く考えたんだ。今まで楽しんで皆で取り組んだ事って私自信が成功した事を喜ぶために、自己満足のためにやってたのになって。それはあるかも知れない。でも皆と一緒に喜びたいって気持ちも本当なんだよ？確かに自己満足なのかも知れない。でも、自己満足のためにやってきた事で皆と一緒に喜ぶ事が出来るのなら、私はこれからも続けたいと思う。皆のために、皆が喜ぶためについていう他人のためじゃなく、皆と一緒に喜びたいっていう自己満足のために。」

亜里抄の話を聞いて、やはり皆で喜びたかったから手伝えなくて悲しかったのだと解った。手伝えないからでは無く、手伝わなかったという結果から亜里抄は自分は皆と喜ぶ資格が無いと感じていた。もし自分がしっかり手伝えたのなら、もし邪魔にならないくらいで良いから手伝えたのなら自分にも皆と喜ぶ資格があると、でも実際は出来ない、皆と喜ぶ資格なんて無い。だから悔しくて、悲しかったんだ。そして、俺が自己満足と言う否定的な言葉で片づけたため、もつと傷つけてしまった。

「ごめん。」

謝らなければ、そんな気持ちを知ろうともしないで、一方的に傷つけさせたんだ。

「亜里抄の気持ちを考えずに、理解しようともせず、俺の考えで追い込ませ、泣かしてしまつて本当にごめん。俺、今日あるやつに言われたんだ。俺は人の事を考えて無いんじゃないかって。確かにそうだった。あの時亜里抄が言つた言葉を何一つ理解しようとはせず、自分が思う事を物差しにして喋つてた。でもそれじゃ傷つくだけだよな。誰だつて自分の考えを理解されずにただ一方的に否定されるのは辛い。俺はそんな事をしたんだつて教えら、やっと気づいたんだ。」

パチパチとキャンプファイヤーの組み立てた木の燃える音も、生徒達の騒ぐ声も段々耳に入らなくなってきた。

「それで、亜里抄の事を考えたら、俺も亜里抄と同じような考えに行きついた。確かに自己満足と言えば自己満足だけど……」
そういう事を言いたいんじゃないや無て……」

言いたい事は解っているはずなのに言葉に出来ない。簡単な言葉なのに、単純な言葉なのに口から出ない……でも、ここで言わなくちゃいけないんだ。

「それで……その、亜里抄とこのまま会えなくなるのは俺嫌なんだ。これから屋上で二人で会って色んな話をしたいんだ。俺にとって亜里抄と会って話すのは何よりも大事なんだ。だから……これから屋上に来てくれないか……」

喋りながら涙が出た。普段の俺なら考えられない、泣きながら叫び、伝える事。普通に喋ってたはずなのにいつのまにか気持ちが抑えきれなくなっていた。

「馬鹿、それじゃあ告白じゃない……」

涙を流し続ける俺を亜里抄は抱きしめ、

「私だって、匠と一緒にいたいよ。屋上で初めて会った時からなんかほっとけない感じがしてた。ぶっきらぼうで、歳下なのに生意気で、敬語も使わない後輩君。そんな匠と話してるのが楽しかった。一日で一番大切な時間だった。だからあの日、私は匠に拒絶されたと思って凄く悲しかった。準備の事よりも悲しかった。ここに来るのも凄く勇気が必要だったんだよ？でも、来なかったら絶対後悔するって思ってた……だから……ここにきて良かった。」

俺を抱きしめる亜里抄の体は、思ってた以上に小さかった。亜里抄の体を俺も抱きしめた。理屈じゃ無い、心で感じた事を言うだけでこんなに気持ちが近づくなんて。

「俺、こういう感情を初めて感じたから……人によつては違うと言いかもしれないけど、亜里抄の事、好きだと思う。」

「馬鹿、普通に好きって言えないの？」

暗い屋上で、グラウンドではキャンプファイヤーが燃え続ける中、

生徒達が文化祭の余韻を感じている中、

た。

俺と亜里抄はお互いの素直な気持ちを確認めあつ

「佐藤、また行くのか？」

「うるさいな。」

放課後になつたので屋上に行こうとしたらあいつが喋ってきた。文化祭後、必要以上に俺に話しかけるあいつを見て、クラスの奴らは驚いていた。そしてさらに、ベースの女とキーボードの女も俺に話しかけるようになり、クラスの奴らは混乱していた。正也は学校で話さなくなつた事を詫びてきたが、学校以外では変わらなかったので俺は気にしていなかった。

「でも小説のような出会いだな、お前とあゝそれ以上言うな。」

あいつが俺と亜里抄の関係を口走りそうになつたので、それ以上言わないように手で口を押さえた。基本的に、誰にもこの事は話していないはずなのに、何故かこいつらは俺と亜里抄の事を知っているみたいで、たまに茶化してくる。どこで見られたのか……

「ねゝ佐藤、今度さゝ亜里抄さんに会わせてよ、いろいろ話したいんだけど。」

「私も亜里抄さんと話したいです！」

「お前ら声がデカインだよ！」

と、あいつ以上に二人の女の方が執拗に喋ってくるので、おそろく、俺が誰かと付き合っている事は知られていると思われる。最初の頃のように、静かな学園生活とは少し離れたけど、これはこれで悪く無いのかもしれない。

「お、やっと来たね。」

「悪い、あいつらがうるさくてな。」

俺と亜里抄の会う場所は屋上だが、放課後の早い時間なのに人はいない。。どこか、人が来なくて誰にもばれないような場所は無いかと探していたら、意外にあるものだ。そこで俺と亜里抄は会うようにしている。

「でもあのバンドのメンバーと同じクラスだったなんてねーうらやましいな。」

「普段はうつとおしいだけだ。」

「そうなんだ。」

亜里抄が笑いながら答える。まあ、亜里抄さえよかったら今度あいつらを紹介してもいいのかもしれない。

「ね、匠。」

「何だ？」

亜里抄の方を振り向いた時、唇にやわらかな感触が伝わった。

「え、ええ！？」

「相変わらず、突然の事に弱いよね。ファーストキスなんだから大事にしてよ？」

「俺も初めてだし……………」

亜里抄が恥ずかしそうに笑っている。よく顔を見ると少し赤くなっている。おそらく、俺の顔も赤くなってるんだろう。

「取り敢えず、これからよろしくね！」

「う、うん。」

「佐藤が照れてる姿って面白いね。」

「佐藤君も亜里抄さんも幸せそうで羨ましいです！」

「二人とも覗き過ぎ。」

外伝 別の転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回で外伝その一は終わりです。書き終えた後、転生全く関係ね〜と思いました。本編もぶっちゃけ転生関係無くなってたんでしょうがないかなと。それもひとえに私の実力不足です。もっと考えている事をきちんと文章で著わせるようにしなければなりません。途中、自己満足は否定的な意味合いを含むと書きましたが、当たり前ですけど私のこれも自己満足に入ります。そんな自己満足に付き合ってください。本当にうれしく思います。またきつと匠と亜里抄の話は書きたいと思うのでその時は宜しく願います。次の外伝からは結構重い話を書きたいと思っています。それこそ、超ネガティブ人間の話を。まだまだ構想全然練って無いのでこれからですけどね。では、今回も読んで頂き誠にありがとうございます！あ、あともしよろしかったらMR・BIGのTO BE WITH YOUを最後らへんに聞いてみたらいいかも知れないです。書いてる時にずっと頭の中で流れてました。良い曲なので（メタルじゃないですよ、普通のバラードです）もし聴いた事の無い人はこれを機会に聴いてみてください！実は、私が一番好きなバンドはメタルバンドじゃなくてMR・BIGです。

中学三年生？ - 1（前書き）

何と言うか、皆さんありがとうございます！お気に入り登録してくれた方々、読んで頂いた方々！感謝してもしきれません！正直な話、お気に入り登録して下さる方々なんていないだろうなって思いましたし、PVも100行ったら大成功だと思っていました。みなさんのおかげで3000越えを果たしました！他の作家さん比べたら全然少ないほうなんですけれど、私にとっては滅茶苦茶多いです！本当にありがとうございます！

それで、今回なんですけど・・・構想の3分の2くらいしか書いてないんですけど、今までで一番長くなってしまいました。まだまだ続きがあるので八話の？って事にしました。長いんですけど、出来る事ならば最後まで読んで頂ければ嬉しいです。では、今回もよろしく願います。

中学三年生？ - 1

「間もなく　です、　観光電鉄をご利用のお客様はお乗り換えください。忘れ物の無いよう、御仕度ください。この先、揺れる事がありますので、お気を付けください。お降りの際は足元にご注意下さい。」

科学の進歩は凄い物で、前世の実家まで新幹線、特急を乗り継いで三時間ちよつとで着いた。これくらいの時間ならば全然苦にならない。むしろ、新幹線、特急列車の、私の隣に誰も座らなかったのが、私を使わないでここまで来れた。

「暑いな………」

駅のホームに降りるとそれまで冷房の効いていた極楽な世界から、湿度が高く、気温も高いジメジメした地獄に戻された。15年間、ここよりも暑くジメジメした都会で過ごしていたから余裕だろうと思っていたのだが、私が知っている時よりも何倍も暑く感じる。少しは涼しいだと期待していただけに裏切られた思いだ。

駅の改札を出て、バス停まで行くと懐かしい風景が流れてた。昔と少しは変わっていたが、大々的に変わってる訳では無い。懐かしさから、辺りを歩き回った。こんな場所だったかな、とか、前世以来の、帰ってきた故郷に胸を熱くした。

私達の中学生生活は残り一年を切った。二年生の時には学校内でのライブ以外にも、師匠のツテでライブハウスで演奏をしたりた。オ

ーデিশョンを受け、出演する事が決まった時の最初のライブはお客様さんは5人だけだった。お客様さんは皆、私達のおバンプ相手の方が本命らしく、無名な私達は観る価値が無い、と決めつけていたのである。一年生最後の卒業ライブの時の人数と比べると天と地ほどの差であった。私としては懐かしい光景だったが、真美と増田さんは多少ショックを受けたらしい。それからライブ本数を重ねるうちに少しずつ観客数も増えていった。文化祭前には目標の100人を達成し、私達は素直に喜んだ。文化祭ライブ自体も二年連続で開催式で演奏する事が出来き、音楽室でのライブも一年生の時以上に観客が増えた。嬉しい事に、音楽室の中に入りきらないほどで、廊下で聴いてた人が多かったらしい。それから、増田さんはピアノのコンクールで中学生の部、全国三位という好成績を収めた。その時の演奏を生で見ていたのだが、鳥肌物だった。演奏はもちろんの事、ドレス姿も最高だった。そう言えば、加奈もコンクールで小学校全国一位というあり得ない成績を収めた。それも二年連続である。日本全国に天才美少女ピアニストとして紹介された。おかげ様で全国区の有名人になり、全国各地からファンレターが届く。それを一通一通しっかりとチェックをして安全な物を加奈に渡している。もしも危険な物が入っていたり、ロリコンの行き過ぎた輩からの差し入れがあったら迷う事なく捨てている。加奈の安全を守るのは私の役目なのだ。

そもそも、何故私が前世の時の故郷にいるのかと言うと、単純に両親に会うためである。そろそろ一人旅をしても大丈夫な年齢になったので父と母に頼み、夏休みの一週間、一人旅をさせて欲しいと頼んだ。母は猛反対したが、父の、

「いいじゃないか、ほら可愛い子には旅をさせろ、って言葉があるじゃん。それに良だぜ？加奈じゃないんだから。」

という言葉に母は渋々納得した。加奈が付いて行くと駄々をこねたが、さすがに小学生はまづいと言う事になり却下された。その時に

加奈が私に向かって、もう子供じゃないよ・・・

・・・と色気仕掛けをしかけてきた。妹のはずなのに加奈の色気は凄まじく、本気でまずかった。おそらく顔が真っ赤だったのだらう。加奈が本当に色んな意味で怖くなってきたのを感じた。

こうして、私は夏休みを利用して故郷に里帰りをしている。家の方のお盆は他の地域より早く行われるので、調度こちらのお盆時期に来る事が出来た。お盆の時期の帰省ラッシュも上手避けれたので言う事は無い。まさに、死んだ者が帰ってきた、というシュチュエーションだ。

バスに乗り、実家へ向かう。バスから見える街の様子はやはり所々変わっていた。大きな本屋が建っていたり、全国チェーンのフェミレス、ハンバーガーチェーン等の外食産業も進出しているようだ。もし、この地に両親が居なくても、これを見ただけで良かったかもしれない。だが、会えなかった時の事を考えてなかったので不安でもある。

市街地から離れて行き、田んぼばかりの道を走る事30分、ようやく実家近くのバス停に着いた。集落も何も変わっていない。本当にもう一度ここに帰ってくる事ができたのだ。

「ただいま・・・・・・長く時間がかかったよ・・・・・・」
誰に向けて喋った訳でもなく、この土地に挨拶をした。

トラベルバックを引きずり、実家の方へ歩いて行く。近くの海から聞こえてくる波の音、所々に生えている松の木、実家に近付くにつれて、心臓の鼓動音が速くなってくるのが解る。本当に行つていいのか？もし、信じてくれなかったら、もし、まだ植物状のまま生き残っていたのなら・・・・・・不安ばかりが募る。それでも、私が見たのだ。しっかりとケジメを付け、今を生きるために来た

のだ。今更迷つてもどうしようもない。

家の敷地に入り、正面玄関の前に立ち、一回深呼吸をしてからインターホンを押す。暫くしてドアが開かれた。

「はい、どちら様ですか？」

出てきたのは母だった。涙が溢れそうになる。母はもう60近くになっている。最後に見た時よりも随分老けてしまっていた。

「すみません、こちら小比類巻博之さんのご実家でよろしいでしょうか？」

「はい、そうですが何か？」

ここからが怖い。もし植物状態で生きていたのならどうしよう。そんな時どう答えれば良いのだ？だが、ここでずっと立ち往生している訳にはいかない。腹をくくれ、良！

「私、生前に博之さんにお世話になったものなのですが、お線香を上げに参りました。お上がりしてもよろしいでしょうか？」

さあ、賽は投げられた。ここからどうなるかは私も解らない。

「まあご丁寧にどうも、どうぞお入りください。後ろの方々もそうなのかしら？博之の知り合いにしては若すぎるのだと思うけど。」

よし、私は既に死んでいる。良かった。って良くはないのだが。

だがこれで博之の体には未練が無くなった。これからは良として生きなければ・・・母は最後の方向といったのだろうか。後ろの方も？今日は俺以外に線香を上げにくるもの好きなやつがいるのか、と変な思考をしながら後ろを振り返ると

「は、はゝゝあい・・・」

「・・・」

「・・・」

そこにいたのは加奈、真美、増田さんのこの地に居るはずの無い三人だった。

一度、母の方を振り返り、

「すみません、急に来たので準備を行っていないでしょうから、数十分後にまた伺ってもよろしいでしょうか？」

「あら、よく解りましたね。そうして下さると助かります。」

そう言うのと互いに礼をして私は扉を閉めた。そして、無言で三人に手で来い、と合図をし、近くの砂浜に向かった。

「それで、何でここにいるのかな？詳しく説明して。」

「いや、ね？加奈ちゃんが良いが今日にどこか遠くに行くから追跡しようって言いだしてさ」

「ま、真美さんが私がお兄ちゃんいなくなるの寂しいって行ったら跡着けようって言いだしたんじゃないですか！」

真美と加奈が二人で責任の押し付け合いをしている。増田さんはどうしようとおろおろしているし、ここは優しく懐柔するしかない。

「怒って無いから、ね、教えてよ？増田さん！」

「え、ええ~~~~~~~~!!?」

こうなったら強硬手段しかない。私は増田さんの手を取り、目を真剣に見て、

「頼むから教えて欲しい。僕にとって今日は凄く大事な日なんだ。」と頼み込んだ。増田さんの顔が真っ赤になり、静かに頷いた。私も増田さんの手を取り顔を近づけるのは凄く恥ずかしかったが、私に関わる重要な事なので我慢した。その後ろでは加奈と真美がまだ責任の擦り付け合いをしていた。

「それで、加奈が真美に僕が居なくなるのを教えて、二人で跡を付ける事に決めて、何も知らされてない増田さんを勝手に呼び出して僕が家を出るのを確認して、コソコソ着けてきたと。」

真美と加奈を砂浜に正座させ、増田さんは私の持ってきたトラベルバックから服を取りだし、砂浜に広げて座らせた。

「はい、ごめんなさい」

自然と溜め息が出た。これからどうしたらいいのか。幸い、お金の

方はA T Mからおろせば四人分なら一週間くらいなら何とかなるが、
「真美と増田さんは親御さんに説明したの？」

「私はまっちゃんの家泊まるって言ってきた。」

「私も真美さんの家に泊まるって・・・」

二人とも申し訳なさそうにしているが、今回は軽く許すわけにはいかない。

「加奈はどうするんだよ。父さんも母さんも許可してないだろ？」

少し考えるそぶりをして、閃いたという顔をして、

「お兄ちゃんと一緒って言えば良くない？」

確かに、そうなりそうな予感がする。

「取り敢えず、帰りの電車代は僕が立て替えておくから、今日中に帰るんだよ？解った？」

「え〜〜？」

「え〜じゃない！真美も増田さんも一日だけならその嘘も大丈夫だけどそれ以降は無理でしょ！常識的に考えて！」

「でも、良のおばさんに説明して頼んだら・・・」

「そんな事させません！！！」

あまりに吹っ飛んだ意見に、私は頭が痛くなった。これからどうしようというのだろう。

「取り敢えず、今からさっきの家に向かうから僕が言う場所に、僕が出てくるまでそこにいろよ？解った！？」

は〜いと三人は元氣無く返事をした。

「お待たせいたしました、それでは仏壇に案内しますね。」

母の案内の元、私は仏壇に向かった。家は昔と変わっておらず、所々、私が壊した場所が見受けられた。そして、仏壇に入ると、祖父の写真の他に、祖母と私の写真が新しく飾ってあった。そうか、祖母は亡くなったのか。

仏壇の前に座り、蠟燭の火から線香に火を付け、手で軽く振って火をけして、線香を立てて合掌をした。心の中で、祖父と祖母に謝

り、無事に天国に行けたのかを聞いて。お供え物を置いて私は母の方を向いて深く一礼した。母も、

「本当にありがとうございます。息子も喜んでいと思っています。」

母は深く頭を下げ、私に向かって言った。ここまではまだ、本番では無い。ここからが本番なのだ。

「すみません、少しお時間よろしいでしょうか？博之さんについてお話したい事があるのですが。」

「ええ、よろしいですよ。でも私にですか？」

線香を上げにきた目的の人物について話したい事があると言われ、母は不思議そうな顔をしていたが、快く承諾した。

「ここでは話しくいと思いますので、別の場所にしましょうか？」

「そうですね。お願いします。」

私は応接間に通され、椅子に座り、母を待った。しばらくして、母がお茶とお茶受けを持って応接間に入ってきた。私の目の前にそれらを置き、母も椅子に座り、いよいよ話す時が来た。

「それでお話というのは………」

「転生、と言う言葉を御存じですか？」

いきなり転生の話を持ちだした私に、母は首をかしげるしか無かった。

「転生というのは死後に別の存在に生まれ変わる事です。輪廻転生の方が言葉としてなじみがあると思います。」

「そうですね………それで？」

私が仏教用語を出した事により、母は私が息子と関わりがあった人物では無く、宗教関連の人物かも知れないと予防線を張った。見て解る、母の口調が変わったのだ。

「まず最初に、博之さんは 年 に 市の 地域に午後 時に 車に轢かれた、それが原因で死亡した、間違いないですか？」

「そうですね、あなたは博之の死んだ日にちをまさか知らないな

んて言わないでしょうね？」

「残念ながら詳しくは知りません。ですが恐らく事故に遭った日から一年以内に死亡したのではないですか？私は博之さんが事故にあつてから一年後に生を受けました。ですので、今は中学三年生です。」

「・・・・・・・・」

母は無言になった。ここからが大変だ。いよいよ私が転生した事を伝えなければならぬのだから。私は一回軽く深呼吸をし、一息おいて説明を続けた。

「今から言う事は決してフィクションでも何でもありません。全て現実です。おそらく、信じられないでしょうが、私は博之として生を受けて、生活し、事故に遭ってから意識を回復した時、赤子として生を受けました。そして今に至ります。要するに私は、新堂良という体の中に、小比類巻博之の生きてきた記憶、性格を持つ人物と言う事です。」

私が言い終えると母は肩を震わせながら下を向いていた。死んだ息子の魂が私のような若造の中に入っているとされたのだ、今日初めて会った人に。怒りを覚え無い方がおかしい。

「信じられないのも無理はありません。見ず知らずの若造に、体は違えど息子だと言われて怒らない親がどこのいるでしょうか。ですが、今回はそのようなドラマや小説のような話が、本当の事なのです。一応、証拠となりえるか解りませんが、家族以外、それこそあなたと博之さんしかわからないであろう事を幾つかお話ししましょう。」

私は母に、おそらく私と母しか知らないような事をいろいろ話した。浅い話では、父と姉に黙って二人で夕食をした事、その時はだいたいの私の好きなお寿司を食べた事。高校の合格発表の時、私が合格したのにわざと、落ちて落ち込んでいるかのようにして母の元へ結果を報告しに行った事、それを母は、私の口元が笑っているのを見て見破った事、等様々話した。一つ一つ、詳細に話す私を見て、段々

と母の私の見る目が変わってきた。そしてついに、

「博之なの？」

と、目元に涙を溜めて私を見た。

「ごめんね、お母さん。俺、親不孝者だよな。いっぱい尽くしてもらったのに、何一つ返せなかった。ごめんね、ごめんね・・・ごめんね・・・」

そこから先、私は言葉が出なかった。溢れる涙が止まらなく、喋っているうちに言葉が出なくなった。母を見ようにも涙で前が見えない。本当に親不孝者でごめんなさい。

「それで今は都会に住んでるんだ。中学校も私立？ドラムも教室に通ってプロの人に教えてもらってる？お金持ちなんだね・・・」

それから互いに今まであった事を話した。主に謝ってばかりの私に、母は全然気にするなと言った。姿形は違えどまた顔を見せてくれた事が嬉しかったらしい。私がどれだけ感謝してもしきれない事を話すと、互いに、また涙を流した。そして、今の生活を話し、今に至る。

「今の父さんも良い人だし、会社も良い所に勤めてるからね。」

「へーそうなんだ。そういえば、博之が来た時に後ろにいた可愛いらしい子達は？」

「ん？・・・あ・・・」

私は急いで外に飛び出し、トラクター小屋に向かった。

「ごめん！！遅くなった！！」

ドアを開け、三人がいる所に向かった。

「あ、良、やっと来た、加奈ちゃん泣いて大変だったんだよ！！」

加奈を見ると膝を抱えて蹲っている。それを増田さんが心配そうに隣について見ていた。

「加奈！何かあったのか？」

私は急いで加奈の元に駆け寄った。増田さんも心配そうな表情をずつと加奈に向けている。もしかして蛇とかに噛まれたのだろうか？

「おい加奈、何かあった？大丈夫なのか？加奈！」

加奈の肩を掴み、呼び続ける。そうすると、加奈は私の胸に飛びついて、

「お兄ちゃん、怖かった・・・怖かったよ・・・」

と震えながら鼻声で喋り始めた。だいぶ泣いていたのだろう。

「ごめん・・・僕がもっと安全な場所にいさせればよかった・・・」

「私・・・お兄ちゃんと一緒にいたい・・・」

「ああ、いいよ。だから落ち着いて。」

「真美さんと増田さんともいたい。」

「うん、みんなでいような。だから落ち着い・・・は？」

私は胸で泣いているであろう加奈を見た、そこには満面の笑顔の加奈がいた。

「え？・・・え？・・・え？・・・」

真美と増田さんを見ると、真美の手には携帯が握られ、増田さんは胸の前に手を合わせてごめんなさいの格好をしていた。その意味する事と言うと・・・

「もしかして僕、はめられた？・・・」

真美と増田さんがVサインをして、私の胸の中にいる加奈は二人をみて、小さく、やったねと呟きピースをしていた。

「……お邪魔します」

「はい、どうぞ。」

取り敢えず私は、三人を家に上げる事にした。三人と私の関係、ここにいる事の経緯を説明した所、私が帰る日まで宿泊しても良いとの言葉を頂いた。いきなり四人も宿泊させる事となり、少し戸惑っていた様子だが、まだ中学生と小学生の女の子を同伴無しで宿に泊めたり、知らない土地で勝手に行動させる事になるくらいなら、と了承してくれた。その時、

「でも博之、あ、今は良くんか。あの子達に私とあなたの関係どう説明するの？あんたが死んだのってあんたが生まれる二年前よ？・

・喋ってて何か違和感があるわね。」

「取り敢えず、全てを話そうと思う。加奈も真美も増田さんも信頼に値する人だと思うし、誰にも言わないと思うんだ。軽々しく喋っている内容でも無いし、当事者以外が喋ったらキチガイ扱いされるからね。」

そう言うと、母はあんたがそう言うならしたいようにしなさいとだけ言ってくれた。

私と三人は、以前の私の部屋に案内されて、暫くここで寝泊まりをして下さいと言われた。幸いにも、部屋の広さは畳十五畳と、広いワンルームサイズなので広さは困らないのだが、肉親以外の異性と一緒に寝泊まりをするのは若干心もとない。朝起きた時に、生理現象が起きてしまったら大変だ。加奈とでさえ、起きる前は数分心を落ち着かせてから起きるようにしているのに。

「広いね。ここ全て博之さんの個人部屋だったんですか？」

自分の家の間取りと比べて、あまりにも広かったために加奈が質問をした。

「博之と姉が使ってたのよ。博之が実家を離れてからは姉が嫁ぐまで一人で使ってたけどね。」

母が簡単に説明をする。そう言えば、私が実家に帰ってくると姉が一人で広々と使っていた。その姉も今は嫁いで二人の子供を儲けて主婦をしているらしい。自衛隊の航空パイロットの旦那さんだから、働かなくても生活に苦はしないらしい。

「それじゃあ、夕食の時にもう一度呼びますのでそれまでくついで下さい」

母は丁寧にお辞儀をすると、部屋から出るときに私にしか解らないように、頑張れ、と小さく手で合図をした。私も母に解った、と手で合図をした。

あらかじめ母が、四人分の座布団を用意してくれていたので、私達はそれに座った。一息ついてから私が喋ろうとした所、加奈が

「お兄ちゃん、おかしいよね？さっき私、小比類巻さんからお兄ちゃんとの関係を聞いたんだけど、矛盾している点がいっぱいあるんだ。お兄ちゃんは何で小比類巻さんの家に来て、何で昔からの知人かのように二人とも接してるの？私達の知り合いに小比類巻って氏の人は誰もいないんだよ？」

いつの間に母と会話をしていたのか、加奈が私とこの家との関わり合いを聞いてくる。どう三人に説明しようかと考えていただけに疑問を持ってくれた事は、説明するのには好都合だが……フィクションの世界のような話をして、三人が簡単に納得するのだろうか？もし仮に納得したとしても今後同じように接してくれるのだろうか？今更になって不安が頭によぎる。母とは違い、今後も付き合いが長くなるかも知れない人達だ。それこそ加奈は死ぬまで関わるだろう。

「ねえ、聞いているの？はぐらかそうと考えていても無駄だよ。だって博之さんはお兄ちゃんが生まれる一年前に亡くなってるんだから、どうやっても当人同士の関わりは不可能。百歩譲って博之さんが芸能人でお兄ちゃんが尊敬しているんなら考えれなくも無い。お墓に

行かずに、一般人の住んでいる博之さんの実家に線香を上げに行くのは非常識な行いだけ。でも博之さんは有名人じゃない、ただの一般人。おかしいよね？」

いつものふざけた加奈とは違う雰囲気。真美と増田さんは驚愕の表情で加奈を見ていた。二人は忘れていたかもしれないが、加奈は全てにおいて非凡なのだ。これくらいやってのけるかもしれない。だが、私も、犯人を推理で追い詰める探偵のような加奈を初めて、しかも私に向けてされたので内心冷や汗ものだ。

「……お兄ちゃん、もし、私に隠してある事があるのなら言ってくれない？ 私はいつだってお兄ちゃんの味方なんだよ？」

先ほどの問い詰めるような表情から一変して、加奈の表情は悲しそうになった。加奈が名探偵のように推理を披露してくれたので私は中々、言いだすタイミングを探せないでいた。

「あ……兄妹間の話なら私席外そうか？ ね、まっちゃん？」

「そ、そうだね、真美さん。」

慌てて真美と増田さんが立ち上がり、部屋から出ようとする。何故か、加奈がラトのように計画通り！ って顔をしていたが、

「待つて。二人ともここまで加奈が言ったら気になるでしょ？ 本当は加奈が疑問をもつ前に三人に説明しようとしたんだけど……・むしろ辻褄が合うし説明し易くなったのかも知れない。だから僕は二人を、僕の友人の中で最高の友人、最も信頼のおける人だからこそ話そうと思う。だから座って。」

真美と増田さんは最初、困った顔をしたが、話を聞いていくうちに表情が真剣なものになり、もう一度座布団に座った。加奈が物凄く不服そうな顔をしていたが。

「これから話す事は絶対に他の人に言わないでほしい。多分信じないだろうけど。加奈、お父さんにも、お母さんにも言わないでね。僕は墓までこの事を誰にも言わないでおこうと思ってたから。だから三人が僕の跡を着けてここに来たのは最大の誤算なんだ……・でもしょうがない。取り敢えず、三人に話しておきたい事は小比

類巻博之って人の事。この人は僕が生まれる二年前に死んだんだ。

バイトが終わり、住んでいるアパートへ向かう途中に後ろからきた車に撥ねられて。彼の人生はそこで終わった。彼が当時住んでいた所はH道 市、大学も同じ市にあり、彼はここと、 市しか住

んでいない。そんな人が、遠く離れた僕と接点を持つにも持てないよね。では何故、僕は彼を知っていて、彼の母と親しく見たのか……。二年前に交通事故に遭った彼が次に意識を回復した時は、目も開けられない、言葉も言えない、ただ泣き声を上げるしかできなかった。それから目を開ける事が出来た時に確認出来たのは自分が小さくなっていったって事。知らない女の人に抱き上げられ、知らない男の人が嬉しそうに私を見ていたんだ。」

私が話す言葉に一字一句逃さまいと、三人は真剣に聞いていた。途中で、何かに気付いた加奈はもしかして、と言う顔で私をみたが、手で静止した。

「加奈はうつすらと気付いたようだね……。彼は目を開ける前から意識があつたために、彼自身にされる事、彼自身が身をもって経験した事から赤子のようじゃないかって思ってたんだ。彼は目を開けてその光景を見た時に確信した。自分が赤子になってるって。それから月日が流れ、彼が三歳になった時、彼は向けられる情報から、彼が事故にあつてから四年が経っている事を知った。一年間、彼が事故にあつてから空白の期間がある事を知ったんだ。そして数ヵ月後、彼に妹が出来た。ここまで言ったらもう解ったよね？……。小比類巻博之が事故に遭つてから次に目を覚ました時、彼は小比類巻博之じゃなかった。彼は新堂良になっていたんだ。」

三人は私の言葉を聞いて声を出せないでいる。当たり前だ。どこにこんな話を初見で聞いて納得する人がいる。内容も現実離れた、フィクションの世界の内容だ。

「僕が喋っている内容は嘘のように聞こえるかもしれない、物語を喋っているのかと思うのかも知れない。でも……。本当の事なんだ。言いかえれば、僕の体は新堂良で、中身は小比類巻博之な

んだ。」

私は下を向いていた。三人が私を頭のおかしい人を見る目、何か得体の知れない人を見る目で見ているかも知れない、と思っただけで怖く
て見る事が出来なかった。

「僕の言っている事は普通の事じゃない。ただの頭がおかしくなっ
た人の話しか聞こえないと思う。僕だってこんな話をされたらそう
思う。だけど……」

言葉が出てこない。何を言ったらいいのか解らない。こんな時どう
したらいいのかなんて誰も解るはずが無い。誰も経験をしていない
のだろうから。

「だけど……これをきっかけに僕と距離を置く結果になっ
ても僕は全然構わない。特に加奈は……僕が、小比類巻博
之が新堂良の中に入ったせいで本当の新堂良の自我は消滅したのか
もし「馬鹿！！！！！！！！」！」

私が言っている途中に加奈に馬鹿と言われ、反射的に顔を上げた所、
私は加奈にはほをぶたれた。そして、加奈は私を強く抱きしめた。

「心が小比類巻博之でも！体が新堂良でも！私の世界一大好きなお
兄ちゃんはお兄ちゃんだけなの！名前なんて関係無い！もしとかだ
つたらとか関係無い！またそんな事いつたら今度は殴るからね！思
いっきり殴るからね！私は今ここにいるお兄ちゃんが大好きなの！」
加奈の抱きしめる手が強くなっている。喋っている声が大きくなる
につれて涙声になっている。

抱きしめられている手が離れたと思ったら、私は胸元を掴まれ引
きよせられると、誰かに殴られた。顔を上げると、そこにいたのは
肩を上下させ、息を荒くしている真美がいた。

「良、今度また距離を置いてもらっても構わないって言ったら……
……私は良を一生許さない。何であんた一人の考えで距離を置か
なくちゃいけないの？私はあんたと距離を置こうなんて気はさらさ
らない！あんたが真剣に、苦しそうな顔で言っている事が嘘だと思
うほど、私とあんたの関係は浅く無いだろ！」

茫然と真美を見上げていると、真美の後ろから増田さんが近寄り、私は頬を叩かれた。

「良くんが不安になる気持ちも解ります。でも、私はあなたの真剣な話を信じられないほど馬鹿じゃない！私は・・・今のあなたが好きなんです！名前なんて関係無い！だから離れても良いなんて・・・二度と言わないでください！」

増田さんが怒りながら、涙をながしながら言った。そうか……。私が思う以上に、彼女達と私の間にあるものは深かったんだな……

本当に三人とも……あれ？、先ほど私は増田さんに好きと言われなかったか？

「あの、増田さん……さつき僕の事好きって言わなかった？」

増田さんの顔が何を言っているのだろっ、と言っ顔から段々狼狽していき、しまいには顔を真っ赤にして、

「ですから……その……好きなんです！ 良くんが！ 他の誰よりも！」

増田さんは言い終えた後、真つ赤な顔で私を見た。私は告白されたのだ。この状況に置いて……

「ちよつとまつちゃん！」

「真美さんは黙ってて下さい！」

「嫌、黙らないね！ 抜け駆けなんてずるいよ！」

「なら、告白してください！」

二人が口喧嘩してるのを茫然と見てみると、真美が私の方を向き、
近寄ってくる・・・

「!!!!!!!!!!!!!!」

「真美さん!!!!!!!!!!!!!!」

真美は私にキスをした。

「これで私の気持ちが解ったでしょ？解らないなら……」

と、言った後に私の顔を掴みもう一度キスをした。口の中に舌を入

れて………なすがままにしていたら、急に真美が引き離され、引き離された真美を見ると、増田さんにビンタされていた。

「ちよつと何を！」

「酷いです！私は告白して下さいって言ったんです！」

「元はと言えばまっちゃんが先に私達の約束を破ったから！」

「それとこれは関係無いです！」

二人はまた口喧嘩を始めた。私は黙って見ているしかなかった。そこに、先ほどまで空気だった加奈が私の前にゆっくりと近寄ると、

「消毒しなくちゃね。」

加奈も私の顔を掴み、ディープキスを始めた。先ほどの真美よりも大胆に、ねちつくく。

一度行為を中断すると、ほんのりと火照った顔で

「まだまだしなくちゃね………」

もう一度顔を近づけようとしたその時、

「あほか………！！！！！！！！」

真美と増田さんに頭を叩かれた。

「邪魔しないでください！」

「兄妹でそれは駄目だろ！常識的に考えて！」

「兄妹とか関係ありません！私は世界中で誰よりもお兄ちゃんの事が好きなんです！」

今度は真美と加奈が喧嘩を始めた。ちよつと待て、加奈は妹で肉親で………と考えていた所に、

「私だけして無いのは仲間外れですよね？」

今度は増田さんがキスをしてきた。それも普段の増田さんからは考えられないディープキスを、

「ちよつと………！！！！！！！！」

直ぐ様二人に引き離され、今度は三人で喧嘩をする。私の過去の話から一体どうなったこのような状況になったのだろう？

かくして、私はファーストキスを奪われ、合計三人の女性に数分のうちにディープキスをされるといっておかしな事を経験した。

三人がまだ言い争ってるので、独り我に返った私はこっそり部屋を抜け出し、屋根の上に昇った。物心付いた時から、何かあると屋根の上で考える癖が私にはあった。今はマンシヨンのために無理なのだが。

屋根の上は浜から来る浜風と、波の音が聴こえる。そして、海が近い。ため水平線を見渡せる。

「三人にキスされちゃったな……」

先ほどの事を思い出し、少し顔が赤くなった。三人とも飛びぬけて美人だ。そんな相手に思いを寄せられ、キスまでされたら、答えを出すしか無い。

「加奈の事は好きだけど……妹だしな……」

加奈への愛情は妹としてしか見ていなかった。だが、ここ最近の行動と、成長に危うい場面がいくつもあった事は認める。もしも、同じ歳だったなら、それこそ非常に危無かっただろう。

「真美と増田さんか……」

中学二年生頃から急に異性として意識し始めた二人。二人とも互いに持っていない良さがある。だからこそ、迷う。ぶっちゃけた話、二人とも異性として好きなのだ。どちらかなんて選べない。それくらい二人とは深く、長く関わってきてしまった。二人とも好きなのだ。

「二兎を追う者は一兎を得ず、多分そうなんだろうけど……僕は欲張りなんだろうな。どちらかをなんて選べない。どうしたらいいものか……」

日本が一夫多妻制だったなら良かったのに・・・今の私は本気でそう思っている。

「ほんと・・・三人とも僕には釣り合わない、素晴らしい女性だよ・・・」

小さく呟いたと同時に、体を屋根に預け、私は空を見た。雲一つ無い晴天の空だった。

「良。」

体を起こすと、三人が屋根の上にいた。

「何でここにいて解ったの？」

「お母様に聞いたんですよ。昔から何かあつたら屋根の上にいるって。変わらないんですね。」

増田さんが笑いながら答えた。母は私の癖を今でも覚えていたらしい。

「良が言つてた事、聞いてちゃった。」

真美が照れながら言つた。私も、さっきまでの独り言を全て聞かれたかと思うと顔から火が出そうだった。

「良が、私の事好きなんだって事は言葉の意味から解つた。そして、まっちゃんの手も好きだってことも。良なら多分そうなのかなって納得しちゃった。だって良って案外欲張りだもんね。」

「うん・・・僕は真美の事が好きだ。女性として。でも同じくらい増田さんの事も好きだ。今の僕にどちらかを選べるなんて事出来ないんだ・・・ごめんね、凄く優柔不断で。」

普通の人ならこれで愛想が付くだろう。二兎を追うものは一兎を得ず、欲張りすぎる人は全てを無くす、世の中は本当にそうなのだ。

「良、私凄く嬉しいよ。私の初恋って良なんだよ？もしかしたら距離が近すぎて、友人としてしか見られていないって思ってた。でも良は私の事を好きだった。こんなに嬉しい事は無いよ。だから！」

真美は私の側に来ると、私を指さし、

「良が私以外の女なんてあり得ないって思うくらいに、私頑張るかー！だから、良が誰が一番好きな人が出来るまで私は良と今までの

関係でいる！駄目？」

「私もです！」

増田さんが真美の背から顔を出し、

「私も真美さんと一緒です！私も待ってます！そして、それまで私は良くんと友達です！私は真美さんなら良いって最初から思ってたので。私だったら嬉しいけど・・・」

「私もまっちゃんならしょうがないって思うよ！こんな良い娘他にいないもん！でもね、私達以外だったら・・・」

解ってるよね？と言う目で二人は私を見た。笑顔なのにいつも以上に怖い。

「ま、二人は私の前に敗れ去るんで。」

加奈の声に、二人は後ろを向き、また三人で言い争いを始めた。本当に、仲が良いほどよく喧嘩をする。喧嘩の理由が私絡みで無ければ言う事ないのだけれど。

三人とも、こんな私を、優柔不断で踏ん切りのつかないへたれな私をここまで一途に思ってくれるなんて、

「ほんと・・・」

下を向き、軽く呟いた後、私は立ちあがり三人に向かって大声で、

「お前ら、最高の女だよ！！！」

と叫んだ。その言葉に三人は言い争いを止め、私を最高の笑顔で見てくれた。

中学三年生？ - 1（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

取り敢えず、今回の話はこの物語を作る上で最初から決めてました。

転生物を読んだり、考えてしまうとそれまでの両親の事を考えてしまつてどうにかして会つて元気に過ごしている姿を見せたいって思っちゃいます。形姿は違えど、会つて話せば伝わる、解るはずだ！って勝手な思い込みが私の中にあります。

それと、良の判断何ですが、今の所はこれでも大丈夫なつて。女性陣がたくましくするので・・・

それでは今回も読んで頂きありがとうございます！出来るならば、今日中か、明日には次の内容を上げたいと思います！

中学三年生？ - 2（前書き）

と言う事でその2です。恐らく、前回の良の行動に疑問を感じた人って結構いると思います。良死ねってなると思います。多数の人から好意を抱かれて、特定の人物を選び、その先をつてのを書くには私はまだまだ勉強不足なのでこうしてしまいました。すみません。それでも読んで頂ける方々には私自信もつと勉強して、納得のいく文章を書いて行きたいと心がけていますのでどうぞよろしくお願い致します。それでは今回もよろしくお願い致します。

中学三年生？ - 2

「それにしてもどこかで見た事ある顔だと思ったらあの天才ピアニスト少女だったのか」。お前も凄いのを妹に持ったな！」

夕食の席で父が加奈を見てどこかで見た事あるような顔だと言ったので、天才ピアニスト少女としてテレビで紹介された事があると説明した。そうしたら、父は非常に興奮し、握手を求め、サインまでねだった。加奈の困惑した顔を久しぶりに見れたので私は面白かった。

「テレビで見るより何倍もめんこいな。そんなにめんこいと学校の男どもが放つとかないだろ？」

「そ、そうですね」

父はただの酔っ払いになっていた。それも達の悪い酔っ払いに。

父が仕事から帰って来ると、母は私の事を全て話した。母の時と同様に、私と父しか知らない事を話すと（おもにへそくりの場所を話した。そして今も変わって無かった。）、父は私の名前を呼んで殴った。そして泣いた。

姉とも会いたかったのだが、明日来る事になっていたので今日は来れないみたいだ。甥っ子を見たかったのだが。

夕食の前に、小比類巻の母じゃなく、新堂の方の母に、加奈が私を追ってきた事、ついでに真美と増田さんもついてきた事を電話で話した。私はすぐさま加奈と電話を変った。母からだいぶ絞り込まれた加奈はぐったりしていた。切符の関係上、最低でも三泊しないと電車のチケットが取れない事を伝えると、母は真美と増田さんの親に家に三泊する事を連絡するからきちんと帰って来なさいと言った。あっちに帰ったらだいぶ怒られる事を予想したら、私は頭が

痛くなった。

賑やかな夕食が終わり、三人一緒にお風呂に入っている間、私はまた屋根の上に昇っていた。都会とは違い、真つ暗な夜の中、波の音だけが聴こえてくる。その音を聴くだけで心が洗われるようだった。

「やつぱ、ここにいたか。」

父が酒を持って屋根の上に昇ってきた。

「まだ未成年なんだけど。」

「馬鹿野郎。お前が今の歳で梨木の家で酒を飲んだ事や煙草を吸ってた事もこちら解ってるんだ。今更良い子ちゃんぶってんじやねえ。」

「変わらないな。」

父は私に猪口を渡し、酒を注いだ。私も同じように父の猪口に酒を注いだ。

「取り敢えず、再び会えた事に乾杯だ。」

父と私は猪口を合わせ、ぐいっと一気に中の酒を飲みほした。この体になって初めて飲む酒が日本酒と言う事もあり、久しぶりの酒の味はただ辛くてきつかった。

「きつついな。」

「口がまたお子様に戻ったんじゃないか？」

父は笑いながら、また酒を注いだ。

「今夜は月が綺麗だな。」

「ああ、満月だ。」

私も酒を注ぎ、月を見上げながら酒を一口、口に含んだ。

「昔は月を見上げながら飲む酒は旨かったけど・・・今はきついな。たぶんビールもだめだろう。」

「もう顔真つ赤だもんな。相変わらず顔に出るんだな。」

「ほっとけ。」

父と私は笑い合った。酔いが速く回ったのか、心臓の鼓動が速くな

っているのが解る。

「でもよ」

父は酒を口に含みながら、

「姿形は違えど、生きていて良かったよ。お前が死んだ時、母さん少しおかしくなったんだ。葬式中なんて見てられなかった。あんなに泣き叫ぶ姿を見たのは結婚する前から一度も見た事が無かった。」
酒を一気に飲み干すと、再び月を見上げ

「大勢の人がお前の葬式に来てくれた。それを見て俺は、お前は他所でもちゃんとしてたんだなって思ったら涙が出ちまったよ。母さんも五年もしたら元に戻った。その間、香住が世話してくれてな。あいつも家庭があるのに、毎日来てくれた。あいつの旦那も。あいつは良い奴とくっ付いたよ。」

「父さん。」

私は猪口を下に置き、

「僕、感謝してる。今までの事全てに。高校だけじゃなく、大学まで行かせてくれてありがとう。いつもご飯を食べさせてくれるために働いてくれてありがとう。好きな物を買ってくれてありがとう。父さんと母さんには感謝してもきれないほど沢山のモノを貰った。僕が今、こうして新堂良として生きていられるのも、もしかしたら神様が僕に父さんたちにまだ何も返してないだらって事で生かしてくれたのかも。」

父は腕を震えながら顔を下に向いていた。

「馬鹿野郎、お前は俺らにいろんなモノを返してくれたさ。金の話じゃねえ。いつも気持ちで返してくれてただろう。帰ってきたら必ず元気な姿見せてくれたじゃねえか。親はな、子供が元気な姿を見るだけでいいんだよ。」

「悪いな。先に死んじまつて。」

「生きてるじゃねえか。今もこうしてさ。」

「そうだな。」

私と父はそれから酒瓶が空になるまで飲み続けた。酔いで火照った

体に、夜風が涼しく感じた。

翌日、物凄い頭痛と吐き気で私は起きた。昨夜の酒が響いたみたいだ。

「そんなに飲んで無いのにな。」

台所へ向かい、コップに水を入れて一気に飲み干す。少しでも気持ち楽になった。

「二日酔い？」

「みたい・・・」

母が二日酔い止めの薬を持って来てくれたので、それを飲み、私はまた布団に入った。

「起きろ～～～～～～～～！！！！！！~~~~~~~~~~~~あああああああああああああ」

あまりのうるさに目を開けると体の上に被さっていたはずの掛け布団が無かった。横を向くと、掛け布団を持ったままの真美がいた。
「ちよつと頭痛いからあんまり大声出さないでよ・・・・・・」

「だって・・・・・・」

先ほどの声と違い、小さな声で顔を真っ赤にしている真美を見て、何があったのか考えた後、私は今の恰好を思い出した。上半身裸で、パンツ一丁、そしておそらく寝起きなので・・・・・・

「うわああああああああああああ！！！！！！！！！！真美、布団！布団！」

「う、うん！」

慌てて真美に掛け布団を要求し、投げ渡された掛け布団で体を隠した。

「と、取り敢えずまだ寝るから・・・」

「そ、そう・・・おやすみ・・・」

真美は顔を真っ赤にして部屋を出て行った。私は掛け布団で顔を隠し、恥ずかしさに悶えた。

「ごめん……」

「こっちこそごめん！まさかあんな格好だと思わなくて！」

再び起きて、身支度をして居間に向かうと真美がいたので先ほどの事を謝った。真美も突然の事にびっくりしたのだろう、私に謝ってきた。

「でも何であんな格好で寝てたの？」

「多分、夜寝てる時、暑くなって、皆がいる事忘れて脱いだんだと思う。僕の布団の周りに服があつたし……」

無意識のうちに何に行っていたらしい。こんな事したのは良になつてからは初めてだった。

「でも……良のって大きいんだね……」

「褒め言葉として受け取っておくよ……」

「わんこ！わんこ！」

外では加奈と増田さんが犬と戯れていた。この犬は何代目なんだろうか？でも犬は柴犬が一番可愛い。

「可愛いですね」

犬の首元をさすって増田さんが言った。犬も気持ちよさそうに尻尾を振っている。それにしても犬と戯れる美少女二人。悪く無い絵だ。携帯を取り出し、カメラに設定をし、犬に戯れる二人を隠し撮りした。

「え？」

シャッター音で気付いたのか、二人は私の方を見た。

「おはよう。」

「もう昼だよ」

「お兄ちゃん起きるの遅い！」

私は二人の元に近寄り、犬の頭を撫でた。

「ちよつと昨日寝たの遅かったからね。」

「そうなんだ。」

犬を撫で続けていると、敷地内に車が入ってきた。家の前で止まると、車の助手席から私と同じくらいの歳の男の子が、後部座席の方から二人の小学生くらいの歳の女の子が降りてきた。

「うわ、マジで新堂加奈だ！」

男の子が加奈を見て驚きの声を挙げた。初対面の人に呼び捨てにされた事に不服な加奈は少し不機嫌な表情をしていたが、

「「加奈ちゃんだ~~~~~!!!!!!」」

二人の女の子が走りながら近寄ってきた事に驚き、私の方を見た。そして、二人の女の子に囲まれ、質問責めに合った。

「こら！博美、幸恵！困ってるでしょ！落ち着きなさい！」

「「だって加奈ちゃんだよ？超可愛いもん！」」

「落ち着け。」

「「はい・・・」」

運転席側から降りてきた女性の言葉に二人の女の子は加奈から離れた。加奈は少し安堵の表情をして胸を撫で下ろした。

「君が良くん？」

「はい。」

「ちよつとあつちに行かない？」

「ええ、良いですよ？」

私はにやりと笑い、女性の指さす方へ向かった。その様子を不思議そうに二人の女の子と、男の子は見送った。加奈と増田さんが後ろから浮気者！って叫んでたが。

「あんた本当に博之？」

「そうだよ、香住。」

ちなみにこの女性は私の姉だった小比類巻香住だ。そろそろ四十歳

だと思っただが。

「へー、本当に全然違うね。めっちゃイケメンじゃん。」

「何、そんなに昔の僕って不細工だった？」

「いや、普通？」

二人で笑い合う。何年経っても、姉弟の関係は同じらしく、会話のテンポも昔とさほど変わらない。

「それで今の旦那って昔付き合ってたあの自衛隊の人？」

「そうだよ。結婚しちゃった！」

「おめでとう。」

「ご祝儀」

「お前中学生からせがむのか？」

出してきた手を叩き、私達は笑い合った。

それから私達は、久々に前の家族全員揃ったの食事をし、会話をして過ごした。他にも香住の子供、加奈、真美、増田さんと大勢いたが、大勢で囲んで食べる食事はどこでも美味しく、楽しかった。父が仕事の無い日に、私達は父にお願いして、車で近くのスタジオまで送ってもらい、父と母に今のバンドの曲を披露した。演奏終了後、父と母から大きな拍手を貰い、私達は二人に演奏を披露する事が出来て良かったと心から思った。

次の日の朝に帰る事が決まっていたために、私達は身の回りの整

理を行つた。それから、皆が就寝したのを見計らつて、私は砂浜に向つた。

砂浜に向かう途中で枯れ木を何本か拾ひ、砂浜に着くと拾つてきた枯れ木で焚き火を作り、着火剤を置き、火を点けて燃やした。お盆の迎え焚き火と送り焚き火の、私の、小比類巻博之の送り焚き火を自分自身でしたかつたのだ。焚き火の火の勢いが増すにつれ、木が燃える音がしていく。

「もゝえろよもえろゝよ、ほのおよもゝえゝろゝ」

いつの間にか口ずさんでいた歌を歌ひ、私は焚き火を見ていた。小比類巻家にくるのはこれが最後だ。小比類巻博之はもう死んでいるのだから、むやみに私が来ていい場所では無い。これは私もそう思つていたし、父と母もそう感じていただろう。それでも、ここに来て良かった。

「今日で小比類巻博之は完全に死んだよ。僕は身も心も新堂良になる。」

どこかで博之に戻る事に期待を感じていた自分、ずっと長い夢を見ていて、これは博之が夢見ている世界かも知れない、つて。それらを全て捨てる。私は新堂良だ。

小比類巻博之がずっと吸つていた煙草を取り出し、ライターで火を点け一服をする。昔はあんなに美味しかった煙草も、今となってはただ煙を吸つて吐いているだけとしか思えない。

「こんな煙を美味しいなんて感じてたなんて、煙草は麻薬より性質が悪いな。」

私はもう一本煙草に火を点けると、焚き火の前に刺した。そして、煙草を口にくわえ、合掌を行つた。私は神様に初めて感謝の言葉を奉げた。死んでもなお、私を両親に合わせしてくれた事を、新しい命をくれた事により素晴らしい出会いと生活を送れた事を。そして、今後を送れる事を。

煙草を吸いきると、持つて来ていた携帯灰皿に入れて、砂浜に刺した煙草も燃え尽きたのを確認して灰皿の中に入れた。それから焚

き火が完全に燃え尽きるのを見届けた。焚き火が燃え尽き、再び着火しない事を確認すると、

「じゃあな小比類巻博之。安らかに眠れ。」

それだけを言うと、私は砂浜を後にした。

翌日、私達は父と母に駅まで送ってもらった。

「もう来るんじゃないぞ。お前は新堂良だ。俺達の息子の小比類巻博之じゃねえ。」

「解ってるよ。今度会う時はお空の上だな。」

「そうだな。」

父は笑いながら煙草をふかした。

「そうね。博之は死んだもんね。ここにいるのは良くんだもんね。」
母は少し悲しそうにしていた。

「それじゃあ、行くよ。」

「おう、行つてこい。」

「元気でね。」

見送る母と父を後にして、私達は駅の階段を昇って行った。

<Side Another>

「今日で小比類巻博之は完全に死んだよ。僕は身も心も新堂良になる。」

お兄ちゃんが焚き火に向かって呟く。それまで持っていた小比類巻博之への未練が無くなったのだろう。そして、心の中のどこかにあった新堂良を認めていなかった気持ちが無くなり、身も心も新堂良になる事を決めたのだろう。その背中は堂々としていた。格好をつけて煙草なんか吸ってる。結構、キザなのかもしれない。でも未成年は煙草を吸っちゃいけないから今日以外で吸ってたら注意をしなくちゃ。

物心ついた時には、私は他の人とは違うと自覚していた。私が初めてギターを触って弾いた時、お兄ちゃんもお母さんもお父さんも凄く驚いていたし、勉強も一度読んで考えたらほとんど解る。運動だってどう体を動かしたら良いか、普通に行っているだけなのに他

の人よりいつも優れていた。他の人が出来ない事を見ていると何で出来ないか理解できなかったりした。それは主に勉強面なのだが、他の人が考えているのを見ると何でこんなの出来ないのだろうという気持ちになった。私はそれらを経て、少し傲慢になっていたのかも知れない。段々、女の子の友達は離れて行った。それでも良かった。家にいればお兄ちゃんがいて遊んでくれる。でも、離れて行った友達の数が多くなるにつれ、私は寂しさを感じて行った。ついに誰もいなくなった時、私は孤独という感情を初めて知った。男の子は寄ってくる。でもそれは対等な立場の友達では無い。それがまた女の子達は気に入らなかったのだろう。無視だけしていたのが、次第にいじめへと発展して行った。

いじめは決して気持ちの良いものではない。男の子も女の子もいじめを受けると心に大きな傷を受ける。暴力は物理的な物だけでは無い。殴られるよりも、蹴られるよりも何よりも、言葉の暴力は私にとって痛かった。私に向かって喋るのならまだいい。反論をしたらいいだけだから。しかし、陰で言われたり、他の人との会話中に私に聞こえるように言うのは物凄くきつい。名前を言わないのだけれど、私の特徴を上げて悪口を言う。決して私個人の名前を挙げないのだからどうでも言い逃れる事が出来る。悪口から、今度は私の持ち物を破り捨てる、机の中に死ねと書かれた紙を入れる、靴の中に画鋲をいれる、靴を隠される、トイレに入ったら水をかけられる、とエスカレートしていく度に、私は何で生まれてきたのだろうと感じた。誰も私が生きている事を望んでいない、そう思った時、私は死のうと考えた。

部屋の天井にロープを付けているちょうどその時、部屋にお兄ちゃんが入ってきた。お兄ちゃんは今がロープを付けている所を見るや否や、走って私の元へ向かい、私に体当たりをしてロープからつき放した。そしてロープを掴み、部屋を出て行った。私は茫然とし

ていると、お兄ちゃんはずぐに部屋へ戻ってきて、私を叩いた。

「おまえ、何をしようとした？」

いつもの優しいお兄ちゃんの声じゃなく、低く、小さいけど、はっきりとした口調で言った。私はそれに対して、私は誰からも望まれていない、生きていても意味が無い、だから死ぬんだと言ったら思いつき叩かれた。

「誰からも望まれていないって？生きている意味が無いって？ふざけるな！ここにいるだろ！お前が生きるのを望んでいるやつが、これから成長していく姿を望んでいるやつが！ふざけるなよ、世の中にはな生きてくても死んでしまうやつだっていっぱいいるんだ。それを自分から死ぬなんて事するなよ！」

その言葉を聞いた時、私は今まで溜めこんでた思いが全て溢れ出した。お兄ちゃんに何が解るの？私はいっぱい傷ついた。いっぱい酷い事もされたし酷い事を言われた。友達も皆いなくなった。お兄ちゃんはそのような事ある？ある訳無いよ！お兄ちゃんにはいつも周りに大勢の友達がいって、いつも皆から慕われている人に私の気持ちなんか解るはずが無い！知った風な事言わないでよ！そう言葉にしていた。私は泣いていた。泣きながらお兄ちゃんに向かって大声で叫んだ。そしたらお兄ちゃんは私を抱きしめ

「痛かったよな、凄く痛かったよな。言葉の暴力って何であんなに痛いんだろうな。不思議だよな。体が傷つくよりも、心が傷つく事の方が百倍もいたいよな。体の傷は消えるけど、心の傷って消えないもんな。」

そういつて抱きしめてくれたお兄ちゃんに、私はお兄ちゃんを強く抱きしめて泣いた。いっぱい泣いた。凄く泣いた。

お兄ちゃんは私がずっと側にいてくれて、一生懸命背中を撫でてくれた。それから私は全てを話した。いじめられた事を。そしたらお兄ちゃんは、

「僕もね、いじめられた事はないけど、嫌われた事はいっぱいあるよ。僕はその時、相手の事を全然考えなかったんだ。僕が相手の事

を考えないで言ったり、行動したらその子は僕の事を嫌い始めた。そして、僕の事を嫌いになる人が多くなった時考えたんだ。何で皆僕を嫌うんだろう？って。考えたら、僕の行動は僕の事しか考えていなかったんだ。そこで初めて気づいたんだ。僕は相手の事を考えていないって、だから嫌われたのかな？って。加奈はどう思う？」

私はお兄ちゃんの話している事を自分に当てはめていた。私は今まで人の事を考えた事があっただろうか？自分が出来る事が出来ないのを不思議に思ったり、自分が、自分が、全部自分の事しか考えていなかった。

「お兄ちゃん、私も今まで自分の事しか考えて無かった。なんで私は出来るのにあなたは出来ないの？とか、何で私は似合うのにあなたは似合わないの？とか。」

「そうか、じゃあもしかしたら加奈も僕と一緒に相手の事を考えてなかったから嫌わちゃったのかな？」

お兄ちゃんが言う言葉に、私は頷いた。それで嫌われて、憎まれて、いじめられたんだろう。

「お兄ちゃん、私どうしたらいいのかな？」

「加奈にはもう答えが解ったんじゃない？だったらそれをしてもらいよ。それでもいじめてくるような奴とは加奈はその子と仲良くなる必要なんてないよ……加奈は凄いからね、皆加奈みたいじゃないよ。人は皆違うんだ。でも加奈には加奈のよさがあって、その子にはその子の良さがある。それを探してみるんだ。そして相手の事を思えば加奈はまた友達が増えるよ。」

ね、と私に向かって笑顔を向けるお兄ちゃんに、私は今までとは違う感情が芽生えた事が解った。何だろう、凄くドキドキする。お兄ちゃんってこんなに格好良かったっけ？

その時私はお兄ちゃんを一人の男性として好きになったのだろう。

私はそれから相手を思いやるという事をした、人の悪い所を探すよりも良い所を探す事をした。そして少しずつだが私を認めてく

れる人が現れてきた。数カ月も経つといじめは無くなった。

「加奈ちゃん、それは恋をしたんだよ。その人の事を好きになったんだよ。」

友達に、私の気持ちを伝えたらそう答えてくれた。恋なの？この気持ちは？そう思った時、私は実の兄に恋をした、と友達には言えなかった。

でも、気持ちが抑えきれなくなった時、私はお兄ちゃんに振り向いてもらうために色んな事を始めた。時には体に接触して色気仕掛けを行った時もあった。お兄ちゃんは凄く恥ずかしそうにしてたけど、私も凄く恥ずかしかった。寝ているお兄ちゃんにキスをした事もあった。

私がお兄ちゃんに好意を抱くように、お兄ちゃんの周りもお兄ちゃんに好意を持ち始めた。真美さんや増田さんが良い例だ。真美さんも増田さんも凄く美人で良い人達だ。私と違って結婚も出来る。二人が凄く羨ましかった。何で私はお兄ちゃんの妹で生まれたのだろう？もし、お兄ちゃんと同級生だったら絶対にお兄ちゃんと結ばれる自信があるのに！でも、お兄ちゃんの妹で良かった事は沢山ある。それに、私はまだまだ諦めない。結婚しなくても二人でずっと一緒にいる事や子供を産む事も出来る。だから諦めない！最大のライバルは真美さんと増田さんの二人。でも二人は今お兄ちゃんがしている事を知らない。私は寝た振りをしてお兄ちゃんを襲うと思ってたからずっと起きてたんだもん。だから今夜は凄く運が良い。誰も見ていないはずだから・・・

お兄ちゃんが去って行くのを見て、私はさっきまでお兄ちゃんがいた所へ向かった。私もお兄ちゃん、博之さんのために合掌をしようと思ったからだ。

一步一步、砂浜の上を歩いてるうちに私の視界の両端に人影が見えた。暗くてよく解らないけど、近くの住人がお兄ちゃんが焚き火しているのを見て、火がちゃんと消えたか確認しに来たのだろう。そう思って近づいていく。

「え？」

「あれ？」

「ええっ！？」

二人の人影はこころ周辺の住人では無く、真美さんと増田さんだった。

やっぱりこの二人が私の生涯のライバルだ。

中学三年生？ - 2（後書き）

読んで頂きありがとうございました

これで一応、良は過去との決別をした、と言う事になります。書いててここまで長くなるなんて思っていないませんでした。それはそうと、今月号のカペタは物凄く熱いですね！ノノノも面白かった！

ここ最近音楽と全く関係無くなってしまったのですが、転生、と言う所に重点を置きました。それとラブコメですかね？

次からはラブコメ＜音楽となると思います。話が結構重い話になってたので、次からは明るい話を全面においていこうかな～って思ってたりにしています。それと、書いた後に誤字脱字をチェックするために読み直したら、結構良ってキザですね、って事に気付きました！

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございます。次も頑張って書き上げますのでよろしかったら、時間があつたら読んで頂ければ嬉しいです。

中学三年生？ - 1（前書き）

第九話の1です。書くのに夢中になっていたらご飯を食べるのを忘れていた。一日一食！良いダイエットになりますね。めっちゃ眠い、でもゲゲゲの女房見なければ！ということとで第九話の1です。今回も読んで頂けると幸いです。ではどうぞ宜しくお願いします。

中学三年生？ - 1

「次のライブは学校の文化祭になると思います。良かったら来てくださいね！それじゃあ次の曲行きます。」

慣れと言うのは怖い物で、観客数が100人越えを達成すると、半分のお客さんの数でも少なく感じてしまう。それでも私達はお客さんの多い少ない関係無く精一杯演奏しようと皆が心に誓っている。驕る事が一番だめなのだ。自惚れる事も駄目だ。

「ありがとうございます！」

最後の曲が終わり、私達はステージを後にした。ライブを一回やると私は汗だくになる。一曲一曲を常に持てる力を出し切るために精一杯行うからだ。物理的な力を入れてドラムを叩いてる訳ではない。

「お疲れ。」

水の入ったペットボトルを差し出し、真美が私の前に立った。

「お疲れ。増田さんもお疲れ。」

「お疲れ〜真美さんお疲れ〜。」

増田さんに挨拶をして、私は水を飲んだ。ライブ後の水は凄く美味しい。楽屋の端に移動し、荷物を置いて一度外へ出る事にした。楽屋を出て、ホールを横切り、階段を昇り外へ出た。

時期的に、外も十分暑いのだが、中のこもった熱気に比べたらまだまだ涼しいので、夜風を浴びて涼しんだ。

「お疲れ様、中々良くなってきたんじゃないか？」

「お疲れ様です。来てたんですか？」

師匠に良くなってきたと言われ、嬉しくなった。師匠が私を褒める事はあまり無い。褒めてくれる時は相当良い時だけだ。

「馬鹿、お前のドラムじゃねえよ。バンドだよ。お前はまだまだだ。全然俺レベルには成っていないよ。たかが六曲くらいでへばってるようじゃ話にならねエ。もっと力を抜ける所は抜かせ。あと体力をつける。」

「ですよ〜。」

やはり、師匠は私個人を褒めてはくれなかった。でも、バンド自体を褒めてくれたことは素直に嬉しかった。そして、さり気無く私個人の問題点を話し、対処方法を教えてくれるので本当に尊敬出来る。「お前らがその気なら俺がレベルに声かけてやるけどどうする？ま〜声がかかってそうだけだな。」

「直接は来てないですけど、そんな話があるってオーナーさんが。でも、正直まだまだレコーディングするレベルじゃないかと思うんですけどね。」

「う〜ん。そりゃメジャーで長くやってる奴らや上手い業界のやつらに比べたらまだまだだけだよ。お前らの実力ってお前が悲観するほど低いつてわけじゃないからな。お前個人に限って言えば、若いやつらに比べたら技術はお前の方が全然上だ。真美ちゃんだって若いスタジオミュージシャンレベルはある。増田ちゃんなんて、あの子ピアノすげーだろ？普通ならクラシックでプロ目指してるんじゃないか？」

確かに、私はそこまでのレベルじゃないと思うけれど真美と増田さんは凄い。師匠がここまで褒めるのも頷ける。

「そもそもだな、俺が三年も教えてるんだ。それでアマチュアレベルしか成長出来ない奴を俺は教えね〜。見込みがあるやつだけにしか見てやらねえんだ。その点は誇ってもいいぞ。」

「ありがたいですね。」

「お前はもつと嬉しそうにしるよ！」

頭を力任せに撫でられ、少し痛いが師匠の言葉は物凄く嬉しい。

「でだ。」

師匠は私の頭から手を離し、煙草に火を付けて話し始めた。

「お前らもそろそろどうするか考える。レコード会社と契約して商業目的にするのか、それとも趣味の延長線で行うのか。俺の見立てではお前らのバンドは上に行く力を持っている。集客性もある。売れるかどうかは運次第ではあるが、お前らがその気ならメジャー

でもインディーズでも話を持ちかけてやる。それでだ、取り敢えずデモ作ってみない？ドラム録りならいつもの所で出来るし、持ってなかったらMTRも借してやる。」

「何でそこまでしてくるんですか？師匠がコネとかそういうの嫌いな俺知ってますよ？」

そう言うのと師匠はニヤリと笑い、

「言っただろ？俺にバンドをもう一度したいって思わせるバンドはここ数年いなかったんだ。お前らは他のやつらとは違うんだよ。」

翌日、準備室に二人を呼んだ私は、

「って事で、デモ作ってみる気があるなら作れるけど…….
どうする？」

真美と増田さんに、先程の師匠の事を伝えた。

「良いじゃん！作ろうよ！上手く行ったら私達デビュー出来るんですよ？作るしかないでしょ？」

「私も作ってもいいと思う。それに、本気で皆がデビューしたいならするべきだと思う。」

真美も増田さんも作る事に賛同した。

「それじゃあ取り敢えず、デモは作るって事でいい？数曲だけだから文化祭前にはつくり終えられると思う。文化祭の時にCDを配布してみよう。」

「「やったあ！！！」」

真美と増田さんはハイタッチをして喜びあった。そして、私は先程の増田さんの言葉が引っかけかり、真美を呼ぶと、準備室を出て階段の下に移動し、話を始めた。

「真美には悪いけど、増田さんがもしも僕たちのためにデビューしたいって言うなら、僕はデモを作るだけで留まらせるよ。」

私の言葉に真美は困惑し、

「どういう意味？」

「増田さんが自らの気持ちでこのバンドで上に行きたいって気持ちが無いんだったら、僕はこのバンドでどこかと契約する事には同意しないって事。」

「何で？真美だって本気でバンドに打ち込んでるじゃん！だったら、」

真美が反論する気持ちも解らなくもない。

「バンドに打ち込むだけだったら趣味で出来る。真美は元からプロ志向だったし、僕もなれるならなりたい。でも増田さんは違うだろう？彼女は元々バンドをやるためにピアノをしている訳じゃない。もしかしたらピアノリストになりたいのかも知れない。そんな夢を、僕たちのために潰すことだけは絶対に出来ない。」

「そうだね。でも、まっちゃんが本心で上に行きたいって言ったら？」

不安そうな顔で真美は私を見る。私は真美に笑顔を見せ、

「その時は皆で目指すだけだよ。」

そう言った。

真美との話合いを終え、準備室に向うために、階段を昇ろうとした時、

「良くん、私がデビューしたく無いって思ってるの？」

階段の真ん中に増田さんが立っていた。

「私がピアノのコンクールで三位に入ったら？だからプロのピアノリスト目指してるって思った？」

増田さんは吐き捨てるように言った。

「ふざけないで！私のことは私が決める！そんな勝手な事しないで！」

えらい見幕で私の前までくると、右手で私のほほを叩き、階段を駆け昇って行った。私はそれを見送る事しか出来なかった。またやってしまった。自分の意見だけで、相手を理解したつもりになって、「ちよつと良、追いかけていいの？」

「・・・・・・・・」

言葉を返せないでいる私を見て、

「あ〜〜もう、私行くからね。」

真美は駆け足で階段を登っていった。

今の増田さんになんて声をかければいいのか？私が悪かった、増田さんの気持ちを考えないで、でも、増田さんはピアノが大好きなはずだ。コンクールの時もあんなに楽しそうに弾いていた。その気持ちは嘘じゃないはず。ならピアノストになりたいって考えがあつても・・・

「どうしたんだお前、こんな所で難しい顔して。」

顔を上げると佐藤が階段から降りてきた。

「いや、ちよつと・・・」

「どうした、ついにあの女どもにフラれたか？」

「そんな感じかな・・・・・・・・」

声に覇気が無いのが私にも解った。その様子を見て、佐藤は

「話なら聞け、屋上にでも行くか？」

と声をかけてくれ、私と佐藤は屋上に向かった。

屋上に出ると風が強く吹いていた。午前中は晴れていたのに、曇り空な所を見ると、まるで今の私の心模様を現しているようだった。「それで、どうしたよ？」

「うん、増田さんを傷つけたみたいだ・・・」

私は佐藤に先程起きたことを話した。そして、私が思う、増田さん

の気持ちを。

「なるほどな。つまりお前はあの子がコンクールで楽しそうにピアノを弾いてる所を見てそう思ったのか？まあ小さい頃からピアノを弾いててそれならそう思わなくもないわな。」

屋上のベンチに座り、空を見上げながら佐藤が言った。

「まあ俺には才能ある奴の事なんて解らないけど、ピアノ楽しそうに弾いてる奴は全員ピアノリストになりたがるかね？」

「でも増田さんは非凡なんだ。普通の人とは違う。そういう夢を持つてる可能性があるなら「お前さ」」

話の途中に佐藤が入ってきた事に驚き、私は佐藤の方を向いた。佐藤は仏頂面のまま、

「才能あるやつは普通のやつを考えを持ってないとも思ってたのか？中にはただピアノ弾くだけで楽しいやつがいるかも知れないだろ？ピアノリストにならなくてもピアノは弾けるんだからよ。ピアノが弾けて、一緒にいるだけで楽しい連中と音楽が出来て、自分たちの曲を聞いて貰える。あいつにとってピアノリストになって、独りでピアノ弾くよりもこっちの方がやりたいんじゃないのか？」

そう言った。確かにそうかも知れない。増田さんはただピアノが弾くだけで楽しいのかも知れない、そして真美、僕と一緒に演奏が出来る事、もしかしたら端からピアノリストなんて眼中になかったとしたら。その事に気づいたとき、私は居ても立ってもいられなくなつた。

「佐藤、ありがとな。あの時と逆になったな。」

「これで借りは返したぜ。」

私は立ち上がり、

「亜里沙さんによろしくと伝えておいてくれ。」

「了解。」

佐藤に一声かけると屋上を出て、全速力で準備室に向かった。まだ残っていてくれ、頼む。

準備室のドアを勢い良く開けると、中には真美と増田さんがいた。私の方を向いた増田さんの目には涙が流れていた。私は肩で息をし、ドアを閉めると中に入った。

「良！」

「ごめん、ちよつと遅れた。」

私は真美の避難の声を制し、増田さんに向かって

「バンド、続けないか？これから、この先もずっと。」

肩を上下に大きく揺らし、口で呼吸し、私は増田さんに言った。増田さんは満面の笑みを私に向けて、

「当たり前です！」

と言い、私に抱きついた。

「良そんな事考えてたんだ？」

「真美には喋ったはずだけど？」

それから私たちは、師匠からMTRを借りるために師匠の家に向かった。

「良くんは考えすぎなんです。私はピアニストになる考えなんて微塵も無かったんですよ？大好きな音楽を好きな人と一緒に出来るだけで幸せです。それでお金がもらえるなら、それだけをして行きたいですよ。」

「・・・なんか、そう直接言われると恥ずかしいよ・・・」

直接的な物言いに、少しだけ照れていると、私の顔を覗き込み、

「それくらいしないと良くんは気づきませんか。」

ほほ笑みながら増田さんは私に言った。その仕草に思わず胸が高鳴る。

「もっまっちゃんはそういう事するからずるいんだよ！良の顔、真つ赤だもん！」

真美に言われて顔が赤くなっているのが解った。増田さんのこうい

う仕草は正直に言ってきた。

「大成功です！一歩リードですね！」

増田さんは私の腕を掴み、身を寄せた。増田さんの大きな胸が私の腕を挟む状況になり、

「ま、増田さん・・・胸が・・・」

「当てるんですよ！」

ほんのりと薄く桜色した頬を私の肩に寄せて、小さく呟いた。それをみた真美が急いで増田さんを私から引き離し、

「このおっぱいお化け~~~~~！！！！もげろ！乳もげろ！！」

と、増田さんの胸を鷲掴みした。近くにいると色んな意味で体が持たないので、私は二人の前を歩いた。

「お、きたな真美ちゃん、増田ちゃん、その他一名。」

「お呼びで無いとでも？」

「お前古いの知ってるな。」

師匠の家にお邪魔すると、最近恒例のやり取りをして、私達は中に入った。師匠の家はそれなりの広さを持つ一軒家で、地下に自宅スタジオがある。たまに、師匠が仕事帰りじゃなく、家にいる時はここで個人レッスンを受けている。

「あら良くん、いらっしやい。他の子は初めてね。」

「お邪魔します。」

師匠の奥さんが奥の方から出てきた。その歳の割には若く、美人な人だが、奥さんとしても優秀らしく、師匠は尻に敷かれているらしい。

「いいえ、ゆつくりして行ってね。それにしても良くん、また一段と良い男になって。今度お姉さんと一緒に遊ばない？」

「お姉さんって歳かよ。」

そう言って笑う師匠に、奥さんは近くまで寄ると

「ゲフツ！」

「何か言ったかしら？」

腰の入った見事な突きを師匠のみぞおちに入れた。たまらず足がもつれ、床に膝がついた師匠は、

「何でも無いです・・・」

と言うのが精一杯だった。奥さんは空手三段らしく、若い頃は隠していたとか、何とか。

地下のスタジオに行くと、既にMTRが箱に詰められている状態だった。わざわざ私達のために準備してくれたようだ。師匠は何を思ったのか突然、

「良、ちよつと時間あるか？二時間位。」

と私に聞いてきた。

「二時間ですか、僕は大丈夫ですが、真美と増田さんは？」

師匠の問いを私は真美と増田さんにも聞いた。

「私は大丈夫です。」

「私も。」

二人共、時間に余裕があるみたいだ。

「じゃあ、一曲だけ一発録りしてみるか。デモだから良いだろ？」

「え、宜しいんですか？」

「調度、録ってたからな。それに嬢ちゃん達も楽器持つてるようだし。悪い真美ちゃん、ベーアン、アンペグしかないんだけどいいか？」

「全然オッケーです。むしろ良い位。」

「じゃあ録るか、特別にお前には俺のドラム叩かせてやる。」

師匠の持つドラムセットを叩かせて貰える事になり私は心が踊った。

何回か聴かせてもらった事があるが、音が全然違う。プロが選ぶ、最高のドラムと師匠の持つ腕で、私には到底出すことの出来ない嗜好の音を聴かせてくれた。

師匠は、箱に入っていないMTRにシールドをつなぎ、外されていたスタンドにマイクを付けて、シールドを接続し、ドラムの準備が出来た。

私は、ドラムセットの方に移動すると、入念にストレッチを行い、スローンに座り軽く音を確認して、準備が整った。

「クリック音聴かなきゃ行けないからヘッドフォン付けておけ。」
言われるままに、私は側に置いてあったヘッドフォンを付け、メトロノームのBPMを設定した。

「いつでもオッケーです。」

「はいよ、んじゃ始めてくれ。」

メトロノームのテンポを聴きながら、私はドラムを叩き始めた。

二時間後、全てのパートを一発録りし、師匠がパソコンで編集したのをスピーカーから流した。私達の演奏は思う以上にまともに聴こえ、少しばかり自信が付いた。

「まゝ一発録りって事もあったが、デモとしては上等だろ。しかしこれが中学生の演奏か？若い奴らがスタジオで録ったみたいじゃねえか。」

忘れていたが、中学生の演奏として聴いたならば全然問題ないだろう。

「案外上手く行ったね。」

「そうですね。」

真美と増田さんも、出来が良いと感じたのか、顔が綻んでいた。師匠は曲を聴き終わると、真面目な顔で指で額を押さえ、しばらくして、

「嬢ちゃん達は先に帰ってくれ。ドラム録り全てするから時間かか

る。上にいるカミさんに車で送らせるから気を付けて帰れ。」
と二人に言った。

「は、はい……」

二人は、チャランポランなエロ親父の印象しかない師匠の仕事モードを初めて見て、狐につままれたような顔をしていた。そして、私に軽く手をふった後、師匠に礼をして、この場を去った。

「良、ちよつと真面目に行くから覚悟しろよ。」

それから二時間、私は師匠に駄目出しを食らい続けながら二曲録音した。

「悪いな、遅くなっちまって。心配しなくても良の両親にはかみさんに連絡入れるように言つといた。」

「ありがとうございます。」

師匠の車に乗せてもらい、私は家へ向かった。ドラムの音源の入ったCDとMTR、58、コンデンサーマイク、ヴォーカル録音用のポップガード、キャノンケーブル、とほぼ一式を借りてしまった。

「お前、決意したな？」

「はい。行ける所まで行く覚悟を決めました。」

そうか、と言い、師匠はそのまま、車を運転し続けた。

「どうする？声かけとくか？」

「いえ、焦らず、自分たちの力で声かけてもらえるように頑張りますよ。師匠のためにもね。」

「馬鹿が、ガキが生いいやがって……でも、悪くねえな。」
車は私達家族が住んでいるマンションの前に着いた。道具を持ち、降りる際に

「いつか、フェスでも何でもいいけどお前らと俺が受け持つバンド

が対バン出来たらいいな。」

師匠は笑いながら言った。私は右手の指を全て広げ、師匠の前に出し、

「五年以内、それまでに師匠と対バンしますよ。絶対に。」

「ハッ、そんな時まで必死こいて練習しろ。情けね〜演奏見せたら承知しねえぞ?」

「師匠こそ、歳のせいにしないでくださいよ?」

私と師匠は互いに笑い、そしてその場を去った。

翌日、部室を使い録音を行った。昔のMTRと違い、今のMTRはHDやらCDやらSDやらとカセットじゃない。しかも、MTRだけでCDが出来るのだから技術の進歩は凄いものだ。性能も素晴らしい、内蔵アンプシュミレーターもいい音を出してくれるので、アマチュアに重宝される理由が解る。しかし、準備室にある本物のアンプのSVTを使った方がさすがに良いため、ベースはDIを通して録音した。そしてキーボード、ヴォーカル、コーラスを録音して、出来上がったマスターCDを皆で聴いてみた。

「なんか、感動モノだね。」

「本当です。これが私達の第一歩なんですな。」

「うん。これが僕たちの新しい第一歩だ。」

私たちは出来上がったCDを聴いて、これを様々な人に聞いてもらえると想うと胸がはずんだ。それから皆で記念の写真を撮り、その日は解散した。

次の日、真美がジャケットのデザイン、歌詞カードをPCで創り

上げて、CDに印刷を施し、記念すべき一枚が完成した。そして、マスターCDからダビング、ジャケット入れ、を施し、108枚のデモCDが完成した。100枚はライブの度に無料で配り、残りの8枚のデモCDは、

「あ、小倉。デモCD出来たからあげるよ。」

「マジで？やった〜！！」

一枚は小倉に、

「佐藤、デモCD出来たから亜里沙さんに渡しといて。」

「俺の分は？」

「しょうがないな。一枚一万円だ。」

とのやり取りをして、佐藤と亜里沙さんに一枚ずつ、

「師匠、出来ました！」

「何でジャケットに真美ちゃんと増田ちゃんいないの？」

師匠に一枚、そして、私達の分の三枚、残り一枚は準備室に置いておく事にした。これで後は文化祭に向けるだけだった。

文化祭当日、今年の開催式のバンド出演は後輩のバンドを出す事に決まった。去年までは私達が先輩に依頼されて出っていたので、今回は私達の学年で出るバンドを決めた。出演するバンドは二年生のバンドで、一年生の頃から組んでいて、学内の全てのライブを見ていた。バンドとしての成長が著しかったので、今年は、このバンド

を出すことに決定した。

「良さん。こんな広いホールでやるの初めてなんでめっちゃ緊張してるんですけど・・・」

「大丈夫だよ。楽しんで！楽しめたらそれでいいんだから。ミスしたらどうしようとか思わないで思いっきり演奏を楽しんで！」

後輩たちのバンドはとても楽しそうに行い、会場も多いに盛り上がった。こういう所が音楽の素晴らしい所だと私は思う。

午後にライブがあるというのに、私は午前中からずっと露店の手伝いをしていた。露店の近くを亜里沙さんと一緒に歩いている佐藤を見て、

「佐藤・・・亜里沙さんと一緒にいたいのは解るけど、店の方も手伝ってよ。」

と言った。佐藤は嫌そうな顔をして、

「別にいいだろ。」

と言い放ち、その場を去っていった。こんな暑い中に火を使う身にもなっただけなものだ。

その後も、私は露店を手伝い続けた。露店の売れ行きが好調のため、忙しく、刻一刻と時間が過ぎていった。料理を作るのに夢中なあまり、私は時計を見るのをすっかり忘れてしまっていた。そのため、

「良！あんた何やってるの！十分後にライブだよ！」

「嘘！もうそんな時間？」

時計を見ると本当に出演時間まで後十分しか無かった。私は急いで料理を作るのを別の人と代わり、エプロンと三角筋を脱いで音楽室へ向かった。

「良くん、今から見に行くからね！」

「ありがとう！」

「今回もいいライブ見せてくれよ！」

「まかせとけ！」

音楽室へ向かう途中、すれ違う人達の声援を受けながら私は走った。無我夢中で走った。私にとってこのバンドでライブをする事は何よりも大切で、何よりも楽しい。

準備室のドアを開け、私のスネアとペダル、スティックを三セツト持ち、私は音楽室へ向かった。

「良くん、もう準備始まつちゃうよ！」

「いい気になって露店ばかり手伝うからそうなるんだよ。」

二人が私が走ってくるのを見ると、それぞれが口々に言った。私が音楽室の前に着いたとき、調度前のバンドが終わり、彼らが出てきた。

「温めておいたぜ！」

小倉が汗だくになりながら私達へ言った。

「ありがとう。」

私は小倉に感謝の意を表すと、中に入ってしまった。音楽室の中は物凄い熱気で、入っただけで汗が流れた。ドラムの方へ向かい、スネアとペダルをセットし、予備のスティックをバスドラの上に置いてセッティングを開始した。タムをワントムにして、フロアタム、ライド、ハイハット、クラッシュ、スプラッシュ、チャイナ、それぞれを自分の叩きやすい位置にセットし、全ての音を確認してから、私は準備室へ向かった。

「お、やっと来た!」

「良くんはいつも最後ですね!」

「ドラムだから仕方ないんだよ。」

「ハハハ、そういう事にしとく、まっちゃん?」

「駄目です、許しません!罰として、後夜祭は私と二人っきりで準備室に「まっちゃん!」嘘です!皆ですよね!」

「お、BGMが変わったよ。そろそろ行きます?」

「行きましょう!」

「中学生最後の文化祭ライブを楽しもうぜ!」

「「お。」」

「おいおい、何かハリがないな。」

「良くんがいつもより気合が少ないからです!もっと気合入れてく

「ださい！」

「まっちゃんが真面目なこと喋った！」

「いつも真面目です！」

「最近は発情期だったからな。このエロ！」

「ま、真美さんだって！」

「・・・そろそろいい？それじゃあ、皆、思いつきり楽しもうぜ！
！！！！」

「お――――！！！！！！！！！！」

私達は準備室のドアを開け、大歓声に包まれながらそれぞれの楽

器の元へ向かった。真美がベースを背負いEの音を出し、増田さんがキーボードでEのコードを鳴らし、私がカウントを行い、曲がスタートした。

「えゝ次で最後の曲になります。でもその前に一つ告知を。私達、デモCDを作りました！わゝゝゝ！ありがとうございます。それでですね、三曲入ってます！無料です！ライブ後に配布するんでちょっと待ってね。真美も私も着替えたいから．．．．．凄い汗だくでちよつとね．．．．．と、言う事で取り敢えず余るの覚悟して100枚も刷っちゃいました！全部良の自腹です！だから良いんです（笑）良はそれくらいしないと駄目です！あ、話長くなっちゃいましたね。それじゃあ、最後の曲です。皆で楽しんでいきましょう！聴いて楽しんでえ！バディ！！！！」

中学三年生？ - 1（後書き）

読んで頂きありがとうございました！

書いてて、めっちゃ最終回っぽくなりました。あゝ終わっちゃうのかな〜って。ところがどっこい！まだ続きます！まだ書いてない内容があります。そのためにもう少しだけお付き合いください。泣いて喜びます。

この、良達のバンドって実は名前考えていないんですよ。だから名前が出てこない訳で・・・良達の曲を考えようとしても・・・私キーボード弾けないので再現できません・・・普通の3ピースで考えればよかったかな〜

ということ、今回も読んでいただき誠にありがとうございます！次も頑張って書き上げたいです！

中学三年生？ - 2（前書き）

第九話の2です。本編の物語としてはもう九話目、投稿数で言えば合わせて十三話も投稿したんですね。我ながらよくここまで続けたな、と。読んでくださったっている人がいるって思うとはりきつちやいますね。特にここ最近は。

そんなこんなで中学三年生の生活も残り少なくなりました。（私じゃないですよ。）そんな彼らの物語を楽しく読んでいただけたならば嬉しい限りです。では、今回もよろしくお願いします。

中学三年生？ - 2

「時の流れは妙におかしなもので、血よりも濃いものを作ることがあるね。」

学校の屋上。空が夕暮れから段々と暗くなる中、グラウンドでは準備委員会の人達が急いでキャンプファイヤーの準備を行っていた。本来、今の時間はクラスの展示、露店、部の出し物の片付けを行っていた時間帯なのだが、

「たまにはさぼってもいいんじゃない？」

という真美の言葉を聞き、あらかた片付けの目処が着いた所で私は屋上に上がった。

「誰の歌だよ。」

隣に座っていた佐藤が訪ねてくる。

「B・Zの歌だよ。RUNって曲。僕のお気に入り曲なんだ。」

「B・Zか、あんまり知らない。」

佐藤はあまり邦楽を聴かないのだろうか。それとも、結構古い曲なので私と同じ歳の子達は知らないのだろうか。シングル曲では無かったし。

「でも」

暗くなり始め、もう少しでキャンプファイヤーに火が付くそんな時に佐藤は言った。

「悪くねえ曲だな。まるでお前らの事じゃねえか。」

屋上の真ん中で亜里沙さんと話している二人を見て喋った。

「お前と亜里沙さんもな。」

「そうかもな。」

珍しく佐藤は同意した。

「Let's run, run for your life...
か。」

中学生最後の文化祭。それまでに様々な事があった。それこそ、血よりも濃いものを作るきっかけになったのかもしれない。同世代の人よりも長い年月を過ごし、経験していたからこそこのように出来たのかも知れない。特別なこの時期を二回味わう事が出来たからこのようになったのかも知れない。一回目は今たく上手く行かなかった。大きな回り道をしながらもがき続けた。その経験が有つてもなお、私は回り道をしながら歩いてきた。

「面白いな、何事も解らない事ばかりだ。」

「解らないから、面倒くさい事ばかりだけどな。」

溜め息をつきながら、でもほほ笑みの顔で佐藤は答えた。佐藤が笑う顔を、私は亜里沙さんと二人っきりの時以外では初めて見たのかもしれない。

そのように思っていると屋上の扉から小倉が現れた。それを見るや否や、佐藤はまたいつものように仏頂面に戻った。素晴らしいまでのツンデレ具合である。

「良！つと、佐藤もいたか。ちよつと大変なんだよ！速く屋上か」

扉の前で言い終える前に小倉の体は後ろからの衝撃で吹き飛ばされた。何事か、と皆が見守る中、小倉の体が地面に倒れると後ろから人影が見えた。

「お兄ちゃん！」

「加奈！？」

加奈が私のもとに駆け寄った。小倉を踏むのを厭わないまま。小倉が嬉しそうにしているのはおそらく私の見間違いのだろう。

「ちょっと待つて、今は在校生しかいれないはずだけど。」

「あの人だつて在校生じゃないでしょ！」

亜里沙さんを指指し、加奈が答える。よくよく考えると亜里沙さんは高校生だ。

「加奈ちゃん、良くん困つてるよ。」

亜里沙さんとの会話を一時中断し、増田さんが歩み寄る。増田さんが来た事に、顔を不機嫌にし、小さく、だが増田さんに聞こえるように、

「この泥棒猫が、」

と呟いた。

「え！えええ！？」

「解つてるんですからね！増田さんがお兄ちゃんにしている事を！その体で何をしているか！普段は大人しくしているくせに……」

・
」

あの台詞を現実で使う人がいるのを初めて見た。それも実の妹が。増田さんが狼狽し始め、その間も加奈が言及している。

「まゝまゝ、加奈ちゃんもまっちゃんも落ち着いて、ね？」

「まゝ真美さんは貧乳だからどうしようもないですもんね。」

「誰が貧乳だ！！！！私は普通だ！！！！！」

落ち着かせようと来たはずの真美が、加奈の言葉一つで逆の立場になった。そしていつものように三人での言い争いが始まる。この光景を何度見た事か。思わず、額に手を当てて溜め息をついた。その様子を見た佐藤が、

「相変わらずだな。他のやつが見たら羨ましがる状況だ。」

呆れながら言う。

「匠もそのほうがいいんだ？」

私が言うよりも速く、いつの間にか近くに来ていた亜里沙さんが答えた。

「い、いや……別に、俺は……」

「そつだよ。私は真美ちゃんや増田ちゃんやその子と違って美人

じゃないもんね。私の他に美人な人が匠の声かけてたら匠はそっちに行っちゃうよね？・・・」

笑顔で言うのだが、その笑顔が怖い。女性の笑顔で問い詰める様子はどうしてこんなにも怖いのだろうか？佐藤はあたふたし、必死に誤解を説いている。佐藤の説明を言葉では信じていないように反論するが、顔は嬉しそうにしている亜里沙さん。今の佐藤ならそれくらい読み取れるだろう。私は小倉の元に歩み寄り、

「面倒くさい状況だから準備室に行こうよ。」
と言った。

「全ての元凶はお前だけだな。」

溜め息をつきながら立ち上がり、小倉は言った。間違いでは無い。

「ホント、羨ましいぜ。一番佐藤が幸せそうだけだな。あんな中二病野郎が美人の先輩とつ付き合えるのに俺はよ・・・」

肩を落としながら、小倉は歩いた。私も小倉について行き、階段を降りながら、

「いつか現れるさ・・・多分。」

私が言うのと嫌味にしか聞こえないのだろうけど、私だって常にこのような立場では無かった。それでもいつか、誰かと相思相愛になれる時が来る・・・多分。

「お前、来週の水曜日、午後から開いてるか？学校か？」

部屋で勉強をしていた所、携帯電話に師匠から電話が入った。

「普通に学校なんですけど・・・何かあるんですか？」

当たり前だが、休日でも無い平日の午後は学校にいる時間帯である。

「いやな、前に一回俺の付き添いでレコーディング見学した事あったろ？その時のプロデューサーがさ、お前に一曲叩いてもらいたいって言ってるんだけどどうする？」

師匠の話が本当なら私に仕事の依頼がある、と言う事だ。私の今の仕事は学業だ。しかし、これはまたとないチャンスだ。これを機会に、私は今以上に学ぶ事が出来るのかも知れない。そう思うと私は、
「やります。やらせていただきます。」

直ぐに返事をした。

「そうか、それじゃあ明日伝えておくから。んでその後曲の楽譜を渡すからな。ちよつと練習しておけ。大丈夫だ。そんな難しい事やらねえよ、多分。」

「そうですか。ありがとうございます。でも何で僕に依頼が入ったんですかね？師匠何か言いました？」

私はそう言つと、師匠は少しうんと考えた後、

「まゝ、誰か若いのでいいのいいないか、って言われた時にお前の名前を言つたくらいかな。んで、実際のお前をあの時見て、まだ若い事に驚いたんだろう。んで試してみたくなつたと。そんな所じゃね？」

それから、二言程話をし、私は電話を置いた。

そして、初めてのレコーディングの仕事の日になった。

「あれ、良帰るの？」

午前中の授業が終わつた所で帰る支度をしていると、真美が話しかけてきた。

「あれ？言わなかつたっけ？」

「真美さん、良くんは今日お仕事なんですよ。初めてレコーディングに関わるって言ってたじゃないですか。」

私が今日何かあったのか、と不思議そうな顔をしている真美に、呆れたように増田さんが言う。

「…………あれ本当だったんだ…………良に先越された！
!!!!」

私の言葉を冗談だと思っていたのだろう。真美が非常に悔しそうにしていた。元々真美はプロの演奏者を目指していたのだ。バンドでという事と同時に元々の目標の方もあったのだろう。

「全部師匠の力だよ。何の業界でも信頼が一番大事だからね。だから僕も重圧が大きいよ。」

私一人の力だと今の段階で仕事の話が来るはずもない。いかに師匠がこの業界で大きい人かと言う事が解る。

「あゝあのエロ親父良がドラム録ってた時凄かったもんね。普段と違ってオーラバリバリ出たもん。」

「そういう事。じゃ、時間無いからこれで。」

私は真美と増田さんに挨拶をし、教室を後にした。

「おはようございます。」

約束の15分前にスタジオに入り、私はその場にいる全ての人に向けて挨拶した。そして、中には入り、仕事の準備をした。仕事の手順は前に一度、師匠の仕事を見ていたために一通り頭に入っていた。約束の時間の15分前にスタジオ入りしたのは、私が新人なので、今日来る他のエンジニアを待たせる結果になってしまっただけなのではないかと思いきや余裕を持って来たのだが、予想以上に早く着いてしまった。「お、気合入ってるね。ま、そりゃそうか。」

スタッフの一人が私に話しかけた。

「はい。新人ですから。これくらい当たり前です！」

「元気がいいな！まだ中学生だつて？それで薫さんの信頼を受けるなんて相当だよ。皆噂してたんだよ？薫さんが初めて弟子をとつたつて！」

改めて、師匠の持つ力は凄いことを思い知らされる。そして、その信頼を地に落とす結果にならないようにしなければならない。

「それじゃあ、頑張ろうよ！力抜いてね！」

「今の所、もうちょい前ノリで頼む」

「解りました。」

やはり、プロの音響さんが求める事は細かく、そして予想以上に多くの事を求められる。

ただ、叩くなら楽譜を一回見るだけですぐ出来る。しかし、それだけではいけない。ただ叩くだけなら誰でも出来る。そして、ただ上手く叩けるなら全てのスタジオミュージシャンは叩ける。そこから何が求められ、使いたいと思わせる人物になるのか？それらを身に付けなければ仕事は来ないだろう。

「オッケーです。」

スタジオから出ると、ディレクターに呼ばれたので、ディレクターの元に向かう。

「おつかれ、いや、予想以上だったよ。いくら薫くんの弟子とは言え私は君の演奏を聴いた事が無かったからね。いや、その歳でこれだけのレベルを持つなんて素晴らしいな。」

「ありがとうございます。」

ディレクターの賛辞の言葉を素直に受け入れる。私は一応、求められた要求に答えられたのかも知れない。

「そこでだ。」

真剣な表情のまま、ディレクターは話を続けた。

「君が私の求めるレベルで終わらせたなら君はここで今日の仕事は終わりだ。だが、君は私の思う以上に答えてくれた。そこで、もう一曲あるのだが、叩いていつてくれないか？」

そう言つと、ディレクターは私に右手を差し出した。

「喜んでやらせて頂きます。」

私はその手を両手で取った。

「お前もこれではれてプロのミュージシャンだ。」

師匠は店員の出された料理に手を付けるのを一旦止め、私に言った。私は師匠と師匠の奥さんの三人で料理屋に來ている。初めて給料を貰った時、私は直ぐ様に師匠に何かしなければならぬと思った。

それで私は、師匠と師匠の奥さんを家族で本当に特別な時にだけ使う料理屋に招いた。

「プロですか？」

「金を貰ったんだ。お前がドラムを叩き、商品が出來て流通ラインに乗る。そして誰かがそのCDを手にする。金が巡り回つてゐるんだ。お前がドラムを叩いた事で金が動く。立派な商売で、プロフェッショナルだよ。」

師匠の言う事は仕事上での意味でプロと言っている。自分の行う事でお金を貰える。それはもうプロだということだ、と。ここ日本においてプロとは技術が優れて、芸術面で成功している人、様々な仕事上での成功者、有名人を指している事が多い。

「お前の評価は凄く高かった。今回の曲は女子高生バンドのアニメの曲だそう。この曲が売れる事になるとお前は次からも呼ばれるだろう。新人だから単価も安いしな。んで、もしかしたら同じよう

なアニメやゲームの時に呼ばれるかも知れない。そうして仕事をこなし、いき、信頼を勝ち得る事で次々と仕事が入るんだ。」

こういう事を一つずつ積み上げて師匠は今の立場になったのだろう。師匠は料理に手を付けるのを止めたまま、

「だが、お前の目指す世界はそこじゃないだろ？取り敢えず経験と知識を増やして、それを活かして行けばいい。」

私に話を続けた。隣で奥さんが冷めると勿体無いから、と呟いているがそれを無視して喋っていた。私の事を思い、師匠の経験からアドバイスしてくれている。料理に手を付けないでだ。師匠の思いやりに、私は感謝しても仕切れなかった。

「良くん、本当に今日はご馳走様。こんな美味しいお店、お高いんでしょう？」

「いえ、金額以上のモノを僕は師匠と奥さんに貰いましたから、せめてこれくらいさせて下さい。」

「嬉しいわ。若くてイケメンな子からお食事に関連していかれるのわ。」

店を出ると直ぐに、奥さんから感謝の言葉を頂いた。

「まゝ、ありがとうな。こういうのも悪くないな。」

「あなた、もしかして感激のあまり泣いてる？」

「うるせー。」

師匠が照れながら奥さんに言った。師匠は物凄く情に熱い所もある。そんな師匠だからこそ、私は着いて来れたし、これからも着いて行きたい。単に、今の私がいるのは師匠のおかげだ。もちろん、他の人のおかげもある。

私は人との繋がりが自分を強く、たくましく成長させてくれる事を身に染みて実感した。

<Side Another>

「君はベースなんだね。重くないの？」

「だってカッコいいじゃん！四本しかないし！」

それが私と良の初めての会話だった。今からもう何年前になるんだ

ろう。十年以上前かな？私がベースを習いに行ってた音楽教室で会った同じくらいの子。音楽教室で初めて出来た同い年の子。

良がドラムを習っていると知ると、私は良と一緒に練習をする事が多くなった。家で一人で弾いててもつまらなくは無いんだけど、人と一緒に演奏するのは一人よりも全然楽しい。

そのうち、課題の曲から私がしたい曲、良がやりたい曲、曲じゃなくても適当にセッション。凄く楽しかった。私は良と一緒にベースを弾いている時が何より楽しくてしょうがなかった。学校の友達と話したり、買い物に出掛けるのももちろん楽しいけど比較にはならなかった。

それから月日が流れるうちに、私は良を意識し始めた。良は学校で友達が格好良いつて言う男の子と比べても大差ないくらい格好良いいし、周りの男の子達と違って落ち着いていて、大人っぽかった。そんな良に少しずつ、友達って感覚から好きな人って感覚になっていった。でも言い出せない。言ったらこれまでの関係が崩れるって思っちゃうと動けなかった。

良の通っている小学校は物凄く頭の良い小学校だ。そして中学もそのまま上に上がっちゃう。今は良と一緒にいれるけど、もし、もししたら会えない時間が増えて、そのうち会えなくなっちゃうって思ったら凄く嫌だった。

「同じ中学校に通えば良いんじゃない？」

友達に相談した時にそう答えが返ってきた。そうだ、そんな簡単な事で一緒にいれるんだ。でも今から勉強して入るのは物凄く厳しい。多分音楽教室も、良と会う事も我慢しなきゃいけない。でもそれを乗り越えたら毎日良と会えるんだ、って思ったら寂しかったけど頑張れた。

試験が終わって、合格発表があり、私が合格した時は泣いて喜んだ。お母さんもお父さんも喜んでくれた。

次の日、久しぶりにスタジオに行った時、外に良がいた。私は嬉しくなって近寄って驚かしたりした。それで、何でここにいるの？

って聞いたらバンド練習だって良は答えた。同じ歳の子達同士らしい。多分、その子達は良の凄さを解っていない。そして、良の実力を発揮させることが出来ない、そう思ったらそいつらに良の凄さを見せてやる！って気持ちになった。良の手を取り、私はスタジオに向かった。中に入ったら、私が良の手を取っている事に怒っている子がいた。その子は凄く可愛いし、反応から良の事が好きなんだって一発で解った。でも良と一緒にいるのは私が一番長い、他の子に負けるはずが無いって自分に言い聞かせた。

まさかその子と親友と言えるほど仲良くなるなんてその時は思わなかった。

「真美さん、良くんって他に好きな子がいるから私達に振り向いてくれないのかな？」

中学に入学して、最初は余所余所しかたまったちゃんと私も、あまりに良が反応してくれないから二人で話をした所、意気投合をして仲良くなった。まっちゃんが不安になる気持ちは解るけど、他の子を好きになるなんて事有り得ない。だって、まっちゃんは凄く可愛いし、それに・・・大きい。私と比べ物にならないくらいに一度触らせてもらった時にその感触に私は夢中になってしまった。もう少しで危ない線を互いに超えそうになっちゃいそうだったけど、踏み止まった。同姓の私でさえこうなっちゃうのだ。異性ならどうなるかなんて考えなくても解る。

「真美さんも増田さんも、私には結局負けちゃうんで違う男の人で

も見つけたほうがいいですよ？」

ある意味一番やつかいなのは妹の加奈ちゃんだ。この子は良より、全てにおいて完璧だ。私も小学生に胸の大きさを負けるとは思わなかった。そして何より美人過ぎる。アイドル？女優？そんなもの霞んじやう。私もまっちゃんも一番気をつけてるのは加奈ちゃんだ。だって、未だに部屋が一緒なのは加奈ちゃんが駄々をこねたせいだ。って言うし、良への事となると凄く怖くなる。あの日、私とまっちゃんがキスをした時は恐ろしかった。そして、加奈ちゃんのキスは私達の誰より激しかった。そのうち、行為が始まっちゃうのかもって思うくらいに。

良が私とまっちゃんの事を異性としてちゃんと捉えてくれて、そして好きなんだって事を知った時は嬉しい反面、一人の女性も選べないのかよ、って思った。でも、私は良以外考えられない。ならば一番になるしかない！それであんな事言っただけ、まっちゃんの方が行動に関して一枚も二枚も上手だった。

「それくらいしないと真美さんに勝てないもん。私が勝ってる部分って胸の大きさしかないし、」

その大きさがだいぶ強いと思うんだけど。

「スタイルも顔も性格も真美さんの勝ちだもん。何でこんなにスタイル良いの？」

そう言ってまっちゃんはよく私の体を触る。それもいやらしい手つきで。最近のまっちゃんはSっぽい。まっちゃんの行動力は加奈ちゃんも最も危惧しているらしい。

でも、まっちゃんならって思う。まっちゃん以外に考えられないから。

そうこうしているうちに中学生生活も終わりに向かっている。バンドも目指すべき道を決めたし、恋も頑張らなければならない。これまでに以上に険しくなるけど、頑張って行こうと思う。

「真美さん、帰りにドーナツ食べに行こう！私がお金払うからいっぱい食べていっぱいおおきくなってね！」

「太れってこと？」

中学三年生？ - 2（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました。

一応前回からの続き、真美の話しつつ形で書きました。百合好きな私の中では真美はネコ、増田さんはタチだと思っています。どうみてもキモイです、本当にありがとうございました。

まあ、そんな感じで書きちゃいましたけど、どうしたらもっと面白く書けるかなって考えています。彼らはインディーズでやってからメジャーに行くのか？それとも、インディーズを経てそれなりの結果を得たら自分たちでレーベルを立ち上げて活動していくのか？そんなこんなでそこら辺ももう一度勉強して考えていきたいと思います。でもそれは中学生の間じゃ書けないって言う………まだ続くかも知れません。

それでは、今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

中学三年生？（前書き）

はい、第十話です！記念すべき十話の内容がこれでいいのか解りませんが、日常系です。あと、15禁の堺ってどこらへん何ですかね？よく解らないのですが、もしこのSSが15禁に当てはまるだろ！って思ったのならばご連絡ください。直ぐ様警告の所に15禁のタグ付けます。では、今回も楽しんで読んで頂けたならば幸いです。では、宜しく願います！

中学三年生？

中学生生活も残り二ヶ月となり、高校受験をする人は今の時期は何と言っても大切な時期だろう。脇目も振らずに受験勉強をし、模試の結果に一喜一憂する。判定が思い通りに行く人はこの結果に満足せず、合格を確実にするために勉強をする。自分が思う結果にならなかった人は寝る時間を惜しんで勉強をする。

と、真面目な話をしたが、うちのクラスで高校受験のために勉強をする人なんて一人もない。もしかしたら他のクラスにはちらほらいるかもしれないが。うちの中学は付属の高校に望めば全ての人が進学できる。有名私立大学の付属中学、高等学校なので、わざわざ他の公立、私立を受けるために勉強するメリットは無いのだ。エスカレーター式に高校まで上がり、校内推薦を得て大学まで上がる、これがほとんどの生徒とその親が描くシナリオだ。私立大学の中ではトップクラスの学力を誇るだけに、これを理由に小学校から受験を受け入る人もいるし、中学高の受験を受ける人もいる。高校の方も受験を行っているのだが、難易度は私立受験の中でも最難度を誇りちよつとやそつとでは受かる事は出来ない。

そんな訳で、私達は最後の中学生生活を満喫しようと言々勉強、趣味に時間を費やしている。そんな矢先、

「良、一生の頼みがあるんだが。」

小倉は、今回で何回目になるか解らない一生の頼みを私に話そうとしていた。

「実はよ、俺って彼女いないじゃん？んで、お前も彼女がない訳じゃん？一応。」

実は、とまるで彼女がいない事が不思議だと言ってもらいたいのか、そう小倉は言う。私も、彼女はいないにはいないが、真美と増田さん以外に付き合おうと思う女性は一人もない。

「それでさ、今週の土曜日に俺のツテで合コンをやる事に決まった

んだけど……相手方の条件がお前が来る事なんだよ。もちろん来るよな？」

小倉が来ない訳ないよな、と言いたげな顔をしていた。私は小倉にほほ笑んだ。それを見た小倉は私が引きつけると思っただろう、満面の笑みをしたのを見て、

「うん、無理。」

私はほほ笑みなを続けたまま答えた。私が了承したと思ったのか、一瞬だけ大喜びした小倉も、私の返事が断りだと知るや否や、焦った表情になり、

「何でだよ？他校の女子と知りあうチャンスだぞ？あわよくばその日のうちに、なんて事も出来るんだぞ？」

と、言うのだが、

「真美と増田さんにバレたらなんて言えがいいの？そんなの無理だよ。」

もし、私が真美や増田さんに行った事がばれたのなら……考えるだけで恐ろしい。加奈なんて何をしでかすか解ったもんじゃない。それに中学生で合コンって何をするんだ？酒が入るなんて事あり得ないだろうし、最初からカラオケボックス、いや、カラオケルームなんてのも考えられない。

「ほんと頼むよ！最後の中学生生活に思い出を作りたいんだ！ホント頼む！この通り！」

小倉は私に頼みこむと同時にその場に土下座をした。地に頭をつけながら。だが、私もここで折れてしまえば……

「本当に頼む！」

……

「って事で、今日は来てくれてありがとう！あ、まず自己紹介しようか？俺小倉、小倉小倉智之って言うんだ！宜しく！ギターやってバンドもしてよ！」

小倉が張り切って幹事を務めている。合コンが初めてなのか多少緊張しているが、頑張っている所から、やや好印象を与えただろう・・・多分。

心配していた場所は、私の心配どうりファーストフード店だった。この次にカラオケを計画しているらしい。ファーストフード店で合コンって、思ったが中学生同士で居酒屋に行ける訳も無く、仕方が無いのかもしれない。

テーブルをくっ付けて、四対四で向かい合う。男の方の面子は私と小倉の他に、小倉の友人が二人。女子の方は近くの公立中学校の子達で、小倉のいとこがいるらしい。公立の中学生は今が一番大事な時期だろう！と小倉に言った所、彼女達は推薦でもう進学が決まっているらしい。

「次お前だぞ？」

「え？あ・・・新堂良です。よろしく。そうですね・・・趣味はギターかな？」

考え事をしている間に他の人達は自己紹介が終わっていたわしく、私が最後だった。自己紹介を終えた後、全員から拍手を貰ったのだが・・・自己紹介の時って拍手は起きるものだっただろうか最後に合コンを行ってからだいたい時間が経っているため、内容をほとんど忘れてしまっていた。

「良くんってドラムじゃないの？私ライブ観に行ってるから解るよ！」

「あ、ライブ来てくれてるんだ。ありがとう。ドラムは専門だから

ね。ギターの方がいいかな？って？」

「じゃあギターも出来るんだ！凄い！あ、良くん握手して！」

女の子がそう言ったので、一応握手をしておいた。私が握手をしたらその子は大変喜び、他の女の子達も私に握手を求めてきた。もしかしてこの子達は毎回ライブに来てくれる人達なのか？小倉のための合コンなのに、私ばかりに人が集まっけていては本末転倒だ。これは非常にまずい。

「お、小倉もね、バンド組んでるんだ。凄く良いバンドだから今度学校であるライブに来たら聴いてみてよ。こいつ、今もカッコイイけどギター持ったらもつとカッコイイんだよ。」

女の子達に小倉の事を話した。その後、小倉に目で頑張れと合図を送ったら、嬉しそうに頷いた。だが、目の前の女の子だけ、

「智之のバンド観たけどよく解んなかった。ただ暴れてるだけって感じ。」

と、興味を惹かなかった。この子はもしかして、小倉のいとこなのだろうか？

「それより良くんって普段どんな音楽聴いてるの？私は西野カナとか、青山テルマとか聴いてるよ！」

「…………この話題が一番困る。何故なら今の邦楽はあまり聴かないからだ。バンド物はたまに聴いたりするのだが、J-POPはあまり聴かない。普通の人と音楽の話をしようにも解らないし、この年代の自称音楽好きは邦楽なんて糞だと言って有名所の洋楽の話しかない。今この場で中学生の女子でも解るような人達は…………」

「B・Zが好きだよ。」

「私もB・Z大好き！イチブトゼンブとか、DIVEとかめっちゃ好き！」

どうやらこの子はB・Z好きらしい。それなら多少話が出る。

「良いよね。僕はRUNのアルバムが好きなんだ。out of controlとか、THE GAMBLER、月光、そして何よ

りさよならなんかは言わせない！アルバムの中の曲全部が好きだ
どと言った曲は中でも特に好きなんだ。君はどう？」

「え？・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・ごめん、そこまで知らない
だ・・・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・・・ごめん。」

結局いつものように私一人が盛り上がってしまった。

「・・・・・・・・濡れたまんまでいつちゃって・・・・・・・・」

あれから適当に会話をし、それぞれが話せるようになった所で、私
達はカラオケに向かった。同じ歳の子達と初めてカラオケに行った
が、皆が歌っている曲は知っている訳も無く、そんな私が歌っても
場が白けるだけなので歌わないで合いの手を叩いていた。

そんな事ばかりしていると気疲れを起こすので、それが悟られな
いたために私は一度部屋を出てトイレで気合を入れに行った。

「全然解らない・・・・・・・・」

そもそも、酒も入らないでそこまで盛り上げれる事が凄い。そう
言えばこの時期に酒を飲んだ時はいつも以上にハイテンションにな
ったのだが、これくらいのテンションからさらにテンションが上が
った状態になるのだろうか。

手を洗った後、トイレを出たと同時に、

「ねえ、つままないの？」

横から声を掛けられた。そこには、壁を背にし、顔だけ私の方に向
けている小倉のいとこであろう子がいた。

「い、いや・・・・・・・・・・別にそんな事は・・・・・・・・」

「私はつままないな。」

彼女はそう言うと、

「ね、一緒に抜け出しちゃおうか？」

と、言い私の腕を取った。非常にまずい。この状況を誰かにでも見られたりなんかしたあかつきには

「良くん、その子だね？」

私の背後から声がした。振り向いた先に……。増田さんがいた。最悪な形で、私は今、一番会ってはまずい人物の一人と会った。

「ねえ、誰その子？私みた事ないし、何で良くんの腕に捉まってるの？」

「いや、この子は……。その……。増田さんが思うような人じゃないよ！本当だよ！」

増田さんが一つの表情も無く喋る。この顔は初めて見た。とても怖い。体中から脂汗が噴き出したのが解った。

「キーボードヴォーカルの増田さんですね？初めまして。私、上村綾香って言います。今から私と良くんは二人っきりで別の場所に行くのでどうぞごゆっくりとカラオケをお楽しみ下さい。」

「ちよつと、何言ってるの！？僕まだ行くなんて一言も「どういう事？」いや、だから違うつて増田さん！」

この子の勝手な言葉でややこしくなっていく。

「さつきも言いましたよね？今から私は良くんと遊びに出かけるんです。邪魔しないでください！」

「あなたは何を言っているのか解ってるの？」

二人は睨みあいながら火花を散らしている。私がこの場で出来る事と言えば……………

「ちよつと良、どこ行くの？まだ話は終わっていないよ？」

その場を離れようと、後ずさるうと一步後ろに踏み出した時、誰かに肩を掴まれながら言われた。恐る恐る顔を振り返ると、

「ま、真美？」

「正解。」

恐ろしい表情をしている真美がいた。と、言う事はもしかして、

「お兄ちゃん………」

「………」

会ってはいけない人全員が揃っていた。

「これはこれは、メンバー全員勢ぞろいですか。一人知らないですけど。でもすみませんが、私達はもうここを出るので。」

「お兄ちゃん？」

「だから違うんだって、誤解だ！僕は別にこの子と二人つきりでどこかに行くなんて事しない！信じてくれ！君も勝手な事をしないでくれ！」

このままずると長引くくらいなら一言ビシツと言った方が良いでしょう。思い、私は三人に私を信じるように、そしてこの子の勝手な行いに喝を入れた。それを聞いて皆、少し落ち着いた様子になった。

さて、ここからだ。どう説明しようか考えていると、

「………つまりお兄ちゃんは別にこの女とどこかに行く予定は無かった、それをこの女が勝手に決まっているかのような話を増田さんに喋った。こういう事？」

加奈が静かに喋る。完璧すぎるほどの正解だ。だが、加奈の様子がおかしい。驚くほど冷静で、静かなのだが………静かすぎる。だが、加奈がこの子を見つめる視線がとげとげしい………そして、静か………まずい！

そう思うと同時に加奈は動きだした。私は、加奈の前に立ち、加奈が彼女の元へ向かうのを妨げた。

「落ち着け！」

私の制止を振り切り、私を抜き去り向かおうとしていたので、私は加奈の手を取り、実力行使で止める事にした。

「だから落ち着けっ！」

「離してお兄ちゃん。この女、絶対許せない。」

まずい、完全に頭に来ている。こうなった加奈は梃子でも動かない。

非常にまずい。彼女の身が。

「君！部屋に戻ってくれ！」

「でもまだ、」

「いいから戻れって言ってるんだろ！早くしろ！」

私の怒気を含んだ声を聞き、彼女はびくついた後、私達が使っていた部屋の元へ向かった。私は取り敢えず騒ぎの元凶がさった事に胸を撫で下ろしたが、

「良、ちよつと表に出な。」

「そうだね。説明しなきゃ納得しないよね。」

真美の言葉に私は賛同し、三人を連れてカラオケの外に出た。

「そういう事なんだ……小倉も必死だったんだね……」

私がここに来るまでの経緯を全て伝えた所、真美が憐れみながらそう言った。増田さんも納得はしてくれたがそれよりも先ほどの加奈の行いに驚いているようで何も喋らなかった。加奈が少し落ち着いてきように見えたので、

「加奈、落ち着いた？怒る理由も解るけど加奈がキレる事は無かったんじゃない？」

と言った。そしたら、

「お兄ちゃんの話からするとあの女。絶対に増田さんの事を見くびってたんだと思う。そう思ったら頭の中が真っ白になって……」

・そうじゃなきゃあそこまでならないよ。」

加奈は増田さんが低く見られた事に腹を立てたのだろう。それこそ腹わたが煮えくり返る程に。たまに言い争ったりもするが、基本的に加奈は増田さんと真美の事は気に入ってる。増田さんの事はまるでお姉ちゃんが出来たみたい、と喜んでいたのだ。増田さんは加奈があそこまで怒った理由を知ると加奈を抱きしめ、

「ありがとう加奈ちゃん。私も加奈ちゃんの事大好き……
そして真美さんはお嫁さんだね。」

と加奈に言った。

「ありがとう。私も真美さんは私のお嫁さん……それにしても！」

「そ、そうだね。」

「そうですね。」

加奈と増田さんの友情を美しく見ていたら、三人が一斉にこちらを向いてきたので、その迫力には私は後ずさった。

「私達に黙って合コンに行ったのは許せないよね？」

「そうだね。これは詫びが必要じゃないのかな？」

「そうですね。そうしなければ腹の虫がおさまりません！」

三人は私に目を吊り上げながら言った。

「で、でも、言ったら小倉が「あゝあ、小倉のせいにするんだ？そうなんだ」。……解ったよ。」

「……やったー！！！！」

私が洪々了承すると、三人はにんまりとした顔をし、ハイタッチをした。その後加奈が、

「ここの近くに美味しいケーキ屋さんがあるんですよ？お値段は少ししますが、お兄ちゃん、最近仕事があっってお金持ってるはずですからお土産も買ってくれますよ！」

「お、いいね！ありがとうね良！」

「御馳走になります！」

いつの時代も女性には敵わない。そしてこの三人は私が今まで出会った中で一番強い女性だ。この歳でこうなら成長して行った事を考えると……

「どういたしまして……」

世の中考えない方が幸せな事もあるのかもしれない。特に女性関係は、私はそう思わざるを得なかった。

「それにしても何で真美がお嫁さんの？」

「「可愛いから！……！」

「もっ忘れちゃ……」

<Side Another>

「今日は何の予定だったんですかね？」

「さー、仕事じゃないの？」

「それは無いですよ。私、お兄ちゃんの仕事の用事なら把握してますから！机の二段目の引き出しに手帳入れてあるんで毎日チェックするんですよ！」

一人の少女の言う事に二人の少女は苦笑いをする。休日の正午、三人の少女は人気のあるイタリアンレストランで昼食を取っていた。休日、昼間、人気店、三つの要素が重なり店の中は大勢の客で賑わっていた。

「でも本当に加奈ちゃんの紹介してくれるお店は美味しいですね。こんなに美味しいパスタ食べた事ありません。」

「増田さんはイタリアンより和食派ですもんね。着物でお茶を立てる姿は想像出来ませんもん。真美さんは……アメリカンって感じ……」

「ガサツだって言いたいのか！」

真美と呼ばれた少女が青筋を立てているのを二人の少女が口元を押さえ上品に笑う。たったそれだけの行為で近くにいた客は三人の姿を凝視してしまう。それは無理の無い話である。三人の少女は一人一人がテレビに出てもおかしくない程の容貌を持っていた。それぞれ違うタイプの美少女に、客は料理に手を付ける事を忘れ、ただ彼女たちを見つめていた。

「でも、それなら本当にどこ行っただろう？今日はせっかく皆何もなかったのにさ。」

飲んでいたコーヒーをテーブルに置き、真美は言った。真美の言葉に他の二人も手に持っていたカップを置いて、

「何かあるんですよ。そんな毎日私達と一緒にいる、って訳にも行かないじゃないですか。」

「でも私はお兄ちゃんといつでも一緒にいたい！……そういえばですけど、この前お兄ちゃんがお風呂に入ってる時、間違っただ振りして一緒に入っちゃった。」

加奈の言葉に、二人は言葉をなくした。加奈の表情はしたり顔で、勝ち誇っているようだった。

「ちよつと佳奈ちゃん！なんて羨ま……じゃなくて駄目ですよ！加奈ちゃんと良くんは兄妹なんですよ！」

「そうだよ！そんな……そんなの駄目だよ！」

慌てているように見える二人には明確な違いが見えた。増田はまだ余裕があるような感じだが、真美はどこか余裕が無い。それどころか、浴場という何も身につけない状況での事を考えてか、顔を真っ赤にしていた。その表情を加奈は逃さなかった。

「真美さんもしかして、いやらしいこと想像してませんか？」

「な……な、！」

加奈に詰め寄せられた刹那、真美の顔は先程よりも赤くなった。まるでゆでダコのようなのだ。

「加奈ちゃん、真美さんはこういう話弱いんですからいじめちゃ駄目ですよ。」

「だって、真美さんってこういう話になるとすぐに赤くなって可愛いんですもん。私、食べちゃいたくなりますよ……。」

加奈は言い終える前に真美の顎を取り、顎したを撫でると、その手を段々と下に降ろしていった。その手つきはいやらしく、もう少しで襟の中に手が入りそうな所で手を離し、

「ほら、真美さんのこの表情。凄く刺激的じゃないですか？」

真美の顔は真っ赤になり、目がトロンとしていた。

「ええ、とても。あまりの可愛さに嫉妬しますよ。」

顔を真っ赤にしたまま下を向き、

「二人とも意地悪だよ……。」

そう小さく呟いた。

「何か、真美さんって洋楽ばかりですね。」

「そういうのばかり聴いてきたからね。友達と話合わすために小学校の頃はいろいろ聞いたけど、最近は特にそういうのも無いしね。」

手にしたマイクをテーブルに置き、真美は次に歌う曲を探すため、リモコンで曲を探している時、

「真美さん、これ一緒に歌いましょう！」

「何？」

加奈が指さした曲はアイドルの可愛い曲だった。

「ダメダメ！私みたいながさつなやつより、真美みたいな方が似合ってるよ。」

「だ〜から〜、真美さんは今のままでも十分可愛いですって。そんな所をお兄ちゃんに見せないから私どころか、増田さんにも負けそうなんですよ？」

加奈は増田を指差しそう言った。それを聞いた増田は

「加奈ちゃんの自信は凄いですね……………」

と微笑みながら呟いた。

「恥ずかしいよ〜それに、良だっていきなり私のそんな所見たら笑っちゃうよ。」

「ギャップですよギャップ。同姓の私でもきちやいますもん。お兄ちゃんなら完璧にコロっと、そしてこんな風うに、」

右手を真美の背中に回し、体を引き寄せ、もう少しで唇が触れ合うくらいの距離に顔を近づけ、

「好きだよ、真美。ってなりますよ〜、ね、増田さん？」

顔を離し、増田の方を見ると、顔が少し不機嫌になっていた。

「加奈ちゃん。真美さんは加奈ちゃんのおもちゃじゃないんですよ。」

！」

少しやりすぎたかな、と加奈は思い真美に謝ろうと真美を見ると顔が今までとは比較にならないくらい耳まで真っ赤にしていた。そして、

「ちょっと……ドキつとしたけど全然気にして無いよ！ね、加奈ちゃん！」

と真っ赤なまま手で大丈夫と合図した。それを見た加奈は真美に抱きつき、

「もう真美さん私の嫁さんにする……！こんな可愛い人見たこと無いですよ！」

体を触りながらそう言った。

「ちょ、加奈ちゃん！私よりまっちゃんのほうが胸も大きいし抱き付き合いが、あっ！」

「大きすぎじゃなくて感度ですよ？大事なものは。」

耳元で声を出し、右手で真美の胸をまさぐった。それにたえきれなくなりそうな真美は、

「ちょ、た、たすけて！まっちゃん！！」

と、増田に助けを求めるのだが、

「加奈ちゃんダメ！真美さんは私のものなんだから！」

と言うと、増田も加わり二人に骨抜きにされた。

「ごめん！ちょっとお手洗い！」

真美は顔が真っ赤のまま、少し息を荒くして、脱兎の如く部屋を出て行った。

「……………ちょっと悪ふざけが過ぎちゃったかな？」

「かもしれないけど……………私は少し本気でした！」

加奈が舌を出し答える。その様子には真美は溜め息を吐き、

「加奈ちゃんって良くんが好きじゃないの？」

と、言った。それに対して加奈は、

「大好きですよ！お兄ちゃんが旦那で、真美さんがお嫁さん、増田さんは私のお姉ちゃん！これが私の理想。」

そう答えた。それに対して軽くほほ笑み、

「私は加奈ちゃんが妹で、私が奥さんならいいな。真美さんは絶対にお嫁さん！これは決まりだね！」

二人は互いに笑いながら言い合った。

「ずっと一緒にいたら良いね。」

「そうですね。皆で一緒にいたいです。」

ソファーに背をもたれ、少し上気味を見て二人は言った。

「あ、私真美さんの様子見てきますね。待っててください！」

増田は部屋を駆け足で行った。

中学三年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

取り敢えず百合厨な私は今回のアナザーを書いている時が一番力を入れたりして・・・

んで、合コンですが、慣れないと最初はお酒の力を使わなければ何も出来なかった事を思い出します。最近は中学生でもやってるとかなんちゃらで合コンの話を書いてみました。このリア充が！私が中学生の時は皆で集まるくくくらいしかやった事が無い・・・

それで、B・Zの下りは本当にあつた話です。女の子とチャットしててB・Zが好きって話になって・・・まさにこの下りでした。相手のごめん知らないが最も印象深かったので入れてみました。

それでは、今回も読んでいただき誠にありがとうございます！
次は明日の朝までに書きたいです！

中学三年生？・1（前書き）

第十一話の？です。前回、朝までには・・・と思いましたが予想以上に書けなくて、この時間になりました。すみません・・・有限実行出来ないってきついですね。

と、言うことで第十一話の？です！今回も皆さんに読んで頂けたならば幸いです。それではよろしくお願いします。

中学三年生？ - 1

「お兄ちゃん、バレンタインチョコ貰ったらその場で叩き割るんだよ？解った？」

「心配しなくても貰えないよ。」

加奈は私が沢山バレンタインチョコを貰ってくると勘違いしているが、中学に入ってから真美と増田さん以外の女性から貰った事など一度も無い。去年、一昨年と二人から貰ったチョコを嬉しそうに加奈に取られたので、今回は学校で食べようと思う。

「良、俺今年はチョコ貰えると思うんだ。」

どこにそんな根拠があるのか解らないが、小倉が胸を張りながら言った。

「そう言って毎年貰えてないけど・・・君の最大の問題点はその自信過剰な所だと思うよ。」

別に小倉はルックスが決して悪い訳じゃない。むしろカッコいい方だ。それこそ小学生の頃はそれなりに女性に人気があった。それならば何処で道が別れたか？女心は解らないが、どこかで見切りを付けられたのだと思う。

バレンタイン。男として生まれたなら嫌でも意識をせざるを得ない日だ。沢山貰える人も、全く貰えない人も。私だって昔はバレンタインなんて都市伝説だと思っていた時期があった。だが、友人が隠れてチョコを貰っているのを目にした時、バレンタインという日は都市伝説では無い、という事を知った。

「あ、良。チョコなんだけどき。今年無しで良い？」

「え、何で？」

真美が私の傍らに来るや否やそう言った。

「いやゝごめんね！楽しみにしてたでしょ？」

真美は、手でごめんと形作りながら言った。今年は食べれるのを楽しみにしていただけにすごく残念だ。だが、

「そりゃ残念だけど、増田さんがくれるかもしれないから何とか「良くん！」噂をしたら何とやらだね。」

柄にもなく、チヨコが貰えると思うと胸が躍る気持ちになった。増田さんの手作りチヨコを貰えて、食べる事が出来るのだ！さあ、私にチヨコを

「ごめんね、私も今年あげれないんだ。」

恵んではくれなかった。悲しくなんか無いもん！だから小倉は私にお前の気持ちは解るよ、と言う目で見ないで欲しい。

「さて、今年はお前が俺ら側についた訳だが、手放しに喜べないね。可愛い妹から貰えるんだろ？」

確かに加奈からは貰えると思う。ほぼ十割の確率で。

「この周りの人間を見てみる。お前が貰えなかった事に最大限の喜びを感じている奴らだ。何故だか解るか？解るまい、学校の可愛い子ランキング一位、二位の女の子二人から常に好意の目を向けられ、毎年チヨコを貰っていた良には、この俺らの体を通して出る喜びが！」

お前はカミ ユか、と突っ込みたくなる台詞だが、黙って聞く事にしておいた。

「お前に解るか？俺たちはな・・・バレンタインなんて都市伝説だと思っただけだよ・・・この時代に、憧れの先輩のために・・・なんて三次元の世界で有り得る訳が無いと、そんなもの二次元しか有り得ないと・・・それをお前は・・・毎年毎年見せつけるかのように貰いやがって・・・俺らにそんな厳しい現実を見せつけて楽しいか！？貴様は俺らが苦しむ姿を見

て悦に浸る屑やろうか？」

周りの人間が涙を浮かべながら拍手をしている所悪いが、

「お前だってチヨコ貰った事あるだろ。小学生の時。」

私の言葉をきっかけに、それまで小倉の言葉に賛同をし、多大なる拍手を涙を浮かべながらしていた全ての人が小倉を囲み、殴り始めた。

「ま、取り敢えずうちのクラスでチヨコ貰えそうな人ってあんまりいないよな。女の子は女の子同士でチヨコ交換する日としか認識してないしな。」

大勢の人を裏切り殴られた後なのに、小倉は何事も無かったかのようになんて話し始めた。

「・・・・・・彼女がいる奴は放課後とかに二人つきりで貰えると思うけど？」

「あーあー聞こえない聞こえない。あーあーあーあー。」

今日ほど小倉が面倒くさいと思った日は無いほど、面倒くさい。

「佐藤もあの先輩から貰うんだろうな・・・・・・ほんとに、あの中二病野郎が・・・・・・」

何かと小倉は佐藤の事を中二病野郎と言う。確かに一時期はなりかけていた時期があったが、今は中二病と言う程中二病では無いと思うのだが。

「あいつどうせ屋上にいるんだろ？独り寂しく黄昏ている所をからかおうぜ。」

「多分殴られるよ。」

「俺の方が強いし！地元で負けなしだし！」

屋上に向かって走りだした小倉を私は痛く感じた。むしろ、小倉のほうが危なくなてきているんじゃないだろうか。

小倉が佐藤の邪魔をするとなると、後々面倒くさい事が高確率で起きる。そう考えたら本当に煩わしいのだが、私も屋上に行き、小

倉を止めるしか選択肢は無かった。急いで階段を駆け上がり、小倉の後を追って屋上に入ったのだが、誰もいない。この寒い時期にわざわざ好き好んで外に出るような人はいるわけもないのだが。小倉も佐藤がいらないと思ったのだろう。既に屋上を後にしたのかも知れない。しかし、佐藤は屋上の普通の人は知らない場所にいる。そこに行くのと、佐藤は毛布をかけて寝ていた。

「風邪ひくよ。」

「ん？……あゝお前か。」

私が声をかけると直ぐに目を開け、佐藤が起き上がった。

「何しに来た？」

「さつき小倉来なかった？」

佐藤は少し考えてから、何かを思い出すと、

「そもそも、お前に声をかけられて起きたから解るわけがねえ。」

そう答えて、また寝始めた。この寒い中毛布だけで寝れる神経が羨ましく感じる。仕方が無いので、屋上から出ていこうとした調度その時、屋上の扉が開き一人の女子が入ってきた。彼女は私と佐藤がいる場所に向かって一直線に歩いてきた。他には眼を向けることなく。佐藤に用事があるのだと思い、私は奥の方に隠れた。彼女は佐藤を見つけたが、寝ている事を知ると少し落胆した。だが、彼女の取った行動は、

「……………!!」

声をかけて起こす、もしくは諦めて帰る等ではなく、一緒に布団の中に入るという行動だった。大胆で私にとっては面白い行動に、佐藤のリアクションを見るまでは帰る訳にはいかない、そう思いこの状況を見届ける事にした。

暫くして、佐藤が亜里沙さんと勘違いしたのだろう、彼女を抱き寄せた。この場に亜里沙さんがいたのなら修羅場を見る事になるのだが、運が良い事にいない。やがて、亜里沙さんとは違う体付きに違和感を感じたのか、佐藤は目を開けるのだが、

「……………」

自分が抱き締めた相手が亜里沙さんでは無い、と解るとそつと辺りを見回し、誰もいない事を確認し、その手を体から離れた。そして、

「誰？」

と、最もな事を聞いた。佐藤の問いに答える前に彼女は顔を真っ赤にし、布団から急いで抜け出し、

「先輩！チヨコ受け取ってください！」

と言うと、佐藤にチヨコを強引に手渡し走り去った。嵐のように過ぎ去って行った出来事に、佐藤はただ茫然としているだけだった。

「見ちゃった。」

そんな佐藤に静かに近寄り、私は一言声をかけた。

「まだいたのか？」

大きな溜め息を付き、佐藤は私を見て言った。そして、

「解つてるとは思うが俺は、」

「うん、大丈夫だよ。亜里沙さんには佐藤がちゃんと説明したらいいよ。でも羨ましいな。僕は今年は誰からも貰えないから。」

と、佐藤の言葉に答えた。

「は？あの二人から貰えるだろ？」

「今年はくれないんだってさ。だから無いよ。」

私が貰えない事を知ると、

「バチが当たったな。」

と佐藤は言った。

「何、今年は一つも貰えなかったのか？ハハ、ざまーみる。いつもいつも順調に行くとは限らないんだよ。」

師匠が今年は真美と増田さんからチヨコを貰えなかった事を知るや否や手を叩き、笑いながら言った。確かにここ最近はこの環境に甘

えすぎていたのかもしれないが、

「師匠だつていつも愚痴るじゃないですか。色んな人から貰えるつて。」

「あれはな〜仕事柄つてやつだ。俺に気に入られたいんだろ、若い奴らは。」

初めて、バレンタインの日に師匠と会うが、去年も一昨年もチョコ食べ過ぎちゃつてよくと自慢してくるので普通に貰っていたのかと思っていた。

「んで、ライブやデモCDの効果はそれなりにあつたんだろ？どうするの？」

私が一番考えている事を聞かれた。今一番現実的にCDを出せるのはインディーズだ。声もかかつてる。だが話を聞いたら、インディーズでやるとなるとお金がかかる事が解つた。その分、CDの売上次第ではこちらの手元に入ってくる金額はメジャーよりもいいのだが、それだけである。要はCDの売上のみが収入になる。レーベル側がプロモーションや広告をしてはくれるらしいが、レコーディングに関してはあまり融通を付けてくれないらしい。相手側も仕事だ。自分たち側に金が入るかどうか解らない新人に全額投資してくれるほど優しくは無い。メジャーの方がCDの売上げによるアーティストの取り分は少ない。しかし、メジャーは音楽事務所所属となり毎月固定給を貰える。メディアへの露出も多く、その分の金も貰える。こつちのほうの商品としての捉え方は大きいし、会社そのものの大ききから出来るのだらう。逆に言えば売れなかつたら契約更新はされないシビアな所だらうが。

「そうなんですよね。今は考え中です。」

「簡単に考えるよ。お前らの最大の武器つて何だと思つ？」

師匠が私に問う。

「……………若さですか？」

私の問いにニヤリと笑い、

「解つてるじゃないか。若くて将来性のある奴らには誰でも喰いつ

く。取り敢えずバンドコンテストにでも出てみるよ、10代限定のあるコンテストなんか優勝したらメジャーと契約させるって書いてるんだしよ。こういうのを最大限に使うのが良いんじゃないか？使える物は使う、これくらいの気持ちじゃなかったら生き残れねえよ。だから俺を使ってもいいんだが……まあそれは置いてくか。

「師匠の言葉で10代限定のバンドコンテストを知った。しかもメジャー契約だって？もつと調べておくべきだったのかも知れない。」

「確しか地区予選が5月にあるが……まあお前らが出ても大丈夫か。楽器隊はアマチュアレベルじゃねえもんな。そんな奴らが若い奴らだけの大会で予選落ちするならそんな大会は糞だ。本戦はもうそいつらの個性だろうな。結局、音楽は技術がモノを言う訳じゃないからな。ま、取り敢えずこういう話があるって事だけは頭の中に入れておけ。それとだな。」

言い終えると師匠は私の方を指差し、

「ざまあ……！！！！！！！！！！」

と言った。

師匠の家を後にし、独り寂しく家へ向かった。今日はいつもよりも寂しい。わずかばかり誰かから貰えるかと期待したし、今年こそは真美や増田さんからのチョコを食べれると期待もしていたのだが、食べれる所か貰えさえしなかった。期待が大きいほど、そうならなかった時の損失は大きい。肩を落としながら私は家に入った。

「ただいま……」

靴を脱ぎ、部屋へ向かおうとした所で私は玄関に置いてある靴の多さに気がついた。女物のサイズの靴なので、母の友人か、加奈の友人でも来ているのだろう。取り敢えず部屋に行き着替えようと思い部屋の扉を開け中に入った所、私の机の上に朝には無かったCDちよっと大きめの箱が置いてあった。

「加奈のチョコかな？」

荷物を置き、箱を持ち上げると可愛らしい便箋が一枚下に置いてあった。それを後で読むことにしといて、私は箱を開けた。中に入っていたのはチョコレートケーキだった。

「今年は凄く手の込んだ物を作ったんだな。」

まるでケーキ屋さんの売り物と見間違える程であつたが、加奈は毎年手作りをくれる。今年は例年以上に手の込んだ物を作ってくれたのだろう。早速味わうために部屋を出てキッチンへ向かった。台所で一口サイズに切り小皿に載せ、テーブルに着いてチョコレートケーキを口に入れた。

「美味しい・・・」

予想以上の美味しさに、二人前ほど切り、もう一度食べようとテーブルへ向かおうとした時、キッチンに加奈が入ってきた。

「加奈、ありがとう。これ本当に美味しいよ。」

と、味と作ってくれた事に感謝の言葉を送ったのだが、少し苦笑いをし、

「お兄ちゃん、ケーキ入ってた箱の下に便箋置いてあつたでしょ？
読んだよね？」

箱の下においてあつた便箋の話をした。私はそれを食べ終わってから読もうとしていたので、

「まだ読んでないよ。」

と答えた。私がそう言うのと、加奈は溜め息を吐き、キッチンとダイニングを区切っている扉の前までくると、

「だからお兄ちゃんはこのうの後に読むって言いましたよね・・・
・・・まあ、サプライズって意味では間違つてないんでしょうけど・・・
・・・」

ダイニングにいる誰かに向かつて話をする、考えられるのは私と接点があり、加奈とも親しい人・・・そんな女性は二人くらいしか考えられなかった。

「まあ、サプライズとしてはこっちの方がサプライズか。」

「そうですね。最初からこうしたほうが良かったかもしれないです。」
ダイニングの方から真美と増田さんが喋りながら現れた。もしかして、

「もしかして、このケーキって三人で作ったの？……」

三人の様子から、もしかすると思い、聞いたところ、

「そうだよ。昨日、良が居ない時間に作ったんだ。」

「上手い具合に昨日は平日でしたからね。」

真美と増田さんが私の問いに答えた。とすると、

「秘密にしたかったから学校でああ言っただんだ……」

「最初からあるって思うより、何も無いって思ってた時に貰ったほうが嬉しいでしょ？そういう事！」

真美がしたり顔で答えた。その顔を見て、私は二人の思惑にまんまとはまった事を知った。

「でも本当に美味しそうに食べてたので嬉しかったです！」

「作ったかいがあったよね。」

「……主に私が作ってたじゃないですか……」

三人はそれぞれ言いあっているが、私にはそれがとても親しそうに見えた。ドロドロしていたと思っていたのだが、本当は最も仲がよいのだろう。

「三人共、ありがとう。」

感謝の言葉を三人に言つと、三人は本当に嬉しそうに微笑んだ。

あのバレンタインの日から一週間後、私達は準備室で卒業ライブのための練習を行っていた。中学生の軽音楽部最後のライブのため

に力を入れようと他の部員は力を入れ込むのだが、今日の練習は皆、緊張感の欠片もなかった。その証拠に所々ミスが目立つ。昔の私なら見落としていたのだろうけど、この頃レコーディング等、お金を貰いドラムを叩く立場になってきたので、こういう所に敏感になってきたのかもしれない。毎月一回はライブを行っているのだから、特にライブに向けて・・・という風に気持ちが緩んできているのかも知れない。もし、そのような考えに皆なっているのだとしたら・・・非常にまずい状況である。

「もうそろそろ終わる？私お腹空いて来ちゃった。」

曲が終わると直ぐに真美が言った。練習時間が終わる時間までまだ20分もあるというのに終わろうと言い出したのだ。

「そうですね。何回もやってますから大丈夫ですよ。」

増田さんも真美の言葉に賛同した。

「ね、まっちゃんもこう言ってるし、今日は終わろうよ？ね？」

「そうだ、皆でお茶でもしましょう！真美さんも少しお腹が空いているみたいです。」

二人は私に早く練習を終わらせようと提案してきた。だが、私は先程の事もあり、

「いや、もう一回やろう。所々ミスがある。まだ時間はあるんだし一曲は確認しながら出来る。だからもう一回さっきの曲をやろう。」と、二人に言ったのだが、

「まっまっ、良いじゃん。次のライブまでには何とかなるよ。それに、気楽に行こうよ。ね？」

と、真美はおちゃらけて言い、「ちよつと疲れましたしね。学校のライブですからそこまで神経質になる事も無いですよ！」

増田さんまでも、そのように言った。二人の言葉に私は溜め息を吐き、頭を押さえた。もしかしたら、と思っていた事が的中してしまったのである。

「?どうしたの?」

私のその様子に真美が首をかしげながら言った。

「真美や増田さんは卒業ライブのためにバンドをしているの?それに学校のライブだから神経質になる必要は無いって?驕るのもいい加減にしてよ。君達はそんな気持ちでライブをするの?学校の皆だから手を抜いていいって考えているの?人を選んで演奏するの?そんなバンドがプロで活躍出来る訳、ましてやお金を貰って演奏する立場になろうとしているのならば関わる全ての人に失礼だ。」

私の怒気を含んだ声に二人は驚いていた。

「そんな気持ちでやるんだったら・・・そんな気持ちでプロを目指す気にいるんだったら、僕はこのバンドを・・・」

危うくもう少しで辞めると言う所だった。少し頭に血が上りすぎていたのかも知れない。私は深呼吸をして、

「もう一回考えてみて。僕の言っている意味が解るまで練習は無しだ。別に僕が来ないだけで君たち二人でやる事に僕は文句を言わない。」

私は立ち上がり、スネアとペダルを片付け金物類のネジを緩め終わると、準備室から出て行った。

「師匠、あの時の僕の言葉って間違ってたんでしょうか?」

師匠と会う日では無かったのだが、私は師匠に電話をし、何とか会えないかと頼んだ。師匠は二つ返事で会ってくれと言い、いつも師匠と行っている定食屋で落ち合い、今日の事を相談した。

「プロとして、ならお前の考えが正しいだろ。そんな事は言うまでも無い。客に合わせて手を抜いたり、力を入れるなんて事をしていく奴がいたら、俺も同じ事を言おうと思うぜ。」

私の問いに師匠は真剣に答える。

「まゝでも、真美ちゃんや増田ちゃんはまだまだそこら辺は考えて

いなかったんだろう。普通、そういう気持ちはいろいろ経験して知っていくもんだからな。」

確かにこの考えを言い聞かせるには少し早かったのかもしれない。

まだまだ私達のバンドはアマチュアなのだから。ただ、

「本気でプロになるって決めたのでそれくらいの気持ちを持ってては欲しかったんですよ。」

私の言葉を師匠は黙って聞き、刺身を一枚口に入れ、食べ終えた後、
「確かにそうではあるが、もうちょっと優しく言っても良かったんじゃないか？真美ちゃんも増田ちゃんもそうとうまいったはずだぜ？」

そう言い、再び刺身を口に入れた。

「バンドは何回も衝突して衝突して良くなる。悪くもなる。最悪解散もする。誰かが不満を持ち、それをぶちまけるなんて必ずある。」

その必ずある事がたまたまお前だったってだけだ。取り敢えず二人とは仲良くしろよ。こんな事で解散なんてしたらこっちが困る。ただ、こんな事で解散するのもバンドだがな。」

刺身を全て食べ終え、私たちは店を後にした。

翌日、二人は私に話しかける事も、近寄る事も無かった。私が遠くで見た二人は、いつものような元気は皆無で、見ている者が暗くなってしまうほどに落ち込んでいるように見えた。

中学三年生？ - 1（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました！

だいぶ、楽しい感じから一転して〜という話になってしまいました。バンドをしているところという事ってよくあります。誰か一人でも本気ならば必ず起きるんじゃないでしょうか？皆が本気ならば衝突って免れないと思うんですけど・・・

と言うことで今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

中学三年生？・2（前書き）

第十一話の？です。最近以前ほどにスラスラ書けなくなりました。夏バテなんですかね？皆さんも気をつけて下さい。体力が無いってのは全てにおいて支障をきたします。と言っても場所によっては台風で大変ですからそちらに重点を置いてください。暑いからって素麺ばかり食えると私みたいに素麺アレルギー？になるのでご注意ください。それでは今回も皆さんに読んで頂けたならば幸いです。では宜しくお願いします！

やってしまった。

全ては私の我儘から始まった。

私がつと練習に身を入れていたらあんな結果にならなかったはず。まっちゃんだって私がああ言ったから乗っただけだと思う。全ては私が悪いんだ。

良の言っている事は解る。むしろ解っていないかもしれないはずだ。特に私達の場合は……………

「真美さん、そんなに自分を責めなくても……………私も、むしろ私の方が悪いよ……………だから」

「いや、まっちゃんのせいじゃないよ……………私が……………」

「……………」
そこから先は言葉が出なかった。何を言おうと、結局私が悪いとしか言えない気がしたから。中学生最後のライブで、良い思い出で終

わるはずだったのに…………

家に帰っても沈んだ気分のままだった。良が最後の言葉を言う前に言おうとした事がもしかしたら、口には出さなかったけど、バンドを抜けるって言おうとしたんだ。そんな事を考えると気分が晴れるなんて事出来なかった。そんな事になったら私達は、私はこれからどうしたら良いのか解らない…………

「真美、ご飯だけど…………」

「……………今日はいいや……………」

とても食事が喉を通る気分では無かった。どうしたらいいのか、良に謝らなければいけないんだけど、明日会って謝らなければいけないって解ってるはずなのに、怖い。怖くて仕方が無い。嫌われたと思うと、良の前に立った時に今までのように笑ってくれなかったら私は立ち直れない気がする。そう思うと怖くて仕方がなかった。

翌日、私は良と出来るだけ顔を合わせないようにした。どういう顔をして良いのか解らなかったから。もし、良の私への態度が冷たかったら、言葉が厳しかつたら嫌だったから。バンドを辞めるって思ってたら……………そんな考えが頭を余切り、私は自分の過ちを詫びなければならぬのに良から逃げた。逃げちゃいけないって解っているはずなのに、私は良から逃げた。

「真美さんも、私と同じ気持だったんですね……………」

放課後、誰もいない教室で私とまっちゃんは話し合った。まっちゃんは良の怒りが自分に向けられたことが無かったらしい。元々私と違い、活発な子じゃない。昨日の事が怖かったのだらう。まっちゃん

んも怒られた理由は自分にあるのだから謝らなければいけない、つて気持ちになったのだけれど、私よりも感覚的に怖くて、良と目も合わせられなかったそうだ。

「まだ……怒ってるのかな？怒ってるよね……良と長くいたつもりだけど、全然良の事知らないや。こんな時どうしたらいいのか解らないよ。」

十年以上一緒にいたはずなのに、全然解らない。怖い、人の気持ちが解らない事が凄く怖い。好きな人だから余計に怖い。

「……なんだ、あの野郎はいないのか。」

誰かが教室に入ってきた。振り返ると、佐藤がドアの前にいた。

「珍しいな、放課後は三人でいるのがデフォなのによ。」

教室へ入るなり、佐藤はそう言った。

「ちよつとね……色々あつて……」

「そうか、そりゃ悪かった。」

「ねえ、佐藤君。」

まっちゃんは佐藤の方を向き、

「佐藤君は良くんと仲いいよね？その、良くんと喧嘩したりもしたんだよね？……じゃあ、今の良くんの気持ち、解るよね？」

「あ？」

それから私達は昨日の事を伝えた。佐藤は黙って聞き、私達の話の全て聴き終えると、

「あいつは本気でバンドを辞めたいから言っただんじゃねえよ。続けたいから言っただよ。」

と、言った。そしてそのまま言葉を続けた。

「確かに怖えかも知れない。あいつがお前らの事を嫌いになったかもっってお前らが思う気持ちも解らなくもない。でもその怖さを乗り

越えて行かないと本当にあいつはお前らの事を嫌いになるかもな。
・まあ、あいつはなんだかんだで優しいからお前らがずっとそうしてたら歩み寄るかも知れない。でもよ、それでお前ら良いのか？
わざわざ自分らの駄目な所を教えてくれた奴に対して、何も言わないで受け身になって・・・・お前らあいつに甘え過ぎなんだよ。女だから仕方ないとか思ってたんだよ。お前らが、そんな都合の良い時ばかり女だ、男だ、って言う奴らだったら今すぐあいつと縁を切れ。そんな奴はあいつという資格なんて無い。」

私達は佐藤の言葉に黙って耳を傾けていた。そして、何も言い返せなかった。

「取り敢えず、明日にでもあいつに会ってちゃんと面と向かって話をしろ。まずはそれからだ。そしたら、少しは互いのことを今以上に理解できるかもな。」

佐藤は言い終えると、黙って教室を出ようとした。私は佐藤に、

「ありがとう。」

と言うと、佐藤はこちらを向き、

「どういたしまして。」

とぶっきらぼうに言い、出て行った。

翌日、私とまっちゃんはいつもより早く学校に来た。そして、良に準備室で待っているってメールを送った。私達の気持ちを伝えるために。

「来てくれるよね？」

まっちゃんが不安になりながら私に聞いた。

「絶対来るよ。」

私はまっちゃんにそう言ったが、私も不安な気持ちでいっぱいだった。もし、昨日の事で私達を見限ったならば、そう思うと怖くて仕方が無かった。

五分後、準備室のドアが開き、良が入ってきた。顔に険しさは無い、いつもの良だ。

「どうしたの？こんな朝早くに二人とも。」

声色もいつもの良だ。なのに、何でこんなに緊張するんだろう。まっちゃんを見ると私と同じように顔が緊張している。良も、私達が何も言わない事に首を傾げている。まっちゃんと顔を見合わせて、

「「ごめんなさい！！」」

私達是一緒に息を合わせて謝り、頭を下げた。

「だから、バンド辞めないで……お願いだから！」

頭を下げながら私は言った。隣でまっちゃんも同じ事を言っている。「顔を上げて。」

良の言葉に私は顔を上げた。良の顔を見ると、さっきよりも険しい顔になっていた。

「二人は僕の言った言葉の意味が解ったの？」

その言葉はあの時の言葉をきちんと理解したのか？という事と同じだった。解る、きちんと解っている。言われてから解っても遅いのだけれど、

「きちんと解ってるよ。むしろ言われる前に解らなきゃいけなかった。良の言う通り、プロとして演奏するのを目標にするんだったらそうしなきゃいけないんだよね。それに私達の目標は高い所にある。なら一生懸命、切磋琢磨しなきゃいけないよね。気を抜くんだったらライブ前じゃなくても、毎日練習している訳じゃないんだからいつでも出来るよね……気を抜く時は抜いて、きちんとする時はきちんとしないと……」

気を抜くときは抜く、きちんとやる時はやる。こういうのをしっかりとっていていかなければいけないんだ。常に気を張っていられる訳じゃない、人間の集中する時間というのはどんなに頑張っても長く続かない。だから練習の時は必ず休憩時間があるんだ。私がそう答え、良の方を見ると……少し驚いた顔をしていた。

「あ……うん、そうだね。気を抜くときは……ぬ、

抜かないとね！そうだね！」

少し慌てて良は言った。こういう時はだいたい、予想外の事が起きたときだ。私は良の言葉を思い出してみる。確か良はライブの事と、気の持ちようを喋ってた。私はさっきその事と、気の抜き所を答えた。それは私があの時、練習時間中気を抜いてしまったからそうだと思ったんだけれどもしかして、

「良、気を抜く事についてはむしろ何にも考えてなかった？」

私の問いに良はビクッと肩を上げて、その後、

「……………うん。むしろ気付かされたと言っべきなのかな。最近気を張り詰めていなくちゃいけない場面が多かったから……………だからあの時君ら二人にきつく言っちゃったのは僕が気を張り詰めすぎていて、上手く切り替えが出来ていなかったせいなのかなって……………」

良は頭を掻きながら言った。つまり私達はお互いにお互いの言葉で気づかなきゃいけない事に気づいたと言う事？

「だから真美、ありがとう。僕も気付かされたよ。そして二人ともごめん、あんなに怒って君たちを追い詰めるような言い方して。安心して、僕はバンドを辞めようなんて考えてすらないよ。むしろ続けたいから言っただ。」

……………なんだ、良はバンドを辞めようなんて考えてなくて、続けたいから言っただ。私達の目標が趣味で終わらせる事じゃないからああ言っただ。

「これでおあいこだね。僕も君たちに言われて気が付いた、君たちも僕に言われて気が付いた。だから、頑張っで行こう！」

「そうだね……………うん、そ……………」

まっちゃんが泣いていた。嬉しくて。これからもバンドが出来る事が、良に嫌われていなくて嬉しくて泣いていた。私も気が付いたら涙が出ていた。嬉しくて、嬉しくて。私達が泣いているのを見て良が慌てている。大丈夫、私達は悲しくて泣いてるんじゃない。嬉しくて泣いてるんだから。嬉しくて嬉しくて、嬉しすぎて涙が止まら

ないんだから。

あれから私達は思う存分泣いた。泣きすぎて目が腫れたから午前中は授業に出ないで部室にいた。良も一緒にいてくれて、三人で色々な話をした。良の考えはインディーズでCDを出すのも良いけどお金がかかる、だからメジャーデビューを狙おうと。良の話では五月にバンドコンテストがあり、レベルの目に付いたならばメジャーデビューをする事が出来るみたい。ただそのためには地区予選を勝ち抜いて全国大会に行く事が最低条件みたい。取り敢えずの目標は私それに出て全国大会に行くこと、そして出来る事ならば優勝する事、そう決めた。

昼休みになり、私とまっちゃんは佐藤がいるであろう場所に行った。屋上のあの場所に。

「さーーーーーーーーー!!」

やっぱりここにいた。亜里沙さんが卒業するまで佐藤はここに二人でいつもいた。卒業してからも、一人でここにいるのを良から聞いていた。

「なんだ、お前らか。」

佐藤は私達を見るとそんな事を言った。まるで私達がいるのが嫌かのように。でも佐藤はツンデレだから、亜里沙さんと一緒でも二人つきりじゃないと仏頂面らしい。

「本当にありがとう!!」

「ありがとうございました!」

「あゝ……その様子じゃ上手くいったみたいだな。」

佐藤は相変わらず仏頂面のまま答えた。でも不機嫌じゃないんだろう。良なら解るかもしれないけど、私にはそこまで解らない。

「うん。お礼が言いたかったから。」

今回、私達があんなに早く、上手く行ったのは佐藤のおかげだ。

「いって、気にするな。お前らが落ち込んでるのは亜里沙も嫌だろっからよ。」

「へー、本当にお熱い事で。」

佐藤が亜里沙さんのため、って言ったから少し茶化したら、

「ば、馬鹿。いいからお前らのどっちかも早くあいつとくっつけよ。」

佐藤が慌てながら答えた。本当にこいつは亜里沙さんの事となると面白い。でも、一生懸命、亜里沙さんの事を考えて、愛していて、亜里沙さんも佐藤と同じことを思っていて。そんな二人はどんな力ップルよりも輝いて見えた。だからそんな佐藤に、

「うん、亜里沙さんと幸せにね！」

「佐藤君、亜里沙さんと頑張ってください！」

私達は心から今後もずっと二人の幸せな日々が続いていく事を願った。

<Side Another>

卒業式も無事に終わり、一週間後に卒業ライブを行えば中学校の行事は全て終わりだ。結局、私の友達は全て上の高校に上がるだけだから涙を流す事は無いだろう、と考えていたのだが中学生生活の事を思い出したら自然と涙が出た。小学校の頃より思い出深く色々な事があつた。喜怒哀楽を共にした友人達がいたからこそ、私は成長する事が出来た。四月から高校の方の校舎で学ぶ事になるのだからこの校舎とはお別れだ。

「はい、と言う事で皆卒業おめでとー！ー！！！！！！かんぱしー！！！！！！」

「かんぱ〜い！！！！！！！！」

卒業式の後、クラス毎に打ち上げが開かれる。私達のクラスは近くの焼肉屋で人数分入る部屋を貸切り打ち上げを行った。グラスにはジュースか烏龍茶を入れ、私達は乾杯を行った。

「佐藤もちやんと来たんだね。」

「お前が無理やり連れてきたんだろ。」

佐藤はこういうクラスの打ち上げに参加した事のないので、私が無

理やり連れてきた。

「また同じクラスになればいいね。」

「そりゃ遠慮したいね。」

佐藤はそう言うと言っていたグラスに口をつけて、中に入っていた飲み物を飲んだ。私も烏龍茶を口にした。

「それにしてもよ」

佐藤はグラスをテーブルに置き、

「いろいろあったな。特にお前とは。」

と、言った。

「そうだね、いろいろあったな……」

私は佐藤との事を思い出した。最初の印象は決して良いものじゃなかった。でも、佐藤が決して悪い奴じゃないって事は知っていた。よく屋上で亜里沙さんと二人でいたのを見ていたから。それから色々な事があって、なかなか佐藤といえるのは楽しかった。

「ま、高校の方でも何かあったら頼むわ。」

「あ、デレた。」

「デレてねえよ。」

私が笑うと、佐藤は不機嫌そうにこちらを見た。

二次会はカラオケだったので、私は二次会に出席しないで帰った。

そして、卒業ライブ当日を迎えた。

私達のバンドの出番は最後だ。それまで私は他のバンドの演奏を楽しんだ。色んなジャンル、色んなバンドを楽しみすぎたために、少し疲れてしまった。ただ一つだけ残念だったのは、メタルバンドがいなかった事だ……

少し外の風に当たるため、私は屋上へ向かった。

「この眺めもこれで最後なのかな？」

屋上からの景色を見て、私はそう呟いた。屋上から見るグラウンド、空、全てがこの三年間で見てきた景色だった。ベンチに座り友人と喋った事も、一人で屋上で悩んだ事も全て現実だ。様々な思い出がこの屋上にあった。

それから暫く眺めたあと、私は携帯電話で時間を確認し、少し早
いが準備室へ向かった。

準備室に入ると、私達の前のバンドが準備していた。

「良さん、お疲れです。」

「頑張つてね。」

軽く会話をし、私は体のストレッチを開始した。いつもより少し時間をかけ、入念に行った。そして、床に座り軽く目をつむりライブを待った。

「起きろ――！！！！！！！！」

「うわっ!!!」

耳から大きな声が聞こえたので、私は目を急いで開けた。

「ほら、準備しないと。この曲終わったら私達の番だよ。」

真美が私に言う。どうやら私は寝てしまっていたらしい。これではせっかく温めた体もまた冷えてしまった。私は再びストレッチを行った。

「こんなうるさいのに寝れるなんてどんな神経してるのよ……」

私が寝ていたことに呆れながら真美は言った。すると増田さんが、
「でも真美さん、良くんが寝ている姿をずっと見てたじゃないで
すか。ニコニコしながら。」

「ちよ、ちよっと！それ良に言わないって言ったじゃない！」

真美を笑いながら茶化し、真美が狼狽した。いつも見慣れた光景だ。増田さんが真美で遊ぶ、もしくは増田さんと加奈で真美をイジる。そんな光景を眺めていたら、前のバンドの演奏が終わった。

バンドがはけるのを確認すると、私達は準備のために音楽室のステージへ向かい、それぞれの楽器の準備をした。楽器のセッティングが終わり、音を確認するために皆が音を出す。音楽室の中にはまだ準備の段階なのに観客が大勢いた。皆、今か今かと待ち遠しくしているように見える。それを見た私は真美と増田さんに目で客を見ろ、と合図をした。二人は前を向き、私の意図している事に気づくと、私の方を向いて頷き、PAの方に手で合図をした。幸いにも全ての観客が私達の方を見ている訳じゃなかったので、“それ”はしやすかった。その間も、私はドラムをたたき続けていた。PA側も意図している事に気づいたのか、遠くから私達の方へ向けて大きくOKサインを出した。

これで準備が整った。私は簡単なドラムソロを行った。その音に気付いたのか、観客はこちらを向いた。まだ外にいた人も後ろのドアから入ってくるのが見えた。外の人が皆入ったのを確認し、真美がドラムに合わせてベースを弾く。私は、真美を目立たせるために後ノリ気味のツービートに変更し、真美はそれに合わせスラップを開始する。暫くして、私達のグループにノせて増田さんがキーボードを弾く。

そう、私達はセッションからライブを行う事に決めたのだ。それぞれのソロコーナーの度に観客は声援を贈る。真美と増田さんのソロが終わり、一旦タメを作ってからハイハットでカウントをし曲を始めた。

「それじゃあ~~~~最後の曲です！聞いてください……..
バイバイ！」

最後の曲を終え、私達は準備室へと向かった。予定調和ではあるが、トリはアンコールを認められている。一応そのために楽器類は置いてきたのだが、

「これでアンコールが無かったら……..っですごー！」
真美がもし無かったらと言いつ終える前に、私達の所まで、アンコールを求める声が聞こえてきた。

「よし、予定調和ではあるが期待に答えますか！」

「そうだね、最後の曲行きますか？」

「ですね、頑張りましょう！」

「じゃ、行きますか。」

「あ、アンコールありがとうございます。最後にもう一回やれるなんて嬉しいです。私達は卒業しますが、高校に行ってもこのバンドは続きますのでよろしくお願いします！真美さんの女の子ファンの方々、だから大丈夫ですよ！高校になったら過激な格好になりますから。常に水着です！（笑）アハハ、睨まないで真美さん。それで、中学生の最後の曲って何やればいいのかな、って皆で考えたら一つ良いの見つかったんです。でもその曲ギター必要だったんでアレンジしちゃいました！だから今回はキーボードが二つあるんですよ。それじゃあ、皆で聴いてください。知っている人は歌ってくださいね！B・Zのグローリーデイズ！！！！！！」

中学三年生？ - 2（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました！

取り敢えずこれで中学校編は終了です！次からは高校編に行くか大学編に行くかどうかでしょうか？まゝ、どうしますかね・・・

卒業式って、本当にどう過ごしたかで変わりますよね。私は中学校の時間が一番色々あったので泣いてしまいました。その反面、高校ではなんとも泣けない卒業式でした。高校も楽しいこととかいっぱいあったんですけれど中学の方が思い出深かったんですね。

それと、B・Zのグローリーデイズは卒業ソングとしてはもってこいだと思いますよ。是非共聴いてみてください。

では今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

短編 ある日の良達（前書き）

今回は短編です。甲子園を見てて思いついたので書いてみました。ビールを片手に甲子園を観たいのですが、そういう訳にもいかないですね。残念です。

では、今回も皆さんが楽しく読んで頂けるのならば幸いです。どうぞ宜しくお願いします！

短編 ある日の良達

1、甲子園

夏は何と行っても甲子園である。球児達の今までの努力を出すために、その地域の他の球児達の思いを胸に甲子園で戦う。その姿を私は涙無しでは見られないのだ。

「頑張った……よく頑張った！」

試合終了のサイレンが響き、敗れた者はその場に崩れる者、人目をはばからずに号泣する者、全力を出し切ったと笑顔でいる者、様々な人達がいる。勝負には必ず勝者と敗者が出る。皆頑張りましたでは終わらないのだ。だからこそ観るものを感動させ、心に響くのだろう。

「頑張った……」

テレビ中継を見ながら拍手を行う。目には涙を浮かべ、私は両チームに惜しみのない拍手を続ける。君たちがこれまで頑張った事は決して無駄ではない、必ずその思い出が今後の人生に活きるのだ、だから負けた方も下ばかり向いてないで前を向いて胸を張って欲しい。「お兄ちゃん、毎年甲子園見ては泣いているよね。」

後ろから加奈の声が聞こえるが関係無い。私は闘い抜いた選手達にもっと拍手を送らなければならないのだから。

「良くんがここまで泣いてる姿初めて見ました。」

「あ、まっちゃんは甲子園シーズンの良見た事無いんだっけ？良はね、試合を観る度に泣くんだよ。そして試合が終るところなるんだよ。まっ私にはよく解らないけどね。」

何故、家に真美と増田さんがいるのか解らないが関係無い。勝利高

の校歌を聴いて……君達は負けた人達の気持ちを受け継ぐんだ。次も頑張ってくれ！そう思わずにはいらなかった。

「ねえ、気持ちは解るけどさ。なんであんなに号泣するの？さすがに不思議に思うよ。」

「そ……そうですよ良くん。教えてください。」

次の試合が始まる前に真美と増田さんが私に問うてきた。加奈には一度説明したのだが、二人には説明していなかったか。

「二人とも長くなるから辞めといったら？」

加奈は洗濯物をたたみながらそう言った。

「加奈！お前は……彼らを見て何も思わないのか！？彼らのそれまでの頑張り、そして涙を見て何も思わないのか！！！」

「思うところはあるけどお兄ちゃんほど肩入れは出来ないよ。」

加奈は私の熱弁を洗濯物をたたみながら聞くという冷めた事をしてる。お兄ちゃんは加奈をそんな子に育てた覚えは無い！私は二人を見て、拳を握り、

「いいかい二人とも。彼らはね、この日のために小さい頃から切磋琢磨してきたんだ。小さい頃から甲子園を夢見て、いつか甲子園の舞台で野球をして、優勝するために！そんな事を思いながら日々を練習につき込むんだ！朝早くから夜遅くまで白球を追いつけ、砂にまみれ、暑い日も、雨の日も練習をするんだ！そんな人達でも一握りしか甲子園の舞台に立てない、選ばれた人達しか立てないんだ！そんな夢半ばで倒れた人達の思いを背負って彼らは甲子園に立つんだ！解る？この場にいるって事はそれだけの思いを持って立ってるんだよ！？」

思わず手に力を入れ、声も熱を帯びていく。

「そんな代表校達がわずか一高しか持つことを許されない優勝旗を目指して頑張るんだ。そのために流した汗を、日々を思うだけで胸が熱くなるじゃないか！？そんな彼らが戦う。でも勝者がいるって

事は必ず敗者が出るんだ、そこに必ずドラマは生まれる。事實は小説より奇なりって事を僕は毎年テレビで観る事が出来るんだ。そんな彼らの悔し涙、嬉し涙を見ると、その日々の思いが伝わってくるじゃないか！これを涙無しでは観ることなんて僕には出来ない！そうだろ！？」

この思いを皆に届けたい！そう思うと、熱弁せずにはいらなかった。この思いは二人にも届いているはずだ、そう思い二人を見るのだが、

「あ、うん………そ、そうだね………」

「そ、そうですね………」

二人は私に同意するのだが、笑顔が引き攣っている。

「だから言っただけじゃないですか………」

加奈がそう呟く。二人には私の思いが伝わっていなかったのか。こんな素敵で純粋な気持ちはまだ感じ取れないのは何故だろうか………私が深く模索した先にたどり着いた答えは、

「そうか！三人ともちゃんと試合を観ていないからなんだね！それなら解らないよね。じゃあ今から第三試合が始まるから皆で観よう！今日は第四試合まであるからあと二試合も見れるね！」

「え………あ、ちよつと用事を思い出したかも。ね、まっちゃん？」

「そ、そうですね！真美さん！」

二人はその場限りの嘘で何とか逃げようとしているが、そんな事はさせない。今はそんな気持ちでも試合後には泣き崩れて僕に試合を観る機会を与えてもらった事を感謝するのだから。

「そんな嘘つかなくていいから！よしそれじゃあ観よう！さあさあ、こっちに来て！」

私は二人を強引にテレビの前に座らせた。さあ、もうすぐ試合が始まる！

加奈が洗濯物をたたみ終え、この場を去ろうとしていたので、
「加奈、どこに行くんだい？もう試合が始まるよ？」

「え？私は関係ないんじゃない？……」

と、試合を観ない気でいたので、

「僕は三人って言ったよね？加奈も一緒に観るんだよ。」

と私は加奈に手招きをした。

「私は関係無いじゃん！」

加奈がそう言った時に、真美と増田さんは立ち上がり加奈の両腕にそれぞれつかまり、

「加奈ちゃん。一緒に観ようよ。」

「そうですよ。せっかく良くんが積極的に私達に言ってくれたんですよ？」

と言い、二人は加奈をテレビの前まで連れてきて、強引に座らせた。二人にも私の気持ちが伝わったのかも知れない。

その後、私は涙無しでは二試合を観ることが出来なかった。やはり、夏は甲子園を観るのが一番である。

「一人だけ逃げようとした罰だからね。」

「……………」

「加奈ちゃんだけ逃げようという事はさせません！」

2、メタル

「な〜良、メタルって難しいのか？」

昼休み、準備室でお弁当を食べていると小倉が聞いてきた。小倉はパンク好きだったはずなのだが、

「難しいって、ギターの事？」

「そりゃそうだろ。俺はギターしか弾けないんだし。」

私は食べようと持ち上げていたからあげを弁当箱に戻し、少し考えてから、

「曲によるけど・・・難しいのは多いよね。」

と、答えた。一般的にメタルは凄く難しいというイメージがある。否定はしないが、メタルの曲ばかり練習するのはあまり上達しない気がする。恐らく、メタルの曲、と言う事で練習を開始すると速弾

きばかり練習する人が現れるだろう。だが、曲の中で速弾き等は数秒しか披露する機会が無い。むしろその他のリズムバッキングの占める割合が多い。だからこそ、リズム面を強化するためのバッキング練習は欠かせない。

「そうか……何か初心者にお勧めのバンドあるか？コピーする上で。」

これまた難しい質問だ。基本的に自分が好きなバンドの曲をコピーするのが一番良いのだが、私がお勧めするのは……

「メタルじゃないけど、ディープ・パープルとかいいよ。」

「ディープ・パープルね……どんな曲があるん？」

「有名所だと、ブラックナイトとか、バーンとか、ハイウェイスターとかかな」。僕はチャイルドインタイムが好きだけど。」

私も初めてギターを触ったときに練習したのはディープ・パープルだった。有名なスモークオンザウォーターを弾いたものだった。ソロは決して初心者用では無いのだが、リフを弾くだけで満足した。

「へへ、どんな曲？」

私が口で説明しても伝わる訳が無く、弁当を食べ終えた後、準備室に置いてあるギターで、私は小倉にバーンを聴かせた。

「案外簡単そうだな。」

「きちんとリズムを取ってやんなきゃ駄目だよ。でもだいたいリッツの曲はソロが、」

ソロに入るとそれまで余裕そうに見ていた小倉の顔が真剣になった。私の弾くパッセージを見て、先程までの簡単だ、という考えが消え去ったのだろう。ソロを弾き終わると、

「これって難しいほうか？」

と小倉が聞いてきた。

「ディープ・パープルの中では難しい方だろうね。でも、速弾きって観点から言えばもっと速くて複雑なのはいっぱいあるよ。例えばこれとかね。」

私はイングヴェイのライジングフォースのソロを弾いた。その速さ

にただ小倉は驚いていたようだった。

「ま、これは難しい方だと思うよ。でも練習をしていたら弾けるようにはなるよ。必ずね。」

私の言葉に小倉が頷いた。昨今では速弾きは弾いても目立たず、ただ速く弾いてるだけと言われるが、私の中で未だに速弾きギタリストは好きな部類である。メタルを弾く上での楽しさはリフもあるのだが、速弾きも無くてはならないと私は思う。私はギターを置き、「まあ、リフを弾くのも凄く楽しいよ。それでも練習をしなければいけないのは言うまでもない事だけだね。」

「そうだな。取り敢えず、これらを完璧に弾きこなすわ。」

小倉はそう意気込んだ。こうしてメタルを弾く楽しさを感じてくれたならば嬉しいのだが。

「取り敢えず、好きな曲を見つけてそれを練習するのが一番だと思うよ。準備室に何枚かCD置いてあるから聴いてみるのもいいよ。」

「解った。聴いてみる。」

小倉が準備室のCDをあさりだしたが、もうそろそろ午後の授業が始まるので私は小倉に一声かけてから準備室を後にして、教室へ向かった。

それから一週間が立ったある日、

「なあ良！お前のおかげで俺気づいたよ！」

と、小倉が朝から元気よく私の所へ来た。

「やつぱあれだな。邦楽なんて糞だな。俺聴いてて解ったよ！洋楽のほうがめっちゃくちゃ上手いし、良い曲ばかりだもん。いままで邦楽を聴いていたなんて俺、恥ずかしいよ。」

活き活きと邦楽を貶し、洋楽を絶賛する小倉を見て、私はやってしまった感が大きかった。

「日本のギタリストなんて糞だ糞。皆下手くそだ！俺取り敢えずヤングギター読んでもっと海外の事勉強するわ！それじゃあな！」
走り去る小倉を見てどうしようと思つた。

「あちゃー、典型的なパターンに小倉なっちゃったんだ。」
小倉が言っていたのを聞いたのか真美が私に言つた。

「ま、面白そうだからこのまま見届けようよ。」

真美は笑いながらそう言つと、自分の席へと向かつた。私は小倉がこつなつた原因の元が私にあると思うと頭が痛くなつた。

短編 ある日の良達（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

まゝ、中学生の時ってこういう考えになっちゃう人って大勢いますよね。私の時は私も含め、周りが皆そうになりました。私はバンド系だったのですが、R & a m p・BやHIPHOPが流行っていたので皆ソツチ系に。B系が多かったな。今でもたまに会うとそういう格好の人とかいます。私がライブハウスに行くように、彼らはクラブに行くみたいです。クラブとか怖くて行けないです！

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

高校一年生？（前書き）

ついに高校生にまでなっていました。速いですね。それは
そうと、台風凄かったですね。あ、感想頂きました。ありがとうございます
ございます！丁寧な隅から隅まで見て頂き、それに基づいて評価をし
て頂きとても嬉しかったです。今後も、お目にかかるようなものを
書いていくように心がけます！

それでは、今回も皆さんに楽しんで読んで頂けたのなら幸いです。
では宜しく願いします。

高校一年生？

高校生になって変わった事、と挙げていったらキリがないだろう。例えば、服装が厳しく無くなった、授業に出なくてもそこまで怒られない、アルバイトが出来るようになった、とか。私も、以前は朝の新聞配達までしか出来なかったがガソリンスタンドでバイトをするようになった。これも懐かしい思い出である。校則が厳しかった田舎の中学ではカラオケ入店禁止、等も緩和されてある程度 of 自由が許されるようになる。だがそれは義務教育という立場が無くなつたからというのが大きい。法律上の関係も言うまでもないのだが、それをきちんと把握している人なんてあまりいないだろう。どちらかと言うと高校になったことで羽目は外す人が増える。いわゆる高校デビューだ。男子は髪型を気にしたり・・・と、今では小学、中学からでも珍しくは無いのだが、心機一転、新しい生活のために！と意気込む人は今なお少なく無い。女子なんかはそれが多いに見受けられ、パツとしなかった子が別人のようになっていゝ、なんて話はザラだ。化粧というのは本当に素晴らしい力である。

そんな高校生活を始めるに当たって、私達は中学の頃と同じように軽音楽部に入部した。主にスタジオ代の節約のためというのが多いのだが、卒業した先輩達から誘われたのも大きな理由かも知れない。もうそろそろ始まるバンドコンテストのために練習もしておきたかったので、入学当初から部室を使えるのは凄く美味しい話だ。

中学とは違い、高校の軽音楽部は部室棟に部室を一つ構えているので前ほど苦情が来る事も無い……。と思っていたのだが、他の部からうるさい、という苦情は中学以上に多いらしい。

それでも、部の設備は充実しているし、大きさもそれなりにあるため、私達は重宝している。個人の所有物があちらこちらに見受けられ、ギターアンプは部のマーシャル、ジャズコの他に個人のアンプ数台、それもメサブギーやレイニー、ケトナー等、とても高校生では買えない代物が目白押しだ。さすが親がお金持ちなだけある。ベースアンプは相変わらずアンプゲのSVTなのだが、ごく稀にラックを持つてくる人がいるらしい。皆、機材にお金をかけすぎなのでは無いだろうかと心配してしまう。初心者の中に良い機材を使いきると音作りをきちんと出来なくなってしまう可能性があるからだ。

「じゃあ、事故紹介と担当楽器、もしくはやりたい楽器、それと好きなバンドをそれぞれ言って頂戴。」

毎年行われる新生歓迎ライブの最中の入部予定の新生の事故紹介が始まった。一年生全員がステージに上がり、マイクを通して挨拶を行う。ステージの上にいる人達を見ると、中学の頃からの顔も見受けられるが、半数は見たことのない人達だ。上級生を見ても同じであり、部としての規模、人数は高校の方が比べ物にならないくらい大きい。私としては、中学校の時くらいの規模が好きだったのだったのだが、仕方が無い。

「良、良の番だよ。」

マイクを私に渡し、真美が喋る。どうやらもう私の出番らしい。

「新堂良です。パートはドラムをやってますが、今組んでるバンド以外では叩くつもりはありません。ギターもやっているのでそちらの方でお願いします。好きなバンドは……色々あります。では宜しくお願いします。」

私は言い終えた後に一礼をした。少々生意気だったが、これが私の本心なので変えるつもりは微塵もない。先輩達も中学での私の事を知っているのだろう、納得している顔をしているが、一部、険しい顔をしている人がいる。おそらく外部から入ってきた人達なのだろう。

新入生全ての挨拶が終わり、私達がステージから降りた時に、

「おいお前、何生意気ぶってるんだよ？」

と、先程の挨拶を気に食わなかった人が絡んできた。

「おい、良いんだって。良のドラムは俺らじゃ釣り合わないし良も良で忙しいんだよ。お前は高校からだから解らないかも知れないけどさ。」

私の事を知っている先輩が言ったのだが、

「そんなの関係無いだろ。俺はこいつより上級生だ。調子こいてる下級生は上級生がきちんとしてあげないとな！」

そう言くと、私は腹を殴られた。急に殴られたので、腹に力を入れる事が出来なく私はその痛みにその場にしゃがみ込んだ。その様子を観ていた周りが騒然となる。そして、

「おいヤメろ！俺らの部はそんな上下関係を厳しくしていないだろ！」

「だからと言って後輩が先輩を舐めていいなんて事決まってる！」

それを区切りに、先輩が言い争いを始めた。真美と増田さんが心配そうに私の元に駆け寄るが、私は大丈夫と一声かけ立ち上がった。

「ようやく立ったか。これに懲りたらてめーは偉そうな事を抜かすんじゃないよ。」

私が立ったのが見えたのか、完全に舐め切った口調で私に言い放つ

た。その口調に真美や増田さんだけでなく、小倉さえも顔が険しくなった。その言葉と舐め切った口調、表情に私は、

「……………全く、いつの時代も口だけは威勢のいいやつがいて困る。」

「あ？」

私の買い言葉に頭に血が昇ったのだろう、私は胸ぐらを掴まれた。だが、私は言葉を止めなかった。

「だいたい下のやつに威張る奴はな、実力的には下っ端なんだよ。まあ軽音楽部だから技術なんて関係無いけどよ。少しはそのちっぽけな自尊心捨てたらどうだ？たかが数年早く生まれたからって意気がる事じゃねえだろ！自分の実力で示せよ！」

「てめ！」

その瞬間、掴んでる手とは別の手で私を殴りつけようと拳を後ろに大きく振りかざした。だが、その手は後ろからの誰かの手に掴まれていた。

「おい、やめておけ。これ以上騒ぎを起こすならこっちも考えなくちゃならない。」

その一言で、先輩は私の掴んでいた胸ぐらから手を離しどこかへ行った。

「大丈夫？あの人達あまりこないくせに威張るのだけは得意なんだよね。」

「助かりましたよ前田さん。」

私を助けてくれたのは前田さんだった。おそらく学年的にはあの先輩の方が上なのだろうが、何かあり前田さんの言葉を逆らえないらしい。元々私が売り言葉を買ってしまったのだから悪いのだが……
……私達の印象が決して良いとは言えない新人生歓迎ライブは波乱を巻き込む結果となってしまった。

「にしてもよ、あの先輩マジでうざかったな。」

「まあ、僕が悪いんだけどね。」

あの一件があり、私達の学年の入部者はあの先輩の事を気に入らなくなってしまった。特に小倉は目の敵にしている。あの時が初対面であつたにも関わらずにだ。私の言葉で他の人にまで影響が出てしまった事に、少なからず反省はしていた。

「良も大丈夫？お腹殴られたでしょ？」

「平気だよ。伊達に鍛えてないよ。体力がモノを言うからね。」

真美が私のことを気にかけてくれたが、不意打ちで無かつたのなら何とも無かつた。プロとして関わる以前からきちんと体は鍛えておいていたし、今も変わらない。格闘技経験者や常に体を鍛えている人に殴られない限りそこまで体に痛みは残らない。

「でも良くん……印象悪くなつたんじゃ……そこが心配です……」

皆口々に心配をしてくれる事に私は素直に嬉しかった。

あの最悪な形での事故紹介もあり、先輩から何故私がドラムを叩くのは今のバンドだけなのかと聞かれる事が多々あつたが、私がドラムを叩いてお金を貰っている事、それに伴いあまり他の曲のための練習時間をさきたくない事、真美と増田さんとのバンドに集中したいからと答えた。ギターはやっている人、今から行なう人が多いためにわざわざ私を誘ってまでバンドを組もうと思う人はいないだろうと思ひ言つたまでだつた。まあ、一つくらいならギターでバンドをやってみたいという気持ちも頭の片隅にあつたのだから口に出たのだろうけど。

再来週にはバンドコンテスト、その翌週には顔見せライブ、と中々忙しい時期だつた。私個人としても、音響監督に呼ばれる機会が

増えたため、学生とプロとの二足の草鞋を履いている状況が多くなつた。その度に、自身の力が付いた実感が湧いてくるのでとても充実している。学力の方も心配は無い。長年の蓄積と、これまでの日々の積み重ねからセンターレベルなら間違いが起きなければ確実に九割は取れる。このまま行けば校内推薦を取らなくても、一般入試で入ることが出来るだろう。今からでも必死に勉強をしたのなら国内最難関を誇る二大大学にも現役で合格出来るかもしれない。だが、私にそのような考えは今のところ無い。今無いのだから今後生まれた所でどうする事も出来ないのだろうが。

「さて、いよいよ本番だね。楽しみだね！どんな感じなのかな？」
「至って普通のライブみたいだよ。ただ会場が今までよりも大きいくらいかな……中学の文化祭の開催式程ではないみたいだけどね。」

バンドコンテストの会場を見渡して、私は言った。これほどの広さでライブをするの皆慣れている。増田さんは、個人でもっと広くて緊張する舞台での経験は多いし、真美もホールクラスを初めて行った時は緊張する所か今まで以上の力を出した。私も場慣れをしてきたので問題無いだろう。むしろ、初めて会う音響監督に叩いている所をジーツと見られる方が胃に悪い。

「楽しみですね！ここにいるの皆二十歳以下の人達なんですよね！どんな曲を聴かせてくれるんでしょうか？」

増田さんも大勢の人を見てはしゃいでいた。ほとんどの人が同世代だろうが、中には、見て解るくらいに私達より若い子もいる。私達があればいい時は……それなりに出来たかもしれない。非凡な二人はさすがと言えないが、私の場合は特別才能があった訳では無い。全てずると言っても過言ではない。その事に他の人

に申し訳なく思う。

一つのバンドの持ち時間は、十五分与えられておりその時間内に準備と曲を演奏しなければならぬ。私達の出番は中盤の最後と、何とも言えない所だが、何とかなるだろう。早速、一番最初のバンドの演奏が開始された。ガチガチにメンバー全員が緊張して演奏している所を見ると、学校でバンドを組み、文化祭等しか出た事が無いのだろう。私も最初の頃はこんな感じで緊張ばかりしていた事を思い出した。曲もいささか背伸びした感があり、難易度の高い曲を演奏していた。

「もつと、自分達に合ったレベルの曲を演奏したらいいのに」。あれじゃあ曲を演奏するのに必死で全然楽しんでないよ。」

真美が的確な評価を下していた。必死にミスしないように、と下を向いてばかり演奏している。観ていて大変なんだろうな、としか伝わってこない。これではせっかくの自分達の持ち味を出しきれない。

次のバンドも、その次のバンドも似たような感じであった。順番が最初という事もあるのだろう、いささか可哀想だった。そういう点で言えば、私達の順番は良い位置なのかもしれない。

「お、ちびっ子がいる。可愛いな。」

「ですね！私も小学校の頃を思い出します！頑張れ！」

上手のギタリストが他のバンドとは違った。それは、そのギタリストが小学生であろう事だ。真美と増田さんはその子に声援を送っていた。こんなに若い子がどんな曲を弾くのだろう、と私も興味を抱いた。そして、そのバンドの演奏が始まった。演奏しだした曲の、イントロを聴いた瞬間私は、

「嘘………エクストリーム？………」

と、思わず呟いてしまった。この曲を知っている者たちがざわめいたのを私は感じた。そのバンドが演奏しだしたのはエクストリーム

[illegible]

次の曲もGet The Funk Outと大いに盛り上がった

ストリームのファンクメタルなるノリは聴いていて楽しい。

「あのちびっ子凄かったね。昔の良思い出したよ。」

「私も思いました！」

「あの子の方が凄いいし、才能もあるよ。」

のか、バンド、ソロでデビューするかで大部変わってくるのだが。

って行かれた気がしてならなかった。技術的には小学生に負けない

！と意気込むギタリストが多かったのだが、音の粒、正確性からあの子ほど上手なギタリストはいなかった。個性的で面白いギタリストは何人かいて面白かったのだが。

バンドとしてまとまっているのもあまり無かった。皆、どれかが抜きん出ていると言う事が多く、それを補う、バンド全体としてでは無く個ばかりに重点を置いていたためであろう。ただ、何組かのオリジナルバンドのうち一つは未熟ながらも素晴らしいセンスを魅せつけてくれた。こういうのがあるから面白い。

そろそろ私達の出番になるので、楽屋の方へ向かうために一度外に出たのだが、

「・・・・・・ここにいるの未成年だよ？まっちゃん。」

「煙草を吸うなんて不良です！」

若い子達に多い、煙草の喫煙。それを見た二人が露骨に嫌そうな顔をした。ライブハウスに出る事は多数あったが、対バン相手はどれも成人や、師匠の知り合いのプロのミュージシャンの遊びバンドとかだったために、未成年とのバンドの対バンは無かった。未成年なのに、男女構わず大勢の人が煙草を吸っている光景が嫌なのだろう。それを露骨に嫌そうに見ていたために、

「お嬢様方はこんな場所で煙草を吸っているのが珍しいのかい？さすがはお嬢様だね。どうせ下手なんだから恥じかく前に帰りなよ！」と、ヤジを飛ばされた。言い返そうとした真美を制し、

「言わせたい奴には言わせておけばいいよ。」

と言った。真美はくやしそうに頷き、私達は楽屋へ向かった。

楽屋へ入ると、私達の前のバンドが準備をしていた所だった。

「お疲れ様です。」

私達はそのバンドに挨拶をした。あちら側も私達に挨拶をし、

「僕らの次のバンドですね。噂は耳にしていますよ。ドラムの子がプロだとか。」

「あ、そんな事まで広まってるんですか？」

私の事が広まっているらしい。

「そうですね、それにベースもキーボードも滅茶苦茶美人だって。初めてお会いしましたけど、めっちゃ美人ですね！羨ましいな。」
と、互いに会話をし、健闘を祈った。

「それじゃあ、楽しもうよ！」

「そうだね！」

「ファイト、オーです！」

私達の番が来て、無事終わった。会場に何人かいつもライブに足を運んできてくれた人達もいたおかげか、盛り上がり、私達も楽しく終える事が出来た。

その後、外の自動販売機で水を買った時、

「良くん。」

と、声をかけられたので、振り向いたところ、

「あ、お疲れ様です！どうしてここに？」

そこにいたのはつい最近のレコーディングのディレクターを務めていた人がいた。

「いやね、このコンテスト、実は僕らのレーベルの主催なんだよ。」

私こそ君がバンドで出場している事に驚いたよ。」

どうやらこのコンテストのメジャー契約のレーベルは私が仕事で知り合ったディレクターのレーベルらしい。世の中広いようで狭いとはこの事だ。

「君だけがずば抜けているようだったなら考えものだったけど、他のメンバーも素晴らしいじゃないか。ベースの子もプロレベルだし、キーボードの子なんか言うまでもない。恐らく君達がこの大会の通

過者の一組なのは間違いないが、私が一声上の奴に取り次いであげようか？ ルックスも才能も技術もそろった子達なんて滅多にいないからね。」

「ありがとうございます！でも、取り敢えずその話は今は置いときませんか？ 全国大会でも変わらないお気持ちであれば喜んでお願いします。でも、今の段階でその話を受けるのは他の人達に失礼な気がするので……取り敢えず、他の子達のバンドを観ましよう。」

「ははは、そうだな。そう言えば、来週の話なんだけど……」

その後、私は仕事の話をディレクターと話し合った。そして、自分の力で段々と繋がりを広げている事にも気がつかされた。

「と、言う話があっただけど……勝手に僕の判断で決めちゃってごめんね。」

私は先程のディレクターの話を二人にした。

「うっん、良の気持ちは私も同じだから。」

「私もです！」

二人も私と同じ気持のようだった。自分達の実力だけで上に行きたい、という気持ちがあるようだ。若い時だけの特権なのだろう。私もそういう気持ちがあるって事は心に余裕があるのかもしれない。昔の職を探していた時ならば是が非でも飛びついたらどう。

「取り敢えず、僕達が全国に行ける事を願いながら、今日のコンテストを楽しもう！」

「「おー!!!」」

私達は残りのバンドのライブを観るために中に入っていた。

全てのバンドのライブが終わり、数十分待った後、結果発表と表

彰式が行われた。私達のバンドは見事に優秀賞を取る事が出来き、夏の全国大会に行ける事になった。全国大会と行っても、場所がここから数駅離れたホールで行われるので甲子園に行くぞ！という気持ちにはならないが、私達の目標に一步近づく事となった。そして特別審査員賞として小学生のギタリストのいるバンドも全国大会に出場出来る事となった。その他に個人賞として、真美がベーシスト賞、増田さんがキーボーディスト賞を頂いた。私はプロという立場になるのだから申し訳ないが受賞出来ない、という旨をディレクターから聞いた。私としても個人賞に未練は無いので他の子に渡り、今後の糧としてほしいと言う事を伝えた。そして、ギタリスト賞はもちろん、あの小学生の子だった。

「見て見て、個人賞貰ったらエフェクター貰っちゃった！オークションにだそうかな？」

「真美さん駄目ですよ！せっかく頂いたんですから！」

真美と増田さんも個人賞を貰った事が嬉しいのかはしゃいでいた。この二人が今回の個人賞を貰えないとするならば、それは出来レースしか有り得ないだろう。それくらいに二人の技術は他の人達より頭一つ以上抜けていた。だが、嫉妬心は冷静な判断を出来ない場面もある。現に、他の出場者の女性達は真美と増田さんを目の敵にしていた。

「あの子達ってさ、絶対上の人達と寝たよね。対して上手くもないくせにさ。」

「枕ってやつ？うわ、最悪、あのドラムの子も可哀想に！あんな女なんかひっかけられちゃってさ……」

「だよ。私が今から説得して私達のモノにしちゃおうよ！」

こんな心無い言葉も囁かれているのを聞いた。とても心外である。わざわざコンテストのために寝るなんて二人に限って有り得ない。二人は見た目以上に心も立派な人達なんだ。そう思い、憤慨していると、

「良、何で怒ってるの？」

「ちょっと顔が怖いですよ……」

二人が私の顔を見て心配そうに言った。

「あ、ごめんごめん。ちょっとムカツク話を聞いてね。」

「それって私達の話でしょ？」

真美は囁かれていた事に気がついていたらしい。それでも、心を乱すことなくいつものように振舞っている。それでも、心にうけた傷は深いはずだ。だから、

「真美、増田さん、この後時間ある？ 今日のお祝いをしよう！ 僕が全額持つよ！」

二人には悲しまないで欲しかった。だから、今日はこの良い結果を祝って楽しい思い出しにしたいと思った。この二人が悲しんで傷つく事だけはあってはならないんだ。

「え、ほんと！ やったー！！ まっちゃん、今日はご馳走だよ！」

「はい！ 加奈ちゃんも呼びましょう！」

二人は悲しむ顔よりも笑顔が似合う。だから、私は出来るだけ笑顔にさせなければならぬ。二人の事が好きだから。それにしても二人は忘れているのだろうか？

「加奈は今ベルリンだよ。忘れてた？ だから三人だけだよ。」

私達は全国大会に出場出来る事を盛大に祝った。お金は三人で諭吉さんが一人いなくなるという高校生としては多少高い金額だったが目を瞑った。

「てか、そんなコンテストがあるなんて聞いてなかったし！俺が出たら確実にギタリスト賞取ってただろ！」

先日あったコンテストの事を小倉に言つた所、小倉は悔しそうにそう言つた。それを冷めた様子で聞いていた真美が、

「無理無理！あんたじゃあの小学生にかないつこないよ。もっと練習しなさい。」

「何だと！俺だってほら、こんなに弾けるようになったんだぜ！」

そう言つと小倉は、手にしていたギターでハイウェイスターのソロを弾いた。だが、

「良、あの小学生が弾いた曲弾いてみて。弾けるでしょ？」

小倉のギターを取り上げ、真美が私に渡してきた。強引な行いに苦笑いを浮かべたが、私は仕方がなく Warheads のソロを弾いた。そして、

「これを小学生の子が弾いてたの。ライブで完璧に。あんたじゃまだ無理でしょ。」

あまりに的確な言葉に小倉はただうな垂れるしか無かった。

「糞~~~~！絶対そいつを越してやる！」

と、意気込み、小倉はギターをケースに入れ教室を出て行つた。

高校一年のクラスで特に親しい人は真美しかない。増田さんも小倉も、佐藤も皆違うクラスになった。悲しいがこればかりは仕方が無い事である。ただ、二年の時の文理、授業選択でほぼ同じクラスになれるかも知れない選択をする事が出来る。ただそれは、進路に関わる事なので出来れば自分が必要だと思つた事を自分で決めて欲しい。

「それにしても……あの小学生は上手だったね。」

「そうだね。楽器は違うけど、小学生の真美レベルじゃないかな？それくらい上手かったよ。まゝ加奈みたいな化物が世の中にはいるから、上には上がいるって思い知らされるけどね。」

あの技術を小学生で持つのだから素晴らしい才能だ。恐らく地区や

周りではあそこまで上手い子はあの子の周りにいないだろう。ただ、加奈みたいにとんでもない化物が世の中にはいるのだから、本当に世の中上には上がいるという言葉を思い知らされる。

「それにしても加奈ちゃんとは本当に凄いね……あの子将来何するとか決めてるの？」

「うーん……何も言っていないからな。」

加奈は去年のコンクール優勝により、国際コンクール出場の権利を手に入れ、それに出場するためにベルリンにいる。母も一緒に着いて行ったので、家には帰っても一人だ。父も寂しそうにしている。

「加奈ちゃんほどのチートは見た事が無いよ……」

真美が言う言葉を私は小さい頃から目の当たりにしていたので最近には特に思うことは少なくなってきた。

「あーあ、それにしても……今週末は顔見せだっけ？バンド数多くて疲れそう。」

「真美は受付だからいいよ。出来る事なら僕も受付にいたいよ……」

高校の軽音部になってから、ライブの設営等は全て自分達でやる事となっている。会場作りから、PA、そして、ライブ中の転換も自分達で行う。一年生は担当楽器毎に仕事を割り当てられていて、私の場合、ドラムの転換、準備を行わなければならない。一年生のドラム人数が少ないために、ほぼフルでやらなければならないのが面倒くさい。

「私も、良と一緒にずっと受付出来たら嬉しいけどさ……」
真美が恥ずかしそうに答えた。私もめんと向かって言われると恥ずかしい。そこに、

「真美さん！同じクラスだからって！」

どこからともなく増田さんが現れた。増田さんは隣のクラスなのだが、感じが良いかこういう時には必ず現れる。

「ちよっと、まっちゃん！またこんな時に！」

「ええ、感じましたもん！真美さんのラブ臭を感じましたもん！」

結局、クラスは違えど二人の共にいる時間は以前と何ら変わっていないのだった。

そして、顔見せライブ当日。私は過大な労働を強いられていた。

事前のミーティングで説明があったものの、ほとんどの新入生は設営はした事がない。先輩に教わりながら四苦八苦して進めていくものだから時間は押しに押した。ドラム周りも、先輩も含めマイキング、設置位置などずさんな物だったので、私が一から説明をしてそれなりの物にした。ただ、最初の時同様、気に食わない人が現れるもので、結構すんなりは行かなかった。それが適切な指摘ならば私も頷くのだが、その人の主観で違う、昔はこうだったと言われても困る。そちらの昔はよく知らないが、現場や師匠、その他エンジニアから見て教わった事を否定するのは恐ろしいにも程がある。反抗しても埒があかないので、その人達の時はそのままにしたが、今後もこういう衝突があるのかと思うと頭が痛くなった。全ての準備とリハが終わり、本番開始を待つだけになった時、小倉が私の元に来た。

「お疲れさん。お前休みなしだな。」

「だってただでさえ少ないドラム人口は少ないのに上にはあの人がいるんだよ？」

「あゝ・・・・・・・・・・災難だな。」

そう、ドラムの最上級生の一人に一番最初に私に絡んできた人がいるのだ。前田さんはサッカーの試合があるらしく、今日はここにいない。最上級生のドラムの人達は皆、仕事をする事もないので話していたり、遊んだりしてまっけているのだが、この人だけは違う。まるで姑のようにネチネチと文句を付けてきたりするのだ。

「ま、頑張れよ・・・・・・・・お前らの出番は五番目か。ここにいる客、序盤で帰っちゃうかもな。」

「そうならないように盛り上げないとね。」

私はそれだけを言い、開始時刻を待った。

高校の軽音楽部、という事もありレベルは中学のより少しは上がっていると思える。先輩たちも皆上達しており、努力の成果が見受けられる。楽しそうに演奏している所を見る限り、本質は変わらないのだろう。と、準備をしつつ観ていたら、もう私達の出番が来た。出演バンド数が多いために時間が少ないので、次々と回転が速いのだろう。私は直ぐ様に、置いてあったスネアをセットし、そのまま自分でセッティングをした。

「良、疲れているみたいだけど……大丈夫？」

「これくらい何とも無いよ。それよりちゃっちゃと準備を終わらせよう。今回は前のようにセッションから始めよう。」

「うん、解った。」

真美と増田さんに、この前のようにセッションから始める事を伝えて、皆が準備を終えた所で私達は演奏を開始した。

それからは本当にきつかった。これが労働だったのならばそれなりに賃金を貰えてもおかしくない。まさか裏方の方をやる羽目になるとは誰が予想しただろうか。それも憎まれ口を叩かれながらだ。全てが終わった時、私はライブを終えたと言っ達成感より、ようやく仕事が終わったという開放感のほうが強かった。

「あゝ終わった。帰って寝よう。」

背伸びをし、そう呟いた所、

「あれ？今から打ち上げじゃないの？出ないの？」

真美が私にそう言った。そうだった。これから皆で打ち上げがあるのだった。

「……………面倒臭いな。」

「良くんがいかないなら、私は行きません。」

増田さんがそういうが、事前の確認の時に行くと言った手前、行かなければ店側にも部にも迷惑がかかる。

「いや、行くよ。ただ、それまでは少し教室かどこかで休むよ。」
打ち上げまであと一時間しか時間は無いが、少しでも体を休めてからじゃないと動きそうに無かった。

部室に行き、私は少しの間仮眠を取ることにした。

「あ、良。そろそろ行かないと……ってまっちゃん！」

真美の言葉で私は目を覚ました。だが、目の視点が少々高かった。それに頭の下感触も床の硬さじゃなく、柔らかかった。何事かと思ひ、起き上がり、床を見ると、誰かの太ももがあった。その太ももの人物を見ると、

「もう、真美さんのせいで起きちゃったじゃないですか！」

増田さんが不満そうな顔をして座っていた。つまり、私は今まで増田さんの膝枕で寝ていた事になる。私は意識が無かった事を非常にうらやんだ。

「そうやってまっちゃんはいつもいつも！」

「何ですか！真美さんは同じクラスになれただけでは満足してないんですか！」

そして、二人はいつものように言い争いを始める。

「良、そろそろ行くぞ……ってまたかよ……」

部室に入ってきた小倉が溜め息をつきながら言う。小倉もこの二人が言い争っているのを見慣れている。取り敢えず、私は立ち上がり荷物を持ち小倉の元へ向かった。

「どこにいるかと思いきや……」

「ハハ、ごめんごめん。二人とも、もう行くよ？」

私は言い争いを続けている二人にうながした。二人は言い争いを続けたまま私達について来た。部室の鍵を閉め、夕暮れ時のオレンジ

色の空の中を、私達は打ち上げ会場へ向かって歩いて行った。

高校一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました！

え〜っと、案外好きなバンドで年代がバレてしまう！って事もありますが、私と同年代でエクストリームが好きな人はあまりいませんでした。むしろ知られていないです。昔ですが、小学生がエクストリームの曲を完璧に弾きこなしているを見てびっくりした思い出があります。普通に考えて、エクストリームは難しいです。バンドでやりようものなら、本当にしんどいです。

本当はもっと早い段階で書くべきだったのですが、ご感想お待ちしております。ビビりな私なので今まで書くに書けませんでしたが、自分の実力を上げるには客観的意見が大事なので………

では、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

高校一年生？（前書き）

今回はちょっと遅れたかも知れないですね。楽しみにして頂いている方、すみません。

では、今回も皆さんが楽しんで読んで頂ければ幸いです。それでは宜しく願います！

高校一年生？

「はいはい、この機械にこの紙を入れて、ボタンを押すと……
・何とお札になっちゃうんですね。あ、これ決して偽札じゃない
よ？マジックだからね？」

教壇の上で割かし危ない事が繰り広げられていた。一万円程の大きな真つ白の紙をプレス機に入れてボタンを押してプレスした所、その紙の模様が一万円札の模様になったのだ。遠くから見たら本物と遜色が無い。近くで見たらどうなのだろう。と、言うより何故生物教師がこのような機械を持ち出してきたのだろうか？

高校の教師は少し変わっている人がいる。これはどこの地域でも同じなのだろうか？現代語の教師なのに白衣を着て授業を行う先生。普段はぱつとしないのに、愛車がインプレッサWRX STiに乗っているもう少しで定年を迎える家庭科のおばあちゃん先生。毎日、良いマフラー音を響かせながら登校しているので、あだ名が走り屋おばあちゃんとなった。そして、担任なのだが、

「えーっと……はい。今日は特に何も無いんだけど……
・球技大会前にクラスの団結を一致するために今から体育館に集合！大丈夫、今の英語の時間と、次のLHRの二時間もあるから！
それじゃあ十分以内に着替えて集合！」

初めてのクラス担任に意気込む若い先生だった。

「何でだでさえ暑い夏の時期に体育館で運動をしなければならないのか。朝一で体育があったのだから今日だけで三時間分体育を行こな暑い時期に二回も体育館で体動かさなきゃいけないのよ!」

真美が不満を言っているが、その気持ちは私も解る。たう事になる。体育会系や、体を動かすのが好きな人は良いのだろうけど……・例えば、

「よっしゃー! 英語が体育になった!」

小倉は張り切り過ぎている。それぞれ思う事があるのだろうが、私達は体育館に向かい、更衣室で制服から学校指定のジャージに着替えた。着替えが終わり、体育館で気だるそうにしていると、

「良、なんかお前嬉しそうじゃないな。」

「そりゃね……暑いし。」

私の言葉に大げさな手ぶりをつけて小倉が、

「おいおい、ライブの時の方が暑いじゃねえか! それによ……・

・見てみるよ。」

私は小倉が指刺す方を見た。そこにはクラスの女子がいるだけであるのだが、小倉は目を輝かせて、

「女子のジャージ姿だぜ? 暑いから上はもちろんシャツ。下はハパン、何人かズボンもいるけどよ。見てみるよ、あの膨らんだ胸を。シャツの上から大きく主張している二つのおっぱいを。眺めるだけで興奮しないか? あれが動くと上下左右に揺れるんだぜ? しかも、ズボンもヒップラインがしっかりと現れている! これを見るだけで俺は……俺はもう!」

いつかの時のように力説した。気が付いたらクラスの男子連中も頷いている。それほどまでに魅力的なのだろうか? 私も凝視してみるのが、

「いや、僕は小倉ほど……」

「はい出ました〜! やっぱりいつも増田のような大きな胸を目の前で見てるやつは言う事が違うよな〜。増田みたいに大きい胸でスタイルも良い、顔も良いなんて滅多にいないもんな〜。それに、真美

さんみたいな貧乳属性も一緒だもんな……死ね！すぐ死ね！」

またしても、いつかのように小倉の言葉に頷きながら男子達は私を睨みつけた。だが、それ以上に小倉の言葉がまずい。真美の事をそう言つと、

「死ね！」

案の定、小倉は真美に殴られた。真美の胸の事にたいする悪口は禁句である。真美が小倉を殴り、去って行った後、

「もう学習したら？」

「馬鹿野郎！！！！！！！！！！」

私の言葉に小倉は血相を変えて、

「俺だって学習していない訳じゃねえ！真美さんに胸の事を言つと殴られる事くらい知ってる！でもな、貧乳と言われて頭にくる真美さんをみたいからやってるんだよ！裏返せば、貧乳という事にコンプレックスを持っていると言う事だ！そんな女性を見ない事ができようか？いや、出来ない！……俺は巨乳の方が好きだ。

でもな、貧乳の事に悩んでいる、その事に恥ずかしがっている女性ほもっと好きなんだ！！」

またしても小倉に拍手が送られる。女子は冷めた目で見ている。それと同時に真美を励ましている。真美も、「いつか殺す。」と呟いている。何とも言えない状況だった。また一つ、小倉が遠くへ行つたような気がしてならない。

「おかえり~~~~~！！！！！！」

家に帰宅すると加奈が私を出迎えてくれた。実に一月半ぶりにその姿を見ることがなる。メールや電話で近況は教えてくれたのだが。

「今日帰ってきたの？」

「うん。お昼には帰ってきたよ。んで、はいお土産。」

と、加奈が私に手渡したのは……

「いや、ビールが名産なのは解るけど、僕、未成年だよ？」

「大丈夫！ノンアルコールだから！それとソーセージ！」

ベルリンに行っていたのだからこのようなお土産になるのは予測していたのだが、本当に予想通りだとは思わなかった。まあ、ドイツのソーセージは絶品らしいし、これでフランクフルトを作り食べる事を考えたら口の中に涎がたまった。

久々の家族四人での夕食を終え、私と加奈は部屋でお土産のビールを飲むことにした。

「本当にノンアルコールだね？」

「本当だってば。それじゃあ乾杯しよう？」

加奈はビール瓶を開け、私と加奈のグラスにビールを注ぎ込んだ。冷蔵庫に冷やしておいたので、今日のような暑い夜には最高のシチュエーションである。アルコール入りならば……

「それじゃ乾杯！」

「乾杯！」

グラスの合わさる音が響き、私はビールを一気飲みした。この喉越し、苦さ、疲れた体に心地良い程染みていく感じがたまらない。

「~~~~！やっぱ美味しいな。ドイツのなんてビールだろう？それにしてもアルコール入りと変わらない美味しさだね。これっす……」

何のビールか確認しようと瓶のラベルを見た所、私は言葉を無くした。明らかにアルコール分5%と書いているからだ。

「ちよつと、加奈！これノンアルコールじゃないよ！」

私はそう言った後、加奈の方を見た。だが、加奈の様子がいつもと違う。手に持つグラスは既に空になっており、顔が見る見る前に真っ赤になっていった。明らかにアルコールにやられた顔だ。私は加奈の酔いを冷ますために水を持ってこようと立ち上がるとしたその時、

「どこに行くの？」

私の腕を掴み、加奈が言った。

「加奈、酔ってるでしょ？もうこの際アルコールが入っていたとかどうでもいいから水を持って」

「そんな事どうでもいいでしょ？お兄ちゃんは私といっしょにいるのいや？」

そう言うと、加奈は私の腕を胸の辺りに持ってきた。いつのまにこんなに成長したのだろうか？とても今年中学一年生になったばかりの女性の感触と大きさでは無い。これではまるで増田さんのようである。非常にまずい。アルコールを摂取したせいもあるのだろうか？心臓の鼓動が速い。まるで、実の妹に欲情しているかのようなのである。そして、加奈の鼓動も腕を伝って感じる。加奈も同じように鼓動が速い。何をしているのだ、私は。そう思っていると、

「聞こえる？私、こんなにお兄ちゃんの事を考えると胸がどうにかしそうなんだよ？」

真っ赤な顔だが、上目遣いで言い寄る加奈に確かに女性を感じてしまった。

「あの時、お兄ちゃんの事好きって言ったの嘘だと思った？でも本当の事……だって、こんなにもお兄ちゃんを欲しがっているんだもん。」

加奈は私の掴んでいた腕を自分の服の中に入れた。段々と私の手を上に上げていき、胸の辺りに持つてくるとブラジャーの中に入れた。加奈の体温が私の手のひらを伝わり感じる。とても熱く、そして体温ばかりではなく柔らかさまでも感じてしまった。素直に言えば、私は加奈に女としての魅力をこれ見よがしに感じさせられたのだ。

「ね．．．．．解るでしょ？本気なんだよ．．．．．だからお兄ちゃん、私を一人の女として．．．．．」

「っ！」

私が、気合を入れて冷静さを保とうとすると同時に、加奈の体から力が抜けていき、私の元に倒れた。何か悪い事でも起きたのか？と思つて加奈を見ると、加奈は寝息を立てて寝ていた。どうやら初めてのアルコールにやられて、潰れてしまったらしい。

私はほつと胸を撫で下ろすと、加奈をベットまで運んで寝かせた。運んでいる時に、もう加奈は少女ではなく、大人の女性に近づいている事を解ってしまった。そして、恐らく最後の言葉も酔いで自制心が効かなく発したのだろうが、本心なのだろう。

加奈が私のことを兄として見ているのでは無く一人の男性として見ている。嬉しい気持ちとは裏腹に侵してはいけないタブーだという気持ちが生まれる。正直な話、私はあの時加奈に欲情してしまった。兄なのに、妹にだ。あれほどまでに寄られて大胆な行動をされた事が無い、という事があつたとしても、あつてはならない事なのだ。

「まいったな．．．．．」

私は残っているビールを開け、一人で飲み始めた。未だに鼓動の速さは続いている。真美、増田さん、加奈。もうそろそろ答えを出さなければならぬのかも知れない。今までのようになあなあで済まず訳には行かない時期かも知れない。次に加奈が免疫を付けて私に言い寄ってきたら、私は断れる自信が無い。加奈だけ無く、真美や増田さんでもそうだろう。そうってしまった場合、答えを出していないのに手を出すことになる。不可抗力と言つて免れる事など出来ようも無い。

「高校までだな。それまで愛想つかされるかも知れないけど。」
いつの間にか空になったビール瓶を見た後、時計を見てもう夜も更けてきた事に気づいた。私はビール瓶とグラスを片付け、布団に潜り込んだ。

翌日、加奈が物凄く体調を悪そうにしていた。

「ごめんお兄ちゃん……昨日ビール飲んでから記憶無いんだけど、ノンアルコールでも酔ったりするものなの？」

「あれね、アルコール入ってたよ。多分二日酔いだから今日はゆっくりしたら？」

私の言葉に黙ってうなずき、加奈は再び眠りについた。初めてのアルコールに記憶をなくしていたらしい。昨夜の事を覚えていないのは、私にとって好都合だった。

それから、母にビールの事を話し加奈を休めさせる事にした。母がきちんと確認をしていればよかったのだが、

「まゝお酒位この歳になったら飲むでしょ。」

の一言で終わった。確かにそうだが、親公認でそれはいささかまずいのではないかと感じてしまった。

終業式が終わり夏休みに入ると、私達はよりいっそうバンド練習に力を入れた。時には一日中部室で曲作り、練習を行った。あまりの暑さと真剣さに脱水症状になるのではないか、と思っただけだった。個人個人が自らの実力のレベルアップを図り、私達のバンドはより一層の実力を付けたと自負している。

「今日はここまでだね。珍しく次が入ってるみたいだし。」

額の汗を拭き、私はそう言い練習を終えた。二人ともここ連日の猛練習にさすがに疲れた表情を隠せないでいる。

「一応、新曲が出来た、と言う事でいいのかな？」

「そうですね。そういう事で良いんじゃないですか？」

部室の中の熱気を少しでも和らげるために、クーラーの温度を下げ、二人はマイクを片付け始めた。私も自分の楽器を片付け、それらを持ちいち早く外に出た。

外に出ると、次のバンドの人達が既に待っていた。

「お疲れ〜。」

「お疲れ様です。」

「気合入ってるね〜。何かあるの？」

私はそう問われ、

「今月にコンテストがあるんですよ。優勝するとレーベルから声がかかるとか、もしくはお目にかければ同じような結果になるとか。」
そのように答えた。

「そんなのがあるんだな。俺らも来年出ようかな。お前らは出るなよ、俺らが上に行けないからな。」

「僕達がお目にかかればいいんだけどね。」

真美と増田さんが部室から出てくると、その人達は部室に入っていた。
った。

「何話してたの？」

真美が私にそう言ったので、

「いや、何でも無いよ。」

とだけ、答えた。

「前より広い場所だとは聞いてたけど、そこまで変わらないものなのね。」

会場を目にし、真美が呟いた。大会本番、私達は会場に来ていた。出演者達が集まる時間より少し早めに来ていた。中に入り、楽屋に行くと、既に何組か来ているようだった。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様です。」

私達の挨拶に、皆こちらを向き挨拶を返してくれた。ぱっと見だが、緊張を隠しきれ無い人が多く見える。それだけで、この大会に意気込んできている事が解る。だが、私達も皆と同じ、それ以上に努力してきたと自負している。

「あ、この前はどうも。あなた達の演奏を聴いてちよっと自信無くしましたよ。」

一人の青年が私達に話しかけてきた。その青年は、以前見たことがあった。それもそのはずであり、私達と同じ地域のもう一つの出場バンドである。小学生の天才ギタリストを筆頭に全てのパートが高いレベルを持っていた。

「いえ、私達もあなた方の演奏には感激しました。何より、あのギターの子には私も驚かされました。」

「あいつは俺の弟なんです。俺らの仲間でバンドを組むときにあいつ以外に良いギター弾けるやついないんで。でも、貴方も同じ位の年代のはずなのに凄いですね。プロの演奏かと思いましたよ。」

謙虚で低い物腰のまま言い続ける彼に、私はより一層の好印象を抱いた。私達の事を教えると、彼は納得したかのように、

「それならばその実力も頷けますね。しかし、本当にプロでしたか。今度一緒に対バンしませんか？俺らも貴方達から学びたい事はいっぱいあるし、何より面白そうです。」

「ええもちろん。一緒にやりましょう。その時は是非オリジナルが聴きたいですね。それではお互い頑張りましょう。」

「ええ、今回は負けません。」

互いに握手をして、私達は健闘を祈った。

会場に移動し、主催者から挨拶を聞き、私達は出番を待った。今回も中番だったので、出番が近づくまで他のバンドの演奏を聴い

ていた。さすが全国各地から予選を勝ち抜いてきたバンドや、人達だったので、その演奏力、オリジナル性はどれも引けを取らなかった。様々なジャンルがあるのかと思っていたのだが、やはり中高生に人気のジャンルがオリジナルにも現れている。だが、それぞれの良さをきちんと出し、観客達を盛り上げさせていった。審査員席の人達も固唾を飲んで聴き入れ、それぞれのバンドの評価をしていた。その中に、お世話になっているディレクター、そして何故か師匠もいた。

「ねえ、良の先生いるよ。」

「うん、僕もびっくりしてる。」

「私達が考えているよりももっと凄い人だったんですね……」

増田さんの言葉に私は黙って頷くしかなかった。影響力のある人だと思っていたが、ここまで多方面に関わっているとは思わなかった。考えてもみれば、いくら長年、トップクラスのプロのミュージシャンだったとしても、ドラム奏者だけであんなに豪華な家を持つ事は厳しい。そして、顔の広さ、慕われよう、もしかしたら私が知らない以外にもまだまだ師匠の秘密は多いのかも知れない。

先程の青年のバンド、小学生ギタリストのいるバンドの演奏が始まった。今回も同じくエクストリームのようだった。出演しているギタリストは彼のプレイを食い入るように観ていた。私も、気になつていたので始まる前に色々聞こうとしたのだが、

「あんたギタリストじゃないだろ。そんなやつに教える事なんて無い。」

と、一蹴されてしまった。なんて可愛げの無い子だろう、と思った。だが、彼のプレイは凄まじい。以前の棒立ちのプレイから、所狭しと動きまわる姿はさながらヌーノのようである。

「彼も何か一皮剥けたかな。」

音の変化以前に、ライブでの立ち振る舞いからそう思った。

「そろそろ私達の出番ですよ！」

増田さんが私と真美にそう告げたので、私達は楽屋の方へ向かった。楽屋に入り、今朝したスネアのチューニングを再確認し、ペダルとスティックを取り出した。軽い準備運動を行い、私達の出番を待った。

次に出るバンドが楽屋に入り、準備を終えた所で、

「君達さ、何処の代表？私達北海道なんだよね。」
と、話しかけてきた。

「僕たちは関東です。家がこっちにあるので地元ですかね。」

「そうなんだ。じゃあ、交通費とか出ないのかな？私達は北海道からこっちまでの交通費出てさ。飛行機代だったからフェリーで来て差額分儲けちゃった！」

こういう事が出来るのが地方の強みだろう。私も、同じことをしたと思う。北海道から来たと言うこの人達は、どうやらガールズバンドのようであり、地元の学校の制服を着ていた。私服や、そのバンドの個性に合わせた衣装も良いのだが、制服と言うのも女子ならば良い。見ていて清々しい気持ちになる。もっとも、文化祭で真美と増田さんの制服姿でのライブをメンバーとしては観ていたが、観客として観るのはまた一つ違う意味合いを持っている。

「でも君はまさに両手に華だね。こんな可愛い子達とバンド組んでるなんて周りからうらやましがられない？」

「そうですね。僕もそう思いますよ。」

僕が素直にそう言うと、茶化すはずだったのだろう、反応が薄い事に少し顔色を変えた。遠くで真美や増田さんが、それ見た事か、と聞いたげそうな顔をして私達を観ていた。すると、彼女は他のメンバー全員を呼び、私を囲むと、

「あの子達も可愛いけど、私達も悪くないでしょ？」

「そうそう、私達来年上京するからその時はね？」

「私達と遊ばない？」

「手とり足取り色々教えるよ。」

と口々に言ってきた。言うだけで無く、制服のスカートを捲し上げる等もしてきたのだが、私には彼女達の色気等どうとも思わない。真美や増田さん、加奈といった三人に比べたら天と地ほどの差があるのだ。だが、真美と増田さんは彼女たちの行為に腹を立てたのか、こちらに寄ってこようとしていた。始まる前につまらない事で騒ぎを起こしたくなかったので、

「遊ぶのは良いですけど、そんな事までしてくださなくて良いですよ。間に合ってますんで。」

と笑顔で拒絶の言葉を差し向けた。その言葉が面白く無かったのか、
「そ、そう？あゝ…………イケると思ったんだけどな。ま、いいや。お互い頑張りましょう。」

と、最初に話しかけてきた彼女が言った。そして、手をさし出してきたので、私はその手を取り、

「ええ、頑張りましょう。」

と、言いながら握手をした。その後、彼女らはステージの方へ向かった。

「良って誰にでも付いていく奴じゃないんだね。私達が迫ったときにすぐ狼狽えたから弱いと思ってたよ。」

「私もそう思ってた。でも違うんですね！」

彼女たちがいなくなると同時に、真美と増田さんが私にそう言ってきたので、

「そりゃ、真美や増田さんほど色気があって魅力のある女性なんていないからね。それに比べたら他の女性が迫ってもどうとも思わないよ。」

と答えた。二人は私が褒めた事に嬉しそうに笑い、

「そうですね！ありがとうございます！」

「まゝ、加奈ちゃんって言う例外がいるけどね。」

と答えた。確かに、加奈と言う例外がいる事に同意をせざるを得な

前のガールズバンドが終わり、私達はステージへ向かった。表に立つと、多くの観客と終えたバンド、これから出るバンドの人達が私達を観ていた。そして、中央に審査員達。これほどの目に見られたのなら、よほど場慣れをしている人以外ならば足が竦むだろう。近くを見ないで、遠くを観る、足元をみているだろう。人それぞれであるが、緊張をほぐすのは重要だ。私とて、決して緊張しない訳ではない。程良い緊張感があるだけだ。緊張しすぎていると体に力が入りすぎていけない、逆に全く緊張しないのはそれはそれでいけない。私としては緊張感がなさすぎると、全くやる気が出ず何をしてもつまらなく感じてしまうからだ。そんな中では決して良い演奏、音楽が生まれる訳が無い。これが私の自論だからだ。

音を出し、P Aと確認を終えた所で準備が終わった。二人は私よりも早く終えていたようで、黙ってこちらを見ていた。

「オーケー！真美も増田さんも、今日も楽しもう。」

「うん、それじゃあ精一杯楽しもう！」

283

軽いタム回しの後、タメを作り、皆で同時に音を出した。ベースから放たれるA音、増田さんの弾くスケールにのせ、私は金物類を叩き続けた。その後、ハイハットで勢い良くカウントを刻み曲の開始を告げた。熱い熱気に包まれながら、私達は大勢の客、バンド、審査員の前で自分達だけの演奏を開始した。

「皆さん盛り上がってますか！！！？私達は見えて解る通り盛り上がっています！今日は……コンテストの全国大会って事でもう次が最後の曲なんですけど……あ、ありがとうございませう！頑張りますよ！もう演奏が終わったバンドの方はお疲れ様でした！これから演奏する方は頑張ってください！審査員の方々もお疲れ様です！そして、見に来てくれている人達ありがとうございませう！私達の事を初めて知った方々は、良かったら応援してください。もし、知っていて来て下さっている方がいらっしゃったらありがとうございます！もっともっと頑張ります！それじゃあ、最後の曲です。盛り上がりましょう！多いに弾けましょう！

jump to one's feetです！行くよ~~~~~
「！！！！！！」

二曲目だが、最後の曲を私達は始めた。観客が盛り上がっているのが見えた。真美が楽しそうにベースを弾き、マイクに声を通す。

増田さんも流れる汗を拭くことも無く歌い、弾き続ける。嬉しい事に皆が熱狂してくれていた。コンテストなのに、ライブとは言えないのに。皆が熱くなっていた。ドラムを叩く手に力が入る。前ノリになるから、皆をもっと盛り上げさせるために。そして、私は気が付いた。この中の誰よりも、私が熱狂して、楽しんでるんだと。

高校一年生？（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

えゝ、今回結構時間がかかってしまった理由としては、外伝を考えていたからです。結構書き進んだ、と思ったらデータが消えたり、等とハプニングもありました。そして、いまだに外伝進んできません！どうしよう・・・・・・・・テーマが難しすぎて進まない・・・・・・・・

と、愚痴を書きましたが、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

高校一年生？・2（前書き）

前回で1という表記をするのを忘れていました。ですので今回は続きます！

それはそうと、気がついたらポイント数が三桁突入！PV数も二万達成しておりました！ありがとうございます！本当にありがとうございます！これからも頑張っていきたいので宜しくお願いします！それでは今回も皆さんが楽しんで読んで頂ける事を願って、そうなる下されば幸いです。では宜しくお願いします！

高校一年生？ - 2

「ベストパフォーマンス賞は……東北代表！……」
私達は精一杯の力を出したが、最優秀賞、このコンテストのベストパフォーマンス賞を取る事は出来なかった。

自分達の力を出し切り、僅かな時間のみだったが楽しめたので私は悔いが無かった。メジャー契約が遠のいた事は残念だが、まだチャンスはある。真美も増田さんも清々しい顔をしていた。二人とも、悔しさはあるだろうが、それ以上に観客のレスポンスの良さ、そして自分達の実力を出し切った事に満足したのだろう。私はそう感じた。

最優秀賞を取ったバンドがステージに上がり表彰されると、会場中から拍手が起こった。私達も惜しみない拍手を送った。

それからその他の表彰が行われ、私達のバンドはどの賞も、貰える事は無かった。さすがにどの賞も貰えないほどに酷いとは思えなかった。この結果に少々疑問を抱いたその時、

「おい良、ちよつといいか？」

私は後ろから肩を叩かれ声をかけられた。この声は恐らく師匠だ、そう確信を抱いて振り返ったら、私の予測通り師匠がいた。私が挨拶をしようと口を開けようとしたと同時に、師匠は私に付いて来いとジェスチャーをした。私はそれに従い、師匠の後を付いて行った。私と師匠は裏の機材の搬入口に出た。ここならば、レーベルの上の人、そして出演者等に話しを知られないですむからだろう。ズボンのポケットから煙草を取り出し、口に咥え火を付けて一吸いした後、横に煙を吐き出した。

「良、悪かったな。本来ならお前らが最優秀賞なんだが……」

「そこから先は言われなくても解った。十中八九私絡みだろう。私がプロである事。バンドとしてプロでは無く、十代だったのならば出

演は可である。それは十代という若い歳でプロとして活動している人が極端に少ない事に関係する。そして、そのような人達ならばツテやコネを使いレベルの人に見せる機会を設ける。そういう事もあり、今まではいなかったのだろう。だが、今回は私が出てしまった。まだまだヒヨッコと言えど、プロである事には代わりはない。

「解っていますよ。」

「ああ、それもあるんだが、今回は出来レースだったんだよ。」

渋い顔をして、師匠はそう言った。煙草をおもいきり吸い込み、嫌な思いを吐き出すかのように煙を吐き出した。

「最優秀バンドな。あれは審査員長の甥っ子がいるそうだ。高校生活の最後にいい思い出を作ったらしいんだと。だから他の奴らには申し訳ねえよ。あんな糞バンドが最優秀だとよ。ただ、あいつらは契約はさせねえんだと。そこら辺はさすがに解っているんだろう。」

出来レースは他のバンドには可哀想だけど、何処にでも有り得る話だ。世の中にはこういう事もある。これでコネにより賞を取得、デビューとしていたのならこちらから願い下げだった。そんなレベルに契約してデビューする気など毛頭も無い。追い込まれている時期なら話は違うが、今の時点ではまだまだ若く、チャンスもあると考えられる。でも、公私混合をコンテストのみで終わらせる所を見ると、まだまだこのレベルは良いのだろう。

「それでだな。まだ確定している訳じゃないが、審査員の思考、スカウトの奴らの様子からお前らに声をかけるかも知れない。確実とは言えないが、ほぼそうなるだろう。」

「本当ですか？」

「まだ解らないがな。あくまで希望的観測だ。お前もこの業界に入ったんだから解るだろ？話が無くなるなんて事はあり得るんだ。そこら辺をきちんとわきまえていると思ってお前にだけは言うんだよ、俺は。」

吸い終えた煙草の火を靴で消し、携帯灰皿に入れると、

「ま、そういう事だ。どっちにしろレベルがお前らに目を付けている事だけは確実だ。どっちに転ぶにしろ悪い事じゃねえよ。」

師匠はそう言っと、辺りを見回した。私も顔を上げて見回すが誰もいない。まだ表彰式の最中なのだろう。師匠は誰か来るのを待っているのだろうか？そう思っていたら、私の頭に何かが置かれた感触がした。師匠の方を見ると、師匠は私の頭に手を置き、

「よく頑張った。お前のプレイは何処に出しても恥ずかしくねえ。

立派なプロの演奏だった。それも人を惹きつける演奏だ。胸を張れ。」

「そう言いながら、私の頭を思いっきり撫でた。師匠が褒めてくださったのだ。滅多に、本当に良くなければ褒めない師匠が……それもプロと認めてくれた……上手く前が見えない……師匠の顔がぼやけていく……ああそうか、私は涙を流しているんだ。師匠に褒められ、胸を張れと言われ、感極まって涙が溢れたのだ。」

「馬鹿野郎……泣くな。俺がお前の師匠だからじゃねえ、お前が俺の弟子だから褒めたんじゃないやねえ。一ドラマーとして最高の演奏をしたから褒めたんだ。」

「はい……ありがとうございます！」

師匠として、一人の人間として最高に尊敬している師匠の言葉が嬉しかった。私は頭を下げて師匠にお礼を言った。師匠の顔は見えなかったが、鼻をすする音が聞こえた気がした。それが私の音なのか、師匠の音だったのかは解らない。

それから私は会場に戻り、出演者皆で集合写真を撮った。手に賞状を持つもの、トロフィーを持つ者、それらを持たない者、皆が笑顔だった。成績という結果よりもライブをして楽しかった、という過程のほうที่สำคัญだった、結果が伴った者達も結果だけに満足する

のではなく過程にも満足した、だから皆笑顔になれたのだろう。

全体写真の後、ティーンズ向けの音楽雑誌からの個別の写真撮影、軽いインタビューを受け、私達は一時的とは言え、アーティストとして扱われた。各バンドのギタリストはさらに機材の説明、ギターを持ち写真撮影を行っていたのだが、私達はギタリストがいないのであまり関係無かった。

その後、師匠に私達三人の写真を撮ってもらい、私達はその場を後にした。こうして、様々な人達、私達にとって、私にとって大会に出場する事よりも多くのものを得られたコンテストが終了した。

後日、私の元にレーベルの方から連絡が入った。レーベルで話し合った結果、私達のバンドと契約を結び、専属のアーティストとして世に出したいとの事だった。

私達三人はレーベル本社に行き、担当の人から一通り話を聞いた。その上で、私達三人の意思はレーベルと契約する事にした。日本の

メジャーレーベルの中では決して大きい会社ではない。その点で言えば最大手のレーベルと比べれば宣伝、CM等のタイアップと、セールス力は少ない。だが、大手のプロデュース等、私達の意見を通さない事も少ないだろう、そう思っただけで私は承諾した。もしかしたら甘いのかも知れない。レーベルも慈善行為で私達と契約を結ぶ訳ではない、商品として売り出すからには売れてもらわなければ困るのだ。会社の従業員を路頭に迷わせないためにも。

契約を結ぶに当たり、私達三人は親の同意が必要になった。私達は未成年で学生である。私達の意味だけではどうする事も出来ない。私達がどう思おうが、責任等は親に行く。

本社を後にし、私達はそれぞれの帰路に付いた。家に着いてから、私はこの事を母に伝えた。母は大いに喜び、私を祝ってくれた。加奈もその事を知ると、私に祝辞の言葉を言々と直ぐに、真美と増田さんにも電話で祝辞を伝えた。父にもその事を伝え、二人の同意を得なければならなかった。私は黙って父の帰宅を待った。

父が帰宅し、私と両親の三人で話し合った結果、直ぐ様同意を頂いた。ただ、学業との両立をきちんと行う事が条件だった。私自身も、大学に行くつもりだったのでその条件に喜んで同意した。その後、家族四人で近くの料理屋へ向い、私のお祝いをしてくれた。

「それで……増田さんの方は父親が理解を示してくれなかったと……」

「うん……でも、私頑張るから大丈夫だよ！心配しないで……」

翌日、私達は三人で学校の部室に集まった。真美の家は何も問題はなかった。むしろ、私と同じように盛大に祝ってくれたみたいだ。ただ、増田さんの家の方は父親の方が頑として首を縦に振らなかった。親として娘がこのような道へ進むのを善しとしていないのだろ

う。増田さんはどちらかというと箱入り娘だ。小さい頃からピアノ、私立の幼稚園、と通わせている所から一般家庭では無い。所得上の問題で普通の家では無理である。だから、わざわざこの道に進む必要は無い、進めさせたくないのだろう。

「まっちゃん、大丈夫だよ。きつとお父さんも解ってくれるって。」

「うん、ありがとう真美さん……」

増田さんの言葉には覇気が無かった。恐らく、昨日の段階で頼み通したのだろう。しかし、結果は見ての通りだ。私と真美が思う以上に見込みは無いのだろう。それならば、

「増田さん、今日君の家行っていいかな？君のお父さんと話がしたいんだ。」

私の言葉に増田さんは非常に驚き、

「え……良いと思うけど……」

「じゃあ、お父さんが返つきそうな期間帯を教えて。真美も大丈夫？僕らで思いを伝えた方がいいと思うんだ。」

「うん！任せて！」

一人で言っただけなら、皆で伝えれば良い。必ず人の思いは伝わる、そう思ったから私は増田さんのお父さんと話をする事に乗り込んだ。増田さん一人に厳しい思いをさせない。レーベル側の条件は三人全員の親の同意だ。それがなければ私達は契約を結べない。もし、増田さんの親が同意をしてくれなかったからこの話が無かった事になった場合、増田さんは自分を責めるだろう。そして、親との距離があいてしまう。そうなって欲しくないから、もし同意を得られなくても、増田さんには親の気持を知って納得をして欲しい。

「良くん、真美さん……ありがとう……」

増田さんの声に少しだけ覇気が戻った。上手くいくかどうかは解らないが、やれるだけの事をしよう、私は二人にそう言った。

「それでお父さん、二人はバンドメンバーの」

「初めまして。新堂良です。」

「稲葉真美です。」

テーブルを挟み私達三人の向こう側に増田さんのお父さんが座る。

私達はあれから部室で時間を潰し、良い時間になるのを見計らって増田さんの家へ向かった。

そして今、私達は増田さんのお父さんと話し合うため対面している。

「仕事帰りでお疲れでしょうが、本日は私達のバンドの事でお話をしたくて上がらせてもらいました。それで、増田さんがバンドでデビューする事を善しとしないのは何か理由があるのでしょうか？ありましたら教えてください。」

増田さんのお父さんの表情を伺いながら、私は言葉を口にした。何か粗相が無いように、慎重に言葉を選びながら。すると、

「君が良くんかね？そうか、江利子からよく話は聞いている。うちの江利子が大変お世話になっている。もちろん真美ちゃんも。君達が江利子と仲が良く、そして江利子も君達と仲が良いのは親として非常に嬉しく思う。だが、」

始めのうちは静かに話し始めたのだが、

「レコード会社と契約を結びレコードを出す、これは非常にやぐざな仕事だと私は思うのだ。私は音楽業界の事を知らない立場では無い。私の会社の取引先としても何社か名前が挙がる。もちろん、君達が契約を結ぼうとしている所もだ。そして、売れないミュージシャン達がどうなっていくかも解る。売れる売れないは実力だけではどうしようも無い部分がある。ましてや昨今ではレコードが売れないのだ。一昔前みたいには行かない。そんな場所に、江利子を出したくないのだ。解らないかもしれないだろうが、親が子に求めるの

は幸せなのだ。今は良いかも知れないが、いずれ後悔する。」

途中途中で熱く語る増田さんのお父さんの話は十二分に解る話だ。誰も好んで子供を苦勞させる道に進めさせたくはない。それが増田さんの家みたいな環境なら尚更だ。話を聞くだけで相当上の立場、もしかしたら社長、会長、取締役のどれかかも知れない。

「確かに江利子は普通の子達とは違う。親の目から見なくてもどれだけ才能豊かな人間か承知している。だが、江利子には幸せになつてもらいたい。人並みの幸せで良い、私と家内みたく険しい道を進まなくても良いのだ。今のままで何不自由する事無く進んで行ける。・・・」

増田さんの事を思うからこそ、自分が険しい道を歩んできたからこそその言葉なのだろう。それが親の勤め、親の思い、そう思うのだろう。そこに増田さんの主張は無くても。なら私が言える事は、

「お父さんの仰る事は僕も解ります、と言ったら嘘になります。僕は子供を設けた経験も、結婚もした事ありません。そして、社会人としての経験も皆無です。ですから、どれほど僕達が良かれと思いいこの道に進もうとしている事を甘い、馬鹿な選択であると言われるても仕方がありません。そして増田さん、いえ江利子さんの幸せを願うからこそ反対している事も解りました。ですが、江利子さんの幸せを願うのであれば、もう少し江利子さんの言葉に耳を傾けて下さいませんか？」

私の言葉に増田さんのお父さんは眉間にシワを寄せた。当たり前だ、自分の人生の半分も生きていない若造に娘の事を言われたのだ。だが、私は口を閉ざさないで言葉を紡いだ。

「江利子さんの幸せを願うのは親として当たり前だと思います。でも、江利子さんの意思を尊重しないのは少し違つと僕は思います。確かに長いスパンで考えるのならこれほど安定とはかけ離れた事は無いと思います。大きな失敗や挫折を味わうかも知れません。でも、江利子さんは決して後悔なんかしないはずです。江利子さんは過ぎた事を悔やむような人ではありません！そして何より、江利子

さんのような人が失敗をするとは僕は思えないのです。何をしても成功する人、そう思っただけでいいのです。だからこそ僕達はレーベルと契約をするまでに至った、まだ16か15の僕達です。技術面だけではバンドとしては上手いだけのバンドで終わります、でも、江利子さんの歌う歌、作る曲には人を惹きつける何かがあるんです。江利子さんだけではありません、ここにいます真美もそうです。」

私が伝える事は増田さんのしたい事、そして、真美と増田さんの二人が他の人と違う事。

「僕は未熟ながらプロのドラマーとして少ないながらも数々の現場でお仕事させて頂きました。その経験上から、私の感が必ず成功すると確信しているのです。江利子さんの事は僕が責任を持ちます。だから、江利子さんの事を思うのなら、どうか江利子さんの話を聞いてあげてください。」

私はテーブルに額を付けるくらいに頭を下げ、懇願した。どうか、増田さんの願いを聞いて欲しい。そう思うからだ。

「お父さん、私ね、最初は皆でバンドをするだけで良かった。その時はピアノを弾く意外でこんなにも楽しい事があるんだ、そう思ったの。それが真美さんと良くと三人で始めて、私と真美さんで歌って、凄く楽しくて。でもそれだけでなく、お客さんが喜ぶ姿を見た時、何よりの喜びとなったんだ。私達の曲で、歌詞で大勢の人が楽しんでくれる、元気を貰ったって言うてくれる。こんな事ってあるんだなって思った。そしたらこのバンドが私の中で何よりも掛け替えの無い物になったの。私達の曲をもっと大勢の人に聴いてもらいたい、真美さんや良くんの素晴らしさを皆に伝えたい。だから私は皆でデビューしたい！このバンドは私の、私の夢なの！」

増田さんが涙ながらに訴えた。力強く、ハッキリとした声で真っ直ぐに目を見ながら。その様子に一番驚いていたのは増田さんのお父さんだった。増田さんの思いがハッキリと伝わったのだらう。そして、私も増田さんの迫力に圧倒されそうになった。普段はのほほんとしているが、自分の意思を曲げない、強い気持ちを持っている。

彼女はそんな女性だ。

「いつのまにか大人になったんだな．．．．．それも強い女性に．．．．．」

そう呟くと、増田さんの方を見て、

「江利子、良い人を見つけたな。決して離すなよ、お前の生涯の宝物になるだろう。真美ちゃん、江利子とずっと友人でいてくれ。そして良くん、もしも江利子に何かあったら」

強い眼差しで私を見た。私はその眼差しに答えるべく強く頷き、

「はい。必ず江利子さんを守りぬきます。そして絶対に幸せにします。」

と言った。そして、言った後に気が付いた．．．．．まるで結婚前に彼女のお父さんに挨拶をしに行った男の台詞のようである、とハツとして増田さんを見ると、顔を真っ赤にしていた。そして、

「良くん、娘を頼む。」

増田さんのお父さんはそう言うのと頭を下げた。おかしい、これではまるでではなく本当に、そう思うと同時に増田さんのお父さんは顔をあげ、

「おい母さん、今日はお祝いだ。急いで食事の準備をしてくれ。」

「はい！江利子の旦那さんが決まりましたね！」

「ちよつと、お父さんお母さん！まだ私と良くんはそんな関係じゃない！」

「まっちゃん、もしかしてこれを狙って．．．．．」

気分を良くした増田さんのお父さんが食事の準備を促し、お母さんは娘に旦那が出来たと喜び、真美が嫉妬心を増田さんに向け、増田さんは増田さんで突然の事に狼狽している。まるで誘導されたかのように言わされた。何故こうなったのか．．．．．私は頭を抱えるしか無かった。

「あゝあ、まっちゃんにはしてやられたよ。まさか両親を使っちゃうとはね。」

「だから違うんです！あれは勝手にお父さんが！」

増田さん家で食事をご馳走になった後、私達は増田さんの部屋で談話をしていた。もちろん話題は先程の事なのだが……

「これなら私も反対されるんだった。」

「もう！」

真美が不貞腐れて、増田さんが必死に誤解を説く、という構図になっている。私が何も言えないで黙ってみていると、

「てか良も良だよ！何であんな事言ったの！両親の前で娘の事を幸せにするって言ったらああ思われても仕方ないじゃん！」

「いや……なんか、増田さんのお父さんに上手く誘導されて言われた気が……」

真美の言葉に曖昧な答えを言うしか無かった。私も何故あの時あと言ったのか全く解らないのだ。

「良くん！お父さんの前では私の事名前ですってましたよね？何で今は名前じゃないんですか？」

「え、いや……だって増田さんのお父さんも増田さんな訳だし」

「江利子って呼んでください！」

増田さんが私に顔を近づけながら言う。相変わらず増田さんはこういう所で行動力がある、なんてのんきに観察している場合じゃない。

「ま、「江利子！」え、江利子さ「さんもいらんです！」え、江利子……」

顔を段々と近づけながら、目を見て言うので従わずにはいられなかった。そしてとてつもなく顔が近い。この距離はまずい。まさに目と鼻の先である。心臓の鼓動が速くなってくるのが解る。江利子の顔がさらに近づき、もうこれ以上はと言うところで

「はいはい！離れようね！」

真美が江利子を私から引き離れた。

「・・・・・・・・あと少しだったのに！」

「ほんとまっちゃんは・・・・・・・・」

江利子が悔しそうに、真美が少々呆れた素振りをしている。私はほっと胸を撫で下ろし、そっつと部屋を出た。そして人知れずに荷物を持ち、玄関に向かった。

「お、お邪魔しました。」

小さくそうつ呟き、靴を履こうとした瞬間、

「どこに行くつもりなのかな？」

両肩を掴まれた。前に動こうとも動けない。左後には・・・・・・・・真美が、右後には・・・・・・・・江利子が笑って立っていた。どこに行こうというのか？そう言いたげな目をして笑っていた。まだまだ帰れない、そう思うと私は大きく肩を落とした。

「三人とも同意書も揃った事だし、君達はうちの専属となる。契約期間は四年間で、まあ延長するかどうかはその時に話しあおう。」
レベル本社で、私達三人は再び話し合いをした。主に今後の方向性である。親の同意を得た条件として極力、学業に支障を来さない事があげられている。レベル側も、この事に理解を示し、学校の長期休暇の時にライブ活動を行い、放課後にレコーディング、メディア出演をするようにしてくれる方向になった。

年内はレコーディングを中心に、一枚のシングルをリリースする事、来年の春までにアルバムをリリース、そしてそれに伴う関東圏のツアーを行う事が決まった。

「これで取り敢えず終わりかな。君達も急な話を良くここまで円滑に進めてくれた、感謝するよ。さすが薫さんが目を付けたバンドだ。今後、正式に専属となるとこれまのように好きにライブ等は出来な

い。だから今日から一週間後に正式に会社から連絡が来ると思っから、それまでにしたい事をしといてくれ。それじゃあまたその時に

「私達はサインをした後、互いに握手を交わし、その場を終えた。」

それから一週間、私達はアマチュアとして最後のライブを行うために急遽、顔見知りのライブハウスに頼み込んでイベントを行う事にした。参加するバンドは私達と関わり合いの多かったバンド、人達を選んだ。師匠にお願いした所、師匠も仲間を呼んで参加してくださる事になった。そして、コンテストで出会ったあのバンド、小学生ギタリストのいるあのバンドも出演してくれる事になった。

そして、ライブ当日……

「良！真美さん、増田！おめでとう、と言いつつ悔しいぜ。お前らが遠い所に行く気がしてならないぜ。」

「そんな事無いよ。取り敢えず今日は楽しもうよ、小倉もライブハウスデビューなんだしね。」

お祝いの言葉を言いながら悔しがる小倉に私はそう言葉をかけた。小倉も今回のライブに出演する。これを機に外の事を知ってもらいたいという思いがあったからだ。

「ああ、頑張るぜ！それじゃあちよつと行くわ。」

小倉は私の元を離れ、外に出て行った。内心、緊張感でいっぱいなのだろう。私が声をかける事は容易い、だが小倉が自分で乗り越える事こそが大事だと思い私は何も言わなかった。

ライブは無事に成功した。私達三人の最後のアマチュアのライブが終わった。

打ち上げも終わり、私は師匠と二人で近くの居酒屋に入った。

「良、二人だけだからちよつと真面目な話をしようじゃないか。」
カウンター席に付き、日本酒を飲みながら師匠は言った。

「良は解っているだろうが、これはゴールじゃない。スタートだからな。そこを履き違えないようにしておけ。」

私は頼んだソフトドリンクを一口も飲むこと無く、師匠の話に耳を傾けていた。

「今はCDが売れない時代だ。お前らは苦勞を強いられるだろう。だがそんなの会社には関係ない。お前らに価値がないと判断したら契約延長しない、最悪打ち切りだ。お前らは解散をするか、会社の言う通りに誰かがソロとしてデビューするか……間違い無くお前が切られるだろう。嬢ちゃん二人はアイドル顔負けのルックスを持っている。そんな奴らを逃す手はない……まあ、解るとおり結果が求められるんだ。」

「そうですね。確かに結果が全てだと。でも、僕はこのバンドが売れるって思っんですよ。理由なんかありません。僕の感がそう伝えてるんです。だからと言って努力を怠る気にはなりません。師匠、

僕はいずれレーベルを創りたいんですよ。理想は自分達だけの、どこかのメジャーの傘下でも構いません。そのためにも、こんな所で燻っている訳にはいかない。だから絶対に結果を出しますよ。」

私の感が必ず成功する、そう言ってるのだ。真美と江利子、この二人が売れないわけがない、と。根拠なんてどこにも無い、ただそう思うだけ。説得力は全く無い。だけど、私は信じてみたいと思う。

そして、いずれは自分達のレーベルを立ち上げ自由に創る。そのためにも私は大学で経営学を学びたいと思う。レーベルで実務等を経験する、学ぶ事をしつつ、知識を増やしていきたい。それが自分達で会社を経営するに当たって必要になるだろうから。それを師匠に伝えた。

師匠は、私の決意と言葉に対して、

「最高だ。最後は自分の心で決めるんだ。おまえのここがそう言うなら間違いないだろう。頑張れ、絶対にお前なら成功する。その時は約束忘れるなよ?」

笑いながら答えた。胸に手を当て、叩きながら。私も笑みを返し、

「来年の夏、ジャパンロックフェスで会いましょう。」

そう言い返した。私と師匠は互いに乾杯をし直した。グラスと猪口、大きさの違う二つの杯が重なる音が響いた。

高校一年生？ - 2（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

え〜っと、ようやく二人のフルネームが出ましたね。稲葉真美と増田江利子。こんな可愛らしい名前です。そして、バンド名決まっています！！！アハハ、どうしよう。何かいい名前ないかな？

それにしても暑いですね。皆さんも熱中症には十分気を付けてください。あれはきついです。私も昔部活動で味わったことがあるのですが、死にそうになりました。適度に水分と塩分を摂取してこの夏を乗り切ってください。

では、今回も読んで頂き誠にありがとうございました。

外伝？ さらに別の転生者の場合？（前書き）

だいぶ時間が置いてしまいました。今回の外伝はだいぶ話が違います。良が出る事ありませんし、匠が出る事ありません。日本が舞台でも無くなります。まだまだ全然話が出来上がっていないのでこれからどうするかは決めてませんが、漠然と最後の方は元から決めています。ただ、学園モノではないのでどうなるか……と。

まだまだ良達の方は終わりまで書いていないので続きますので、そちらを楽しみにして下さい。下さっている方々はこの話が合わなくてもどうか見切らないでください。では、宜しくお願いします！

外伝？ さらに別の転生者の場合？

何故、僕は生れて来たのだろう。家族からは出来そこないと言われ、学校ではクラスメイトとはなじめずに、仲の良い友達どころか、皆は僕の事を嫌っている。嫌っているという表現が正しいのかどうか解らないけど、色んな人に虐げられている事だけは事実だ。何がそんなに僕をこんな苦しい状況に陥らせているのか、見た目が悪いから？ 勉強も運動も出来ないから？

そんなに………持つて生まれた物だけで人の人生つて決まるものなの？ そういう風に人生つて出来ているの？ だったら、持つて生まれてこなかった人は他の人に虐げられるために生まれてきたの？

「アハハ。でさ、昨日のあれだけど。本当に面白かったんだよ。」
「マジで？ 見逃しちゃった………！………あいつまだ学校に来てるんだ。よく平気でいれるよね？」

「ほんとほんと！ 私だったら自殺するし！」

「だよね。」

僕がクラスに入るやいなや、それまで世間話をしていた女子が僕の話をしてきた。わざわざ僕に聞こえるか聞こえないかわらないの声で話している声を聞いていると、僕だつて嫌になる。人は慣れる生き物だ、とは言うけど僕には全然慣れる事なんか無い。

自分の席に着き、座ろうとした時、

「っ！」

机の上に落書きが書かれていた。消えないと問題になるから鉛筆で、机一面に僕の悪口を。それを消しゴムで必死に消している間も、周りの人からの声が聞こえる。

何で学校に来てるの？マジきもいんだけど。
死ねばいいのに。あいつって生きてる価値あるの？

何でここまで言われなきゃいけないんだろう。僕が君達に何をしたいのだろうか。僕は君達に関わらないようにしてきたじゃないか。なのに何でここまで言われなきゃいけないの？

「おい。」

誰かに呼ばれた気がして、僕は消しゴムで消すのを止めた瞬間、
「てめえ、何キしてんだよ！」

机事、僕は蹴られた。

「お前何キしてんだよ！うぜーんだよ。学校に来るなよ！」

「アハハ。そうだそうだー！」

「死ねよ。」

周りが僕を死ねとはやし立てる。なんでこんなに……こんなに僕は酷い目に遭わなければならないのだろう……

その日の夜、僕は自らの命を絶った。

「ハル様、夕食の時間でございます。」

「解った。」

召使いの言葉に僕は読んでいた書物を閉じ立ち上がり、その足で食卓へと向かった。

長いテーブルに所狭しと置かれた料理を目前に、僕は食前のお祈りをする。それを済ませると、召使い達がそれぞれの料理を皿に盛り、飲み物を僕達に注いでくれる。僕はそれを静かに、食器の音を立てる事無く口に運ぶ。美味である。専属の料理人達が腕を奮うのだ、万が一、僕達の誰かが口に合わない等と言えばそれだけで首になる。神経の一つ一つを張り巡らせ、慎重に作らなければならない。一流シェフのそのような料理が不味い訳が無い。

だが、

「ハルお兄様、今日のスープは少し微温くありません？」

妹のセリアの言葉に辺り一面の空気が凍る。これを良しとしない考えを父様と母様が思えば最後、スープを作った料理人、もしくは運んだ召使いの気遣いが無いと判断され処刑される。

「セリア、このスープはね、これくらいの温度が一番味が良くなるんだよ。それに僕も母様も父様も熱いスープは苦手だからね。」

「そうなのですか。お兄様は物知りですね。」

僕の言葉にセリアはほほ笑みながら口元をナプキンで吹いた。召使い達は表に出さずとも、安堵したのだろう。母様と父様も何事も無かったかのように食事を続けている。

僕のいるこの家は侯爵家、要は貴族の中でも比較的高い地位にある家だと思ってくれてもいい。何故僕がここにいいのか？という事は解らない。僕はあの日確かに死んだのだから。だから僕の今の名前はハル、ハル・クラリス・コンチェス、クラリス家の次男であり、……要するに良い所の坊ちゃんって事だ。僕が生きているこの時代は封建制度であり、前に暮らしていた時みたいに民主主義、平等なんて言葉は無い。生まれながらに全てが決まっている人が大勢いるのだ。僕みたいに良い所で生まれたのなら色々出来るのかも知れない。それでも自由に、なんて出来ないだろうけど。

僕より歳上の人達が頭を下げて様付けして呼ぶ、最初は違和感しか感じなかったのだけれど段々と慣れていき、今では当たり前となつてしまった。こうして、自殺をしたのに何事も無く、むしろ前よりも良い身分で生まれ変わる事が出来るなんて夢にも思っていなかった。今、身分が下の者達が僕を見て侮辱的な言葉を並べただけでそいつは首が飛ぶだろう。前に生きていたあいつらが侯爵よりも上の地位にいるわけが無い。せいぜいいたとしても農民だろう。まあ、一生会うことも無いだろうから復讐する事は出来ないのだけれど。

「お兄様、いらっしやいますか？」

セリアの声が廊下の方からしたのと同時に扉が叩かれた。僕は扉の前まで行き、扉を開け

「どうしたのセリア？」

と、声をかけた。セリアは私の顔を見るなり、

「お兄様、明日は何をするのか覚えています？」

と、聞いた。その様子はさながら遠足前の子供みたくそわそわしていた。僕は一寸考えたのだが、何があったのか思い出せず、腕を組み熟考していたら、

「憶えてないのですね……」

と、溜め息をつき呆れながらセリアは言った。その様子から何か大事な用事があったのだろうか？と頭をひねっていると、

「明日はお兄様と一緒に海へと行く予定です！お忘れになるなんて酷いです！」

そこでようやく僕は思い出した。確かに一月前程にそのような約束をしたはずだった。僕が勉強やら何やらで忙しかったためにすっかり忘れてしまっていた。

「ごめん！ほら、僕も忙しかったから……でも楽しみにしてたのは本当だよ！」

「本当なのですか？またいつものように学問の事ばかり考えていらしたのではないですか？」

「ち、違うよ！さっきはたまたま忘れていただけだから！」

疑る目で僕を見るセリアに、物怖じしながら僕は答えた。中々苦しい言い逃れだったのだが、

「解りました。明日は楽しみにしています。」

と言うと、セリアは踵を返し、僕の部屋の前から去っていった。

翌朝、馬車に僕とセリア、召使いが二人程乗り込み、僕達は海へ

と向かっていた。約30分程走ると海が見える。僕はこの場所が好きだった。崖を登り、水平線を眺めているだけ、これだけなのに何故か心が洗われるような気がしてならなかった。ボーッと崖に腰掛けながら眺める、たまに海鳥の鳴く声が聴こえ、崖下を覗き、それだけをするだけだった。いつからかセリアも来るようになり、一緒に会話をしながら眺める事が多くなった。

「もう少しでお着きになります。」

馬車の中から外を見ると、既に海が見えていた。もう少しで着く、そう思っていた時、馬車の中が大きく上下に揺れだした。

「!!!!!!」

体が大きく揺さぶられる、中に置いてある物が大きな音を立て崩れ落ち、割る音がする。召使いの人達は必死にセリアと僕を覆いかぶさるようにして抱きしめる。何か大事が起きて僕達に問題が無いように。上下していた動きが左右にも動き出し、その度に僕達は中で大きく揺さぶられた。僕を必死に抱きしめている体が中の側面に勢い良くぶつかり、僕は体を投げ出された。その衝撃のせいなのか、何かで反対側のドアが開かれてしまった。そして、その方向に僕の体が勢い良く放り出され、ドアの隙間から僕は外に飛び出た。

「ハル様!!!!!!」

地面に着いても大怪我をするのだろう、そう考えていた。

だが、僕の体は地面に着く事が無かった。

僕の体は地面に着く事無く、崖下へ向かって落ちていった。

外伝？ さらに別の転生者の場合？（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

えゝ、だいぶ違う設定、内容、話なのでお見苦しいかもしれませんがん……元々の方も酷いんですけどね。

前書きでも書いたように、これはある意味博打です。超博打です。1000円札を持って慶次の等価を打つような感じで書きました。ですので、宜しければ感想等私に書いてくださいましたのならば嬉しいです。学園物、って登録しておいて学園物じゃないのを書いてしまったので問題もあるんですけど……

あ、近日中には良の方は確実に書き上げたいと思います。もしかしたら匠の方になるかもしれませんけど（笑）

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！どうか、この話も書き続けていけるようになったのならば嬉しいです！

外伝？ さらに別の転生者の場合？（前書き）

と言う事で外伝？の？です。結構間際らしいですね。そういえば、夏祭りに行った時にカップルが物凄く目につきました。同年代の友達もほとんど異性と付き合い、皆カップルで夏祭りに向かいます。ああ、良いな。私もいつかはカップルで夏祭りを、防波堤で一緒に花火を…….と思う気持ちよりもカップル爆死しろって気持ちの方が大きかったです。人として最低だと感じて泣きながらこの焼きを食べていました。

まあ、それだけなんですが…….と、言う訳で今回も宜しくお願ひします！皆さんが楽しく読んで頂けたのなら幸いです。

外伝？ さらに別の転生者の場合？

ああ、また僕は死ぬのか。

前世で自ら死んだんだ、その罰当たりなのかも知れない。あの悪い環境を抜け出すために死んだ事、環境を変えようとしなかった事、逃げ出した僕への報いなのか？ならば何故この家に生まれたのだろうか？記憶を残し、時代は違うと言えど望んでも手に入らない境遇に生まれて。

水面に背を向け少しずつ落ちていく、自分の体がスローモーションのように落ちていくかのように感じる。この高さから落ちたら死ぬだろうな、運良く生きていたとしても五体満足では生きれないんだろうな、そのように頭の中で考えられる程、ゆっくりと、少しずつ落ちていくように体感していた。下を見るときもう少しで水面に着く。セリアや召使いたちは大丈夫だったのだろうか？今更彼女たちの心配をする僕は人思いじゃないのかも知れない。

ゆっくりと、ゆっくりと体は落ていき、ついに水面に僕の体は接触した。その瞬間、今までの遅い体感速度からいつも通りの速度に戻った気がした。背中から伝わる物凄い衝撃に、痛みを感じる前に、僕の意識は手放す事を選択した。

音が聴こえる、繊細な音色で澄み切るような音が。こっちに来てから聴いた事のある楽器の音色だ。なんだったつけ？その音が徐々に鮮明に聴こえるように感じた時、僕は目を開けた。体を起こそうとした時、

「・・・・・・・・・・っ！！！！！！」

体中に痛みが走り、僕は起きあがるのを止めた。そうだった、僕は崖から落ちたのだった。でも、痛みがあると言う事はここは天国では無い。どうやら僕は生きのびる事が出来たみたいだ。何故生きれたのかは解らないが。視線を足元に向けてみようと頭を起こす。多少痛みを感じるが、先程のように激痛を伴なう事は無かったので無理やり頭を起こした。体の上にシートが被せられ、その膨れ上がりを見るとどうやら五体満足のようだ。手足が動くかどうかは現状では試しようが無いが。そう思っている間にも何かの音色は聴こえてくる。室内に響き渡るその音は空気感を持ち、エコーがかかっているかのように聴こえる。

「ああ、この音はオルガンか。」

教会に行けば修道士が礼拝のために演奏しているのを、稀にただ弾いているだけを目撃していた。そのオルガンに似た音色。音量、体に響く音色は違うのだが、これは間違いなくオルガンの音である。だが僕の家にはオルガンは無い。昔に比べて小型化され、貴族の、僕の家のような身分なら持つ事は可能なのだが、楽器を演奏する事は父の考えにそぐわないらしく、置かれていないはずだ。首だけを回

し、辺りを見渡すと、この部屋は自分の知らない部屋である事が見受けられた。僕の家こんな質素で狭い部屋は召使いたち用である。間違つても僕がそのような場所で寝かされる事は無い。ならば、あれから僕は誰かに拾われたのだろうか？

「あら、ようやく目を覚ましたんですね。」

声が聴こえた方を向いた先にいたのは、修道服を身に纏とい、手に布巾とボウルを持っていた若い女性だった。

「僕はハルと言います。失礼ながら貴方のお名前を。それにここはどこですか？」

「私はマリーと言います。ここはですね、小さな教会なんですけど、身寄りの無い子供達を預かって育ててもいるんですよ。だからハル君を海辺から運んでくれたのもこの子供達なんです。」

マリーさんは僕の問いに笑みを浮かべながら丁寧に答えてくれた。身寄りの無い子供、それは恐らく捨て子や戦争孤児なのだろう。貧しい家庭だと子供を育てるはおろか、自分達の食い扶持だけで精一杯という所も少なく無い。そんな家庭では子供を捨てるという事は在り来りである。それ以外にもつい最近までこの国は隣国と戦争をしていた。近代のように大多数の質量兵器、多数の戦死者を出す事はなくても、いつだって戦争の被害を被るのは民である。なるべく戦地は市街では無く、平原等広い場所を使われるのだが、運悪く農民等が巻き込まれる場合がある。逃走兵等により村を焼かれる、壊滅させられるという事も珍しく無い。幸いにもこの国は負けていないのだから敗戦国ではないので国民は酷い扱いにはならなかったが、相手国側はどのような事をされているのか考えたくもない。

「そうなのですか。その子達に僕はお礼をしなければなりませんね。……っ！！」

寝たままで受け答えるのは失礼に値すると思い体を起こそうとするのだが、体中の痛みが顔が歪む。それを案じてか、マリーさんは優しく、

「体を動かさない方が宜しいですよ。貴方の体は重症なのでから。」

お医者様にお見せした時に一月は安静にしていなさいと言われたのよ。貴方が運ばれてからまだ半月程しか経っていません。決して無理をしてはなりませんよ。」

僕に言い、ベットに歩み寄ると手にしていた物を机の上に置いた。マリーさんの言葉通りだと、僕はあれから半月ほど眠っていた事になる。その間看病や身の回りの世話をして下さった事を考えると感謝してもしきれない。

「半月もお世話になっていたのですか？それは誠に申し訳ございません。このご恩は必ず返させてください。」

「いいですよ。何があつたのか存じ上げませんが、神様が貴方を救ってくださったのです。ならば私が貴方を看病する事は決まっている事なのです。感謝をするのなら神様に感謝しなくてはなりませんね。」

胸の前で十字を切り、マリーさんは両手を合わせて祈った。その姿は修道女に相応しく、堂々としていた。その様子を見ていたら廊下から足音が近づいてくるのが聴こえた。足音がすぐそこまで聴こえると、勢い良くドアが開かれ、

「シスター！！あと少しでお祈りの時間ですよ！！！！急いで下さい！！！」

黒髪を肩くらいまで伸ばし、マリーさんと同じような修道服を見に纏った活発そうな少女が入ってきた。走ってきたのか肩を上下に揺らし、息を乱しながら。

「シャロン・・・・・・・・何回言えばいいのですか？少しは淑女としての嗜みを・・・・・・・・それにこの部屋には患者がいるのですよ？」

「でもシスター！！！」

「でもじゃありません。ハルさんのお身体に差し支えたらどうするのですか？元気があるのは良い事ですけど時と場所を考えなさい。」
優しく諭すように言っているつもりなのだろうが、それが余計に怖く感じる。人によっては起こった時は怒鳴るよりも静かに喋る方が怖い人がある。マリーさんはまさにそちらのほうだろう。シャロン

と呼ばれた少女も段々と顔の色が青くなっていくのが目に見えて解る。

「シ、シスター………」

「シャロン、私はもう少ししたら行きます。必ず時間には間に合いますから安心してください。さあお行きなさい。皆をしつかりとまとめるのですよ?」

マリーさんは彼女に歩み寄ると目線を同じにして言った。先程までの優しさの中に怖さがある物言いでは無く、全面的に優しさのみが伝わる。彼女もそれが伝わったのか、表情が明るくなった。

「はい!」

「それじゃあ部屋を出る前にハルさんに一言謝るのですよ?」

「はいシスター。騒いでしまってごめんなさい。」

優雅さが少し欠けるものの、誠意のこもっている事は伝わる。僕は気を悪くする所か、全然きにしていないのだからそこまでしてもらう事は無い。

「全然大丈夫ですから。早く礼拝所に行って子供達の所に行ってください。」

「ありがとうございます!」

彼女は元氣よく頷くと駆け足で部屋を去って行った。

「ああ!もうあの子は……お見苦しい所をお見せしましたね。」

「いいえ。元氣があるのは良い事ですよ。なんだか年寄りくさい物言いになっちゃいましたね。」

「私もハルさんもまだまだこれからの人ですよ。ハルさんはシャロンと同じ位の歳に見えますよ?」

ほほ笑みを浮かべながらマリーさんは答えた。マリーさんの歳が非常に気になるところだが、女性に歳を聞くのは失礼な行為だ。それに、何気なく聞いて怖い事にでもなったら、

「ハルさん?もしかして私は若く無いなんて思っていないませんか?」

「い、いいえ!そんな事は」

当たらずも遠からずな事を急に聞かれて僕の声はうわずってしまった。マリーさんを見るとさげすむような視線を僕に向けていた。その視線に狼狽していると、

「もう、私はこう見えてもまだ23ですよ？でも主に身も心も捧げているので駄目ですよ？」

そう言うマリーさんは修道女と言うよりは歳相応の女性が垣間見え、僕は少しだけ心がときめいてしまった。

部屋に微かに聴こえる賛美歌の音色に耳を傾けながら窓の外を眺めていた。陽射しが部屋に入り、風が室内に流れてくる。その風の心地良さと綺麗な歌声を聴いていると心が洗われるようだった。

「セリアや皆は大丈夫なのかな・・・」

僕だけが運悪く、ならばそれにこした事はない。不慮の事故で命を落とす事は無念過ぎる。それにいくら人はいつか死ぬと言っても出来る事ならば幸せに見守られながら死んで行つてほしい。

「早く動けるようになるまで回復しないとね。」

父様や母様の事も気がかりだ。半月も経っているのだからもう僕は亡くなっている人かも知れないけど、どうにかして二人に元気な姿を見せてあげたい。

礼拝が終わり、マリーさんが食事を持って部屋に入ってきた時、

僕はクラリス家の事を話し、父様に僕の安否を伝えて欲しい旨を喋った。マリーさんは快く承諾して下さり、一番近くの修道院から伝書鳩を飛ばしてくれる事になった。

「本当にご迷惑をおかけしてすみません。」

「主に使える身としては当たり前ですよ。」

僕が目覚ましてからさらに半月が経過した。身体の方もだいぶ良くなり、日常生活に支障がきたさなくらいに送れるようになるまで回復した。子供達の世話をしたり、文字や勉強を教え、マリーさんの手伝いをして日々を過ごしていた。

「ハル！今日は何のお話してくれるの！？」

「お話よりも僕達と一緒に遊ぼうよ」

「遊ぼう！」

「先にシャルとアンとセシリーにお話をしなきゃいけないんだ。それから遊ぼうね。」

子供達も僕に懐いてくれたので、暇の無い日々だった。女の子達はお話や勉強事に興味を示してくれて、僕の話す内容は小さい子以外にも、シャロンやマリーさんまでも興味を抱いて聞いてくれる。男の子は体を動かす遊びが大好きなので、あまり一緒に遊んであげられないが、徐々に体が動いてくれるようになるにつれて様々な遊びを教えたり、一緒に行うようになった。

椅子に腰掛け、前世で読んだり、聞いたりした事のある物語を僕は女の子達に聞かせた。僕の話聴いている時の女の子達の目はとも楽しそうで、喋っている僕の方が嬉しくなる。

「はい、と言う事でここまでだよ。続きは明日かな？ちゃんと皆がマリーさんのお手伝いを頑張ったら話すよ。」

「解った！私、シスターのお手伝いいっぱい頑張るよ！」

「私も！」

「私も頑張る！」

僕の言葉に元気よく返事をして、彼女達はマリーさんの元へ走っていった。こうして皆が手伝えばマリーさんも仕事の量が減り助かるだろう。それに、マリーさんは子供達と一緒にいるのが大好きな人だ。手伝ってくれるとなると喜ぶだろう。

「ハル、ちよつと洗濯物干すの手伝って！」
遠くからシャロンが声をかける。

「解った。すぐ行くよ。」

椅子から立ち上がり、僕はシャロンの元へと向かった。今日も天気が良い。選択を干すのには最適な日和だろう。

洗濯物を干していると、

「ありがとねハル。ハルが来てから皆楽しそうだもん。」

シーツを木に干しながらシャロンが言った。

「ううん。僕も楽しいから。」

「私もハルのお話楽しみにしてるんだからね。」

「ありがと、シャロン。」

「シャロンお姉ちゃんでしょ！？私の方が歳上なんだから！」

他愛も無い話をしながら僕とシャロンは洗濯物を干していった。実はシャロンは僕よりも一個上なのだ。それが解るやいなやシャロンは僕にお姉ちゃんと呼べと言うようになった。僕はこれまで姉を持った事が無かったのと、照れからお姉ちゃんとは言い辛くてあまり言わないようにしている。シャロンは呼んで欲しいのか呼び捨ての時は口ずっぱく僕に指摘してくる。でも、口では言えなくても僕の

中でシャロンは姉的存在になっていったのが解った。

「シャ、」

「お姉ちゃん！」

「お、お姉ちゃん。」

「うん！なに？」

「こういう生活って楽しいね。」

翌日、クラリス家からの伝書が届いた。

「クラリス家のハル・クラリス」コンチエスは既に亡くなっておりこの世に存在しない。よって、そちらにいるハルと名乗る人物はクラリス家とは一切関係無い人物であり、当家には関わりは無い。」

外伝？ さらに別の転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

ええ、結構急展開という形で作ってみました。どうなるかは・・・
・・・どうなるんでしょうね？そう言えば、三万PV達成しました！
本当に皆さんありがとうございます！一日だけ物凄くアクセス数
が多かったので何でだろう？って思ったらくここじゃない投稿サイト
の搜索の方で名前が挙がってたみたいです。正直、めっちゃ嬉し
かったです！あのサイトを常日頃利用している自分にしたらめっちゃ
くっちゃ嬉しかったです！本当に皆さんありがとうございます。

と言うことで今回も読んで頂き誠にありがとうございます！

外伝？ さらに別の転生者の場合？ （前書き）

はい、？です！何とか書けました！

そう言えばフルメタの最終巻、ようやく読み終わりました！素晴らしいですね、そして賀東さんはやっぱり凄い！あと緋弾のアリアの最新刊も、来月は境界線上のホライゾンとISの新刊が出るとか……めっちゃ趣味の事ばかり書いてしまいましたけど、頑張つて書きました。今回の話も皆さんが楽しく読んで頂けるように頑張りました。それではどうぞ宜しくお願いします！

外伝？ さらに別の転生者の場合？

「クラリス家のハル・クラリス」コンチェスは既に亡くなっておりこの世に存在しない。よって、そちらにいるハルと名乗る人物はクラリス家とは一切関係無い人物であり、当家には関わりは無い。」

クラリス家の正式な返答内容。要するに、僕はもうハル・クラリス「コンチェスでは無い。ならば僕は誰なのか？僕はハルでは無いのか？この世に存在しない人物、存在してはいけない人物。

「ハル君……」

ハルとは一体誰なんだ？ハルは僕ではないのか？今ここにいる僕は一体何者なんだ？

「ハル？」

「……はは、僕はハルじゃ無いんだ……ハルじゃ……無いんだ……」

僕は誰なの？ねえマリィさん、シャロン、ハル・クラリス」コンチエスはもう死んでいなくなってるんだってよ。おかしいよね。僕は生きてるのに……でもクラリス家には僕の居場所は無いんだって。」僕の中にあつた何かが失われて行く。クラリス家の屋敷で過ごした日々が、生活が、全て頭の中に流れては消えて行く。母様から生まれた日の記憶も、兄様達と遊んだ記憶も、父様から学んだ記憶も、召使い達にお世話してもらった記憶も、セリアと一緒に観た海の景色の記憶も。

「ハハハ、僕って……僕は……ぼ……」

足が、体中に力が入らない。立ってられない、それに体の内面から何かが沸き上がってくる。抑えきれない、胃から食堂を通り、喉を伝って何かが逆流する。駄目だ、吐き出しちゃ駄目だ、全てが僕の生きてきた全てが吐き出される気がする。絶対に吐き出しちゃ駄目だ。吐き出したら……

「……う……！！！！！！！！！！」

「ハル！しっかりして！」

……駄目だ、今吐き出してしまったら何もかもが失くなる。そんな事になったら僕は、僕は僕でいられなくなる！でも口からは何かが吐き出される。吐いちゃ駄目なのに、駄目だっと思うのに体が言う事をきかない。辛い、胃から伝って来る物が出るのが辛い。辛い、吐く度に息が出来ずに咳き込むのが辛い、辛い……

<Side Another>

ハルの家から伝書が届いた。丁度、お昼寝の時間で私とシスターとハルしか起きていなかったで、シスターが伝書を受け取り、それを読んだ。

ハルの家は大貴族らしく、家の方が心配しているかも、と言う事でハルがシスターにお願いして伝書を出した。私達は帰る場所はこのけど、ハルにはハルの帰る場所がある。それはとても良い事であると同時に、いつかは別れなければいけない事に子供達やシスターも寂しさがあつたと思う。もちろん私も皆と同じように寂しく思った。

「でも、ハル君には家族がいますからね。シャロンにとっての私みたいな人がいるですよ。寂しいですけど我慢しなければなりませんよ。」

シスターはそう言うけど、本当は一緒にいたいんだと思う。私より一個下とは言っても体は大きいし、男の子が手伝ってくれるのは大きい、何よりも一緒にいて楽しいはずなのだから。

シスターが伝書を読み終え、ハルが自分にそれを読ませて欲しいと言った時、シスターは難しい顔をした。まるで見せたく無いような、ハルに伝書を渡したくなさそうな複雑な顔をしていた。私はそれがここに来てハルがいなくなるのが嫌なのかなって思った。ハルがこれからの事もあるから、と言って無理やりシスターの手から無理やり取って読もうとした時、いつも凛々しく、優しい表情のシスターが悲しそうな、泣きそうな顔を表に出した。私はその顔を見て、それまでのハルがいなくなる事が嫌なのではなく、伝書の内容をハルに見せたくないのだと確信した。

ハルが伝書を読んでいる間、シスターは酷く狼狽しているように見えた。そろそろ読み終わってもいい頃なのに、ハルは一向に伝書から目を離さない、何回も、何回も読み直しているように見えた。目の動きが止まっても、暫く伝書から目を離さなかった。その時間がとても長く感じた。いつまでたってもハルは顔を下にしたまま、伝書を手を持ったままだった。私は堪らず、ハルの名前を呼んだ。ハルの様子を探るように、か細い声で。続いてシスターも名前を呼んだが、その声は私以上に細く、小さい声で、私よりもハルの様子を伺うような、心配しているように聞こえた。するとハルは肩を小さく揺らしながら、

「……はは、僕はハルじゃ無いんだ……ハルじゃ……無いんだ……僕は誰なの？ねえマリーさん、シャロン、ハル・クラリス」コンチエスはもう死んでいなくなってるんだってよ。おかしいよね。僕は生きてるのに……でもクラリス家には僕の居場所が無いんだって。」最初は呟きながら、そして、私達の方を見ると自分はハルじゃ無いと言った。嘲るように笑い、目が血走り、狂気じみた表情を浮かべ

ながら静かに喋った。私はそんなハルに、何も言えずに、ただただ
啞然とするしか出来なかった。

でもこのままじゃハルが壊れていく、大事な弟があの時みたいになつた矢われる！そんな事は絶対に嫌だ！そう思いハルに何か言おうとした時、

[illegible]

ハルは苦しみだし、その場に膝を着くと同時に口を手で押さえ下を向いた。

「ハル君！」

シスターが慌ててハルの元に駆け寄る。その間にハルは手で押えきれないほど口から物を吐いた。シスターがハルの背中をさすり、必死に呼び掛けながら介抱する。また、また私は弟を失ってしまうの？ 苦しんでいる弟を見殺しにしちゃうの？

「いぢ……」

嫌だ、そんなの嫌だ、弟が、ハルが死んじゃうなんて嫌だ、そんなの絶対に嫌だ。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！何で？どうしてハルが苦しまなくちゃいけないの？どうして私達ばかりこんな思いをしなくちゃいけないの？どうして？ねえ、神様どうして？私、ちゃんと毎日お祈りしてるよ？なのに何でハルはこんなに苦しんでいるの？ねえ、どうして？どうしてなの神様？どうして私の弟はいつもこんな目に遭わなくちゃいけないの？ねえどうして……どうして！！！！！！！！！！

「シャロン！！！！」

シスターの怒声で私はハツと我に返った。シスターの方を向くと、ハルの背中をさすりながら私の目を見て

「急いで水を汲んで来て！それとベットの準備を！ハル君は必ず助かります、だからしつかりして！！」

「は、はい！」

私は急いで水を汲みに井戸へ向かった。ハルが死ぬ訳では無い、今は精神に負荷が荷重に掛かっている状態だ。部屋を出る時にチラッと見た時ハルは気を失っているようだった。ならばハルが次に目覚めるまできちんと整えてあげてそれからハルの心を直していけば良い。ハルはまだ死んでいないんだ、私に出来る事はこれからまだまだある。今ここで愚図愚図している場合じゃないんだ。

ハルの身体を綺麗にし、着替を行った後私とシスターでハルをベツトに寝かせた。段々呼吸も安定していき、どうにか一段落着いたみたい。ただ、ハルが目覚めた時にどんな行動をするか解らない。その時に側にいて、落ち着かせる事が最も重要で、私が最も頑張らなければならない事。

「シャロン、ありがとうございます。」

「いえ、私も気が動転してしまいシスターに迷惑を掛けましたから。」

室内の空気は異様なまでに暗い。幸いにもちっちゃい子達はお昼寝

の時間だったからこの事を知っているのは私とシスターだけだ。あの子達には何とか有耶無耶にしておける。ハルのさつきみたいな様子を見せたく無い。

「シャロン……貴方も辛かったのですよね？それなのに怒鳴ってしまつてごめんなさい。」

シスターは私に申し訳なさそうに謝った。私の事は小さい頃から知っている、ここで生活した事も、ここに来る事になった経緯も。だから謝っているのだらうけど、

「いえ、シスターが謝る事じゃないですよ。ちよつとシェーンと重なつちやいまして……もう何年も前なんですけどね。ハルって、シェーンと同じ年だったから余計に……だから本当は誰より早くハルの元に駆けつけなくちゃならなかったんです。」

私はシスターに精一杯の笑顔を向けて言つた。そう、本当ならば動転している場合じゃなかった、シスターよりも早くにハルの元に駆けつけて介抱しなければならなかった。私がお姉ちゃんなんだから。

「シャロン……」

シスターは私に近寄ると、私を抱き寄せた。シスターの胸の間に私の顔がうずくまるように、優しく、優しく頭を撫でられながら。最初は驚いた。だって私はここに居る子達よりもお姉さんで、一番しつかりしなければならんだ。それが、小さい頃のようにこうされるなんて。でも段々と心が落ち着いてくる、シスターの温もりが伝わる、慈悲深く、全ての者を包むこむような。マリア様がもし今この世界にいらつしゃつたのならそれは、それはシスターなので無いだろうか？

「シスター……シスター！！！！！！！！」

シスターに抱きしめられ続け、何かが肩から降りたように感じた時私は叫ばずにはいられなかった。胸の中で叫びながら、シスターと叫んでいると、私の中から悲しみが外に溢れでた。いっぱいいっぱい涙が溢れた、いっぱいいっぱい悲しさが込み上げては外に出て行くように感じた。

「主よ、どうかこの子達にご加護を……」
私はシスターにしがみつきながら、気が済むまで泣いた。

<Side Another2>

「シスター！！！！！！！！！！」

シャロンが私の胸で悲しみを吐き出している。シャロンの辛さ、悲しさは私以上でしょう。小さい頃に戦争で家族と弟を無くして、行く宛の無かったこの子を拾った経緯を考えれば、シャロンにとって家族を失うのはどれほど辛い事か、家族が傷つく事がどれほど辛い事か。シャロンにとってハル君は本当の弟、シェーン君と重なったのも無理の無い事です。歳が同じだけでは無かったのでしょうか、どこかハル君はシェーン君と似ていたに違いありません。シャロンがハル君に顔を真っ赤にしながらお姉ちゃんと言われた時、シャロンの顔はいつもより輝き、笑っているように見えました。

ここ暫く、シャロンがこんなに泣いている姿を私は見たことがありません。誰よりも私の手助けをしてくれて、子供達の面倒を見て、しっかりと皆のお姉ちゃんの役割をするシャロンの泣き顔を。しっかりとしようと、誰よりも強くあるうとするシャロンは、今日の様な事がまた起きたのらきつと今のように誰よりも悩みを、悲しみを胸に抱え込もうとするでしょう。それではいつかシャロン自信が壊れてしまいます。そうならないように、私が修道院にいた時、悩みを、悲しい事をシスターに伝え心が軽くなったように、シャロンにとって私が本当のシスターと思えるようにならなければなりません。

「主よ、どうかこの子達にご加護を……」

この子達はいつぱい辛い思いをしています。主よ、私達を見てくださっているのならばどうか、どうかこの子達に祝福を、ご加護をお与え下さい。この子達に幸せが訪れるように、この先笑って暮らせるように。主よ、どうかこの子達にご加護を……

外伝？ さらに別の転生者の場合？ （後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます！

前書きとあとがきに結構好き勝手書いてますけど皆さん読んでいらっしやるのですかね？結構気になります。

さて、この外伝、どうんよりと暗い感じで始まり、明るくなったと思いきやはたまた暗くなる、なんて事でしょう！間違いなく精神的ダメージは大きいはずです！まあ、こんな感じで書き続けてたら良の方をどう書けばいいんだ！と感じてしまったり。

それではいつものごとく感想をお待ちしております！

では、今回も読んで頂き誠にありがとうございます！

高校一年生？ - 1（前書き）

遅くなりました……そして、良編再開です。まゝ、いろいろありましたが、今回も皆様が楽しんで読んでくだされば幸いです。では、どうぞ宜しくお願いします！

高校一年生？ - 1

「良、ピッチがずれてる。ちゃんとオクターブ合わせたのか？」

「すみません。」

私は急いでチューナーのスイッチを踏み、オクターブの確認をする。ほんの僅かだがGとBのオクターブが高い。僅かな音の違いでも、レコーディングにおいては多大に影響をもたらす。世に出す以上、バンド側、レーベル側、共に妥協を許さない。それが商業ラインに乗せて音楽を出す者の義務である。

「確認しました。今度はバッチリです。」

「本当か？弾いてみる？」

「はい。」

再度チューナーのスイッチを押し、ギターの音が出るようにする。そして全開放弦を鳴らした後、それぞれの弦の単音を弾いた。ガラス窓の向こうからエンジニアがOKサインを出す。

「じゃあもう一回。今度こそしっかり決める。駄目だったらお前はギタリストとしては首だ。」

「はい。行きます。」

ヘッドフォンからクリック音が聴こえ始め、私はギターをかき鳴らした。

「良、コーラスなんだけど……あんたのコーラス入れる？ぶつちやけ無くても良いような気がするんだけど。」

「ああ……じゃあ無しで行こうか。今後は全部歌系は真美と江利子に任せるよ。」

水を一口飲んだ後に私は答えた。今まで何曲か私もコーラスをする場面があったのだが、レコーディングしている内に女性陣だけのコーラスでも十分だと感じた。むしろ所々音を外してしまう私を外す方が良いのではと考えていた所だった。

「じゃあ私達だけね。良は後何も無いでしょ？どうする、帰る？」

「どうしようかな……」

「迷うくらいなら残りましょうよ！皆で一緒に帰りましょう！」

「そうしようかな。じゃあ見ているよ。頑張つて。」

残りは歌物だけなのだが、一応残る事に決めた。

夏休みが終わり、私達はレコーディング作業に勤しんでいた。シングルに出す用にと二曲レコーディングする事になり、一曲は歌を入れるだけで完成という所まで来た。わざわざ曲を作ってからレコーディングと言う訳では無く、既存の曲をシングルで出す事に決まったのでそこまで時間は掛からない、と思っていたのだが、私以外の二人は始めてのレコーディングにだいぶ手こずってしまったようだ。プロデューサーの要求する事に即座に理解、対応する事が難しかったらしく、二人共最初は戸惑いを隠せなかった。だが、彼女達の適応力は凄まじく、翌日にはもう要求していた事に直ぐさに答える事が出来ていた。そして、この中で一番時間を使ってしまったのが私のリズムギターである。スタジオ音源だから音を厚くしてはどうか、と言う事でリズムギターを入れる事にしたのだ。そこまで難しい事をしないのだから私でも大丈夫だろうと思い、プロデューサーに伝えギター録りをしたのだが、私が思う以上に音、ピッチについて厳しく駄目出しされた。そのせいで歌入りするまでにだいぶ時間が掛かってしまった。もしかしたら、今後はギタリストを呼ばれるかも知れない。ギターの方も結構自信があったのだがだいぶへこんだ。

ドラムの方は良くも悪くもいつも通りだったのだが、そろそろ新

しい金物系に変えなければならない。ただ、レコーディングやこのバンドに使っている物は安い物ではない、そこそこ値段がはるのが悩みの一つだ。経費として落ちれば良いのだが、世の中そんなに甘くは無い。もつとも、有名になるなりしたらメーカーと契約、タダで試供品を貰えたりするのだが……今の私には関係無い話だ。

「良、あのギターだけだよ。次使う時までにはメンテ出しておけ。そうじゃ無かったら今後は二度とお前にギター弾かせないからな。」
ギター録りが終わると同時に、プロデューサーは私のそう言った。

ギタリストの方も何とか首にならずに済んだようだ……何とかではあるが。

「明日学校か……てか、そろそろ文化祭だね。もう出れないのかな？」

「ま、言えは何かなるかもしれないけれど……今回は駄目だろうね。まだレコーディング終わってないし。それに直ぐにアルバムの方もあるからね。」

休憩室で椅子に座りながら私は答えた。数週間後に文化祭が行われる。だが、今回は私達の出番は無い。個人個人ならまだしもバンドとしてならばいささかややこしくなるからである。まだ契約したばかりでかつ、レコーディングも終えていない今の時期に色んな人にこれ以上忙しくさせたくない、との皆の意見で今回は自粛する形となった。

「そうだ、真美さんも良くんもこれからお時間ありますか？良かったら家でご飯食べていきませんか？」

「え、いいの？もちろん行くよ！良も行くでしょ？」

江利子の誘いに真美は乗り気で答え、私に問うてきた。だが私は、

「ごめん、二時間後に学校でバンド練習なんだ。」

そう答えた瞬間、二人は驚くようにこちらを向き、

「いつのまにバンド組んでたの？」

「何で私を誘ってくれなかったんですか！？酷いです！」

真美は少し呆気に取りられた顔をしながら、江利子はむっとした顔を
して尋ねてきた。

「いや、その時二人とも大変そうだったしさ。それに小倉とだよ？」

「でも、メンバーに女の人とかいるんじゃないんですか？」

ジト目でそう言う江利子は本当に怖く感じる。まるで浮気は絶対に
許さないと妻が夫に念を押しているかのようである。最近ますます
強気な態度の江利子に少したじろきながらふとメンバーの事を考え
た。私は小倉にバンドでギターを弾かないか？と誘われただけで他
のメンバーもやる曲も知らない。

「そういえば誰とやるとか聞いてないな……」

小声で呟いたにも関わらず、

「ほら！せ～～～たい女の子いますよ！先輩にも同学年にも女
の子いっぱいいるんですからね！小倉くんの事だから絶対入れてま
すよ！」

江利子は私の呟きに強くそう答えた。なぜあの呟きが聞こえたのだ
ろうか？

「あゝ、小倉だもんね……でもまっちゃん大丈夫だよ！何かあった
ら……ね？」

言いはしないが、解っているだろ？と念を押すかの真美の言い様で
ある。顔は笑ってはいるのに目が笑っていないのはそのためだろう。
二人ともう一人と長年過ごす事によって目は口程にものを言う事を
身を持って知る事が出来る。

「ま、まあ……何も無いと思うよ……うん。」

二人の物を言わない迫力にたじろきながらも、何も無いであろう事
を伝えた。誰でも良いからこの空気をどうかして欲しい、そう思
っている部屋の中にマネージャーが入ってきた。

「お、皆揃ってるね。今日はお疲れ様、次なんだけど来週の日曜
日の１７時からだね。忘れてないよね？土日はいつも通りの時間ね。」

「解ってますよ。」

「はいはい、覚えてますよ。」

「大丈夫です！」

「なら良かった。取り敢えず今日はお疲れ様。次からはもう一つの方だけど……それにしてもレコーディングってこんなに早く進むものじゃ無かったんだけだね。」

マネージャーの呟きも最もである。新人バンドのレコーディングは一曲だけだとしてもこんな短時間で終わるハズは無い。長年活動を続けセミプロ、プロレベルのバンドならいざ知れず、高校生バンドではまず無いだろう。あまりにもレベルが低すぎてプロがレコーディングする場合もある。

「良くんは元々プロでしたしね。」

「良は元より君達二人も十分プロレベルだよ……技術もあって曲作りの才能もあるのか……ほんと、君等みたいなのが上に行くんだらうね……」

マネージャーが若干羨ましそうにこちらを見て言った。元々ミュージシャン志望だったそうなのだが、大学時代に自分の限界を感じて諦め、マネージャーになったそうだ。まだ入社して三年目と年齢が若い分そう思う気持ちは大きいのだろう。

「ま、取り敢えず今日はこれでおしまい！機材は……僕が全部積み込むのか……そしてそれぞれの家まで持って行くと。そうだ、ついだから家まで送るかい？これから何処か行くんだったらそこまで乗せていつてあげるよ？俺も会社に戻るし。」

「じゃあ私をまっちゃんの家まで送ってよ！良は学校だって。」

「了解。それじゃあ準備が出来たら駐車場まで来てね。」

マネージャーはそう言うのと部屋を出て行った。一度ギターアンプを車まで持ち運んだ後、私達は帰り仕度を行い、部屋を出て再度駐車場へ向かった。その後、一足遅れて来たマネージャーに載せられ、それぞれの場所へと向かった。

「ありがとうございます。それではお疲れ様です。」

「お疲れ様〜。」

「また明日ね。」

「お疲れ様です!」

一度私の家にアンプを置いた後、私は学校で降ろしてもらい、部室棟へと向かった。部室に入ると私以外のメンバーと思われる人が三人いた。小倉はまだいないが。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様。」

「お疲れ。」

「お疲れ様。」

私の挨拶に三人とも私の方を向き挨拶を返した。三人の内、ベースを持つているのは早瀬と言い、中学の頃に軽音楽で小倉とバンドを組んでいた。なので、早瀬とは接点はあるが、他の二人と私は接点が無い。ドラムスローンに座り腕を組んでいる人は先輩だったと思うが、腕前は良く解らない。最後の一人は……女性だった。マイクスタンド前に椅子を置き、足を組んで座っていた。真美、江利子とはタイプの違う美人だった。確かヴォーカルをしていたのを何回か観たことがある。観客に熱狂的なファンが男女問わずにいたのを見た気がする。この人も先輩のはずである。

室内に入り、ギターアンプの方へ向かおうとした所、

「新堂、小倉は一緒じゃないのか?」

早瀬がベースアンプのセッティングをしながら私に尋ねる。

「いや、僕は一人でここに来たから……」

「そっか。」

背負っていたギターケースからギターを取り出し、スタンドに立て掛ける。エフェクターケースからシールドを出した所で、そもそも何の曲をやるのか知らされていない事を思い出した。

「早瀬、何の曲やるのか決まってるの?」

私の問いに早瀬はベースの音量を絞った後、

「聞いてないのか？Coccoの星に願いをとParamoreのMiserly Business、Decodeの三曲だ。あいつ、お前に知らせていないのか……」

呆れながら早瀬は頭を抱えた。Paramoreの二曲は聴いた事があるが、Coccoの方は知らない。それに、聴いた事があるだけで、コピー等していないのだ。つまり、今回の練習においては私は何もする事が無くなってしまう。せめて音源を何回か聴けばそれなりにコピーは出来るのだが、三曲は難しい。

「取り敢えず、早瀬は全部コピーしてきたの？」

「何とか。」

他の先輩達はどのようなだろうか？

「すみません、先輩たちは全部コピーしてきましたか？」

「俺はしたぜ。お前してこなかったの？」

私は事情を説明すると、ドラムの先輩は腕を組み始め、

「それは小倉が悪いな。でもどうする？」

と言ったので、

「まゝ、最悪曲の展開さえ解ればバックিংは出来ると思いますよ。楽譜見ながらも何とかなる気がしますしね……」

「じゃあ、俺のプレイヤーと楽譜渡すわ。」

先輩から楽譜と、曲の入ったプレイヤーを借り、私は曲を聴き始めた。丁度一曲終わった所で、

「遅くなつてすみません！でも完璧にしてきたんで大丈夫ですよ！」

小倉が汗をかきながら部室内に入ってきた。

「小倉、先輩が十分前に来てるのに遅刻か？」

「す、すみません！」

ヴォーカルの先輩に嫌味を言われながらも、小倉は急いでギターの準備に取り掛かった。そして、終えた所で、

「それじゃあやりましたようか……！」

と、張り切るのだが、私はつい先程曲を知らされたばかりだ。

「小倉、張り切るのは良いが、新堂は何も知らされていないようだぞ？」

「え？」

不思議そうな顔をしてこちらを見るが、本当の事である。イヤホンを耳から外し、

「小倉……僕は聞かされてないよ……」

私がそう言うと、小倉は冗談だろ、とでも言いたげな顔をした。が、私や皆の顔を見渡した後、携帯電話を取り出し確認をすると、顔が段々と青くなり、

「ごめん……メールが送信ささってなかった……」

と私を見て言った。その言葉に皆呆れはてた。

「いや……まあ、元から良のレベルなら大丈夫だとは思ってたんだよ！な？な？……」
「……というか俺が足引つ張ってたしな……」

練習が終わり、それぞれ片付けをしている時に小倉が私に言った。最初は私抜きで一度全ての曲を合わせていたのだが、如何せん個々のレベルが高い訳では無いし、初練習と言うこともありバラバラであつた。私も何とか Paramore の Misery Business だけだけは覚えて皆で合わせたのだが、私も含め皆の完成度が低かつたために今日はこの曲だけを重点的に練習した。一時間前と比べると少しはましになったと思う。他にも小倉のギターの音、リズム帯の合わせ方、ヴォーカルにバンドの音を聴く事を伝える、等指摘をしていたらあつという間に時間が過ぎていった。

「新堂、時間がある時にドラム教えてくれないか？」

「良いですよ。ただ、週に二日か三日位しか無いと思いますけど？」

「それで良い。今日一日でだいぶためになったと思うし。」

なんだかんだで私も忙しい身である。もうドラム教室に通ってはいないが、師匠とのレッスンはあるし、今月はバンド以外にも仕事の依頼が三つ程きている。業界内で私は、私達のバンドのドラマーとしてよりも、高校生ドラマーとしての方が知名度がある。以前と変わったのは事務所に所属しているか否かである。

「新堂、俺ももうちょいリズムと言うか、グループ？の取り方とかさ教えて欲しいんだ。」

「あ、私もヴォーカルの事を……」

「良！俺もギターの事を今以上に……」

一人良いと言ったがために皆が私に頼り出してきた。非常に嬉しい事なのだが、

「と、取り敢えずその話は部室出てからね。次のバンドの人達待つてると思うし。」

ここで長く居座り続ける訳にもいかなかったので私は皆にそう促し、片付けを終わらせ部室から出て行つた。

その後、外で私は皆の質問に答え続けた。全てが終わった時にはもう辺りは真つ暗になっており、私は急いで帰路に着いた。

それから小倉達とのバンド練習、師匠とのレッスン、他の仕事、バンドのレコーディングと中々に忙しいスケジュールをこなしていった。忙しい時は何も考えずにただ目先の事を黙々とこなしていくために解りづらいが、充実している証拠でもある。時間が経つのが早く、アツという間に過ぎ去っていく。この出来事が私に今以上に良い事をもたらしてくれるはずであるから。

文化祭まで残り一週間を切り、レコーディングの方も無事に二曲

録り終わり、後は編集作業を残すだけとなった。編集の方は私達は誰もやった事も無いので、違う人に任せる事になったのだが、ゆくゆくは自分達でしたいので、様々な人にレコーディングの時から色々と教わったりした。自宅で、自分のPC、ソフトを使い編集する事は出来るのだが、プロ用のツールにはあらゆる面で叶わない。それらを揃える程の費用も無いので、私の当分の目的はこれらを揃える事である。そのためにも様々な仕事をこなしてお金を貯めるしかない。既に月の収入が新卒のサラリーマン並になり始めたので、この調子で行けば数年で揃える事が出来ると思う。

「こんなに早く終るんだったら私も何かバンド組めばよかったかな？？久しぶりにメタルやりたい気分だったし。」

「僕もギターならやりたいな。」

「ツイン踏める人良以外ないから無理だと思っけどね。」

昼休み。教室で私は真美と他愛も無い話をしていた。するとそこに「おい。新堂いるかい？」

ドアの方から私を呼ぶ声が聞こえた。ドアの方を見ると千佳先輩が私を手招きしていた。千佳先輩は小倉とのバンドでヴォーカルをしている人である。

「良、千佳先輩と何か接点あったっけ？」

「あ……」

ここの所忙しくて真美に千佳先輩の事を話すのを忘れていた。もちろん江利子にもだが……

「あ、って何よ？」

「と、取り敢えず行くね！ちゃんと話すから！」

今ここで全てを話すと時間がかかってしまうのかもしれない。で、私は千佳先輩の方へと急いだ。後ろで真美が軽く怒っているのが解るが今は気にしてはいけない！多分……

「どうしたんですか？」

千佳先輩の前に立ち、私は何か用事があるのか尋ねた。

「新堂、今日の放課後バンド練習終わった後時間あるか？」

「まあ……今日は何も無いですけど……」

「ならば少し相談したい事がある。付き合ってもらえないだろうか？」

相談と言うとヴォーカルの事なのだろうか？それならば特に私が言える事は無いのだが、

「……まあ、僕なんかでよければ良いですよ。」

私なんかで力になれるのならば断る理由は無い。千佳先輩は私が承諾したのを聞くと嬉しそうに笑い、

「それではバンド練習後に。」

そう言い残すとその場を後にした。そんな事ならばバンド練習後でも良いじゃないか。焦ってしまったでは無いか、千佳先輩は小倉曰く非常に人気のある人なのだそうだ。見た目は良い、歌は上手い、性格も良い、なので学年関係無く人気があるらしい。高校の四天王のうち一人なのだそうだ。残りの三人は知らないが。

「良？」

安心しきっている所に後ろから声を掛けられる。ああ、この威圧感、は事あることに感じてきたものだ。振り返るのが恐ろしい。

「良くん？」

なぜここにいるのだろうか？彼女は同じクラスでは無いはずだ。振り返っては駄目だ。何か嫌な予感がする。でも真美に千佳先輩の事を伝えなければならぬのだが、果たして彼女は聞く耳を持つてくれるのだろうか？否、持ちはしないだろう。ならば、私の取る行動は一つしか無い。一刻も速くこの場を離脱するだけだ。目指すは屋上、最短距離で駆け抜けなければならない。捕まったら負けだ、命は無いと思え。両足に力を入れ、駆け出そうとした瞬間……

私の両肩が掴まれた。前に進もうとするも、一向に動かない。

「良？何処に行くのかな？」

「良くん、ちょっとお話ししようね？」

身体が教室内に引つ張られていく、二人の身体の何処にそんな力があるのか？窓際のいちばんうしろの席まで連れて行かされ強引に座された時、私の目の前に二人の女性が立ちはだかった。

「小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK？」

「悪魔なりのやり方で話を聞いてもらうから……」

二人に誤解だと言う事を納得してもらうまで昼休み中所か、次の授業時間全てを使った。そして、二人が今日のバンド練習、その後の千佳先輩との相談まで同伴する事になった。

「なあ、良……何で真美さんと増田がいる訳？」

「まあ……いろいろありまして……ってお前昼休みいなかったっけ？」

バンド練習中常に部室内で静かに黙ってみている二人について小倉が尋ねてきた。やはり気が散るのかも知れない。たまに見に来る人もいるのだが、二人の放つ異質なオーラに居た堪れないのだろう。それを感じ取った千佳先輩が、

「済まない、真美、江利子。ちょっと外に出てくれないか？皆やりづらいみたいだ。」

と、二人に言った。

「す、すみません！じゃあ私達でようか？」

「そうだね……そうしようか、まっちゃん。」

二人は室内を出ては行っただが、恐らく外にはまだいるだろう……

「ま、まゝ気にせず続けましょうか？」

「そうだな。」

「それじゃあ、もう一回頭からお願いします。」

練習後、千佳先輩は用事が出来たらしくその日は何も無く家に向かった。一緒に帰る時に、真美と江利子が何処かほっとした表情をしていた。

文化祭は無事終わった。軽音楽部の方の手伝いも難なく進み、クラスの方にもちゃんと顔を出せた。変わった事と言えば、漫画研究部のコスプレショーとライブイベントだろう。軽音楽部の部長と漫画研究部の部長が仲が良いらしく、文化祭ライブに一バンドだけ漫画研究部が出演した。流行りであろうアニメの劇中歌をコスプレして演奏するなど（男性が女性のコスプレをしたり……）半ば異様な盛り上がりを見せていた。楽しそうに演奏していたので彼らにとつては良い思い出となっただろう。部員の一部は邪険そうに扱っていたが、そう偏見の目で見なければいいのに。

小倉とのバンドも無事終わる事が出来た。部員、観客共に曲を知らなかったのかあまり盛り上がりはしなかったが、良い演奏が出来たので善しとしよう。

「小倉上手くなったね。」

「ま、俺だし？」

真美のお世辞に気を良くした小倉は上機嫌であった。私達はいつものように、文化祭終了後に四人で部室の外にいた。先輩たちが中にいたために、今回は部室の外にあるベンチに集まった。佐藤も呼ぼうとしたのだが、邪魔をしてはいけない、と真美と江利子に言われたので呼ばなかった。

「じゃあさ真美さん、俺と付き合おうぜ？」

「あゝそれは無理。」

真美に即答された小倉はがっくりと肩を落とし頂垂れているが、このやり取りはいささか見飽きているので何も言わないでおいといた。「良くん、次は私達も出たいですね。」

「そうだね……レコーディングも良いけどライブしたいね。シングルが年内に出たら来年は関東内でツアーが出来るかもね。」

それまでにアルバムも制作出来たら夏のロックフェスに出れるかもしれない。運が良ければ師匠と一緒にステージに立てるかも……

日が傾き始めた時、私の携帯に着信が入った。私は皆と離れてから電話を取った。着信は千佳先輩からだった。

「もしもし？」

「もしもし、新堂？今大丈夫？」

「大丈夫ですよ。どうしました？」

「ちょっと私のクラスまで来てくれない？じゃあ来てね。」

私の言葉を待たずに千佳先輩は電話を切った。何がだか解らなかったが、私は千佳先輩のクラスに向かった。

千佳先輩は私達の二個上、教室は四階にある。校内に入ると、もう後片付けをしている生徒はおらず、昼間の騒がしさが無く、僅かな話声が聴こえる程度だった。

階段を登り、四階に着くと人は誰一人としていなかった。三学年は最後の文化祭、と言う事もあり打ち上げや、校庭で皆と楽しく過

ごしているのだろう。千佳先輩のクラスのドアを開けた時、教室内は綺麗に片付けさっており、夕日が差し込み、室内はオレンジ色に輝いていた。その中で一人、黒板に背をむけて千佳先輩は立っていた。

「新堂、待っていたよ。」

私が室内に入るのを確認すると、千佳先輩は笑みを浮かべながらそう言った。

「どうしたんですか？」

「いやね、私は今年で卒業する訳じゃん？大学も校内推薦を取ってるから受験勉強をしなくていい。後は最後の高校生活を満喫するだけなんだよね。」

言いながら、千佳先輩は私に一步步近づいてくる。

「勉強をして、友達と遊んで、話して、バンドをして……それだけでも十分面白かった。周りの友達是谁かに恋して、誰かと結ばれて、それらの話が主だった。あの人がかっこいい、とか彼氏がこのうのとかね。でも、私にはその気持が解らなかった。何でそんなに盛り上がるのか、何が楽しいのか解らなかった。」

ゆっくりと、ゆっくりと歩み寄り、

「誰かに言い寄られる事は多々あった。好きだ、付き合ってくれ、と。何の感情も持たなかったが、好きでも無い男と付き合った事もあった。最初は好きで無くて、段々と好きになる事もある。そうしたら恋愛ってこういうものか解るよって言われたから。でも、一向にそんな気持ちは湧いてこなかった。だから付き合ってもふる事はかりだった。でも新堂、君はどこか違うみたいだ。バンドを組むまでは君も周りの男と変わらない、一人の男性だった。でも、バンドを組んで、練習をしていくうちに君の放つ何かに惹かれて行った。君の音に私の身体が反応したんだ。」

ついに、私の目の前まで来た。目と鼻の先、そんな距離まで。

「そして、気がついた。私は君に恋していると。」

高校一年生？ - 1（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

えゝ、だいぶ外伝？が何とも言えない結果のようですね……何件かお気に入り登録を外してしまわれた方々もいらっしやるようで……全て、私の実力不足でございます。またお気に入り登録してくださいよう、認められるように頑張ります！皆さんがもっと面白いと感じるように頑張ります！

それはそうと、感想を書いてくださった方々ありがとうございました！ポイント付けてくださった方々ありがとうございます！読んでくださった方々ありがとうございます！どんな事でも良いので感想などなど待ってます！

では、今回も読んで頂きありがとうございました！

高校一年生？！2（前書き）

祝、十万PV！！！！！！

本当に沢山の方々に読んで頂き誠にありがとうございます！多くの方々からお気に入り登録や、評価、ご感想を頂きまして、本当にありがとうございます！初めてのSSでこんなに多くの方々に読んで頂ける事になりました事を非常に嬉しく思います。

では、今回も皆さんが楽しんで読んで頂けたのならば至極光栄です。では宜しく願いします！

「そして、気がついた。私は君に恋していると。」

歩みを止め、手を伸ばさずとも触れる事の出来る距離で千佳先輩は私に言う。聞き間違いであれば良いものの、この近さで聞き間違えるほど私の耳は遠く無い。私は精神異常者であり、ただの妄想か？とネガティブに考えてみても間違い無く妄想では無い。

要するまでも無く、千佳先輩は私の事を好きだと言っているのだ。

「先輩、僕は」

私が言い終える前に、千佳先輩は人差し指を私の口の前に置き

「ああ、言わなくても良い。新堂の言わんとする事は解っている。

あの二人のことだろう？あの二人は心底君に惚れ込んでいる、普段の言動からも皆が解る事だろう。そして、君もあの二人に好意を抱いている。そうだろう？」

私が言おうと思っていた事を述べた。私の口元から人差し指を離し、苦笑いを浮かべながら

「解っている、解っているさ。彼女たちが君に好意を抱いている事も、君が彼女たちに好意を抱いている事も。全くもって君たちの間に誰かが割って入る事なんて無理だと思わせてくれるよ。だがね。」
そう言った。私は千佳先輩の逆説の言葉を聞き、常々思っている事

を言われるのではないかと思つた矢先に

「最終的に選ばなければならぬのは一人だ。日本は一夫多妻制では無いからね。二人が君の事を好きでも、君が二人の事を同じくらい好きでも選ばれるのは一人だ。その時残つた一人はどうなるのだろうか？」

言われてしまった。決して間違いは言っていない、むしろ正論だ。私がずるすると一人を決めれずにここまで来てしまったのがいけないのだ。二人の女性から私に好意を持っている事を告白されながら全くもつて返す言葉が見つからない。

「それにもしもだ、もしも一人を決めた所で君達のバンドも今まで通りにはならないのではないか？少しの蟠りから始まり、それは徐々に大きくなりバンドは方向性を見失う。そうなってしまうのではないか？」

……バンド内恋愛でそれまで良い方向へ向かつていたバンドがいつも簡単に崩れていく事はよくある。私もそうなつてしまったバンドを沢山見てきた。歯車が悪い方へと進めば進むほど多方面にも広がつて行く。三人の関係、それは直接バンドの方へと繋がる可能性は無いと言い切れない。

「聡明な君なら解るはずだ。バンドの事を思うならば君は他の女の子と恋をしていくべきだと思う。恋愛絡みの解散なんて数多くあるんだ。君はあのバンドにどれくらい力を注いでいるかなんて見れば解る。それをこんな事で台無しにたくないだろ？」

と、言いながら千佳先輩の顔が近づいてくる。彼女の放つ有無を言わせない迫力にのみ込まれ、正常な判断ができなくなる。実年齢では私より一回りも少ない彼女に圧倒されているのが解る。少しずつ、少しずつ、まるで悪魔の囁きを聴き入れ魅了されたかのように私は考える事を放棄してしまいそうになる。

千佳先輩が顔を近づけてくる、数ミリ前へ顔を傾げるだけで唇が重なり合う。私は彼女に魅了されているのか？

「崩れ去る前に、私と一緒にいたほうがよくないか？君達のバンド

はもう趣味では無い。ビジネスなんだ。君と二人はビジネス上の関係にしておいて……私が君の愛人になれば何も問題無い。そう、何も問題なんて無いんだよ。」

頭の中に彼女の囁きが響き渡る。私が二人と恋愛関係を結ぶことを破棄する事でバンドはビジネスとして成り立つ。互いに成果を求めるだけに動き、そこに余分な感情等一切要らない。ビジネスと実生活切り離せば全て上手く行くのだと。

……本当にそうなのか？本当にそれでバンドは成り立つのか？バンドを優先するがために二人への気持ちを押し隠して千佳先輩を選ぶ事が成功へと繋がる？それで良いのか？二人は納得してくれるのか？ここ数日仲良くなっただけの先輩と私が結ばれる事を二人は心から祝福してくれるのか？バンドはより良い方向へと導かれるのか？……もし私がどちらかを選択する事で二人の関係はいともたやすく崩れ去ってしまうのだろうか？……否、彼女たちの友情を甘く見ているだけではない。そんなじゃそこの友達を謳っている奴らとは違うはずだ。それに、事を中心に、癌は私にある。私自信が上手く行えば良いのだ。

そう……だから……私は……甘い考えかも知れないけど……

私は顔を背け、千佳先輩から離れた。先程までのまるで濃い霧の中をさまざまっていた感覚は失くなり、クリアな感覚に頭の中がなる。

「すみません先輩、それでも僕は先輩の気持ちに答えられません。」私の問いに千佳先輩は驚きを隠せないようだった。まるで初めてフられたかのような、今までにこのたぐいで落ちなかった男はいないと言わんばかりに。

「先輩、貴方の言う事は決して間違つてはいないと思います。バンドの事を考えるのならバンド内恋愛は避けるべきなのかもしれません。ええ、そちらの方が良い方向へ向かう可能性の方が大きいかもしれません。ですが、僕は彼女たち以外を選ぶという選択肢は無いんです。先輩は凄く魅力的だと思います。でも、僕にとって先輩は彼女たちに遠く及ばない。外見とかじゃないですよ。そして、彼女たちはどちらかが僕と結ばれる事で関係が崩れる程、彼女たちの絆は僕らが思うほどに深い。だから例え何があつたとしても、僕は二人は最後には笑っていると思うんです。まあ、僕が愛想つかされるといふ事ももちろんあるでしょうけどね。」

窓の隙間から教室内に風が吹き入れ、秋の夜風が私の身体に吹きつける。何を揺れる事があるうか、恐れる事があるうか。彼女たちの事を不安がるよりも、私自信の事の方が今も、これからも不安な事が多いだろうに。

私の言葉を信じられないとでも言いたげに千佳先輩は私を見ている。恐らく千佳先輩は、彼女は軽い気持ちだったのかもしれない。今回たまたまバンドと一緒に組んで何か私に惹かれる所があつたのかもしれない。それを見て、私と付き合いたいと思つたのだろう。それが自然だ。否定等一切しない。彼女たちだってそうだったのかもしれない。ただ違う所は彼女たちと千佳先輩との思いの強さだけなのだから。

「そうか。いやはや君達の思いの深さを見誤っていたよ。そこまでだったとはね。そして君自信にも誤算だったよ。君みたいな人はさつきみたいに言えば確実に落とせると思つていたのだけだね。」

「正直、先輩の揺さぶりは理になつていた分タチが悪かったですよ。頭の回転も速いようですし、今までに落としてきた男の数は多いんじゃないですか？」

「そうだね。そして断られたのは君が初めてだ。」

自嘲気味に笑いながら千佳先輩は答えた。ただでさえルックスが良いのだ。そして他人に自分のペースに引きこませない手腕とかもし

出す雰囲気は同年代の子達と比べるのがおこがましい位に抜きん出ている。

「ハハハ、ますます君に惹かれてしまったよ。遊び半分な所があったのだけれど、本気になろうじゃないか。」

「え？」

「だから」

千佳先輩は私のネクタイを引き、強引に自分の顔に寄せた。

「本気で君に恋したという事だよ。こうなったらバンドがどのだとかそういう事で君を物にしようとは思わない。そうだな、私が君を求めるように、君が私を求めるようにしてみせよう。廊下で盗み聞きしている二人よりも君が私を求めるようになるくらいにね。」

そう言う千佳先輩の顔はもはやただの高校生が出せるようなオーラでは無かった。何なんだこの少女は？本当に油断していると主導権を持つて行かれる！

「と、言う事でだ」

握っているネクタイを徐に引き取り、千佳先輩は私の元から離れていった。

「ちょ、先輩！それ」

「今日の記念に貰っていくよ。それじゃあまた今度。」

私のネクタイをブレザーのポケットに入れると、千佳先輩は教室を出て行った。残されたのは呆然としている私のみだった。千佳先輩が教室から離れていく足音が廊下中に響き渡る。何とも波乱に満ちた文化祭だった……床に座るとどつと疲れが込み上げてきた。

「……あ」

そう言えば私は皆で話していた所を呼び出されたのだった。携帯を開き時間を見ると呼び出されてから40分も経っていた。体感時間は凄く早く感じたのだが、実際はそれほど時間が過ぎていたのだ。

もう皆帰ってしまったのかもしれないが、取り敢えず元の場所に戻らなければならぬ。荷物もそこにおいているのだから帰るにしても一度そこに行かなければならぬ。

「……よいつしょつと！」

若者らしくない言葉を使いながら私は立ち上がり、教室の窓を閉めてドアを開けた。月の明かりが照らされているように時間ももう遅い。これ以上遅くなると家に帰った後が面倒くさい。（主に加奈だが）急いで帰らなければ。

階段の方へ向かうと方向転換した時

「……」

目に入っただのは見知った二人組だった。

「……」

二人は満面の笑みで私を見ている。私も笑顔を返し、反対方向を向き走り去ろうと一歩踏み出すのだが、

「待ちな！」

「待つてください。」

それぞれ別々の肩を二人同時に掴まれ、私はその場を立ち去る事が物理的に無理になってしまった。

「ちよつと話聞かせてくれるよね？」

「良くん、私も聞きたいな。」

決して振り返ってはいけない。振り返ると今以上の地獄が待っているのだから……掴まれている肩口に指が徐々に食い込んでいく。いくら二人いようと女子と男子では体格に差がでてしまう。本来ならば振りほどけるのだが……

今は振りほどこうと腕を上げる事すらままならない。というか物凄く痛い。二人とも何処にそんな力があるのだ？

「い、いやね？最近帰りが遅くなってるから両親も加奈も凄く心配しているみたいだから今日はこれで……」

「じゃあ良の家に行けばいいんだね？そうだね、加奈ちゃんも立ちあつて話しなきゃいけないもんね。」

「そうですね。幸いにも今日は真美さん私の家に泊まる事になりましたから。私も両親に良くんの家に泊まると言えば喜んで承諾すると思いますし。」

「そうだね。何で千佳先輩が誰かのネクタイをポケットからはみ出させていたのかとか、何で良のネクタイが無いのか、何で上着がそんなに気崩れているのかとかね。」

真美の言葉に違和感を感じ、胸元を見るとシャツのボタンが上から三つも取れていた。そして、不自然にはだけていた……いつもの間に千佳先輩はこのような事を……

「いや、待って！これは！」

「言い訳は家に帰ってから……！」

……本当に今年の文化祭は波乱に満ちている。今の私の状況は幸なのか？不幸なのか？ああ、家に帰ってからこの空気が続くのかと思うと頭が痛くなる……

<Side Another>

「バンドをやっているとモテる」

こんな言葉が世に出回っているが、俺自身は決してそんな事は無かったぜ！畜生！何で俺はモテないのか？顔だって悪くない（と思いたい）だろうし、身長だって低くは無い。頭だって良いはずだ！そりゃ学内じゃあまり良い成績では無いけど、この学校は元々超進学校なんだし！ギターだって、小学校や中学校の時と比べたら格段に上手くなったと思うのに何で俺はモテないんだ？

……だが、バンドをやつてモテる奴がいるのも事実だ。いい例が新堂良だろ。事実、小学校最後の出し物のバンドをやってから周りの見る目が変わった。そりゃ、あいつは見た目もそこそこ良いだろうし、学業も運動面も悪くは無い。だが、そんなやつうちの学校では珍しくない。上には上がいる。良より成績が良い奴は……そんな多く無いけど運動なんてあいつより凄いやつなんて沢山いる。小学生なんて皆運動が出来る奴に惚れてしまふのさ。だからあまり良は目立たなかったのかもしれない。元々元気で活発な奴じゃないし、どちらかというと大人びている奴だ。中学生になると周りの女子もそれまでの価値観から違う物へと移行し、大人びている奴が人気が出るようになった。それでいてバンドやってめちやくちやドラム上手いんだからモテないはずが無い。ドラムだけじゃなくギターまで上手いときたもんだ！それに性格も悪くない。糞！あいつは完璧超人かよ！でも良が言うには妹の加奈ちゃんこそが本当の天才であつて、自分は努力の人間だ、と言っている。……まあ、言いたい事は解るけどな。

要するに！決してバンドをやっているからモテる訳では無いのだ！モテる奴は何やつてもモテる、それがたまたまバンドだっただけなのだ！

俺だつて最初はモテたいが為にバンドを始めたさ。それでギターなんだからモテない訳が無いだろう？だつてギターはヴォーカルと同じくらい目立つんだから。技術だつてそんなに悪くないはずなのに何で俺はモテないのかね……滅茶苦茶練習して上手くなつてきたから憧れの千佳先輩を誘つてバンドを組める事になったのに、千佳先輩は俺よりも良の方を見てしまふ。今回の選曲の美味しい所は全部俺が弾いているのに良を見る……アハハ、何か目から塩水が流れてきてるぞ？おかしいな……外で真美さんと増田、良と話していたはずなのに良がどこかへ行くと二人ともその後を追っかけるし……

俺一人で寂しい思いするのも何だから今日は友達に撮ってもらったライブのビデオを見て一人で悲しく過ごそうかな。あゝあ、世の中のカップル皆滅んだらいいのに。

「匠、最近寒くなってきたね……」
「……ちゃんと暖かくしろよ。」

……本当に……カップルなんて滅んだらいいよ……

と、その前に部室に行つて機材取りに行かないと。先輩たちまだ

いるのかな？ま、関係無いけど。

高校一年生？！2（後書き）

今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

え〜と、いきなり言い訳から入ります。感想の方では書いたのですが、最近実生活のほうが何かと忙しく全然書く暇がありませんでした。楽しみにしてくださいる方々には申し訳無いです……

それで、今回約二ヶ月ぶりの更新も非常に少ない文章量で本当に申し訳ないです。出来る事ならば年内に後最低でも四つは投稿したいと思っています。

前書きの方にも書かせていただいたのですが、本当に多くの方々にこの作品を読んで頂きとても嬉しく思っています。私自身ももっと頑張つてより良い作品に行きたい！と思っていますのでどうか暖かいまなざしで見守ってください。

では最後に、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！感想等ありましたら気軽にどうぞ！泣いて喜びます！

高校一年生？ - 1（前書き）

ああ、この調子で本当に年内あと三つも投稿出来るのかな……でも書きちゃったんだから実行しなければ……

どうも、まだまだ遅れながらも書き上げました。忙しい事は良い事なのだろうけど考えものです。やらなければならない事を全然終わらせれないで何をしているのだから……

と、愚痴っぽくなりましたが、26話目です。今回も皆さんが楽しく読んで頂ければ幸いです。では、どうぞよろしくお願いたします。

高校一年生？ - 1

「Power! power! Happens every day!」

部屋に入るや否や、部屋中に響き渡る大音量のBGMが私の耳に入ってきた。部屋に置いてあるCDコンポをミキサー、パワーアンプを通して二本のスピーカーから流れる音は、家のミニコンポのスピーカーやヘッドフォン出力では決して体感する事の出来ない音質を与えてくれる。まあ、ただうるさいだけ、と言われればそれまでのだが。

と、そのような事を考えていると、

「お、やっときたな！そんなにあいつの話って長かったのか？」

私が部屋の扉を開けた事に気が付いたのか、CDコンポのヴォリュームを絞り、私に問いかけた。

「うん。色々だね。」

小倉の問いに答えながら、私は部屋内に入り、カバンをドラムセツトの近くに置いた。

小倉の言葉から察すると、私に来るよりだいぶ前に来ていたのに関わらず、部屋内は全くと云っていいほど暖まっていな。むしろ、外よりも寒いのでは無いだろうか？

「……寒くないの？」

「だからこんなに厚着してるんだろ！」

「……暖房つけたら良かったじゃん。」

「あ……」

まるで忘れて……いや、この場合本当に忘れていたのだろう。小倉は直ぐ様に、エアコンの位置まで向かうと、エアコンのスイッチを入れた。

「いや……ね？俺の前に誰かいたような気がしたから……ね？」
だから暖房が入っていたと思っていたと……なるほど。小倉らしい

と言えばそれまでのだが、

「普通はそういうの全て切ってから退室するでしょ……」

溜め息まじりに小倉にそう言うのだが、小倉も小倉で言い訳の一つでも、と思いとっさに口に出したのだろう。アハハ、と苦笑いを続けていた。

「それで……今日は何でまた突然部室なの？今日は何も無いからよかったです。」

「あ、ちよつとギターでも教えてもらいたいな」と思いまして……」

「絶対それだけじゃないでしょ？」

「あ、やつぱ解る？」

確かに小倉は向上心が有り、様々な人に教えを請う事は多いのだが、私に限って言えばおまけ要素が強い。何か聞きたい事、相談したい事がある、それらを聞き終わるとついでにギターも教えて！と、言うのだ。ギターの事はだいたい二の次。今みたいに、ギターを教えて欲しい、と先に言う事はほぼ無いに等しい。

だから今回も他の事がメインだろう、と思いながらドラムスローンに腰を降ろし、小倉が言葉を発するのを待った。しかし、なかなか言いだそうとしない。むしろ、私が何か聞くのを待っている節がある。

……仕方が無い。

「それで……どうしたの？」

「いや……ね？俺ってぶつちやけた話、俺って周りの人達と比べたら下手なのかな？って思ってたさ。」

「何か言われたの？」

「少しな。良はどう思う？」

笑いながら私に尋ねるのでは無く、神妙な面立ちである。誰かしらに気に病む事でも言われたのだろうか？それで私に尋ねようと思った。私が思うに、小倉は決して周りと比べて見劣りするようなギタリストでは無い。

「技術？全然あるじゃん。むしろ部内だったら上手いギタリストだ

と思うよ。」

「でも先輩達の中には滅茶苦茶凄いソロ弾く人もいるじゃん？それでも俺は上手い方なのか？」

余程、今までに積み重ねてきた自信を打ち砕くほどに強く言われたのだろうか？

「難しい速弾きとか出来る事は確かに凄いと思う。先輩達の中にはそういうのが出来る人もいるからね。でも、リズム面で小倉程きちっと出来てる人って部内じゃいよ。」

「いや、でもさ。やっぱソロが目立つ訳じゃん？ギターって。」

……なるほど。小倉の言いたい事は良く解る。

「一番大事なのはソロだけを華麗に弾く事じゃないよ。ギターはリズム、バッキングこそが重要なんだ。それをきちんと出来ていない人は例えソロだけ技術があってもやってる人達は上手い、と決して思わないよ。だから僕は小倉が部で他の人より劣っているギタリストだとは全然思わない。」

私もかつて同じ事を考え速弾きばかりを延々と練習していた。ただそれは今の小倉と違い、リズム面がまったくもって未熟な時に行ってしまった。部屋で一人でレコードに合わせて弾く場合はそれで良かったのかも知れない。繰り返し同じ曲を聴きコピーするのだから自分の頭の中にレコードで演奏されているリズム、構成を完璧に把握している。そしてレコードと同時に進行で曲を弾く。だが、バンドで行う時にはそう上手くいく訳が無い。その時々により、合わせつつ、自分のリズムでグループを作って行かなければならない。それらはしっかりとリズム面を鍛え、周りの音を聴かなければ到底不可能である。それらが出来ない場合どうなるか、と言うと自分一人が勝手に演奏を行いバンドがバラバラになってしまう。周りの音を聴き、それに合わせる。最低限この事が出来なければお話にならない。リズム隊、となれば話は別になってくるのだが。

そして、ソロが上手い＝楽器が上手いと言う事も必ずしも当てはまる訳では無い。かつての私のようにソロ、リードばかりを鍛錬し

てその他が疎かになっっている者はしかりと観ている人には下手である、としか言われない。よくて指が速く動くんだね、くらいだ。曲の全てがソロでは無い、リズム面、ギターはバッキングの方が曲の占める割合は大きいのだ。プログレ等は全てがソロ、リードに思ってもしれないが、リズム面ありきで成り立っている。それを疎かにしてきた者が出来る代物では無い。

私の言った事に小倉は理解を示してくれたのか、先ほどより表情が一段と明るくなった。

「そ、そうか……？お前からそこまで言われると俺もちょっと自信が出てきたな。」

少し照れ笑いをしながら小倉は私に言った。

「だからと言って奢らないでね。僕が見てきた人達の中で……と比べちゃうと酷だけだね。」

「お前の基準はプロじゃねえか！！！！」

「そうだったね……それじゃあ、脱アマチュアレベルを目指して頑張ろう！」

私の問いに大声で返す小倉を見て、私は自然と笑みを浮かべ、そう答えた。そんな私を見て、小倉は絶対見返してやると返し、私に笑みを向ける。

「そうなったら特訓だ！よし、今日はとことん弾くから覚悟しろよ！！！！」

「なんだよ、それ？意味が解らないよ。」

「俺の特訓にお前が付き合うつて事だよ！！！！」

ギターを取り出し、アンプに繋いで、小倉は開放弦を鳴らす。私がある前に電源を入れて真空管を温めておいたのか、準備は整えておいたみたいだ。

「取り敢えず、僕が言っておいた事はやってるのかな？」

「当たり前だぜ！」

それから二時間程、私は小倉に様々な事を教えた。その間、何人が部員が来ては私達の様子を眺めていたのだが、それらに一切気づく

様子も無しに、小倉は集中して取り組んでいた。彼の呑み込みの速さ、上達の速度が速いのはセンスや才能の他に、この集中力にあるのだと私は感じた。

私が部室を後にする時も、まだ残り、独りで練習をしたいと言ったので、私は独りで帰る事にした。

駅に向い歩いている途中、ポケットの中の携帯電話にマナモードにしておいたバイブレーションが鳴った。取り出し、画面を見ると着信相手は江利子からだった。

「もしもし？」

「もしもし、良くん？今電話大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。」

どこかで歩みを止め、電話をしようと思ったのだが、場所が無かったので、いささか不謹慎ではあるが私は歩きながら電話を続ける事にした。

「あのね、私達のシングル、マスターアップしたって！だから年内にお店に並ぶ事になるんだって！」

江利子は電話口から興奮気味に言う。そうか、ついにマスターが終わったのか。

「本当に！？やったね。これではアルバムの方もマスターが終われば……」

いて行つた。

「今日は何にも無かつたんだから、早く帰ってくるって言つてたよね？」

玄関の扉を開け、部屋に向かう途中に後ろからご立腹そうな声の加奈が話しかけてきた。最近の加奈は怒るにしても凄みが出てきているので困る。加奈の上に立つような人は現れるのだろうか？

「い、いや……ちよつとね？」

「こつちを見て喋りなさい。」

「はい！！」

慌てて振り返ると、壁に寄りかかりながら腕を組んでいる加奈がこちらをじつと見ていた。

怖い、今の加奈はとてつもなく怖い。

「今日の朝、私、お兄ちゃんとどんな会話したっけ？」

「今日の朝は……」

加奈に言われて、何を話したか思いだそうとしていると、一つの事が頭の中に過る。今日の朝、私が学校に行こうと、玄関に向かった時、加奈は「今日って学校終わってから何かあるの？」と聞かれたものだから、何も無いと答えたはずだ。それから……「じゃあ、買い物行きたいから付き合つてよ！」……ああ。思いだしてきた。今日の朝、私は加奈と一緒に買い物に行く約束をしたのだ。それなのに今日の放課後の事を思い出してみよう。うむ、小倉と一緒にいたではないか。言い訳を考えた所で聡明な我が妹の事だ、バレルに違いない。ならば行う事は一つ。

「加奈。」

「なに？」

こういう時は私が出来る最大限の笑みを持ってして、イメージするは某エアのOP最後らへんのシジ君のように無邪気で、無垢の無い笑み。その顔で、

「忘れてた。ごめん！」

言うや否や、私は思いっきり加奈に右頬を引っ叩かれた。斜め横からの確に顎を含む右頬全体を、体重を乗せ、手のひらで押し出すように。

「馬鹿！！！」

叩き終わると、私にそう言い放ち、部屋へ向い走り去って行った。走り去る加奈を見ながら呆気にとられていると、

「あらら、加奈が不機嫌だった理由はこれだったのね。」

母が仁王立ちをしながら私を見降ろしている事に気が付いた。

「良、あなたにとっては忘れてしまった、ですむ話だけれど。加奈にとってはそうでもないのよ？」

「それって……？」

「さてさて、先週まで加奈はどこに行ってたのかな？」

「！」

そうか、加奈は先週までウィーンに行っていたのだ。そして、私は一昨日までレコーディングなり、何なりで家に帰るのは遅くなっていた。加奈とはここ暫くゆっくりと話す時間も無かった。

「気が付いたかな？あの子は良と一緒にいれなくてとても寂しそうにしてたんだからね。だから朝は凄く喜んでいたのにね……あんなに喜んでいた加奈は本当に久しぶりなんだから。」

「そうだったのか……」

「そうだったのか……じゃないでしょ！今すぐ部屋に行って加奈と話してきなさい！ついでに散歩でもしてらっしゃい。ここら辺だったら危なくないでしょ。それに、何かあったら良が命がけで守って

くれるだろうしね。」

「ありがとう、母さん。ついでにどこかで一緒にご飯でも食べてくるよ。」

「そうしなさい。というか、夕飯の準備してなかったのよね。」と、笑いながら母はリビングへと向かって行った。まあ、二人で外食すると思っていたのだから夕飯を作っていなかったのだろう。

部屋に向かいドアを開けようとするのだが、中から鍵がかけられていた。

「加奈、僕が悪かったから。開けてくれない？」

中に向けてそう言うのだが、加奈は返事をしてくれない。

「本当に悪かった……それでさ。今からだと店とかで買い物とかは出来ないけど……ちよっと一緒に歩きまわらないかい？ 久しぶりに加奈とも話したいし。」

そう言い、暫くすると鍵が開く音がした。ドアを開くと、加奈がふてくされた顔をしながら下を向いていた。

「……ごめん、加奈。じゃあ、ちよっと散歩でもしようか。」

部屋に鞆を置き、私は加奈を促しながら外へ向かった。玄関で靴を履き、ドアを開けようとする前にリビングの方をちらつと覗くと、母が目で頑張れ、と合図をしていた。

「それじゃあ、母さん。ちよっと出かけてくるね。」

「あんまり遅くならないようにね。」

「解ってるよ。」

住宅街の路地を照らす街灯と、月の光を明りにしながら私と加奈は歩く。繁華街では仕事帰りのサラリーマンが騒ぐのに良い時間なのだが、元々閑静な住宅街だけあって辺りは静かだった。駅に向かって歩けば、帰路についている人々とすれ違う事もあるのだが、反対側を歩いているので人と出会う事も少ない。

「こうして、二人で歩くのも久しぶりだね。」

声を出す度に、息が白く吹き出る。こんな寒い日は星が綺麗なはずなのだが、夜空に輝く星は一つも無かった。

「お互いに、昔と違って忙しいからね。だからこそ……今日は楽しみにしていたのに……」

「本当にごめん。」

私が顔を向けても、加奈は反対側に顔を向けながら歩いている。

「もしかして、最近告られた先輩と一緒にいたんじゃないでしょうね？」

「違うよ、小倉と二人で部室にいたんだよ。」

「本当に？」

疑いの目を持って、私の方に顔を向けて加奈はこちらを見た。

「本当だって。あ、やっと僕の方見てくれたね。」

「！、まあ、ちょっと一人でカーツとなりすぎたかなって……でもお兄ちゃんが悪いんだからね！」

よく加奈を見ると、余所行き用に洋服もお洒落をしている事に今気が付いた。そして、うつすらとだが化粧もしているようだった。最近の女の子は小学生の時から化粧を嗜むのだから、やっていても何ら不思議では無い。

「加奈も、化粧とかする年頃になったんだね。」

そう言うと、加奈はひどく驚いている表情をした。その様子が何だかおかしく感じ、思わず笑ってしまった。

「おかしい？っていうか、よく気が付いたね。」

「いや、全然おかしくないよ。加奈が驚いてるからね、笑っちゃったんだ。だって、僕は加奈が生まれた時から一緒にいるんだよ？気付かない訳無いよ。」

「そ、そうだよね！お兄ちゃんとはずっと一緒だもんね！」

大分機嫌が良くなったのか、加奈の表情が和らいできた。そういう表情の方が加奈には似合っている。そう思っていると、

「お兄ちゃん、ちょっと寒いから……腕組んで歩いていい？」

「ん？寒いんだったらマフラー借すよ？」

と、言いマフラーを首から取るうとした所、

「マフラーじゃ無く！私はお兄ちゃんと腕組みしたいの！」

私は強引に加奈と腕を組まれた。少々歩きづらいのだが、加奈の機嫌が悪くなるよりかは、と思いそのままにしておく事にした。

「もつと、こう……シャキッと背筋を伸ばして！これじゃあカップルに見えないよ！」

「カップルって……ここら辺で誰かに見られたとしても相変わらず仲の良い兄妹としか思われないでしょ……」

「それはそうだけど……」

しかし、こうして腕を組まれる事なんて昔はあり得なかったな、とふと思い出した。女つ気の無い人生を過ごしてきたのだから仕方の無い事だが。

暫く他愛の無い話をしながら歩いていると、懐かしい場所が私の目に着いた。

「懐かしいな。ここに来るなんて何年ぶりだろう。」

「あ、確かに。というか、こっちの方向に来る事自体があまり無いからね。」

そこは小学校に上がる前、それも数回しか来た事の無い公園だった。母と加奈と一緒に手をつなぎ来た場所。ブランコに乗って遊んだりした場所。この公園も、遊具の安全性を見直す、と言われほとんどが撤去されてしまった。残っているのはベンチとそこその敷地のみである。

「でも……私が覚えている物がこのベンチしかないのは悲しいな……」

ベンチの前まで来て、名残惜しそうに辺りを見回しながら加奈は言う。母がこのベンチに座り、私と加奈が遊ぶ姿を見ている姿が思い出される。そのベンチに、私と加奈は座った。

「あそこの木ってあんまり大きくなかったんだね。」

「そうだね、僕も加奈も大きくなったからそう思うんだろうね。」

人は月日を重ねる事に变化していく。そして、自身が変わる事には滅多に気が付かない。それに気が付かせてくれる数少ない要因の一つとして、昔訪れた場所へ行く事である。この敷地はこんなに狭かったっけ？この遊具はこんなに小さかったっけ？等、懐かしさがこみ上げてくると同時に、同じ物を見ているのにあの時の自分とは違う捉え方をしている事に気が付く。その時、自分は変わったのだなと思ってしまうのだろう。嫌でも人は変わっていく生き物である。それが良いのか、悪いのかは人それぞれだとは思っただけだ。

加奈も昔はもっと小さく、無邪気に走り回り、お兄ちゃんお兄ちゃんと言いながら私の後をついてきたものだ、と思ってしまう。まあ、今でも兄離れのしていない妹だとは思っただけだ。

「私もそうだけど、お兄ちゃんもあの頃とは違って色々な事を経験してきたよね。まあ、お兄ちゃんはある頃に行きつくまでにも凄い経験をしているけど。」

私の肩に頭を寄せながら加奈は言う。

「まあ、僕はね。バイト先から帰ろうと歩いていて、気が付いたら赤ちゃんなんだもん。ほんと、事実は小説より奇なりって話だよな。」

「でも、そのおかげで私はお兄ちゃんと出会えたんだから感謝しないと。あっちの家族には申し訳無い話だけだね。」

「まあ、そうだけど……僕も兄思いの良い妹が出来て良かったと思っているよ。加奈だけじゃない、父さんや母さん。真美や江利子、師匠や小倉とか色々な人達と出会う事が出来た。こんなに素晴らしい事って無いよ。」

本当に私は恵まれている。昔も今も、こうして誰かの愛情を感じて日々を過ごす事が出来るのだから。

「……まあ、沢山の人に出会う事は良いと思うけど……そろそろ女絡みの問題も片付けなくちゃいけないんじゃないの？」

「そ、それは……」

「いっそのこと、他の女の人全員に愛想でもつかされちゃえば？…」

……」

加奈の言葉は、最後の方は声あまりにも小さくて聞こえなかったが、確かにこのままでは―とは思うのだが……。欲張りな身を滅ぼすのだからな……。

ふと、顔を上げると夜空に一点の光が流れては落ちた。とつさの出来事のために何も考える事など出来なかったが、あれは間違いなく流れ星だったのだろう。生まれてから初めて見た。もちろん、前世でも見た事は無い。

「お兄ちゃん、見た？」

「え？」

とつさに加奈の方を見ると、加奈は人差し指を上に向けて指した。なるほど、加奈も流れ星を見たのか。

「うん、でもとつさの出来事だったから願い事なんて出来なかったよ……」

「そっか！私はちゃんとしたもんね！願い事が叶うかも！」

「かなえば良いね。つと、ちよつと話しすぎたね。おなか空かない？どこかで食べようか。……駅前じゃないと無いよね……」

「ふふふ、もちろんお兄ちゃんの奢りでしょ？」

「当たり前。これでも給料貰ってるんだから。」

私と加奈は立ちあがり、公園を後にした。その際、加奈は何か呟いていたみただけで、私には聞こえなかった。何と言ったのか気になるが、聞かない事にした。それが流れ星に願った願いだったのならば加奈の願いは叶わなくなってしまうから。

「さて、どうだい？中々の出来だとは思っただけれど。」

マスターが終わった二曲を聴き終えた所で、マネージャーの音が聞こえた。録音した時よりも何倍も良くなっていたように私は感じた。音のバランス、欲しい所で欲しい音が聞こえる辺りがまた良い。そこまでいじっていないようでここまで変わるのだからやはりプロの仕事は素晴らしい。

「凄いですね……私達の作品じゃないみたいです。」

「ハハハ、だって編集してくれたのはあの薫さんだからね。だから尚更良くなったんだよ。」

「へ〜ってもしかして、ドラマーの薫さんですか！！！？」

「え、薫さん知ってるの？」

「僕のドラムの師匠です。13歳の時からお世話になってます。」

「そうなんだ、だからOK出してくれたんだね。あの人、業界じや知る人ぞ知る大物だからね。中々仕事受け入れてくれないんだけど、君達のような新人バンドを受け持ってくれた理由が解ったよ。」

「そうか、師匠が編集作業をしてくれたのか……やはり師匠は私が考える以上に凄い人物だったのだ……まあ、もしかしたらとは思ったのだが。」

「何か改めてあのおっさんの凄さというか……ここ最近凄さしか伝わってこないよね……」

「ですね……初めてあった時の印象とは違いすぎて……」

普段というより、二人の前だとただの年齢相応の人になるからな、師匠は。

「ま、シングルも無事出来た事だし。後は年内にアルバム用のレコーディングを終わらせちゃおう。と言っても、後二曲だけだったけ？」

「そうですね。正確には二曲のうち一曲は歌だけですが。」

「じゃあ、話は早い。年明けからリハーサルを開始しちゃう！そして、レコ発ツアーだ！」

マネージャーが意気込むのも解る。このまま予定通り進めば来年の

三月にはライブが出来るのだ。既にホームページにはシングルの発売日と試聴用音源がアップしてある。年内にアルバムのレコが終われば年明けにも今企画しているツアーの詳細もアップされるだろう。「よし頑張ろう！僕も君達のスケジュールがスムーズに行くように全力を持ってマネージメントするから！」

「……はい……！」

マネージャーの言葉に、私達三人は声を合わせて勢いよく返事をした。このまま順調にいけば良い。

そして、早くライブをしたい。レコーディングして一つの作品として仕上げるのも良いが、やはりライブをしたい。私達が一番輝く時はライブなのだから。

高校一年生？ - 1（後書き）

今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

最近、アニソンバンドの方の活動を再開しました。私はベースを行っているのですが、アニソンって中々ややこしく動くのでコピーするのが非常にめんどくさい時があります。そんな時はアドリブを行ってしまう悪い癖が発動してしまいます。どうしようも無いですね……下手糞なのに……

それと、私はいまいちなろつのシステムを使いこなしていない気がします。これらも有効に活用していきたいな〜と考えています。それよりももっと作品が良くなるように勉強をしなければなりませんですね……頑張ります！！

そして、ここまで沢山の方々にこの作品を読んで頂き誠にありがとうございました。もっともっと頑張って皆さんの満足のいくような作品に仕上げたいです。

では最後に、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！感想等ありましたら気軽にどうぞ！泣いて喜びます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221m/>

転生は良い結果をもたらすのか？

2010年11月27日13時59分発行